

# 史跡天然記念物屋島

— 史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書Ⅲ —



2019 年 3 月

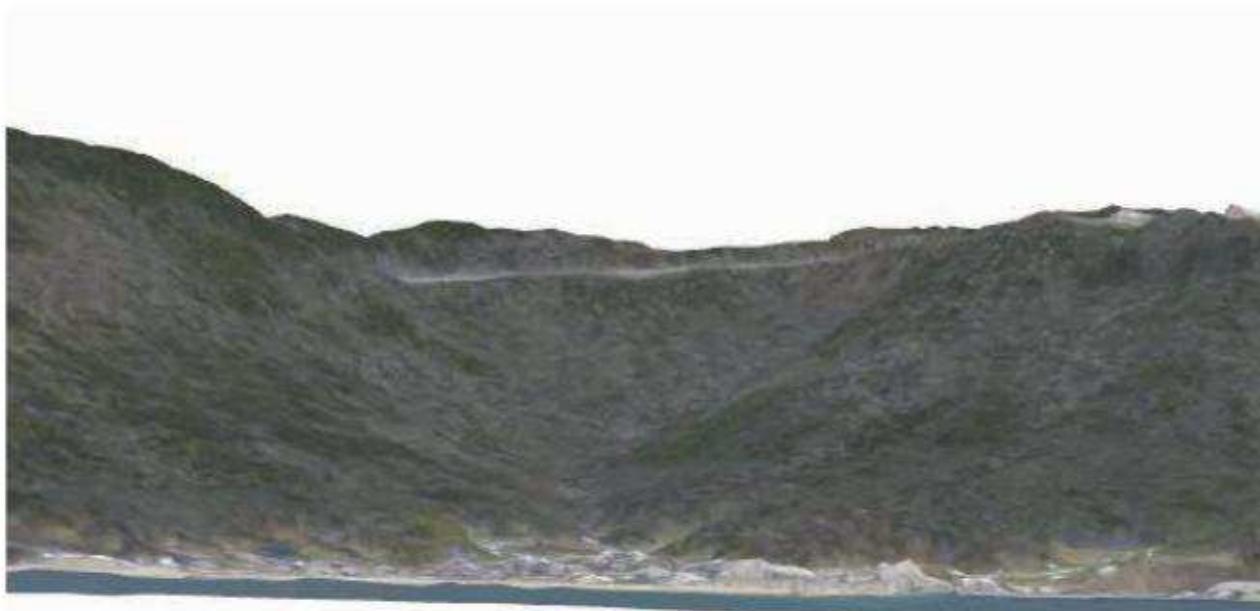
高松市教育委員会



1-1 レーザー測量による屋島オルソ3D画像の展開例（上：俯瞰、中：西から、下：南から）



2-1 山上からみた浦生地区と瀬戸内海（東から）



2-2 屋島オルゾ 3D画像で海からみた浦生地区



3-1 屋嶋城跡浦生地区 城門推定地（西から）



3-2 屋嶋城跡浦生地区 雉城からみた城壁（北から）



4-1 屋嶋城跡浦生地区 雉城からみた城壁の石積み（北から）



4-2 屋嶋城跡浦生地区 城壁の城内側の石積み①（東から）



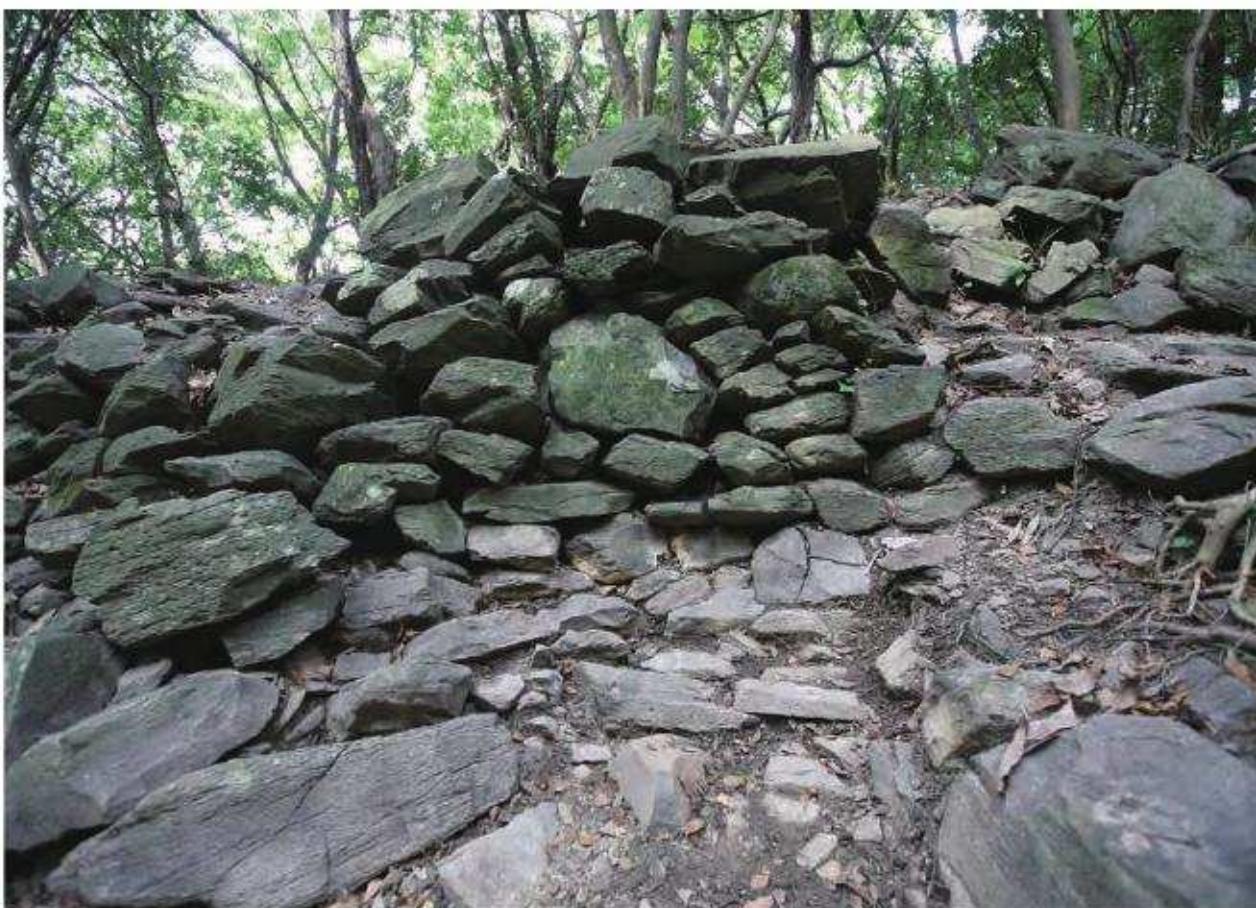
5-1 屋嶋城跡浦生地区 城壁の城内側の石積み②（南東から）



5-2 屋嶋城跡浦生地区 城壁の城内側の石積み崩落状況（東から）



6-1 屋嶋城跡浦生地区 城壁の城内側の石積み③（北東から）



6-2 屋嶋城跡浦生地区 城壁の城内側の石積み④（東から）



7-1 屋嶋城跡浦生地区 H21年度トレンチ完掘状況①（南東から）



7-2 屋嶋城跡浦生地区 H21年度トレンチ完掘状況②（東から）



8-1 屋嶋城跡浦生地区 H21年度トレンチと城内側の石積み（東から）



9-1 屋嶋城跡浦生地区 H24年度トレンチ完掘状況（西から）



9-2 屋嶋城跡浦生地区 H24年度トレンチ完掘状況（南から）



10-1 屋嶋城跡浦生地区 H25年度トレンチ完掘状況（北から）



11-1 屋鳩城跡浦生地区 H 25 年度トレンチ 石積み（東から）



11-2 屋鳩城跡浦生地区 H 25 年度トレンチ 完掘状況（南から）



11-3 屋鳩城跡浦生地区 H 26 年度トレンチ 石列検出状況（北東から）



12-1 屋嶋城跡浦生地区 H27年度トレンチ完掘状況（北から）



13-1 屋嶋城跡浦生地区 H27年度トレンチ完掘状況（東から）



13-2 屋嶋城跡浦生地区 H28年度第1トレンチ完掘状況（北から）



14-1 屋嶋城跡浦生地区 H29年度第1トレント完掘状況（北から）



15-1 北嶺山上地区 H29年度第2トレンチ完掘状況①（北から）



15-2 北嶺山上地区 H29年度第2トレンチ完掘状況②（南から）



16-1 北嶺山上地区 H29年度第2トレンチSK1土層（西から）



16-2 屋鳴城跡浦生地区出土平瓶

## 例　　言

- 1 本書は、平成19年度から29年度にかけて国庫及び県費補助を得て実施した史跡天然記念物屋島基礎調査事業に伴う発掘調査報告書である。発掘調査は高松市創造都市推進局文化・観光・スポーツ部文化財課（平成19年度は高松市教育委員会文化部文化振興課、20～24年度は高松市教育委員会教育局文化財課）が実施し、各調査の担当者については本書第3章において記載している。
- 2 本報告書の執筆・編集は、高松市文化財課文化財専門職員の渡邊誠が行い、同非常勤嘱託職員の上原ふみ、磯崎福子が補助した。
- 3 本報告の標高は東京湾平均海面高度を基準とし、方位は座標北を示す。
- 4 本書で用いる遺構の略号は次のとおりである。  
S K：土坑　S P：柱穴　S D：溝
- 5 発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管している。
- 6 発掘調査から整理作業、報告書執筆を実施するにあたって、下記の方々及び関係諸機関から御協力と御教示を得た。記して厚く謝意を表する（五十音順、敬称略）。  
文化庁、香川県教育委員会、環境省中国四国地方環境事務所四国事務所、四国森林管理局  
香川森林管理事務所、香川県東部林業事務所、古代山城研究会  
赤司善彦、井上俊昭、大久保徹也、小澤佳憲、柏原莊一、狩野久、龟田修一、佐藤竜馬、  
渋谷啓一、田中健二、丹羽佑一、西田一彦、信里芳紀、乗松真也、長谷川修一、平岡岩夫、  
向井一雄

# 目次

第1章 経緯と経過	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の経過	1
A. 地形測量	1
B. 分布調査(踏査)	4
C. 発掘調査	5
D. 整理作業	5
第2章 地理的・歴史的環境	7
第1節 立地環境	7
A. 地形	7
B. 水系	8
C. 植生	8
D. 動物	8
第2節 歴史的環境	10
第3章 基礎調査事業の成果	15
第1節 事業の経緯と経過	15
第2節 地形測量	15
A. 地形測量	15
B. 地図に基づく所見	17
C. 航空写真や地図から読み取ることができる 旧土地利用の状況に関する所見	20
D. 赤色立体図に基づく所見	21

第3節 踏査	32
A. 経緯と経過	32
B. 主な成果	32
第4節 発掘調査	34
A. 屋嶋城跡浦生地区の調査	34
B. 北嶺山上地区の調査	94
C. 南嶺山上地区の調査	122
第4章 まとめと今後の課題	123
第1節 屋嶋城跡	123
A. 浦生地区の城壁とその構造	123
B. 屋嶋城の城壁ラインと城壁構造	124
第2節 北嶺山上地区の調査	133
A. これまでの発掘調査と本事業の成果	133
B. 北嶺という場の歴史	133
第3節 今後の調査とその候補地	134
A. 屋嶋城跡	134
B. 屋島寺の通史的な理解	134
C. 源平合戦の古戦場に関する遺跡	135
D. 石切丁場跡の調査	136
E. 製塩関連遺跡	138
F. 古墳	138
第4節 おわりに	138

# 挿図目次

第1図	史跡天然記念物屋島基礎調査事業年度別調査箇所図(S=1/800) ······	2
第2図	史跡天然記念物屋島位置図 ······	7
第3図	史跡天然記念物屋島内遺跡等分布及び調査箇所地点(S=1/30,000) ······	9
第4図	史跡天然記念物屋島旧版地図(S=1/50,000 国土地理院発行5万分の1地形図 明治30年測図明治34年発行を一部改変) ······	18
第5図	史跡天然記念物屋島航空写真(国土地理院空中写真USA-M450-80 1947年9月8日米軍撮影を使用し一部改変) ······	19
第6図	史跡天然記念物屋島赤色立体図(S=1/30,000) ······	23
第7図	史跡天然記念物屋島赤色立体図 詳細①(縮尺任意) ······	24
第8図	史跡天然記念物屋島赤色立体図 詳細②	

(縮尺任意) ······	25	
第9図	史跡天然記念物屋島赤色立体図詳細③(縮尺任意) ······	26
第10図	史跡天然記念物屋島段彩図(S=1/30,000) ······	27
第11図	史跡天然記念物屋島断面図位置図(S=1/30,000) ······	28
第12図	史跡天然記念物屋島縦断面図(S=1/30,000) ······	29
第13図	史跡天然記念物屋島横断面図①(S=1/20,000) ······	30
第14図	史跡天然記念物屋島横断面図②(S=1/20,000) ······	31
第15図	踏査時採集遺物(S=1/3) ······	32
第16図	関野貞氏想定屋嶋城跡外郭ライン(S=1/40,000・関野1917より転載) ······	34

第 17 図	浦生洛中地理絵図に描かれた浦生地区の城壁（高松市歴史資料館蔵）	34
第 18 図	史跡名勝天然記念物調査報告に掲載された屋嶋城跡と浦生地区の城壁図（縮尺任意・岡田 1922 より転載）	35
第 19 図	屋嶋城跡浦生地区の地形測量図（S = 1 / 500）	37
第 20 図	屋嶋城跡浦生地区の石積み及び断面図位置図（S = 1 / 500）	38
第 21 図	屋嶋城跡浦生地区の年度別トレンチ位置図（S = 1 / 500）	39
第 22 図	屋嶋城跡浦生地区の城壁断面図（S = 1 / 400・1 / 800）	40
第 23 図	屋嶋城跡浦生地区の立面見通し陰影図（S = 1 / 400・1 / 200）	41
第 24 図	屋嶋城跡浦生地区の城壁平面陰影図（S = 1 / 200）	42
第 25 図	屋嶋城跡浦生地区の雉城平面（上）・立面見通し（下）陰影図①（S = 1 / 200・1 / 150）	43
第 26 図	屋嶋城跡浦生地区の北からみた雉城立面見通し陰影図②（S = 1 / 100）	44
第 27 図	屋嶋城跡浦生地区の城門推定地平面陰影図（S = 1 / 150）	45
第 28 図	屋嶋城跡浦生地区の城壁立面見通し陰影図（S = 1 / 150）	46
第 29 図	屋嶋城跡浦生地区の城壁城外側石積み①平面（上）・立面見通し（下）陰影図及び平面図・立面図（S = 1 / 60）	47
第 30 図	屋嶋城跡浦生地区の城壁城外側石積み②平面（上）・立面見通し（下）陰影図（S = 1 / 60）	48
第 31 図	屋嶋城跡浦生地区の城壁城内側石積み③平面（上）・立面見通し（下）陰影図（S = 1 / 100）	49
第 32 図	屋嶋城跡浦生地区の城壁城内側石積み③平面図及び立面見通し図（S = 1 / 100）	50
第 33 図	屋嶋城跡浦生地区の城壁城内側石積み③詳細平面図①（S = 1 / 60）	51
第 34 図	屋嶋城跡浦生地区の城壁城内側石積み③詳細平面図②（S = 1 / 60）	52
第 35 図	屋嶋城跡浦生地区の城壁城内側石積み③詳細立面見通し図（S = 1 / 60）	53
第 36 図	屋嶋城跡浦生地区の城壁城内側石積み④平面（上）・立面見通し（下）陰影図（S = 1 / 60）	54
第 37 図	屋嶋城跡浦生地区の城門推定地石積み⑤平面（上）・立面見通し（下）陰影図（S = 1 / 80）	55
第 38 図	屋嶋城跡浦生地区の城門推定地石積み⑤平面図（S = 1 / 60）	56
第 39 図	屋嶋城跡浦生地区の城門推定地石積み⑤立面見通し図（S = 1 / 60）	57
第 40 図	屋嶋城跡浦生地区 H 21・22 トレンチ平面図・断面図（S = 1 / 150）	59
第 41 図	屋嶋城跡浦生地区 H 21 トレンチ平面図・断面図（S = 1 / 80）	60
第 42 図	屋嶋城跡浦生地区 H 21 トレンチ立面図・断面図（S = 1 / 50・1 / 60）・出土遺物（S = 1 / 3）	61
第 43 図	屋嶋城跡浦生地区 H 22 トレンチ平面図（S = 1 / 80）	64
第 44 図	屋嶋城跡浦生地区 H 22 トレンチ断面図・立面図（S = 1 / 80）・出土遺物（S = 1 / 3）	65
第 45 図	屋嶋城跡浦生地区 H 23 トレンチ断面図・立面図（S = 1 / 80）・出土遺物（S = 1 / 3）	66
第 46 図	屋嶋城跡浦生地区 H 24・25 トレンチ平面図（S = 1 / 100）	68
第 47 図	屋嶋城跡浦生地区 H 24 トレンチ平面図（S = 1 / 80）	69
第 48 図	屋嶋城跡浦生地区 H 24 トレンチ断面図・立面図（S = 1 / 50）	70
第 49 図	屋嶋城跡浦生地区 H 25 トレンチ平面図（S = 1 / 80）	72
第 50 図	屋嶋城跡浦生地区 H 25 トレンチ立面図・断面図（S = 1 / 40）・出土遺物（S = 1 / 3）	73
第 51 図	屋嶋城跡浦生地区 H 25 トレンチ土層図（S = 1 / 40）	74
第 52 図	屋嶋城跡浦生地区 H 26～28 トレンチ位置図（S = 1 / 200）	76
第 53 図	屋嶋城跡浦生地区 H 26 トレンチ平面図（S = 1 / 60）	77
第 54 図	屋嶋城跡浦生地区 H 26 トレンチ立面図・土層図（S = 1 / 40）	78
第 55 図	屋嶋城跡浦生地区 H 27 トレンチ平面図（S = 1 / 100）	80
第 56 図	屋嶋城跡浦生地区 H 27-1・2 トレンチ平面図（S = 1 / 60）	81
第 57 図	屋嶋城跡浦生地区 H 27 トレンチ立面図（S = 1 / 60）・断面図（S = 1 / 60・1 / 120）	82
第 58 図	屋嶋城跡浦生地区 H 27-3 トレンチ平面図・断面図（S = 1 / 80）	83
第 59 図	屋嶋城跡浦生地区 H 28-1 トレンチ平面図・断面図（S = 1 / 60）	85
第 60 図	屋嶋城跡浦生地区 H 28-2 トレンチ平面図・断面図（S = 1 / 60）	86
第 61 図	屋嶋城跡浦生地区 清掃時表採遺物（S = 1 / 3）	87
第 62 図	屋嶋城跡浦生地区 H 29-1 トレンチ平面	

第 63 図	屋嶋城跡浦生地区 H 29-1 トレンチ立面図・断面図 (S = 1 / 50) ······	88
第 64 図	屋嶋城跡浦生地区 H 29-1 トレンチ断面図 (S = 1 / 40) ·出土遺物 (S = 1 / 3) ······	89
第 65 図	屋嶋城跡浦生地区 H 29-2 トレンチ平面図・立面図・断面図 (S = 1 / 60) ······	91
第 66 図	屋嶋城跡浦生地区城壁平面形 (S = 1 / 500) ······	93
第 67 図	北嶺山上地区調査区位置図 (S = 1 / 2,250) ······	95
第 68 図	北嶺山上地区 H20-1 トレンチ平面図 (S = 1 / 100) ······	96
第 69 図	北嶺山上地区 H20-1 トレンチ土層図 (S = 1 / 50) ·出土遺物 (S = 1 / 3) ······	97
第 70 図	北嶺山上地区 H20-2 トレンチ平面図・土層図 (S = 1 / 100 · 1 / 40) ······	98
第 71 図	北嶺山上地区 H20-3 · 4 トレンチ平面図・土層図 (S = 1 / 100 · 1 / 40) ······	99
第 72 図	北嶺山上地区 H26 · 27 トレンチ位置図 (S = 1 / 500) ······	101
第 73 図	北嶺山上地区 H26-1 トレンチ平面図 (S = 1 / 50) ······	102
第 74 図	北嶺山上地区 H26-2 トレンチ平面図 (S = 1 / 50) ······	103
第 75 図	北嶺山上地区 H26-1 · 2 トレンチ土層図 (S = 1 / 60) ·出土遺物 (S = 1 / 3) ······	104
第 76 図	北嶺山上地区 H27 トレンチ平面図 (S = 1 / 80) ······	106
第 77 図	北嶺山上地区 H27 トレンチ土層図 (S = 1 / 50) ······	107
第 78 図	北嶺山上地区 H28 · 29 トレンチ位置図 (S = 1 / 1,600) ······	108
第 79 図	北嶺山上地区 H28-1 · 29-1 トレンチ位置図 (S = 1 / 250) ······	109
第 80 図	北嶺山上地区 H28-2 · 29-2 ~ 4 トレンチ位置図 (S = 1 / 400) ······	110
第 81 図	北嶺山上地区 H28 トレンチ平面図 (S = 1 / 100 · 1 / 80) ······	111
第 82 図	北嶺山上地区 H28 トレンチ土層図 (S = 1 / 40) ······	112
第 83 図	北嶺山上地区 H28 トレンチ出土遺物 (S = 1 / 3) ······	113
第 84 図	北嶺山上地区 H29-1 トレンチ平面図 (S = 1 / 80) ······	114
第 85 図	北嶺山上地区 H29-1 トレンチ土層図 (S = 1 / 40) ······	115
第 86 図	北嶺山上地区 H29-2 トレンチ平面図・土層図 (S = 1 / 40) ······	116
第 87 図	北嶺山上地区 H29-3 トレンチ平面図・土層図 (S = 1 / 60) ······	117
第 88 図	北嶺山上地区 H29-4 トレンチ平面図・土層図 (S = 1 / 80) ······	118
第 89 図	北嶺山上地区 H29 トレンチ出土遺物 (S = 1 / 3) ······	119
第 90 図	北嶺山上地区千間堂跡周辺整地土想定図 (S = 1 / 400) ······	120
第 91 図	南嶺山上地区トレンチ平面図・土層図 (S = 1 / 40) ·調査写真 ······	122
第 92 図	浦生地区の城壁縦断想定図 (S = 1 / 800) ······	123
第 93 図	南嶺山上詳細地形図と屋嶋城跡遺構想定図 (S = 1 / 6,000) ······	126
第 94 図	屋島旧海岸線復元図及び源平合戦関連候補地位置図 (縮尺任意) ······	129
第 95 図	屋嶋城跡及び屋島山上出土 7 世紀後半から 8 世紀代の可能性のある遺物 (S = 1 / 3) ······	131
第 96 図	北嶺山上詳細地形図と屋島寺関連遺構想定図 (S = 1 / 3,000) ······	132

## 挿表目次

第 1 表 史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査箇所及び調査次数一覧表① ······ 3

第 2 表 史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査箇所及び調査次数一覧表② ······ 4

## 卷頭写真図版

- 1-1 レーザー測量による屋島オルソ3D画像の展開例（上：俯瞰、中：西から、下：南から）  
2-1 山上からみた浦生地区と瀬戸内海（東から）  
2-2 屋島オルソ3D画像で海からみた浦生地区  
3-1 屋島城跡浦生地区城門推定地（西から）  
3-2 屋島城跡浦生地区雉城からみた城壁（北から）  
4-1 屋島城跡浦生地区雉城からみた城壁の石積み（北から）  
4-2 屋島城跡浦生地区城壁の城内側の石積み①（東から）  
5-1 屋島城跡浦生地区城壁の城内側の石積み②（南東から）  
5-2 屋島城跡浦生地区城壁の城内側の石積み崩落状況（東から）  
6-1 屋島城跡浦生地区城壁の城内側の石積み③（北東から）  
6-2 屋島城跡浦生地区城壁の城内側の石積み④（東から）  
7-1 屋島城跡浦生地区H21年度トレンチ完掘状況①（南東から）  
7-2 屋島城跡浦生地区H21年度トレンチ完掘状況②（東から）  
8-1 屋島城跡浦生地区H21年度トレンチと城内側の石積み（東から）  
9-1 屋島城跡浦生地区H24年度トレンチ完掘状況（西から）  
9-2 屋島城跡浦生地区H24年度トレンチ完掘状況（南から）  
10-1 屋島城跡浦生地区H25年度トレンチ完掘状況（北から）  
11-1 屋島城跡浦生地区H25年度トレンチ石積み（東から）  
11-2 屋島城跡浦生地区H25年度トレンチ完掘状況（南から）  
11-3 屋島城跡浦生地区H26年度トレンチ石列検出状況（北東から）  
12-1 屋島城跡浦生地区H27年度トレンチ完掘状況（北から）  
13-1 屋島城跡浦生地区H27年度トレンチ完掘状況（東から）  
13-2 屋島城跡浦生地区H28年度第1トレンチ完掘状況（北から）  
14-1 屋島城跡浦生地区H29年度第1トレンチ完掘状況（北から）  
15-1 北嶺山上地区H29年度第2トレンチ完掘状況①（北から）  
15-2 北嶺山上地区H29年度第2トレンチ完掘状況②（南から）  
16-1 北嶺山上地区H29年度第2トレンチSK1土層（西から）  
16-2 屋島城跡浦生地区出土平瓶

## 写真図版

- 1-1 石場に残る矢穴の残る花崗岩①（北から）  
1-2 石場に残る矢穴の残る花崗岩②（南から）  
1-3 北嶺へと続く石敷道（北から）  
2-1 屋島城跡浦生地区城門推定地①（西から）  
2-2 屋島城跡浦生地区城門推定地②（西から）  
3-1 屋島城跡浦生地区城壁天端からみた城壁（北から）  
3-2 屋島城跡浦生地区雉城からみた城壁（北から）  
4-1 屋島城跡浦生地区城壁城外側の石積み①（西から）  
4-2 屋島城跡浦生地区城壁城外側の石積み②（西から）  
5-1 屋島城跡浦生地区城門推定地側壁の石積み（南西から）  
5-2 屋島城跡浦生地区城壁城内側の石積み①（東から）  
5-3 屋島城跡浦生地区城壁城内側の石積み②（東から）  
5-4 屋島城跡浦生地区城壁城内側の石積み③（東から）  
6-1 屋島城跡浦生地区城内側の状況①（北から）  
6-2 屋島城跡浦生地区城内側の状況②（北東から）  
7-1 屋島城跡浦生地区城壁城内側の石積み④（東から）  
7-2 屋島城跡浦生地区城壁城内側の石積み⑤（北東から）  
8-1 屋島城跡浦生地区城壁城内側の石積み⑥（東から）  
8-2 屋島城跡浦生地区城内側の状況③（南から）  
9-1 屋島城跡浦生地区雉城の状況①（南西から）  
9-2 屋島城跡浦生地区雉城の状況②（北から）  
10-1 屋島城跡浦生地区城内側石積み詳細①（東から）  
10-2 屋島城跡浦生地区城内側石積み詳細②（東から）  
11-1 屋島城跡浦生地区城内側からみた城壁（城門

- 推定地② H24・25年 Tr 箇所 南東から)
- 1 1 - 2 屋嶋城跡浦生地区城内側石積み詳細③  
(東から)
- 1 2 - 1 屋嶋城跡浦生地区 H21 年度 Tr 調査前状況  
(東から)
- 1 2 - 2 屋嶋城跡浦生地区 H21 年度 Tr 完掘状況(東  
から)
- 1 3 - 1 屋嶋城跡浦生地区 H21 年度 Tr 調査前の石積  
み状況(東から)
- 1 3 - 2 屋嶋城跡浦生地区 H21Tr 完掘時の石積み状況  
①(東から)
- 1 3 - 3 屋嶋城跡浦生地区 H21Tr 完掘時の石積み状況  
②(南から)
- 1 4 - 1 屋嶋城跡浦生地区 H21Tr 完掘状況①(南西か  
ら)
- 1 4 - 2 屋嶋城跡浦生地区 H21Tr 完掘状況②(南東か  
ら)
- 1 5 - 1 屋嶋城跡浦生地区 H21Tr 南壁土層詳細(北か  
ら)
- 1 5 - 2 屋嶋城跡浦生地区 H21Tr 北壁土層詳細①(南  
から)
- 1 5 - 3 屋嶋城跡浦生地区 H21Tr 北壁土層詳細②(南  
から)
- 1 5 - 4 屋嶋城跡浦生地区 H21Tr 北壁土層詳細③(南  
から)
- 1 6 - 1 屋嶋城跡浦生地区 H21Tr 遺物出土状況①(南  
西から)
- 1 6 - 2 屋嶋城跡浦生地区 H21Tr 遺物出土状況②(南  
から)
- 1 6 - 3 屋嶋城跡浦生地区 H21Tr 遺物出土状況③(南  
から)
- 1 7 - 1 屋嶋城跡浦生地区 H22Tr 検出状況(北から)
- 1 7 - 2 屋嶋城跡浦生地区 H22Tr 北壁土層(南から)
- 1 7 - 3 屋嶋城跡浦生地区 H22Tr 城外側崩落石状況①  
(西から)
- 1 7 - 4 屋嶋城跡浦生地区 H22Tr 城外側崩落石状況②  
(南から)
- 1 8 - 1 屋嶋城跡浦生地区 H22Tr 城外側崩落石状況③  
(南西から)
- 1 8 - 2 屋嶋城跡浦生地区 H22Tr 土層堆積状況(西か  
ら)
- 1 8 - 3 屋嶋城跡浦生地区 H22Tr 城外側崩落石状況④  
(西から)
- 1 9 - 1 屋嶋城跡浦生地区 H22Tr 状況①(東から)
- 1 9 - 2 屋嶋城跡浦生地区 H22Tr 状況②(西から)
- 1 9 - 3 屋嶋城跡浦生地区 H22Tr 城外側崩落石詳細状  
況①(西から)
- 1 9 - 4 屋嶋城跡浦生地区 H22Tr 城外側崩落石詳細状  
況②(東から)
- 2 0 - 1 屋嶋城跡浦生地区 H23Tr 調査前状況①(東か  
ら)
- 2 0 - 2 屋嶋城跡浦生地区 H23Tr 検出状況①(東から)
- 2 0 - 3 屋嶋城跡浦生地区 H23Tr 調査前状況②(西か  
ら)
- 2 0 - 4 屋嶋城跡浦生地区 H23Tr 北壁土層①(南から)
- 2 1 - 1 屋嶋城跡浦生地区 H23Tr 検出状況②(東から)
- 2 1 - 2 屋嶋城跡浦生地区 H23Tr 検出状況③(西から)
- 2 1 - 3 屋嶋城跡浦生地区 H23Tr 北壁土層②(南から)
- 2 1 - 4 屋嶋城跡浦生地区 H23Tr 北壁土層③(南から)
- 2 1 - 5 屋嶋城跡浦生地区 H23Tr 北壁土層④(南から)
- 2 1 - 6 屋嶋城跡浦生地区 H23Tr 北壁土層⑤(南から)
- 2 2 - 1 屋嶋城跡浦生地区 H23Tr 北壁土層⑥(南西か  
ら)
- 2 2 - 2 屋嶋城跡浦生地区 H23Tr 北壁土層⑦(南西か  
ら)
- 2 2 - 3 屋嶋城跡浦生地区 H23Tr 北壁土層⑧(南西か  
ら)
- 2 2 - 4 屋嶋城跡浦生地区 H23Tr 北壁土層⑨(南西か  
ら)
- 2 2 - 5 屋嶋城跡浦生地区 H23Tr 北壁土層⑩(南から)
- 2 2 - 6 屋嶋城跡浦生地区 H23Tr 北壁土層⑪(南から)
- 2 3 - 1 屋嶋城跡浦生地区 H24Tr 調査前状況(北西か  
ら)
- 2 3 - 2 屋嶋城跡浦生地区 H24Tr 検出状況(西から)
- 2 4 - 1 屋嶋城跡浦生地区 H24Tr 城内側石積み検出状  
況(東から)
- 2 5 - 1 屋嶋城跡浦生地区 H24Tr 検出状況①(西から)
- 2 5 - 2 屋嶋城跡浦生地区 H24Tr 検出状況②(南から)
- 2 5 - 3 屋嶋城跡浦生地区 H24Tr 検出状況③(南から)
- 2 5 - 4 屋嶋城跡浦生地区 H24Tr 北壁土層(南から)
- 2 6 - 1 屋嶋城跡浦生地区 H24Tr 検出状況④(南から)
- 2 6 - 2 屋嶋城跡浦生地区 H24Tr 検出状況⑤(南から)
- 2 6 - 3 屋嶋城跡浦生地区 H24Tr 石積み検出状況(北  
から)
- 2 6 - 4 屋嶋城跡浦生地区 H25Tr 調査前状況(東から)
- 2 6 - 5 屋嶋城跡浦生地区 H25Tr 石積み崩落状況(東  
から)
- 2 6 - 6 屋嶋城跡浦生地区 H25Tr 作業状況(北から)
- 2 7 - 1 屋嶋城跡浦生地区 H25Tr 検出状況(北から)
- 2 8 - 1 屋嶋城跡浦生地区 H25Tr 石積み検出状況①(東  
から)
- 2 8 - 2 屋嶋城跡浦生地区 H25Tr 北壁土層(南から)
- 2 8 - 3 屋嶋城跡浦生地区 H25Tr 石積み検出状況②(東  
から)
- 2 8 - 4 屋嶋城跡浦生地区 H25Tr 石積み検出状況③(南  
東から)
- 2 9 - 1 屋嶋城跡浦生地区 H25Tr 北壁土層(南から)
- 2 9 - 2 屋嶋城跡浦生地区 H25 東西 Tr 完掘状況 ①(北  
東から)
- 2 9 - 3 屋嶋城跡浦生地区 H25 東西 Tr 完掘状況 ②(東  
から)
- 2 9 - 4 屋嶋城跡浦生地区 H25 東西 Tr 北壁土層(南  
東から)
- 3 0 - 1 屋嶋城跡浦生地区 H26-1Tr 調査前状況(南か  
ら)
- 3 0 - 2 屋嶋城跡浦生地区 H26-1Tr 検出状況遠景(南  
から)
- 3 0 - 3 屋嶋城跡浦生地区 H26-1Tr 上部検出状況(南  
から)
- 3 0 - 4 屋嶋城跡浦生地区 H26-1Tr 下部検出状況①(南

	から)	(西から)
3 1 - 1	屋嶋城跡浦生地区 H26-1Tr 下部検出状況②(南西から)	3 8 - 1 屋嶋城跡浦生地区 H28-2Tr 石積み検出状況②(西から)
3 1 - 2	屋嶋城跡浦生地区 H26-1Tr 下部検出状況③(北から)	3 8 - 2 屋嶋城跡浦生地区 H28-2Tr 石積み検出状況③(北から)
3 1 - 3	屋嶋城跡浦生地区 H26-1Tr 上部東壁土層(西から)	3 9 - 1 屋嶋城跡浦生地区 H29-1Tr 調査前状況(南東から)
3 1 - 4	屋嶋城跡浦生地区 H26-1Tr 下部中央部東壁土層(西から)	3 9 - 2 屋嶋城跡浦生地区 H29-1Tr 下部石積み検出状況(南東から)
3 2 - 1	屋嶋城跡浦生地区 H26-2Tr 調査前状況(東から)	3 9 - 3 屋嶋城跡浦生地区 H29-1Tr 上部石積み検出状況①(東から)
3 2 - 2	屋嶋城跡浦生地区 H26-2Tr 石列検出状況①(東から)	3 9 - 4 屋嶋城跡浦生地区 H29-1Tr 上部石積み検出状況②(北から)
3 2 - 3	屋嶋城跡浦生地区 H26-2Tr 石列検出状況②(北から)	4 0 - 1 屋嶋城跡浦生地区 H29-1Tr 石積み検出状況(南から)
3 3 - 1	屋嶋城跡浦生地区 H27-1・2Tr 調査前状況(北から)	4 0 - 2 屋嶋城跡浦生地区 H29-1Tr 上部北壁土層(南から)
3 3 - 2	屋嶋城跡浦生地区 H27-1Tr 検出状況①(東から)	4 1 - 1 屋嶋城跡浦生地区 H29-1Tr 調査完了状況(南から)
3 3 - 3	屋嶋城跡浦生地区 H27-1Tr 検出状況②(東から)	4 1 - 2 屋嶋城跡浦生地区 H29-1Tr 石積み下部の状況(東から)
3 3 - 4	屋嶋城跡浦生地区 H27-1Tr 検出状況③(北から)	4 1 - 3 屋嶋城跡浦生地区城門推定地からみた H29-1Tr (南から)
3 3 - 5	屋嶋城跡浦生地区 H27-1Tr 石列検出状況①(東から)	4 2 - 1 屋嶋城跡浦生地区 H29-1Tr 拡張区北壁土層①(東から)
3 3 - 6	屋嶋城跡浦生地区 H27-1Tr 石列検出状況②(北から)	4 2 - 2 屋嶋城跡浦生地区 H29-1Tr 拡張区北壁土層②(南から)
3 3 - 7	屋嶋城跡浦生地区 H27-1Tr 石列検出状況③(東から)	4 2 - 3 屋嶋城跡浦生地区 H29-1Tr 拡張区北壁土層③(南から)
3 3 - 8	屋嶋城跡浦生地区 H27-1Tr 北壁土層(南から)	4 2 - 4 屋嶋城跡浦生地区 H29-1Tr 拡張区東壁土層(西から)
3 4 - 1	屋嶋城跡浦生地区 H27-1Tr 石列検出状況④(北から)	4 3 - 1 屋嶋城跡浦生地区 H29-2Tr 調査前状況(南から)
3 5 - 1	屋嶋城跡浦生地区 H27-1Tr 調査完了状況(東から)	4 3 - 2 屋嶋城跡浦生地区 H29-2Tr 検出状況(南から)
3 5 - 2	屋嶋城跡浦生地区 H27-3Tr 調査前状況(西から)	4 4 - 1 北嶺山上地区 H20-1Tr 調査前状況(南から)
3 5 - 3	屋嶋城跡浦生地区 H27-3Tr 検出状況(西から)	4 4 - 2 北嶺山上地区 H20-1Tr 検出状況①(北東から)
3 5 - 4	屋嶋城跡浦生地区 H27-3Tr 検出状況(西から)	4 4 - 3 北嶺山上地区 H20-1Tr 検出状況②(南から)
3 5 - 5	屋嶋城跡浦生地区 H27-3Tr 南壁土層(北から)	4 4 - 4 北嶺山上地区 H20-1Tr 検出状況③(北から)
3 6 - 1	屋嶋城跡浦生地区 H27-2Tr 調査前状況(西から)	4 4 - 5 北嶺山上地区 H20-1Tr 検出状況④(西から)
3 6 - 2	屋嶋城跡浦生地区 H27-2Tr 石列検出状況(北から)	4 4 - 6 北嶺山上地区 H20-1Tr 土層①(北から)
3 6 - 3	屋嶋城跡浦生地区 H28-1Tr 調査前状況(北から)	4 4 - 7 北嶺山上地区 H20-1Tr 土層②(北から)
3 6 - 4	屋嶋城跡浦生地区 H28-1Tr 石積み検出状況石列(北から)	4 4 - 8 北嶺山上地区 H20-1Tr 土層③(東から)
3 7 - 1	屋嶋城跡浦生地区 H28-1Tr 東壁土層①(西から)	4 5 - 1 北嶺山上地区 H20-2Tr 調査前状況(東から)
3 7 - 2	屋嶋城跡浦生地区 H28-1Tr 東壁土層②(西から)	4 5 - 2 北嶺山上地区 H20-2Tr 検出状況①(東から)
3 7 - 3	屋嶋城跡浦生地区 H28-1Tr 南壁土層(北から)	4 5 - 3 北嶺山上地区 H20-2Tr 検出状況②(西から)
3 7 - 4	屋嶋城跡浦生地区 H28-2Tr 調査前状況(西から)	4 5 - 4 北嶺山上地区 H20-2Tr 南壁土層(北から)
3 7 - 5	屋嶋城跡浦生地区 H28-2Tr 石積み検出状況①	4 5 - 5 北嶺山上地区 H20-3Tr 調査前状況(西から)
		4 5 - 6 北嶺山上地区 H20-3Tr 検出状況①(西から)
		4 5 - 7 北嶺山上地区 H20-3Tr 検出状況②(東から)
		4 5 - 8 北嶺山上地区 H20-3Tr ピット検出状況(北から)
		4 6 - 1 北嶺山上地区 H20-4Tr 調査前状況(西から)
		4 6 - 2 北嶺山上地区 H20-4Tr 南壁土層(東から)
		4 6 - 3 北嶺山上地区 H20-4Tr 検出状況(東から)
		4 6 - 4 北嶺山上地区 H20-4Tr 岩盤状況(西から)

4 6 - 5	北嶺山上地区 H26-1Tr 調査前状況（北から）	5 4 - 3	北嶺山上地区 H28-2Tr 土器出土状況②（北から）
4 6 - 6	北嶺山上地区 H26-1Tr 検出状況①（南東から）	5 4 - 4	北嶺山上地区 H29-1Tr 調査前状況（西から）
4 6 - 7	北嶺山上地区 H26-1Tr 東壁土層①（南西から）	5 4 - 5	北嶺山上地区 H29-1Tr 完掘状況①（東から）
4 7 - 1	北嶺山上地区 H26-1Tr 検出状況②（北東から）	5 4 - 6	北嶺山上地区 H29-1Tr 完掘状況②（北から）
4 7 - 2	北嶺山上地区 H26-1Tr 検出状況③（東から）	5 4 - 7	北嶺山上地区 H29-1Tr 完掘状況③（南から）
4 7 - 3	北嶺山上地区 H26-1Tr 検出状況④（北東から）	5 4 - 8	北嶺山上地区 H29-1Tr 完掘状況④（南から）
4 7 - 4	北嶺山上地区 H26-1Tr 検出状況⑤（南東から）	5 5 - 1	北嶺山上地区 H29-1Tr 完掘状況⑤（北から）
4 8 - 1	北嶺山上地区 H26-1Tr 南壁土層（北西から）	5 5 - 2	北嶺山上地区 H29-1Tr 北壁土層①（南から）
4 8 - 2	北嶺山上地区 H26-1Tr 東壁土層②（西から）	5 5 - 3	北嶺山上地区 H29-1Tr 北壁土層②（南から）
4 8 - 3	北嶺山上地区 H26-2Tr 調査前状況（北から）	5 5 - 4	北嶺山上地区 H29-1Tr 北壁土層③（南から）
4 8 - 4	北嶺山上地区 H26-2Tr 完了状況①（北から）	5 5 - 5	北嶺山上地区 H29-2Tr 調査前状況（南から）
4 8 - 5	北嶺山上地区 H26-2Tr 完了状況②（南から）	5 5 - 6	北嶺山上地区 H29-2Tr 検出状況①（北東から）
4 8 - 6	北嶺山上地区 H26-2Tr 南壁土層（北から）	5 5 - 7	北嶺山上地区 H29-2Tr 検出状況②（南から）
4 8 - 7	北嶺山上地区 H26-2Tr 北壁土層（南東から）	5 5 - 8	北嶺山上地区 H29-2Tr 炭化材検出状況（東から）
4 9 - 1	北嶺山上地区 H27Tr 検出状況①（北から）	5 6 - 1	北嶺山上地区 H29-2Tr 炭化材集中範囲半裁状況（東から）
4 9 - 2	北嶺山上地区 H27Tr 検出状況②（南から）	5 6 - 2	北嶺山上地区 H29-2Tr S K 1 検出状況①（北西から）
4 9 - 3	北嶺山上地区 H27Tr 完了状況（北から）	5 6 - 3	北嶺山上地区 H29-2Tr 調査完了状況（北東から）
4 9 - 4	北嶺山上地区 H27Tr 検出状況③（東から）	5 6 - 4	北嶺山上地区 H29-2Tr S K 1 検出状況②（西から）
4 9 - 5	北嶺山上地区 H27Tr 検出状況④（西から）	5 7 - 1	北嶺山上地区 H29-2Tr S K 1 検出状況③（南から）
5 0 - 1	北嶺山上地区 H27Tr 南壁土層（北から）	5 7 - 2	北嶺山上地区 H29-2Tr S K 1 土層（西から）
5 0 - 2	北嶺山上地区 H27Tr 東壁土層（南西から）	5 7 - 3	北嶺山上地区 H29-2Tr 南壁土層（北から）
5 0 - 3	北嶺山上地区 H27Tr 北壁土層（南東から）	5 7 - 4	北嶺山上地区 H29-2Tr 東壁土層（北西から）
5 0 - 4	北嶺山上地区 H27Tr 北端北壁土層（南から）	5 8 - 1	北嶺山上地区 H29-2Tr ピット検出状況（南から）
5 0 - 5	北嶺山上地区 H27Tr ピット検出状況（西から）	5 8 - 2	北嶺山上地区 H29-2Tr ピット完掘状況（南から）
5 0 - 6	北嶺山上地区 H27Tr ピット完掘状況（西から）	5 8 - 3	北嶺山上地区 H29-3Tr 完掘状況（南から）
5 0 - 7	北嶺山上地区 H28-1Tr 調査前状況（西から）	5 8 - 4	北嶺山上地区 H29-3Tr 土層状況（南から）
5 0 - 8	北嶺山上地区 H28-1Tr 完了状況①（北西から）	5 8 - 5	北嶺山上地区 H29-4Tr 完掘状況①（南東から）
5 1 - 1	北嶺山上地区 H28-1Tr 完了状況②（東から）	5 8 - 6	北嶺山上地区 H29-4Tr 完掘状況②（南西から）
5 1 - 2	北嶺山上地区 H28-1Tr 完了状況③（南東から）	5 8 - 7	北嶺山上地区 H29-4Tr 完掘状況③（東から）
5 1 - 3	北嶺山上地区 H28-1Tr 完了状況④（東から）	5 8 - 8	北嶺山上地区 H29-4Tr 完掘状況④（西から）
5 1 - 4	北嶺山上地区 H28-1Tr 完了状況⑤（南西から）	5 9 - 1	北嶺山上地区 H29-4Tr 完掘状況⑤（南から）
5 1 - 5	北嶺山上地区 H28-1Tr 完了状況⑥（西から）	5 9 - 2	北嶺山上地区 H29-4Tr 完掘状況⑥（南西から）
5 1 - 6	北嶺山上地区 H28-1Tr 南壁土層①（北から）	5 9 - 3	北嶺山上地区 H29-4Tr 完掘状況⑦（西から）
5 1 - 7	北嶺山上地区 H28-1Tr 南壁土層②（北から）	5 9 - 4	北嶺山上地区 H29-4Tr 完掘状況⑧（南西から）
5 1 - 8	北嶺山上地区 H28-1Tr 南壁土層③（北から）	5 9 - 5	北嶺山上地区 H29-4Tr 土層①（南から）
5 2 - 1	北嶺山上地区 H28-1Tr 南壁土層④（北から）	5 9 - 6	北嶺山上地区 H29-4Tr 土層②（南から）
5 2 - 2	北嶺山上地区 H28-1Tr 南壁土層⑤（北から）	5 9 - 7	北嶺山上地区 H29-4Tr 土層③（南から）
5 2 - 3	北嶺山上地区 H28-1Tr 東壁土層（北から）	5 9 - 8	北嶺山上地区 H29-4Tr 土層④（南から）
5 2 - 4	北嶺山上地区 H28-2Tr 調査前状況（東から）	6 0 - 1	屋嶋城跡浦生地区出土平瓶
5 2 - 5	北嶺山上地区 H28-2Tr 完了状況①（北東から）	6 0 - 2	屋嶋城跡浦生地区出土石器
5 2 - 6	北嶺山上地区 H28-2Tr 完了状況②（北から）	6 0 - 3	屋嶋城跡浦生地区・北嶺山上地区出土青磁及び須恵器
5 2 - 7	北嶺山上地区 H28-2Tr 完了状況③（東から）	6 0 - 4	屋嶋城跡浦生地区・北嶺山上地区出土かわら投げのかわらけ
5 2 - 8	北嶺山上地区 H28-2Tr 完了状況④（西から）		
5 3 - 1	北嶺山上地区 H28-2Tr 完了状況⑤（北から）		
5 3 - 2	北嶺山上地区 H28-2Tr 完了状況⑥（南東から）		
5 3 - 3	北嶺山上地区 H28-2Tr 完了状況⑦（北東から）		
5 3 - 4	北嶺山上地区 H28-2Tr 北壁土層①（南から）		
5 3 - 5	北嶺山上地区 H28-2Tr 北壁土層②（南東から）		
5 3 - 6	北嶺山上地区 H28-2Tr 北壁土層③（南から）		
5 3 - 7	北嶺山上地区 H28-2Tr 北壁土層④（南から）		
5 3 - 8	北嶺山上地区 H28-2Tr 北壁土層⑤（南から）		
5 4 - 1	北嶺山上地区 H28-2Tr 北壁土層⑥（南から）		
5 4 - 2	北嶺山上地区 H28-2Tr 土器出土状況①（北から）		

## 第1章 経緯と経過

### 第1節 調査の経緯

屋島は全域約10km<sup>2</sup>が昭和9年11月10日に下記の指定理由によって国の史跡及び天然記念物に指定され、平成26年度で指定80周年を迎えた。また、同年には、屋島を含む範囲が瀬戸内海国立公園に指定されている。

「瀬戸内海火山脈ノ特有熔岩トシテ知ラレ世界的ニ稀有ナル古銅輝石安山岩ヨリ成レル南北ニ長キ熔岩臺地ニシテ遠望屋根状ヲ成シ山容雄偉ナリ頂上ハ平夷ナレドモ四周絶壁ヲ繞ラシ地形上『メサ』ノ標識的ナルモノトシテ其ノ名ヲ知ラル又頂上近キ處ニ露出スル通称『疊石』ハ板状節理ノ最モ美ナルモノトシテ著名ナリ

山上ニ立チテ眼ヲ放テバ西方水邊ニ近ク高松市ノ城櫓家屋ヲ望ミ海上ニハ大小ノ島嶼浮ベルヲ見ル其ノ一帯ノ地ハ史蹟ニ富ミ天智天皇6年外寇防備ノ為メニ築カレタル山城ノ一ナリ又唐僧鑑真ノ創建ト傳フル屋島寺アリ壽永3年平宗盛等安徳天皇ヲ奉ジテ此ニ據リ源氏二氏ノ接戦セシ所ニシテ古戦場トシテ世ニ知ラル」

その後、昭和51年に香川県教育委員会により屋島保存管理計画が策定され、その後、本市へと引き継がれ保存が図られてきた。

本市では、史跡を構成する屋島城跡、源平合戦の古戦場、屋島寺に関する保存し活用すべき対象の明確化とその適正な保存と活用に関する指針づくりを行うため、平成5年から「高松市史跡天然記念物屋島保存整備等基本構想策定委員会」を設置し、議論が重ねられた。その結果、「高松市史跡記念物屋島保存整備等基本構想」としてまとめられ、その中で、屋島に所在する文化財は歴史的価値の高いものが多く、これらを対象とした調査の必要性が高まった。その後、平成7年3月に『史跡天然記念物屋島保存整備等基本構想』を策定し、9年には『史跡天然記念物屋島保存管理計画』を策定した。前者の中で、屋島の歴史・文化・自然の保存と共生を目指した自然歴史博物園の創造を掲げている。この構想の方針の一つとして「継続的組織的な調査研究と恒久的保存」を挙げ、屋島の文化財について現状を把握することを目的として、史跡天然記念物屋島基礎調査事業を平成7年度から開始することとなった。

これまで約20年間にわたり、調査を実施した箇所は第1図と第1・2表のとおりである。既に、長崎鼻古墳の構造及び石棺の確認、千間堂跡の発見、屋島城跡の城門の発見などの成果が上がっており、それらの調査成果については平成14、19年度に『史跡天然記念物屋島』I、IIとして調査報告書を刊行している。特に、屋島城の確定に至った城門遺構の調査については、12年度以降、調査を開始し、城門の確認をはじめ多くの成果を得るとともに、平成19～27年度に整備事業を実施し、現在、屋島城跡の歴史を伝える場として整備されている。成果の詳細は、高松市教育委員会2016刊行の『屋島城跡一城門遺構整備事業報告書』を参照いただきたい。

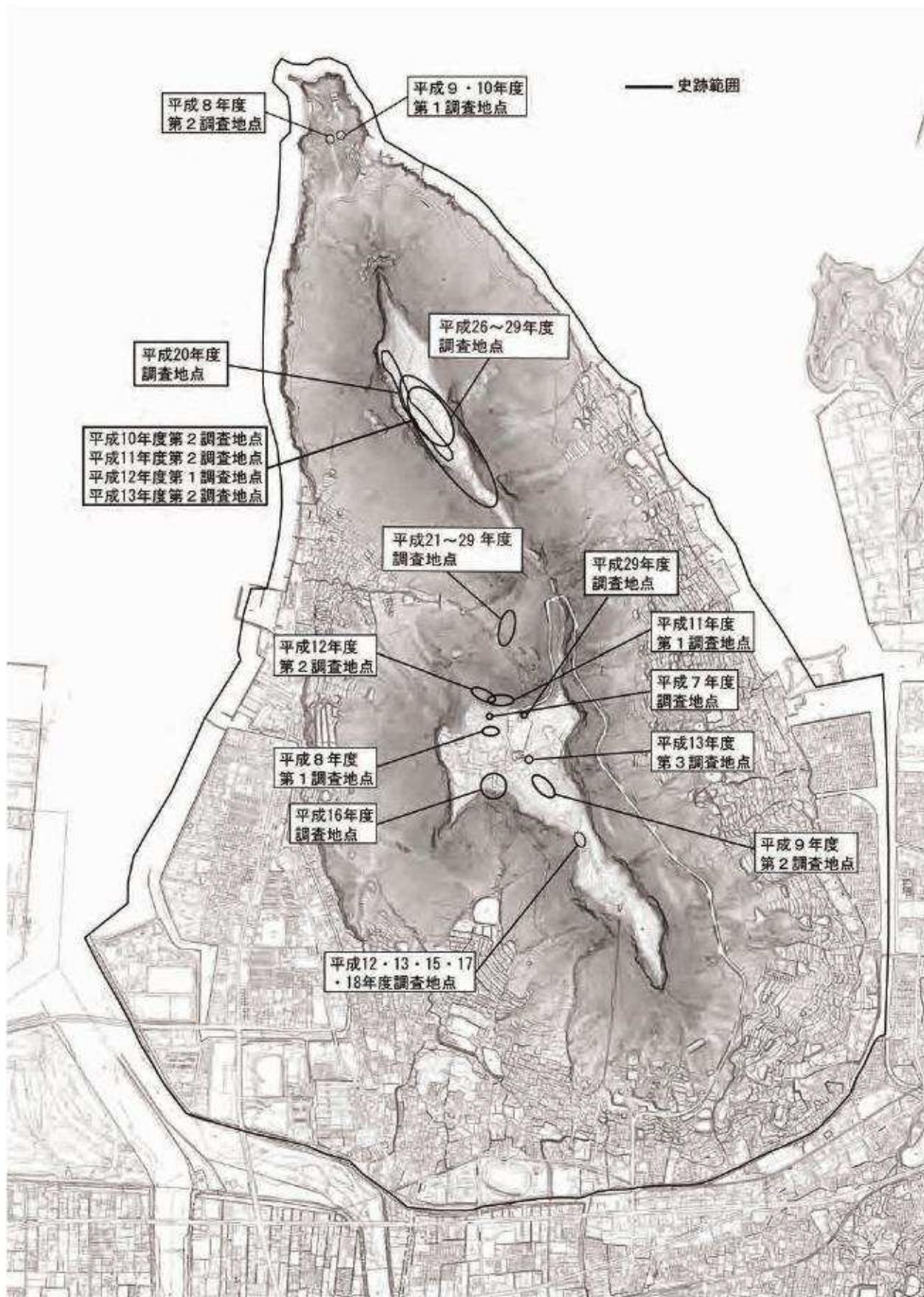
一方で、近年では、香川大学、京都府立大学と連携し、新たな視点で天然記念物や名勝としての屋島の価値の掘り起こしとそれらの成果の総合化が進んできている（高松市・香川大学天然記念物調査団2014、高松市・京都府公立大学法人2016）。また、史跡天然記念物指定、国立公園への指定の経緯などについても明らかにされつつある（高松市歴史資料館2014、大久保2015）。一方で、史跡の構成要素である屋島城、屋島寺、源平合戦古戦場をはじめとし、その価値が明らかにされているものは未だ一部であり、今後のさらなる調査研究が期待されている。

### 第2節 調査の経過

本書は、以上の経緯の中で平成19～29年度に実施した発掘調査の成果について報告するものである。年度別の調査箇所については、第1・3図のとおりである。調査成果については、第3章において詳述するが、調査の経過について整理しておきたい。本書で報告する調査の成果は大きく3つに分かれており、①地形測量、②分布調査（踏査）、③発掘調査である。これらの項目における経過についてまず、個別に整理しておく。

#### A. 地形測量

近年では、レーザー測量技術を用いて大規模遺跡の



第1図 史跡天然記念物屋島基礎調査事業年度別調査箇所図 (S= 1 / 800)

第1表 史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査箇所及び調査次数一覧表①

年度	調査 次数			内 容
昭和	42	1	南嶺	水族館
	55	2	浦生	浦生の石塁
		3	北嶺	千間堂周辺
平成	元	4	北嶺	千間堂周辺
	5	南嶺	屋島寺西側倉庫	池跡を確認。
	6	南嶺	屋島寺鎮守社	江戸時代の遺物出土。
	7	南嶺	屋島寺宝物館	江戸時代の遺構遺物を確認。7～8世紀の須恵器出土。
	8	東麓	安徳天皇社	遺構遺物なし。
	9	南嶺	駐車場北部	弥生土器出土。
	10	南嶺	屋島寺北側	集石遺構を確認。
	11	南嶺	屋島寺南	遺構遺物なし。
	12	南嶺	屋島寺北側	土塁を確認。
	13	長崎鼻	長崎鼻古墳	前方部で葺石確認。鯨の墓調査。
	14	南嶺	屋島寺南東	弥生土器出土。古代から中世の柱穴確認。
	15	長崎鼻	長崎鼻古墳	葺石確認。
	16	北嶺	千間堂周辺	石列確認。
	17	長崎鼻	長崎鼻古墳	墳丘及び石棺確認。
	18	南嶺	屋島寺庫裏	江戸時代の遺物出土。
	19	南嶺	北斜面	土塁確認。
	20	北嶺	千間堂周辺	礎石建物、集石遺構確認。
	21	南嶺	北斜面	土塁確認。
	22	南嶺	南西斜面（城門）	石積み等確認。
	23	北嶺	千間堂周辺	多口瓶が出土。
	24	南嶺	南西斜面（城門）	城門確認。
	25	南嶺	屋島寺周辺	落ち込み状遺構を確認。
	26	北嶺	千間堂周辺	礎石建物を確認。
	27	南嶺	南西斜面（城門）	甕城確認。
	28	南嶺	屋島寺南側	南水門跡と考えられる石積み確認。
	29	南嶺	南西斜面（城門）	城門背面列石確認。
	30	南嶺	南西斜面（城門）	甕城範囲確認。
	31	南嶺	南西斜面（城門）	石積み範囲確認。
	32	南嶺	屋島寺南東	遺構遺物なし。
	33	北嶺	西斜面	弥生土器出土。
	34	南嶺	南西斜面（城門）	城門及び城壁確認。
	35	南嶺	南西斜面（城門）	城門及び南側城壁構造確認。
	36	浦生	浦生の石塁	城壁及び城内構造確認。須恵器平瓶出土。
	37	南嶺	南西斜面（城門）	城門及び南側城壁構造確認。
	38	浦生	浦生の石塁	城壁構造確認。

第2表 史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査箇所及び調査次数一覧表②

年度	調査 次数			内 容
	23	39	南嶺	南西斜面（城門） 城門及び南側城壁積み直し。
		40	浦生	浦生の石塁 城内側斜面部確認。
24	41	南嶺	南西斜面（城門） 城門及び南側城壁積み直し。	
		42	浦生	浦生の石塁 城壁城内側の石積み確認。
		43	浦生	鶴羽神社境内遺跡 散布調査。
25	44	南嶺	獅子の靈巖	遺構遺物なし。
		45	南嶺	南西斜面（城門） 城門及び北側城壁。
		46	浦生	鶴羽神社境内遺跡 包含層等確認。
		47	南嶺	西尾根 遺構遺物なし。
		48	浦生	浦生の石塁 城壁城内側の石積み確認。
26	49	浦生	鶴羽神社境内遺跡 包含層及び焼塙炉確認。	
		50	南嶺	南西斜面（城門） 城門及び北側城壁。
		51	北嶺	千間堂周辺 遺構なし。遺物わずかに出土。
		52	浦生	浦生の石塁 犬城（張り出し部）の構造確認。
27	53	南嶺	南西斜面（城門） 犬城及び背面列石確認。	
		54	浦生	鶴羽神社境内遺跡 包含層及び焼塙炉確認。
		55	北嶺	千間堂周辺 遺構なし。遺物わずかに出土。
		56	浦生	浦生の石塁 犬城（張り出し部）の構造確認。
28	57	南嶺	潟元周辺	遺構なし。遺物わずかに出土。
		58	浦生	浦生の石塁 犬城（張り出し部）の構造確認。
		59	北嶺	千間堂周辺 遺物出土。屋島礫層確認。
29	60	南嶺	壇ノ浦地区	遺構遺物なし。
		61	南嶺	北斜面地区 遺構なし。遺物わずかに出土。
		62	浦生	浦生の石塁 城門周辺で石積みを確認。
		63	北嶺	千間堂周辺 遺構なし。遺物わずかに出土。
30	64	南嶺	潟元周辺	遺構なし。遺物わずかに出土。

航空レーザー測量が実施されるケースが多くなっており、本市でも石清尾山古墳群で実施し、多くの成果を上げていた。それらの成果を受けて、広大な史跡の中に点在する遺構群／遺跡の正確な位置、旧地形の検討、天然記念物としての価値である地形のより詳細な把握等を目指して、平成26～27年度にかけて航空レーザー測量による地形測量を実施し、新たな詳細な地形図を作成した。この地形測量は地形、遺跡の分布を正確に把握すると同時に、地形や遺跡の分布の把握を通じて、新たに得られた知見に基づき、これまでの調査を見直すとともに、さらには今後の調査計画のための分布調査の実施等において基礎資料とするものである。

実際に、測量成果に基づき、目的的な分布調査を実施するとともに、後述するような屋嶋城跡をはじめとして地形と遺構の関係の検討に用いている。

#### B. 分布調査（踏査）

平成7年度の事業開始以降、継続的に実施しているもので、本事業期間においても、平成19、20、25、28～30年度に重点的に実施している。特に、19年度には、後述するように、新たに江戸時代の花崗岩の石切丁場跡を確認（高松市教育委員会2009）する成果を得た。この成果は史跡屋島にとどまらず、

史跡高松城跡の築城や維持管理の問題にも関係することとなり、史跡間を横断する成果に結びついている。

また、既述のとおり、航空レーザー測量による地形測量の後には、これらの成果をもとに、山上周辺の遺構分布、麓周辺の地形復元、石切丁場跡周辺等を目的として踏査を実施している。

### C. 発掘調査

平成19年度以降、発掘調査は2箇所で重点的に実施してきた。

1箇所は屋嶋城跡の浦生地区の城壁周辺の調査である。当該地区は屋嶋城跡が学術的に調査研究された最初の場所であり、昭和55年には本市教育委員会による最初の発掘調査を実施していた。石積み遺構を新たに確認したものの、城壁の立地に関する理解や年代的な裏付けが困難であったことから、その位置付けが不明確なままであった。その中で、山上で屋嶋城跡の城門が発見され、構造が明らかになるとともに、近年、その他の古代山城における調査研究の進展によって、当該地区の城壁の再調査の意義が高まった。それらの経緯を踏まえ、21～29年度にかけて調査を実施した。

もう1箇所は北嶺山上地区である。昭和55年、平成10～13年にかけて既に発掘調査を実施し、屋島寺の縁起に残る北嶺の寺院跡を確認していた。その後、本事業で20年度に調査を実施していたが、新たな価値の掘り起しや千間堂跡の構造や範囲の解明を目的として25年度に現地踏査を実施し、建物跡などが存在する可能性が高い箇所を選定しながら、26～29年度にかけて実施した。

なお、発掘調査としてはこのほかに、鞠羽神社境内遺跡において、地元浦生自治会の協力を得て、24～27年にかけて徳島文理大学と共同調査を実施している（高松市教育委員会2014・2015・2016）が、その詳細な成果については別途報告予定である。

また、本事業に関する調査、特に浦生地区的調査については、文化庁、香川県教育委員会に現地指導をいただくとともに、平成20～27年度においては屋嶋城跡調査整備検討委員会（平成24年度に屋嶋城調査整備会議（第5、6、8、11、14、20、24回）において、調査成果について報告するとともに、現地を確認いただき、調査計画及びその成果について指導をいただいた。また、このほか、多くの研究者にも現

地指導をいただいた。

また、浦生地区の調査については、22、25、26年度において地元を中心とした現地説明会を実施し、多くの地元の方に屋嶋城跡の浦生地区の城壁について知っていただく機会となった。

### 屋嶋城跡調査整備会議

#### 委員長（会長）

丹羽佑一（香川大学名誉教授 考古学）（～27年度）

#### 副委員長（副会長）

龟田修一（岡山理科大学教授 考古学）（～27年度）

#### 委員

石松好雄（（元）九州歴史資料館副館長 考古学（～25.3））

赤司善彦（福岡県教育府総務部副理事兼文化財保護課長

考古学（25.4～27年度））

狩野 久（（元）岡山大学教授 古代史（～27年度））

西田一彦（関西大学名誉教授 地盤工学（20.10～27年度））

箱崎和久（奈良文化財研究所遺構研究室長 建築（～23.4））

大林 潤

（奈良文化財研究所遺構研究室研究員 建築（23.5～27年度））

吉田重幸（（元）香川大学教授 緑地環境）（～27年度）

#### オブザーバー

小野健吉

（文化庁文化財部記念物課 文化財調査官（19～20年度））

内田和伸

（文化庁文化財部記念物課 文化財調査官（21～26年度））

五島昌也

（文化庁文化財部記念物課 文化財調査官（27年度））

森格也

（香川県教育委員会 主任文化財専門員（19～21年度））

森下英治

（香川県教育委員会 主任文化財専門員（22～24年度））

山下平重

（香川県教育委員会 主任文化財専門員（25～27年度））

### D. 整理作業

平成19～28年度に実施した発掘調査の概要については、隨時とりまとめ、実施年度の翌年度に本市内遺跡発掘調査概報として報告してきた。さらに30年度には、29年度に実施した調査の成果に関する整理作業を実施するとともに、これまでの調査で出土した遺物の整理作業、調査成果の総括的な見直し、検討作業を実施し、本書の作成を行った。

そのため、これまでの知見の総合化やそれに基づく遺構の見直し等を行ったことから、概報において示した遺構に関する所見や理解についても一部見直しを実施し、修正している点もある。最終の調査成果については本書を参照いただきたい。

## 参考文献

- 大久保徹也 2015 「屋島 1934～史跡名勝天然記念物保存法と国立公園法～」『徳島文理大学比較文化研究所 2014年度公開講演会資料』
- 高松市 1995 「高松市史跡天然記念物屋島保存整備等基本構想」
- 高松市 1995 「高松市史跡天然記念物屋島保存整備等基本構想」付録
- 高松市・香川大学天然記念物屋島調査団 2014 「天然記念物屋島調査報告書」
- 高松市・京都府公立大学法人 2016 「屋島名勝調査報告書」
- 高松市教育委員会 1997 「史跡天然記念物屋島保存管理計画書」
- 高松市教育委員会 1981 「屋島城跡」
- 高松市教育委員会 2003 「史跡天然記念物屋島」史跡天然記念物屋島基礎調査事業報告書Ⅰ
- 高松市教育委員会 2007 「屋島寺」
- 高松市教育委員会 2008 「屋嶋城跡」Ⅱ 史跡天然記念物屋島基礎調査事業報告書Ⅱ
- 高松市教育委員会 2009 「平成 20 年度高松市内遺跡発掘調査概報」
- 高松市教育委員会 2010 「平成 21 年度高松市内遺跡発掘調査概報」
- 高松市教育委員会 2011 「平成 22 年度高松市内遺跡発掘調査概報」
- 高松市教育委員会 2012 「平成 23 年度高松市内遺跡発掘調査概報」
- 高松市教育委員会 2012 「古代山城プレサミットシンポジウム」資料集
- 高松市教育委員会 2013 「平成 24 年度高松市内遺跡発掘調査概報」
- 高松市教育委員会 2014 「平成 25 年度高松市内遺跡発掘調査概報」
- 高松市教育委員会 2015 「平成 26 年度高松市内遺跡発掘調査概報」
- 高松市教育委員会 2016 「平成 27 年度高松市内遺跡発掘調査概報」
- 高松市教育委員会 2016 「屋嶋城跡－城門遺構整備事業報告書－」
- 高松市教育委員会 2017 「平成 28 年度高松市内遺跡発掘調査概報」
- 高松市教育委員会 2018 「平成 29 年度高松市内遺跡発掘調査概報」
- 高松市歴史資料館 2014 「史跡・天然記念物屋島指定 80 周年記念企画展屋島－シンボリックな大地に刻まれた歴史－」
- 高松市歴史民俗協会 2009 「屋嶋城が見えた！歴民シンポジウム古代讃岐のロマン」

## 第2章 地理的・歴史的環境

### 第1節 立地環境

屋島は高松市域の北東部に位置し、瀬戸内海に面した島である。高松市中心市街地から東方約5kmの所に位置する。その面積は約1.0km<sup>2</sup>で高松市の面積の約5%を占める。

屋島は名前のとおり古代において島であった。瀬戸内海は複数の灘や瀬戸によって形成されているが、その中でも屋島は備瀬戸の東限に位置する。

#### A. 地形

瀬戸内海に突き出た南北幅約5km、東西幅約2kmと南北に長い、台地状の独立丘を呈する島である。標高は292m（南嶺）及び283m（北嶺）で、山上部は平坦、中腹は急峻、山麓は緩傾斜、沿岸は平坦で、メサ地形の標型である。

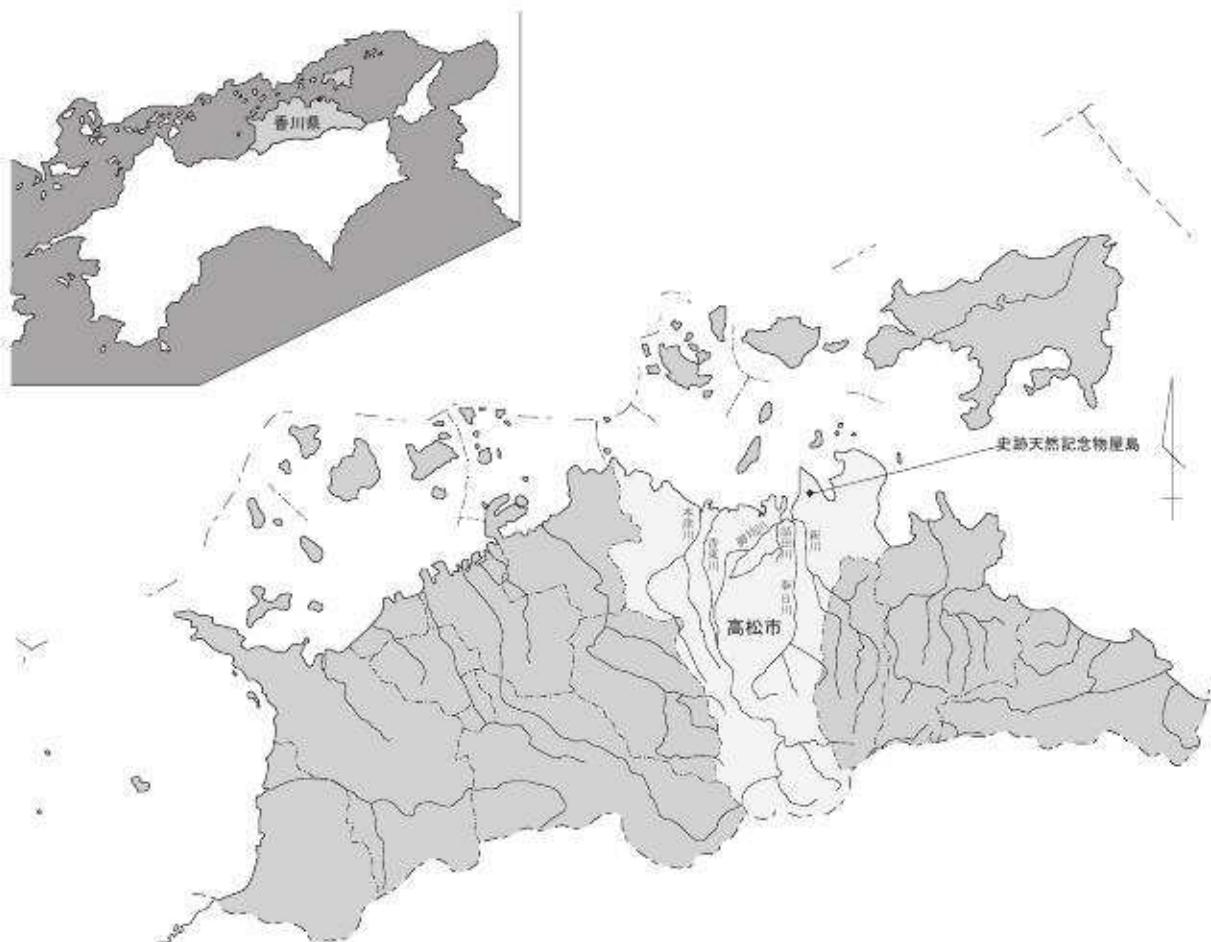
屋島の成り立ちについては、既に、長谷川修一氏に

よって、『天然記念物屋島調査報告書』にまとめられており、以下のような地質的特徴、形成過程がまとめられている。

基盤は領家複合岩（花崗岩・変成岩）の讃岐層群（新第三紀中新世）が山頂部と山頂直下の急斜面を覆っている。構成する讃岐層群は下位から凝灰岩（玄武岩質火山礫凝灰岩（北嶺）・流紋岩質凝灰岩（南嶺））、讃岐岩質安山岩、流紋岩質凝灰岩（雪の庭凝灰岩）、屋島礫層の順に区分される。

これらに加えて、近年の発掘調査によって、北嶺山頂の千間堂広場周辺（北側）にも局所的に、安山岩形成以後に屋島礫層と類似した別の経緯で堆積した土が存在することが明らかになった。

基盤に当たる花崗岩は、白亜紀後期（9,000万年前）の太平洋側のプレートの沈み込みによる火山活動



第2図 史跡天然記念物屋島位置図

によって、花崗岩体（領家花崗岩類）が形成され、これが隆起することで基盤岩を形成した。その後、1,600万年前の瀬戸内火山活動によって基盤の花崗岩の上位に凝灰岩（玄武岩質火山礫凝灰岩）の堆積が始まる。これが現在の豊島、男木島、女木島、屋島北嶺の範囲に堆積し、いわゆる豊島石と呼ばれている石材の母岩で、後世において墓石や建材等の石材として利用されている（松田 2009、長谷川 2011）。

さらに1,400万年前の火山活動によってカルデラ（高松クレーター）が形成され、ここから噴出した火砕流が庵治半島の白粉石などと呼ばれる凝灰岩（流紋岩質）を形成する。さらに、サヌキトイドをはじめとした多様な安山岩溶岩が屋島周辺に流れ込んだ。

以上の経緯の中で、安山岩溶岩が流れ込んだ箇所（凹地）では、基盤の花崗岩の上部に凝灰岩、安山岩の順に堆積することとなった。周辺の大半の地層が浸食された後も大規模に残り、メサ地形を形成することとなった。また、山頂の讃岐岩質安山岩も少しずつ崩落し、それらが崩積土となって斜面の浸食を妨げ、美しい寺勾配を形成している。

屋島の基盤岩は中生代白亜紀に形成された領家花崗岩類（黒雲母花崗岩など）からなり、標高200m付近より山頂部にかけて讃岐層群（凝灰岩、讃岐岩質安山岩）がほぼ水平に重なっている。

この屋島山上部を構成する讃岐層群は、玄武岩質火山礫凝灰岩、流紋岩質凝灰岩、讃岐岩質安山岩、雪の庭凝灰岩、屋島礫層からなっている。特に凝灰岩は北嶺に多く分布し、南嶺の一部で認められる。また、雪の庭凝灰岩、屋島礫層は南嶺の山頂部のみで認められる。

屋島の基盤岩は中腹の標高200mまでが、中生代白亜紀の領家花崗岩類に属する黒雲母花崗岩が優勢であり、有色鉱物（角閃石など）を多く含み、閃綠岩質の部分がみられる。基盤の黒雲母花崗岩は、新鮮部は堅硬緻密な岩盤であるが、表層からの風化が進み深部までマサ状に風化している。

基盤岩の花崗岩上に不規則な浸食面をもって、凝灰岩角礫岩が2～5.0mの厚さでほぼ水平に重なっている。おもに塩基性安山岩の角礫を多く含み、基質は凝灰岩よりなり、よく密着しており緑灰色や暗灰色を呈する。

この讃岐岩質安山岩は様々な節理が観察され、冷え固まってできる柱状節理、溶岩が流れながら冷え固まってできる板状節理、不規則な節理などが確認できる。

## B. 水系

概ね南北に走る山頂尾根部が東西方向の分水界を形成している。

主な河川としては屋島の裾部の人工的に開削された相引川や汐入川があり、その他は、屋島の南嶺と北嶺を分け西へ延びる谷部を流れる浦生川が挙げられる。ただ、全体に渡って小規模な谷が形成されている。これらの谷を利用したため池が標高100m未満の山麓部に多数分布している。

## C. 植生

以前は全体的にマツ群落が優先しており、1970年代までは屋島全体の80%を覆っていたが、1998年で1.4%となり、現在は、わずかである。マツ林が一定の広がりをもって分布しているのは北嶺北東部の海岸付近で、南嶺山上の城門地区付近にもアカマツがわずかに分布している。

ウバメガシ林は屋島の特徴的な植生である。屋島北端部、北嶺山頂部周辺、南嶺山頂部などの急傾斜地に分布している。

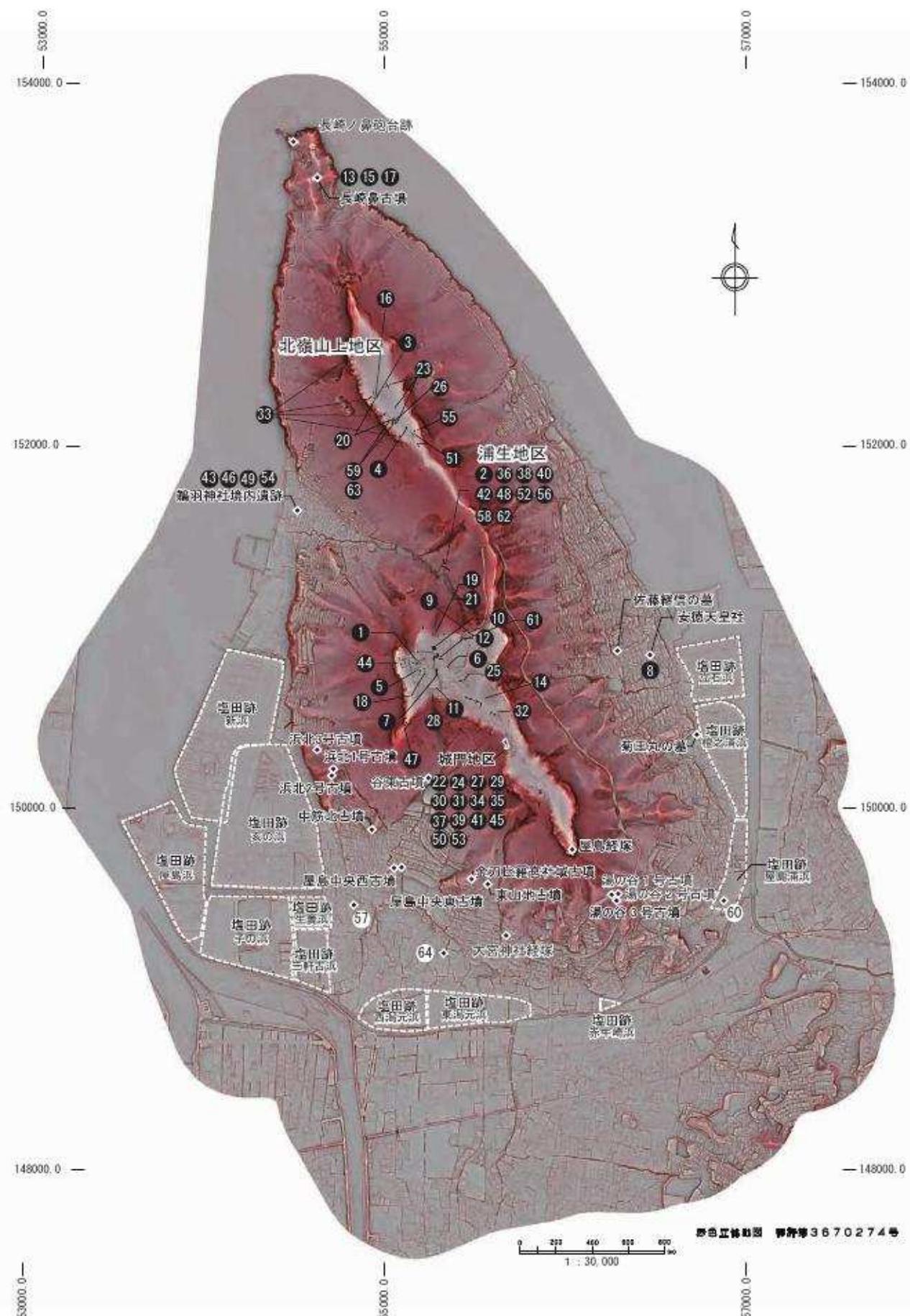
落葉広葉樹林は屋島全域に広く分布し、最も広い面積を占めている。コナラ、アベマキが優勢で、ヤマザクラ、ハゼノキが混生する。低木層はヒサカキやネズミモチが見られる。

常緑広葉樹林はクスノキが優勢で北嶺北側斜面、東側斜面、南嶺南部に分布し、ハゼノキ、クロガネモチ、ヤマモモなどが混生している。この他、東斜面に竹林、ドライブウェイ沿いにツル類なども分布している。マツ・落葉広葉樹混交林が北嶺西側斜面中腹、南嶺西側斜面、南嶺山頂部に分布し、常緑・落葉広葉樹混交林は北嶺東側斜面、南嶺西側斜面、南嶺南部野球場付近に分布している。

落葉広葉樹林が今後はしばらく拡大していく傾向が強いと言われている。

## D. 動物

哺乳類—小型哺乳類のみで、コウモリ類（主として採石跡の洞窟に生息）、食虫類、野鼠が確認されている。洞窟（採石跡地）に数多く生息しているコウモリ類は県内でも最大規模を有しており、少なくとも1,000頭程度のユビナガコウモリが生息している。この他にモジロコウモリ、コキクガシラコウモリなども生息しているようである。



第3図 史跡天然記念物屋島内遺跡等分布及び調査箇所地点 (S= 1 / 30,000)

また、近年はイノシシによる被害が目立ち、その影響は農作物だけでなく埋蔵文化財にまで及んでいることから、喫緊の課題と言える。鳥類としては、山間部約37種、水辺・海岸域約59種が確認されている。

樹林環境を反映して、樹林性鳥類が多く、コゲラ、ヤマゲラ、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリなどが挙げられる。環境省レッドリスト、香川県レッドリストに掲載されている種はオオバン、イカルチドリ、ハマシギ、サシバ、スグロカモメ、ミサゴ、ハイタカ、ハヤブサ、サンショウウクイ、セイタカシギの10種である。

## 第2節 歴史的環境

既述のとおり、屋島は古くは島であり、メサ地形と呼ばれる人々に視覚的印象を刻む特異な山としての形は、急峻な断崖絶壁によって作り出された閉ざされた空間：【山上】と海・外に開かれた空間：【山麓】という異なる二つの位相を作り出している。現代に至るまで人々は絶えず、この二つの位相を行き交いながら、重層的に多様な歴史を刻んできた。

現状で確認できる最も古い人々の活動は弥生時代中期で、まとまった土器や石器が山上で確認されており、山上での居住が想定でき、これは丘陵及び山頂に集落が移動する中期中葉の高松平野における集落動態に一致する現象である。

また、浦生地区の鶴羽神社境内遺跡では後期初頭に遡る製塩関連の遺物が確認されており、その後7世紀まで塩生産の拠点として断続的に使用されていたことが近年の発掘調査で明らかになっている。特に、古墳時代初頭の焼塩に関連すると想定される遺構も確認されている。

古墳時代初頭には西麓の尾根稜線上に浜北古墳群が築かれる。発掘調査はなされていないので詳細は不明であるが、最も山手に立地するのが1号墳で全長30m程度の前方後円墳である。前方部を山側に向け、後円部を斜面側に造るという古墳構築における諱岐特有の特徴が認められる。2号墳は1号墳よりも下方に位置し、現状では立体感に欠け、かろうじて南北約10m、東西約5~6mの範囲で墳丘状の高まりが認められる程度である。小竹一郎氏の報告では長径約15m、短径約12m、高さ2mと報告されている。採集された土器によれば、古墳時代前期前半に位置づけられ、墳丘の立体感とも齟齬がない。3号墳は小竹一郎

氏作成資料によれば2号墳の北西下方約5.0m西側の崖面において箱式石棺状の埋葬施設の残存が認められ、墳丘は長径約8m、短径約7mであるというが、平成11年度の分布調査では、痕跡さえ見つけることができなかったため流失した可能性もある。

古墳時代中期初頭に、屋島の先端である長崎ノ鼻に長崎鼻古墳が築かれる。平成8~10年度の史跡天然記念物屋島基礎調査事業による確認調査によって、全長45.8mの3段築成の前方後円墳で、墳丘の表面には葺石が葺かれていることが明らかになっている。後円部の埋葬施設は盗掘されており、その盗掘坑から、阿蘇熔結凝灰岩製の舟形石棺を確認している。屋島には母体となる後背地がなく、屋島を含めた古・高松湾を押さえながら、備讃瀬戸の四国側の制海権を掌握した豪族の存在を想定しなければならない。

後期には数基からなる古墳群が認められているが、いずれの古墳も発掘調査が実施されておらず詳細は不明である。これらの古墳群は屋島南麓のやや小高い箇所に点在している。これまでの資料に基づくと各古墳の状況は次のようである。

中筋北古墳は地蔵寺西方の小丘南端部にあり、南面した緩やかな傾斜地にあって、墳丘は削平流失してその跡をとどめていない。蓋石を失った長さ約2.4m、幅約0.6mの箱式石棺が残存する。出土遺物がないことから詳細な時期は不明である。屋島中央東古墳は、昭和43年の宅地造成の際に破壊され、宅地内の庭園の一隅に石が2石残存するのみであるが、石の大きさから横穴式石室であったと想定される。墳丘からは須恵器が採集されている。屋島中央西古墳は屋島中央東古墳の西方に位置し、天井石は除去され両側壁と奥壁の基底部近くが残るのみである。残存石室の規模は幅約2.5m、長さ約5.0m、残存高は約1.2mで、出土遺物はない。谷東古墳は農協学園グラウンドの上方に位置する横穴式石室を内部主体とする古墳である。金刀比羅宮社域古墳は屋島小学校の北東、四国電力高松莊裏山に存在し、金刀比羅宮の小祠の東側約8mに箱式石棺が認められる。箱式石棺は北側部分に小祠があり、状況は不明である。南半分は蓋石を失い、上縁部が露出している。現存の墳丘の規模は長径約8.0m、短径約6.0m、高さ1mである。

東山地古墳は金刀比羅宮社域古墳の東方に位置し、横穴式石室が開口する。湯の谷古墳群は3基からなる古墳群で屋島の南東斜面に位置する。直径は5.5~8.0m、高さ0.5~1.2mの規模で、主体部は盗掘

を受けている。湯の谷古墳群も墳丘の規模等から金刀比羅宮社域古墳と同様に箱式石棺を埋葬主体とする古墳であったと想定される。既述の後期古墳は方本（湯元）を中心とする南嶺の麓にまとまって分布しているが、これは島内の山麓で最も広い緩傾斜地が確保できる唯一の場所であり、小規模ではあるが、居住地を含め屋島における拠点として機能していた可能性のある場所である。

古代における屋嶋城や屋島寺以外の関連資料としては、平城宮出土木簡に「□（讀）岐山田郡海郷□葛木部龍麻呂□□□（調塩一か）斗」と記載されたものがあり、海郷の所在と屋島との関連が注目される。『倭名類聚抄』には山田郡は11郷が存在するが、海郷の記載ではなく、現在では山田郡のどの地域を指すものか不明である。海の文字が示すとおり、海に面した郷であることは間違いない、『倭名類聚抄』では山田郡の北端は高松郷や喜多郷であることから、平安時代の初めまでにはいずれかに吸収されたのかもしれない。いずれにしても屋島を含む山田郡の海岸線では、調貢用の塩の生産が行われていた可能性を想定できる非常に興味深い資料である。また、赤牛崎では、屋嶋城築城頃の土器も出土しており、今後の調査が期待される。

さて、弥生時代以降の山頂における歴史は不鮮明であるが、屋嶋城築城は屋島山頂における最初の大規模開発と位置付けることができる。屋嶋城の機能した期間については今後の調査に期待せねばならないが、屋島寺宝物館出土土器からすれば8世紀には廃城になった可能性がある（第4章参照）。

その後は宗教空間として利用されることとなる。断崖絶壁が作り出す閉ざされた空間としての山上は神聖な場として重要視され、靈山としての歴史が始まる。現在の四国靈場84番札所屋島寺は（山号は南面山）、『屋嶋寺龍巖勸進帳』などの史料によれば、開基は鑑真和尚で、天平勝宝6年（754）唐から来朝した際に都への中途で屋島に寄って、北嶺に堂宇（普賢堂）を建立し、普賢菩薩を安置したとされる。その後、その弟子空鉢惠雲律師が僧房を構え、初代の住持となって仏教を広めたと『唐招提寺千歳録』は伝えている（香川県1959）。その後、弘仁年間には、弘法大師が自ら千手観音像を作り、南嶺に寺院を移したとされる。

北嶺には鑑真谷や千間堂跡の名称が残る。この千間堂跡は、平成11年度の分布調査で基壇をもつ礎石建物跡が確認され、さらに12年度に基壇内部を調査したところ仏具と考えられる須恵器の多口瓶が3点確認

されたことから、伝承のとおり北嶺に寺院跡が存在したことが判明した。

初現は未だ明らかでないが、この建物が建立される前、9世紀頃から僧侶の修行場所として利用され、10世紀頃には礎石建物等の整備がなされ、12世紀頃まで機能していた。御本尊で重要文化財の千手観音坐像は10世紀の作とされ、北嶺での歴史を伝えるものと考えられる。

既述の仏堂と考えられる一部瓦葺きの礎石建物、その基壇及び周辺における出土遺物から10世紀中頃に北嶺に礎石建物（仏堂跡：山岳寺院）が建立された後、遅くとも平安時代末には南嶺に移り、伽藍が整備され始めた可能性が高い。ただし、北嶺の調査における出土遺物では10～12世紀のものを中心として、13世紀頃までの遺物が確認でき、9～13世紀の間、屋島寺の関連施設が所在した可能性が想定される。

一方、南嶺では、特に血の池の南側で、貯水池であったと考えられる場所で平安時代末期の平瓦が多量に出土しており、この頃大規模に寺院の造営若しくは修築が実施されたと考えられ、南嶺に伽藍が移ってきた段階と想定される。讃岐国分寺跡出土瓦（SKH19）と同文瓦も出土しており、その関係性も注目される。また、同時期の瓦として陶（十瓶山）窯跡群西ノ浦支群出土瓦と同文瓦も出土しており、伽藍整備や修築に陶（十瓶山）窯跡群の工人の関与が想定され、讃岐国内の他の主要寺院と同様な状況と言え、國衙の関与が想定される。また、近隣に瓦窯が所在していた可能性もある。

重要文化財である本堂は鎌倉時代末期（14世紀頃）と想定され、貞応2年（1223）に讃岐国住人沙門蓮阿弥陀仏の勧進によって土師宗友が鋳造した銅鐘や連珠文軒平瓦等の存在からも再度、鎌倉時代後期頃に寺院が大規模に整備されたことが明らかである。その後の詳細はわからないが、明徳21年（1391）の『大和國西大寺諸國末寺帳』には屋嶋普賢寺と記載され、永享8年（1436）の『大和國西大寺坊々寄宿諸末寺帳』では「讃岐國屋嶋寺」となっている。平成8年度の屋島寺本堂北側の調査ではこの頃と考えられる土壙を確認しており、15世紀段階には寺域が現在よりも北側まで広がっていたと想定できる。このように再び勢いを取り戻したようであるが、大永4年（1524）に先の重要文化財の梵鐘が善通寺市金倉寺に一時的に移されていたことや、『屋嶋寺龍巖勸進帳』の記載などによれば、16世紀頃には衰退していたと推定される。

江戸時代初期、龍巖上人によって勧進が行われ、大

規模な再建事業が実施される。『生駒一正寄進状』によれば、慶長15年（1610）、住持龍巖上人が時の藩主生駒一正に寺院の再興のため、本堂等の再建事業を願い出て許可を得る。しかし、一正の逝去により中断し、その後、正俊の援助を受け、勘進帳を携え、瀧岐高松はもとより、慶長16～18年（1611～1613）にかけて江戸・京都等で勘進を行い、元和9年（1623）まで続けられる。御本尊千手観音坐像光背裏墨書、建築部材に記された墨書等から本堂の修理工事は元和4年（1618）に実施されたようである。屋島寺に伝わる「源平屋島檀浦合戦縁起」の奥書には慶長17年（1612）と記されており、双幅で伝わる「屋島寺縁起絵」とともにこの一連の再建事業の中で製作されたものと考えられている（渋谷2014）。その後、本堂は万治元年（1658）、元禄2年（1689）、享保元年（1716）、安政6年（1859）から万延元年（1860）、明治39年（1906）、昭和32～34年（1957～1959）に大小様々な修理を経て、現在に至っている（香川県1959）。

本堂の他の寺院を構成する堂宇は、棟札や寺伝などから、仁王門が万治元年（1658）以前、千体堂が万治4年（1661）、四天門及び三体堂は18世紀中頃、御成門が文化9年（1812）に、鐘楼が19世紀中頃に建立されているようで（香川県教育委員会1981）、江戸時代を通じ、藩主であった生駒氏、松平氏等の庇護を受けながら整備された。仁王門、四天門、千体堂など多くの堂宇が境内地に現存しており、19世紀中頃に描かれた『瀧岐国名勝図会』や『金毘羅參詣名所図絵』との比較からも現在の寺觀がほぼ江戸時代に整えられていたことが分かる。現在は、四国霊場84番札所として多くのお遍路さんが訪れており、仁和寺が総本山である。

この他の古代に関わる考古資料としては、経塚資料があり、屋島山上南嶺の冠ヶ嶽にある屋島経塚と山麓の大宮神社境内地で発見された大宮神社経塚である。

屋島経塚については、『瀧岐国名勝図会』の記載から江戸時代に掘り出され、一切経が完全な状況で出土し、再度埋め戻されたことが伝えられている。南に開けた非常に見晴らしいの良い場所を選んで、石を方形に積み上げており、上部には祠がのせられているが、造営された年代や目的については不明である。

大宮神社経塚は、境内において不時発見されたもので、現在、その出土状況を知ることはできない。出土資料によれば、遺存状況は良好で、外容器は綾川町陶の陶（十瓶山）窯跡産の瓦器で、安山岩を蓋石として

いる。経筒の中に銅板製の経筒、その中に法華経と考えられる8巻分の経片が入っていた。このほか、輸入陶磁器で、青白磁製の合子、小石が出土している。これらの品々は、12世紀後半のものと推定されており、平安時代末から鎌倉時代初期の所産であると考えられる。

また、屋島と言えば、元暦2年（1185）2月19～21日にかけて起こった源平合戦屋島檀ノ浦の戦いであり、屋島東麓から牟礼町が舞台となつたと考えられている。合戦の内容は『吾妻鏡』、『平家物語』、『源平盛衰記』などの中に詳しい。現在の屋島東町・牟礼町・庵治町の各所には合戦関連の史跡（伝承地）が点在する。さて、平氏は屋島に拠点を構えることで瀬戸内を押さえ一時盛り返しを見せたことからも、屋島城の築城とともに、屋島が古代瀬戸内海において、重要な拠点として位置付けられていたことをうかがい知ることができる。

さて、現在に伝わる伝承や源平合戦に関する史跡（伝承地）という場の保存は、高松初代藩主松平頼重の顕彰活動（いわゆる現在の史跡整備）によるところが大きく、江戸時代初期までに残されていた、記録や伝承が一定程度保存されたと考えられる。その一方で、その伝承等がどこまで遡ることのできる事柄であるのかは不確定で、当時の合戦や平氏の陣地を直接的に示すものは未だなく、今後の調査研究が不可欠である。

その後、屋島は、中世においては『太平記』、『兵庫北関入船納帳』『さぬきの道者一円日記』などの文献に登場し、古・高松の玄関口として機能し、方本（渴元）は塩生産などをはじめとして流通の拠点として機能していたことが知られている。

室町時代から江戸時代にかけては屋島の西側から南西にかけて相次いで塩田が作られ、文安2年（1445）正月から同3年正月にわたる記録である『兵庫北関入船納帳』には船籍地として方本（現在の屋島西町渴元）の地名もみられ、港としても機能していたことがわかる。方本を船籍地とする船は400石以上の大型船であり、大型船の多くが塩の輸送に使われていたと考えられ、屋島周辺の塩田で作られた塩が盛んに積み出しされていたことがわかる。

屋島南側の「高松」と呼ばれていた地名は生駒氏による高松城築城と城下町の整備によって、野原の地（現在の高松城周辺）へと移される。江戸時代になると陸続きとなつたが、旧地形を取り戻すために、松平頼重によって相引川が掘られたことが知られている。その

後は、河川による堆積作用によって新田開発が容易となるとともに、塩田開発によって室町時代から方本周辺で行われていた塩作りが盛んとなるようである。高松藩や梶原景山らによる新たな塩田開発・整備等によって、古代から続く、塩生産に特化した空間利用となり、主要な産業となる。その他、文化2年（1805）に、初代三谷林叟によって屋島焼が開窯される。

長崎鼻には、高松藩が海上警備や島々と船との連絡のため、船奉行の配下に遠見番が置かれていた。番所には見張り場や狼煙場が置かれ、連絡用の船が一艘配置されていたと言われている。松平頼重は長崎鼻の防備上の重要性から二人の兵を配置し、警護には水戸藩士の鈴木道栄を住まわせ、代々、鈴木家が木里神社の祭祀を執り行ってきた。この木里神社は屋船句句遅遅神（ヤフネケクノチノカミ）という船の神様を祭神としている。創建は不明であるが、先の道栄が移り住んだ際にはすでに祀られていたと言われている。

さらに文久3年（1863）には海上防備のため、高松藩主が東の大串鼻、庵治の鎌野、下笠居の神在鼻砲台とともに長崎鼻にも砲台を整備した。湯元の地蔵寺を御囲場とし、郷侍のほか兵士が配置された。藤川三溪の『叩心編』によれば、長崎鼻の御台場は中・下段にそれぞれ三門の大砲を設置していたと書かれており、『山田郡湯元村長崎之岬旧砲台見取図』によれば、北の海上へと向けて上中下段に分かれて平場が構築され、上段は土壘に囲まれた広い空間があり、中・下段は土壘の一部が切れており、大砲を備えていた場所が確認できる。下段は円形の石積みによって造成がなされていたが、現在は、樹木の繁茂や台風などによる被害が著しい。このほかに、木里神社の南北両側に有事の際の連絡手段として狼煙場が設けられている。

本書でも記述するが、近年、北嶺の東麓の石場、長崎鼻周辺に花崗岩の露頭が確認されている。また、北嶺の中腹には凝灰岩を切り出した洞窟跡が北端部と西側斜面部に現在も残されており、さらには、石を海岸へと運び出す道、いわゆる石曳き道が今も明瞭に残っている。

近現代においては、宗教的位置付けに加え、西欧人による風景に対する新たな価値観が持ち込まれ（西田1999）、屋島自身も、名所若しくは景勝地としての価値が見いだされることとなる。その後、明治33年（1900）の村雲尼公を皮切りに、多くの皇族が訪れることがある。同年の小松宮彰仁氏、明治36年（1903）に大正天皇（皇太子時代）、大正3年（1914）の三皇

子（皇太子、秩父宮、高松宮）、大正11年（1922）に摂政宮（後の昭和天皇）、大正12年（1923）に良子女王殿下（香淳皇后）が屋島に登られている。その際に、良子女王殿下（香淳皇后）が北嶺の先端の展望所を遊鶴亭と名付けられた。さらに、同時に久邇宮家、大正14年（1925）に李王、朝香宮両女王、北白川宮大妃、昭和9年（1934）に梨本宮、昭和10年（1935）に三笠宮が訪れている。梨本宮が瞰蹠亭を命名されている。近代においては皇室御用達の名所／觀光地として定着した状況を確認できる（高松歴史資料館2014・東2016）。また、大正11年（1922）には英國エドワード皇太子が高松を訪問した際にも、屋島を訪れている（橋2016）。このほか、歌人与謝野鉄幹・晶子夫妻、北原白秋、英國の詩人エドマンド・ブランデンなど多くの歌人も訪れその景色を詠むなど、文人が立ち寄る場所としても浸透している状況を確認できる。このような新たな価値観の導入による、新たな価値の創出は、後の国立公園の指定への原動力となったと考えられるが、見られる場所から見る場所への変化（上杉2016a・大久保2015）を促すこととなり、宗教的な目的以外で屋島自体へのアクセスが始まるところとなる。明治30年代から屋島保勝会の活動が始まり、觀光地／名勝地として売り出しが積極的に行われ、昭和9年（1934）の国立公園の指定として結実する。さらに、昭和初期から觀光地としての環境整備が促進されることで大衆化が進み、知名度が急激に増幅し、年間250万人にも及ぶ觀光客が訪れる場所となる。まさに山上は靈山から觀光地へと変貌した。この変化を支えたのは、屋島という地形、場に刻まれてきた歴史、景観、自然という土地固有のポテンシャルがあったからこそであり、このことは忘れてはならない。

さて一方、山麓では、昭和46年（1971）の製塩業の終焉によって、居住空間への道を歩むこととなる。山麓は街中に近い、居住区間と化し、現在では2万人以上が居住している。近代以前までの生産と流通の拠点としての場の歴史と景観は変貌してしまう。その意味では、原風景は分かりにくいものとなってしまい、本来の姿は、土地の改変と建物の中に埋没してしまうこととなり、ある意味で近代以降も時代の流れ、すなわち近代化、都市化、郊外化等を象徴的に示す場所となつたとも言えるのかもしれない。

このように、立地と特異な形が織りなす空間：屋島は、いにしえより人々をひきつけ、高松、さらには日本の歴史の舞台としての役割を果たしてきた。そのあり方

は時代とともに変わりつつも、常にその景観と場に人々の注目が注がれている。

## 参考文献

- 東昇 2016 「近世・近代の文芸にみる屋島・源平合戦」『屋島名勝調査報告書』
- 出石一雄 2010 「第1章第2節第1項4島であった屋島」『屋島風土記』
- 上杉和央 2016a 「総論 屋島像の展開」『屋島名勝調査報告書』
- 上杉和央 2016b 「中近世の絵画資料にみえる屋島像」『屋島名勝調査報告書』
- 大山真充 1997 「おわりに」『香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』5・7世紀の讃岐 香川県埋蔵文化財調査センター
- 大久保徹也 2015 「屋島 1934～史蹟名勝天然記念物保存法と国立公園法～」『徳島文理大学比較文化研究所』2014年度公開講演会資料
- 岡田唯吉 1922 「屋島(木本郡)」『史蹟名勝天然記念物調査報告』1 香川県史跡名勝天然記念物調査会編
- 香川県 1959 「重要文化財屋島寺本堂修理工事報告書」
- 香川県 1972 「香川叢書」第一巻
- 香川県教育委員会 1981 「香川県の近世社寺建築」
- 角川書店 1981 「日本名所風俗図会」14 四国巻
- 波谷啓一 2007 「屋島」『歴史考古学大辞典』小野正敏ほか編 吉川弘文館
- 波谷啓一 2009 「古・高松鴻と瀬戸内海世界」『中世讃岐と瀬戸内世界』岩田書院
- 波谷啓一 2010a 「第2章歴史に輝いた屋島 第1節古代の屋島 第1項屋島の歴史的立地」『屋島風土記』
- 波谷啓一 2010b 「経塚の構築」『屋島風土記』
- 波谷啓一 2010c 「室町時代の屋島問辺」『屋島風土記』
- 波谷啓一 2010d 「戦国時代の屋島」『屋島風土記』
- 波谷啓一 2014 「屋島寺縁起絵」「空海の足音 四国へんろ展」香川編 香川県立ミュージアム
- 宗教法人屋島寺 2015 「屋島寺創成門保存修理工事報告書」
- 関野貞 1917 「天智天皇の屋島城」『史学雑誌』第28編 第6号 史学会
- 橋セツ 2016 「近代西歐のまなざしからみた屋島と瀬戸内海」『屋島名勝調査報告書』
- 田中健二 2017 「近世初期讃岐国における城下町建設と開発・治水に関する研究」
- 高松市教育委員会 1981 「屋島城跡」
- 高松市教育委員会 2003 「史跡天然記念物屋島」『史跡天然記念物屋島基礎調査事業報告書』
- 高松市教育委員会 2007 「屋島寺」
- 高松市教育委員会 2008 「屋島城跡」II 史跡天然記念物屋島基礎調査事業報告書II
- 高松市教育委員会 2009 「平成20年度高松市内遺跡発掘調査概報」
- 高松市教育委員会 2010 「平成21年度高松市内遺跡発掘調査概報」
- 高松市教育委員会 2011 「平成22年度高松市内遺跡発掘調査概報」
- 高松市教育委員会 2012 「平成23年度高松市内遺跡発掘調査概報」
- 高松市教育委員会 2013 「平成24年度高松市内遺跡発掘調査概報」
- 高松市教育委員会 2014 「平成25年度高松市内遺跡発掘調査概報」
- 高松市教育委員会 2015 「平成26年度高松市内遺跡発掘調査概報」
- 高松市教育委員会 2016 「平成27年度高松市内遺跡発掘調査概報」
- 高松市教育委員会 2017 「平成28年度高松市内遺跡発掘調査概報」
- 高松市教育委員会 2018 「平成29年度高松市内遺跡発掘調査概報」
- 高松市歴史民俗協会 2009 「屋島城が見えた!歴民シンポジウム古代讃岐のロマン」
- 高松市歴史資料館 1993 「高松市歴史資料館常設展示回覧録」
- 高松市歴史資料館 1994 「高松平野の考古学のあけぼの」小竹一郎旧蔵資料展
- 高松市歴史資料館 1996 「高松市歴史資料館収蔵資料目録」考古資料編
- 高松市歴史資料館 2014 「史跡・天然記念物屋島指定80周年記念企画展 屋島 - シンボリックな大地に刻まれた歴史 -」
- 高松市歴史資料館 2015 「見たい 知りたい 屋島の戦い」
- 高松市・高松市教育委員会 2013 「屋島城が築かれた時代」
- 高松市・香川大学天然記念物屋島調査班 2014 「天然記念物屋島調査 報告書」
- 高松市・京都府公立大学法人 2016 「屋島名勝調査報告書」
- 高松市屋島地区面積整理組合 1980 「栄光ある転進一屋島の塩田・蘇生の記憶一」
- 田辺三郎助編 1985 「四国の仏像」日本の美術No.226
- 千葉幸伸 2010 「近世の屋島 第1～3項、第5項」『屋島風土記』
- 西田正憲 1999 「瀬戸内海の発見」
- 日本経済新聞出版社 2011 「屋島城」『日本の史跡101選』出かけよう 日本の記憶をたどる旅へ
- 乗松真也 2015 「高松平野における8～10世紀の道路と敷設目的」『多肥北原西跡跡』香川県教育委員会
- 長谷川隆 2010 「文学に見る南北朝期の屋島」『屋島風土記』
- 平岡岩夫 1998 「屋島城跡の新発見の石墨に關して」『満浦』古代山城研究会
- 廣瀬常雄 1983 「屋島の城」『日本の古代遺跡』8香川
- 藤好史郎 1996 「高松市新田町小山・南谷遺跡の発掘調査」『条里制研究』第12号 条里制研究会
- 藤好史郎 1997 「屋島城と城山城—古代山城研究の一観点」『香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』5・7世紀の讃岐 香川県埋蔵文化財調査センター
- 松本和彦 2009 「野原の景観と地域構造」『中世讃岐と瀬戸内世界』岩田書院
- 向井一雄 2007 「屋島城跡」『東アジア考古学辞典』西谷正編
- 村田修三 1985 「研究室旅行こぼれ話・屋島城」『寧樂史苑』第30号 奈良女子大学史学会
- 屋島風土記編纂委員会 2010 「屋島風土記」
- 山元敏裕 2003 「屋島城跡の発掘調査について」『満浦』第11号 城門調査を中心に 古代山城研究会
- 山元敏裕 2005a 「屋島南側で確認した堀切について」『満浦』第12号 古代山城研究会
- 山元敏裕 2005b 「古代における讃岐国山田郡について—古代山城屋島城の分析を中心として—」『飛島文化財論叢』納谷守幸氏追悼論文集刊行会
- 山元敏裕 2006 「屋島の港は城門へと通じる(屋島城環境復元その1)『十顛山』2 田村久雄先生尊寿記念文集 田村久雄尊寿記念会
- 山元敏裕 2008 「古代山城屋島城について」『歴史に見る四国』その内と外と 地方史研究協議会編
- 吉川弘文館 1952 「国史大系 日本書紀」後篇
- 渡部明夫 2010 「屋島寺の創建」『屋島風土記』
- 渡辺時弘 1962 「屋島城」『屋島鏡光学術読本』高松市商工観光課編 高松市商工観光課
- 渡邊 誠 2012 「正体が見え始めてきた「古代山城」屋島城の謎」『香川県謎解き散歩』

## 第3章 基礎調査事業の成果

### 第1節 事業の経緯と経過

平成20～29年度にかけての調査は、地形測量及び踏査、屋島城跡浦生地区、北嶺山上地区の発掘調査を重点的に行なった。26～27年度にかけて地形ヘリレーザー測量による地形測量を実施し、19、20、25、28～30年度に踏査を実施し、特に28年度以降は先の測量図をもとに踏査を実施した。

発掘調査は、20年度以降、継続的に実施しており、21～29年度は屋島城跡浦生地区の調査、20、26～29年度は北嶺山上（千間堂跡周辺）でも調査を実施した。本章では、これらの成果について詳述する。

### 第2節 地形測量

#### A. 地形測量

平成7年度以降、継続している史跡天然記念物基礎調査事業では、確認調査とともに踏査を並行して実施してきた。踏査はあくまで現在の1/2,500の都市計画図に基づき行ってきたが、指定地が広大で、大部分が傾斜地であり山林という現状などから、正確な場所の把握が困難で、各遺跡の正確な位置の把握、周辺の微細な地形の把握と遺跡の広がりの確認、さらには従来の地形図などから認識できない地形変化地、未確認遺跡の洗い出しを行うことが大きな課題となってきた。また、近年、屋島の歴史的位置付けから、本来の海岸線を含めた山麓の地形への関心が高まっていることなどから山麓の正確な地形の把握も今後の調査計画を含め、重要な課題であった。

そのような中、近年航空レーザー測量の進歩によって、本来の地形を正確に把握できるようになってきた。また、本市では既に石清尾山古墳群において山塊の測量調査を実施し、古墳の正確な位置や形状、中世城館の土壘の形状、周辺の踏査では十分に把握できなかつた地形などを捉えることができた実績があった。それらを踏まえ、今後、継続して調査を実施していく必要のある屋島においても同様に地形測量を実施することで、上記の課題を克服するとともに、目的的な踏査の実施、調査地の選定に役立てるため、測量を実施することとした。平成26年度に地形測量、平成27年度に図化作業を㈱四航コンサルタントに業務委託して実

施した。測量に当たっては屋島山上の断崖絶壁を詳細に把握することが屋島城の城壁ラインの理解においても役立つことから、山上周辺は2回測量を実施し、2回目はより崖を詳細に把握できるよう、計測器の取り付け角度を変更し、崖面によりレーザーを照射できるような仕様で計測を行なった。下記に具体的な業務に関わる主要な仕様を掲載しておく。

#### ■平成26年度

##### (1) 業務名

史跡及び天然記念物屋島ヘリレーザー測量業務委託

##### (2) 業務概要及び数量

①航空レーザー計測（回転翼）	11.2 km <sup>2</sup>
②調整用基準点の設置	4点
③3次元計測データ作成	11.2 km <sup>2</sup>

##### (航空レーザー計測)

1 計測は、GNSS/IMU装置・レーザー測距装置及び解析ソフトから構成され、必要な計測機材を装備したヘリコプターを使用し計測範囲の航空レーザー計測を行うものとする。計測時期については発注者と協議し決定するものとする。

2 航空レーザー計測の条件及び設定は以下のとおりとする。

(1) 使用するヘリコプターは、所定の高度で安定した飛行ができるものを使用する。

(2) 使用するレーザー計測システムは、傾斜0°～20°の範囲を可変でヘリコプターに搭載し計測できるものを使用すること。

(3) 航空レーザー計測のスキャン密度は、山地部1.0 m×1.0 m メッシュに30点以上、平野部1.0 m×1.0 m メッシュに15点以上のレーザー点が照射されるように設定する。また、急勾配地域（崖）においては、急勾配面に正対した1.0 m×1.0 m メッシュに6点以上のレーザー点が照射されるように設定するものとする。

(4) 飛行コース間重複度は6.6%、平野部5.0%を標準とする。

(5) 飛行コースは安定かつ等間隔の飛行計測を行うこととし、樹木等による計測への影響を考慮し飛行

- 速度を調整することで航空レーザーの計測取得精度を高めるものとする。
- (6) 計測装置には眼など人体への悪影響を防止する機能を有しているものを用いることとする。
- (7) 計測終了後点検を行い、再計測の必要がある場合は速やかに行うものとする。
- (8) 計測終了後、その結果に基づき地形図(1/25,000)若しくは地図画像上に表題、計測コース、コース番号、計測精度、年月日等を記入した標定図を作成するものとする。
- (調整用基準点の計測)
- 1 航空レーザー計測データの点検及び調整を行うのに必要な基準点を、計測範囲内に4点以上設置するものとする。なお、調整用基準点は3級基準点測量に準じるものとする。
- (三次元計測データ作成)
- 1 計測で取得したデータの照射角、ジャイロ回転角、加速度、GNSS/IMU情報から計測データを統合解析し各計測ポイント(XYZ)を求めるものとする。
  - 2 三次元計測データを作成する際に、取得されたノイズ等によるエラー計測部分を削除するものとする。
  - 3 三次元計測データの点検は、調整用基準点を用いて比較点検を行い、コース間標高の点検は、コース間重複部の標高値から比較点検を行うものとする。
- 平成27年度
- (1) 業務名 史跡及び天然記念物屋島ヘリレーザー測量図化業務委託
- (2) 業務概要及び数量
- |                 |                      |
|-----------------|----------------------|
| ①オリジナルデータ作成     | 11,20km <sup>2</sup> |
| ②グランドデータ作成      | 11,20km <sup>2</sup> |
| ③グリッドデータ作成      | 11,20km <sup>2</sup> |
| ④等高線データ作成       | 11,20km <sup>2</sup> |
| ⑤数値地形図データファイル作成 | 11,20km <sup>2</sup> |
| ⑥赤色立体地図作成       | 11,20km <sup>2</sup> |
| ⑦断面図作成          | 13か所                 |
- (オリジナルデータ作成)
- 1 オリジナルデータ作成は、調整用基準点を用いて三次元計測データの標高及び水平位置を調整するとともに、計測コース間の標高誤差の調整を行い作成するものとする。
- 2 点検はオリジナルデータ作成の補正前後で行い、作業終了時に再点検を行うものとする。また、既存基準点が存在する地点については、その基準点と比較を行い精度の確認を行うものとする。
- 3 作成したオリジナルデータは、テキストデータに変換したものも併せて納品するものとする。
- (グランドデータの作成)
- 1 グランドデータ作成は、オリジナルデータのうち、地表面の標高を示すデータでオリジナルデータを自動フィルタリング処理により、地表面以外のデータを除去し同時に撮影された航空写真より作成した簡易オルソ画像を参考に、検査フィルタリングを行うものとする。
  - 2 フィルタリングの点検は赤色立体地図とフットプリント及び等高線の重ね合わせ図を作成し実施する。
  - 3 フィルタリングにより地表に露出した、既調査城郭・古墳・石切場等の遺構の可能性のある地形形状、その他構成に必要な微地形情報をより明らかに判読する。
  - 4 判読した微地形情報を発注者と協議を行い、必要箇所を重点的にフィルタリングし、微地形表現の精度をより向上させるものとする。
  - 5 フィルタリング結果により必要な場合は、現地調査を行い確認するものとする。
- (グリッドデータ作成)
- 1 グリッドデータは、グランドデータから内挿補間によりグリッド間隔0.5mで作成する。
- (等高線データ作成)
- 1 等高線データは、グランドデータ及びグリッドデータを用いて作成し、発注者が指示する範囲について、地図情報レベル500(1mピッチ)、地図情報レベル2,500(2mピッチ)に準じて作成するものとし、電磁的記録媒体に記録するものとする。なお、調査職員が別途指示する範囲については地図情報レベル500(0.5m)ピッチで作成するものとする。
  - 2 発注者と協議により報告書等で使用が可能なデータをDXF形式及びAI形式に変換処理し、別途の記録媒体に記録するものとする。
  - 3 データファイルはグラフィックディスプレイ等によりデータの内容が正しく記載されているかを確認するものとする。
- (数値地形図データファイル作成)

- 1 別途貸与する高松市都市計画図(D M)データより、等高線を消去したデータと前条で作成した等高線データを合成した数値地形図データファイルを作成することとし、電磁的記録媒体に記録するものとする。
- 2 発注者と協議により報告書などで使用が可能なデータをDXF形式及びAI形式に変換処理し、別途の記録媒体に記録するものとする。
- 3 データファイルは、グラフィックディスプレイ等によりデータの内容が正しく記載されているかを確認するものとする。

(簡易オルソ画像作成)

- 1 航空レーザー計測時写真画像を用いて地図情報レベル1,000、2,500に準じて簡易オルソ画像を作成することとする。

(赤色立体地図作成)

- 1 航空レーザー計測データを用いて地形解析を行い、色調の濃淡で傾斜表現をすることで古墳群及び周辺の微地形状況を、視覚的に誰でも把握することが可能な赤色立体地図又は同等以上の立体地図を作成するものとし、立体図と等高線図を重ねた図面も作成するものとする。
- 2 計測データ・貸与資料等を使用し、鳥瞰的に見ることのできる3次元データを作成するものとする。作成に当たっては、イメージ、データ形式、データ容量を発注者と協議の上、作成するものとする。

(断面図作成)

- 1 前条までに作成したデータを用いて断面図(S=1/2,500)を作成するものとする。

以上の業務委託で作成された図面の一部が第6～10、12～14図である。これらの成果に加え、踏査、写真資料や古い地図等を元に、本書では、今後の調査の起点となる屋島の旧地形について整理するとともに、調査成果を踏まえた遺跡との関係性、さらには今後の調査地の選定における基礎資料の提示を行っておきたい。

## B. 地図に基づく所見

まず、赤色立体図等の所見をまとめる前に、旧版地図(第4図)に基づき、大規模な人工改変が行われる以前、すなわち、戦前でもより古い段階の地形を表現している地図から地形に関する所見をまとめておきた

い。

国土地理院発行による明治30年(1897)や昭和3年(1928)の地形図によれば、斜面部の利用を除いた土地利用の状況において同様な状況が確認でき、江戸時代から戦前にかけては塩田開発を除けば、大規模な地形の改変を伴うような開発はなかったことを読み取ることができる。ここでは、まず、明治30年(1897)の地図をもとに古い地形や土地利用について整理しておく。

### ■居住地

住宅は、屋島西町浦生周辺、浦生から汐入川沿いに潟元へと抜ける道沿い、現在の屋島小学校の東西の斜面地、潟元駅周辺、藤目地区にまとまって認められる。東側の斜面部は、点々と宅地が認められ、集住する箇所は顕著でない。

### ■農地

水田と考えられるのは、屋島南麓の平野部、さらには細々とではあるが、同じく南嶺の南東から東側の平野部、実態は不明な点もあるが、東側の斜面部にも水田が広がっており、西側斜面とは土地利用が異なっている。相引川より南側も大規模な区画の水田が広がっている。地図の縮尺にもよるかもしれないが、ため池はこの段階ではあまり確認できない。

### ■山林

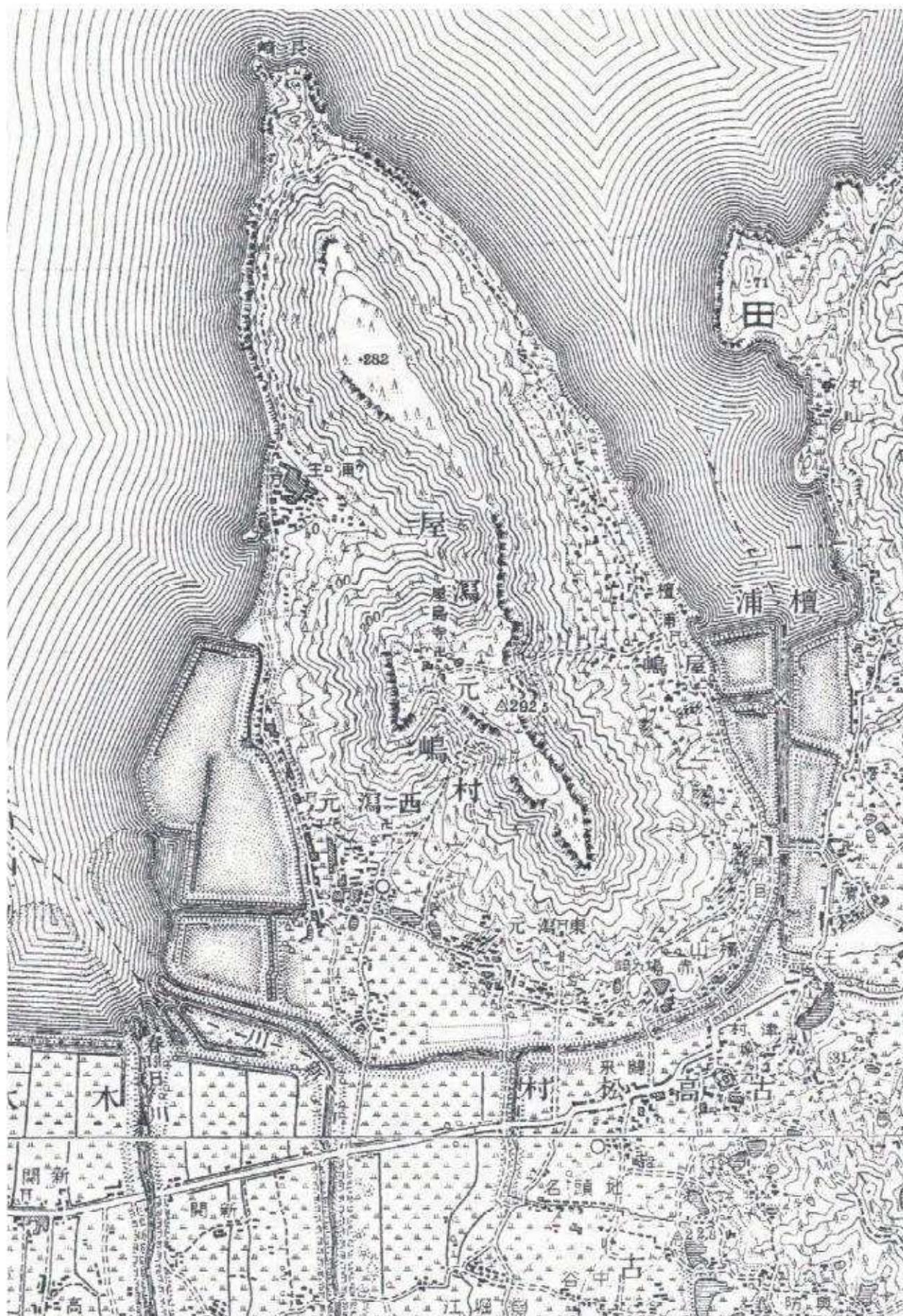
現在同様、山頂部から斜面部はほぼ山林で覆われている。ただ、先に述べたように、東側斜面部は農地化がこの段階でかなり進んでいる状況が確認できる。

### ■海岸線と塩田

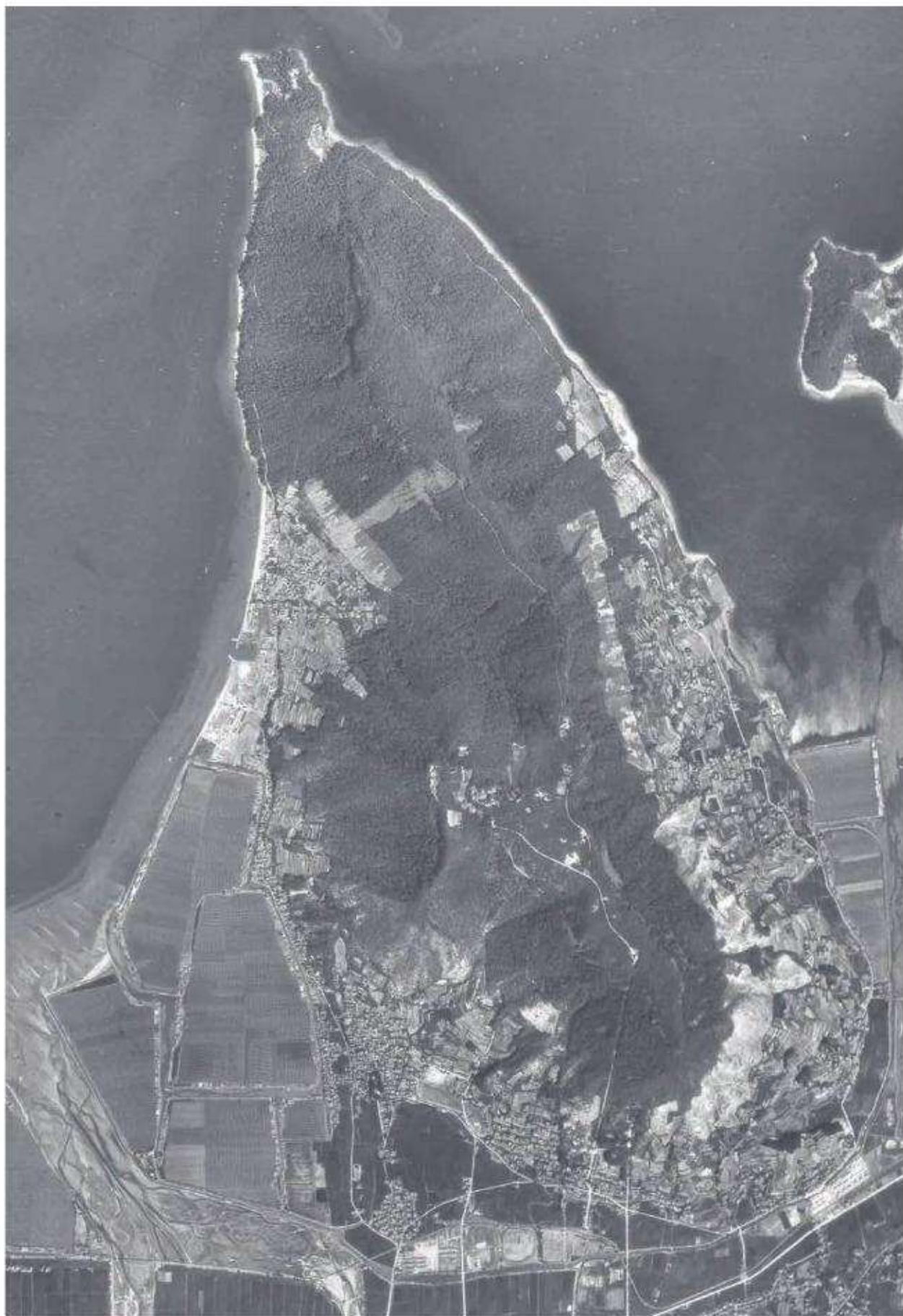
港湾施設としては、浦生港しか確認できない。新浜の北側にあたる、現在の第一健康ランドの周辺は現在ほど埋立てが進んでおらず、新浜が海側に飛び出たようになっている。また、南西隅の屋島浜が完成しておらず、新川と春日川の河口が現在と大きく異なる。赤牛崎浜、屋島浦浜は既に農地化しており、東潟元浜は土地利用が明記されていないが、塩田としては利用されていない。生賀浜と三軒古浜の塩田の一部は農地表記になっている。立石浜が明治30年(1897)頃の完成と言われており、当地図が作成されるころまで、塩田が拡張される一方で、既に別の土地利用へと変化した塩田もあることも明らかである。相引川を挟んで牟礼側にも塩田が広がっている。

### ■交通

現在、屋島で使用されている主要幹線道路をほぼ確



第4図 史跡天然記念物屋島旧版地図 (S = 1 / 50,000 国土地理院発行5万分の1地形図 明治30年測図明治34年発行を一部改変)



第5図 史跡天然記念物屋島航空写真（国土地理院空中写真 USA-M450-80 1947年9月8日米軍撮影を使用し一部改変）

認できるが、浦生から檀の浦方面へと抜ける北側の周回道路は破線表現になっており、あまり整備されていない状況と言える。また、屋島南麓の屋島神社参詣道から東に向かう道が、やや山麓の高い場所を通り、藤目へと抜ける道が描かれており、現在とは異なるが、この道も現在も残っている。当然であるが、山頂への明確なアクセス道は遍路道のみである。

#### ■小結

以上の点から、居住空間としての屋島が形成される以前において、居住域は山麓若しくは谷から派生する扇状地が利用され、平野部（元低地部）は農地若しくは塩田として利用している状況を確認でき、屋島の陸地化の経緯とその範囲を知る上で重要である。その際に注目されるのは、山麓から離れた渴元駅周辺に宅地がまとまっている点である。その場所を結ぶように、2本の道路が確認でき、その道の間は農地となっている。離れ島として安定した土地があったとは考えられず、この道路も含めて、当時の地形（古い地割）を反映している可能性を考えておきたい。

なお、その後、昭和53年（1978）の地図を見ると、昭和30年代後半から40年代にかけての屋島ドライブウェイの開通、塩田の廃業という出来事を契機として、大規模開発が進み、さらには、塩田が宅地化され、山上の観光施設が整備され、名勝としての価値がより一層進むこととなる。その累積によって、景観が一変し、島としての屋島も次第に忘れ去られることとなる。

次に地図から得られる状況に加え、戦後の航空写真によって、戦前期にかけて斜面部の土地利用等について整理しておきたい。

### C. 航空写真や地図から読み取ることができる 旧土地利用の状況に関する所見

次に、地形図には反映されにくい、実際の土地利用の状況や範囲について、国土地理院空中写真 USA-M450-80（第5図）をもとに、戦前までの大規模な開発が進む前の状況を確認しておきたい。

#### ■居住域

地図で確認できた箇所と大きな変化はないが、住宅の数は増加しているように見える。住宅ではないが、現在の屋島陸上競技場周辺で新たな土地利用（興亜中学校跡地）が始まっている。

#### ■農地

水田についても大きな変化は認められないが、水田

の一部が居住域になっている可能性が想定される。写真によって顕著な箇所は、斜面部における農地開発である。東側は明治30年（1897）段階でも水田が広がっている様子が地図に表記されていたが、その実態を確認することができる。また、写真が撮影された時代性もあるが、宅地より高い斜面部にも多数の農地が整備されている。基本的には居住域の背面の斜面地が開発されており、農地が認められないのは北嶺の北半分程度である。全体として斜面部が農地として開発されたと考えられるが、元々開発されていた東側と、一気に開発の進んだ西側という違いがあるかもしれない。

また、東斜面は南にかけて帯状に樹木が伐採されている状況が確認でき、斜面の地肌が見えていることから、さらに開発が進められようとしている状況を示すものと考えられる。同一レベルで小規模なため池も点々と認められる。斜面部は畑作のみならず、ため池を整備し稻作も行われていたと考えられる。

#### ■山林

現在同様、斜面部から山頂部分はほぼ山林で覆われている。ただ、先に述べたように、農地開発がかなり進み、山腹まで農地が進出している。山上は開発が進む以前で、北嶺は、遊歩道以外の人工物は確認できない。南嶺では、四国靈場84番札所の屋島寺とその周辺にいくつか建物が確認できる程度で、それ以外は西側の獅子の靈巖、現在の県木園周辺、水族館周辺、駐車場周辺、談古嶺、旧甚五郎ホテル周辺、三角点周辺に樹木がない箇所が確認できる程度で、その他は草木に覆われている。ただし、斜面部との状況とは異なったように見え、屋島寺南側の谷部から西尾根の斜面も山林は確認できるが、他の斜面部と様相が異なり、森林資源の利用状況を示しているものと考えられる。いずれにしても、戦前までは、山頂の利用はかなり限定されており、樹木の伐採状況から現在に残る展望所は既に利用されている状況と考えられる。いずれにしても現在の状況とは景観が大きく異なっていたことは明らかである。屋島ドライブウェイが開通する昭和36年度以降、現在への景観が作り出されたことが明らかである。

#### ■塩田

屋島浜が完全に整備されており、加えて新浜、亥の浜、子の浜、三軒古浜、生簀浜、立石浜、檀之浜が塩田として機能していた状況が確認できる。塩田が終了する昭和46年（1971）まで屋島の景観の重要な一角を占めていた。

### ■海岸

港湾施設としては、富田製薬屋島工場（現在の協和化学がある場所）のあった浦生漁港、さらにその南側の汐入川へとに入るための塩田用石炭などの搬入用の港（高松港泊地）、石場港、立石港が確認でき、明確な港湾施設が整備されている状況が確認できる。施設としては明確ではないが、明治期から木材等を積み出していたとされる長崎鼻港がある。それ以外の海岸線は現在との大きな違いは認められない。写真は新川や春日川の状況から干潮と考えられるが、細い帯状の砂浜が海岸線沿いに認められる。

### ■交通

現在、屋島で使用されている主要幹線道路をほぼ確認でき、現在の土地利用の状況へと変化した状況も、交通路を軸に見ていくことができる。先の藤目へと抜ける道路は写真からは分からず。

### ■小結

地図と古い航空写真の比較から、現在のような居住域としての屋島が成立する以前の土地利用の状況を確認することができた。次に、開発が進んだ後の地形ではあるが、本事業で行ったレーザー測量による地形図から見える旧地形について検討を行っておく。

## D. 赤色立体図に基づく所見

上記の旧版地図や航空写真等から読み取ることのできない、斜面部や麓の低地部の本来の詳細な微地形に注目して作成した赤色立体図とそれに基づき作成した地形図から読み取ることのできる所見を以下に整理しておく。

### ■地形

赤色立体図は、急峻な箇所が黒くなり、傾斜の度合いによる赤色の濃淡によって地形が表現され、平坦になるほど白く表現される。

この赤色立体図（第6～9図）を見ると、山頂部が平坦で、平坦部周辺が急峻な崖になっていることを改めて認識することができる。また、斜面部は山頂から麓に向かって赤色が次第に淡くなっていくことが読み取れ、寺勾配（長谷川2014）の状況を示しており、後述する断面図（第12～14図）からも明らかである。大きな谷が少なく、細かな谷が多数所在している。浦生川によって形成された西に開く大きな谷（大谷／鑑真ヶ谷などと呼ばれている）の北と南で二つの山（北

嶺と南嶺）に分かれており、北嶺と南嶺の間は延長0.8kmに及ぶ細い尾根で連結している。浦生川下流では緩斜面の扇状地が発達している。もう一つの谷が、屋島寺の南に位置する箇所で、山麓では、他の場所よりもやや広い扇状地が形成されている。

北嶺の海岸線は急峻で、長崎鼻のみに小さな扇状地が形成され、一部砂浜が認められる程度で、多くは崖の外側に小規模な砂浜がわずかに確認できる。このような視点で、南嶺の西麓から南麓を見ると、同様な崖が確認でき、海岸線を考える上で、この段丘状の崖が重要になると考えられる。

赤色立体図では上記の航空写真で認識できた斜面部の農地を明瞭に確認でき、等高線に平行する細長く整形された地形は麓から標高50～70m付近にかけて構築されていることがわかる。農地の形状は、尾根や谷の幅や等高線の間隔に応じて、大小様々な規模・形状に造成されていることも読み取ることができる。地元の方の話に基づけば、これらの整備は戦後がそのピークであったようである。農地利用としては、既述のどおり、東斜面の方が顕著であるが、かなりの斜面が農地化される。また、ため池が谷筋に上下二段以上に作られており、最上部にため池があり、谷筋の概ね標高80m付近に造られている。西側では、小規模な谷ごとに1箇所程度ため池が構築されている。また、浦生地区の北側斜面には細かな農地が造成されているが、ため池が少ない点は特徴的である。南麓は低地に農地が広がることから、麓近くに大形のため池が作られており、これらは、明治30年（1897）の地図でも確認できる。当然であるが、地形や供給先の規模に応じてため池が造営される場所がやや異なる点が伺える。現在では斜面地の農地やため池は、継続的な土地利用がなされず、林野となってしまっているが、現状の地形把握が困難な場所においても、航空写真などで認識できる以上に開墾された状況が把握でき、かなり地形の変化がなされていることがわかる。

一方、山頂部の平坦部を、詳細に見ると、細かな濃淡が認められ、土地の細かな起伏が確認できる。特に、外から見える山頂部の崖の箇所が明確になり、崖が顕在化していない緩やかな斜面があることもわかる。

また、地形ではないが、現在、遍路道をはじめとして、現在使用されているかどうかは別として、斜面を登るための林道などの道が設けられていたことも確認できる。この他にも、後述する採石に伴う洞窟の場所、石材を搬出した石曳き道なども北嶺で確認できる。後

述するが、北嶺2箇所、南嶺1箇所に石切丁場跡は穴丁場（洞窟）のまとまりを確認することができる。遊鶴亭の展望台の下、北嶺西斜面の2箇所があり、西側のものは平坦面が広い。このほか、既に知られている長崎鼻古墳、浜北古墳などの古墳の位置を正確に認識することができた。

以下、各地域別に地形的な特徴について整理しておきたい。

#### ●長崎鼻地区

屋島先端が尾根状に飛び出しており、先端部は長崎鼻と呼ばれている。西側に向かって小規模な谷が2箇所、東側に向かって開く谷が1箇所あり、東西の各谷に向かって洞窟から延びる石曳き道が確認できる。石曳き道は尾根線上に設けられる特徴がある。特に東側の谷部は谷に平行する平坦面を確認でき、一定程度の造成がなされている状況を確認できる。

全長45.8mの前方後円墳である長崎鼻古墳が明瞭に確認することができる。また、その北側の尾根筋の先端には木里神社が鎮座する場所が円形に造成されている。また、その北西方向には、砲台跡が造成された平坦面を確認することができる。

#### ●北嶺地区

山頂部も微地形があり、中央部のやや東よりにピークがあり、そこから北及び西側に緩やかに傾斜している。山頂周辺のほとんどは急峻な崖を形成しているが、このピークの東側は崖が認められない。このピークと現在、千間堂跡が確認されている周辺が比較的平坦面を認めることができ、それ以外の箇所は、緩やかではあるが斜面を形成している状況を確認できる。この微地形が遺跡形成に関係している可能性もある。わずかではあるが、崩落したような谷地形が数箇所認められる。

遊鶴亭の下に位置し、標高150～170m付近に大規模な洞窟及び崖面を確認でき、そこから既述の長崎鼻に向かって石曳き道が延びている。同様に、西斜面の標高150～170m付近に洞窟が2箇所に認められ、そこから、石曳き道が浦生の港に向けて延び、最終的に複数の石曳き道が合流している。

本書で報告する屋鳩城跡浦生地区の城壁及び物見台と呼ばれる張出部が明確に確認でき、地形が改変されている状況を確認できる。城壁の両側に大きな谷が形成されている状況を確認できる。

東側斜面は小さな谷が多数確認でき、谷筋上にため池が確認できる。どちらの斜面部も等高線に平行するように細長い農地が整備されている。

#### ●南嶺地区

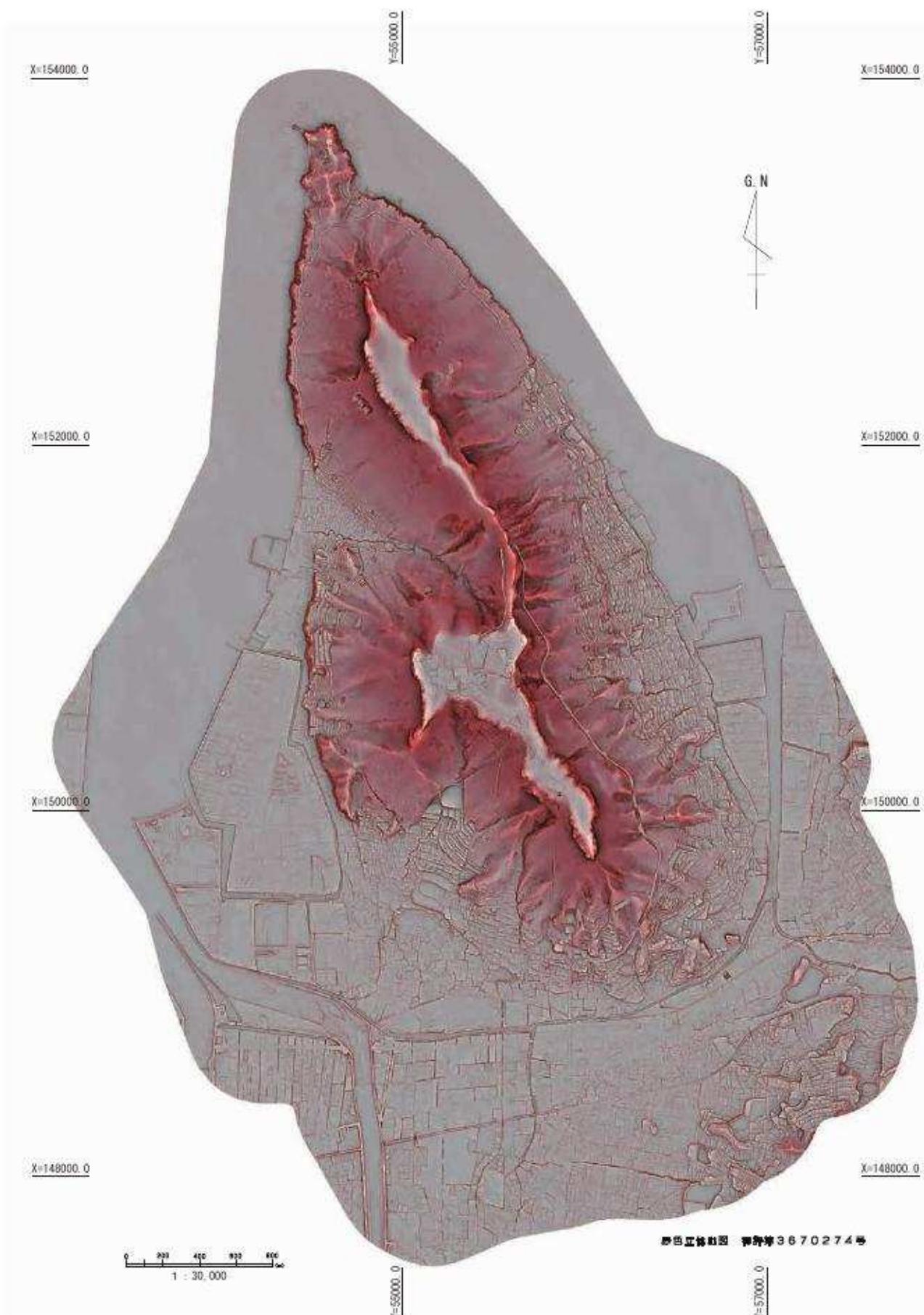
北嶺から南嶺にかけての東側の斜面から山麓地区に、八手状の細かな尾根と谷が交互に展開する地形が顕著に確認できる。そのため、かなり細かな微地形が存在し、所々緩斜面の扇状地が展開する。そのため、細かな違いであるが、山自体の浸食が進んでいると言えるかもしれない。西側はほとんど認められない。

斜面部では、北西側の斜面部標高150m付近にも小規模な洞窟が確認できる。当該箇所については、石曳き道らしきものが確認できる。

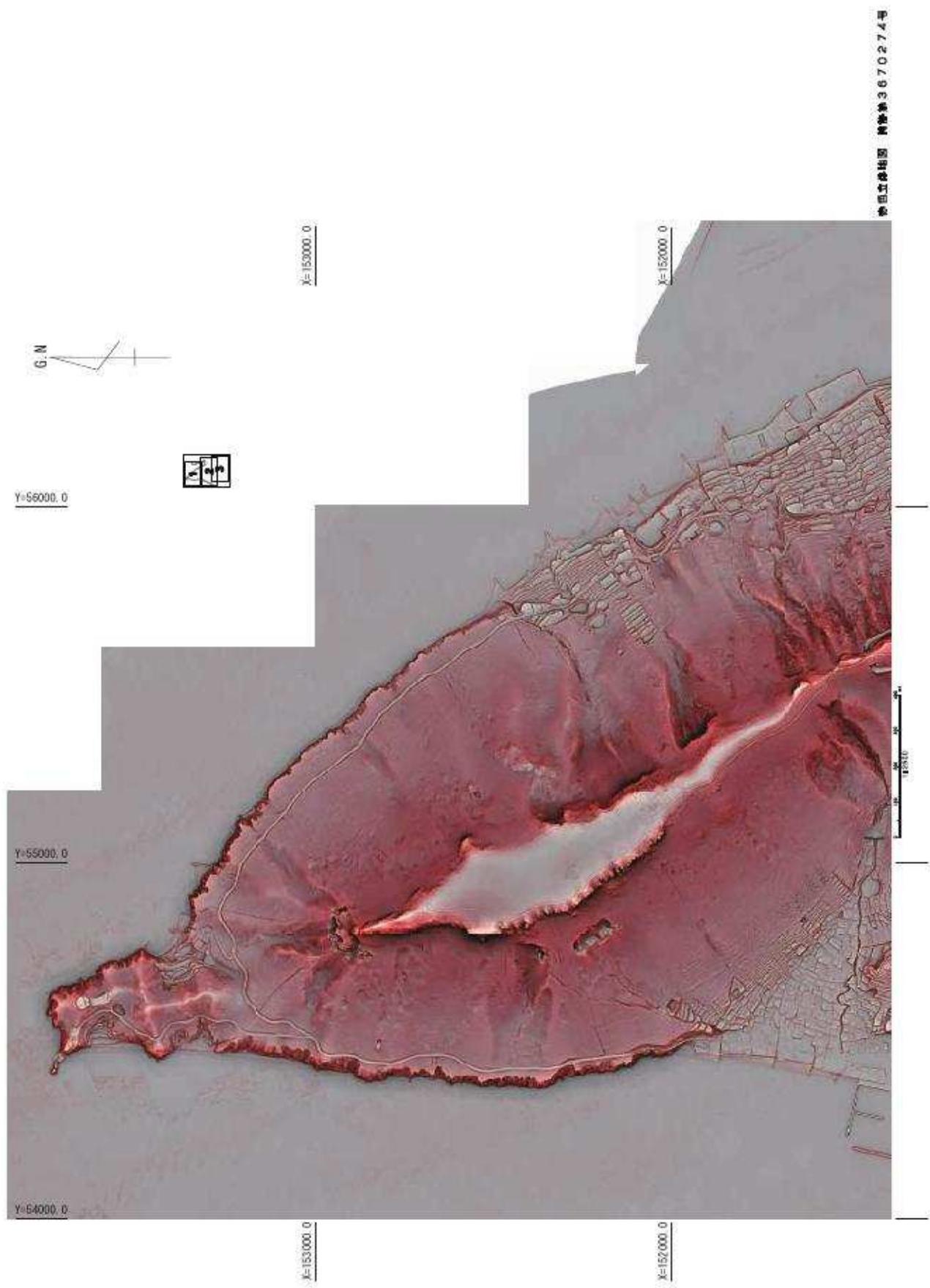
南麓の平地地区では、微地形、特に旧の海岸線の検討を行った。その結果、明治期の地図などに認められる半島状の地割は細かな標高からは確認しづらいこと、屋島の南側の対岸の海岸線も想定可能であることが認識できた。

既述のとおり、低地部との境界と考えられる付近に、崖が認められ、浦生から湯元へと向かう道沿いは顕著であるが、この崖は湯元駅へと向かう交差点のあたりで不明確になり、仲池周辺で再度明確になる。このことから、もともと、当該地域は連続した土地であったと考えられ、先の湯元が飛び地のごとく居住域として利用される状況を考えると、半島状に高い場所がもともとはあったと考えた方が良いであろう。現地にはその名残を残しており、境界付近にあたる場所でかなり大きな段差が認められる場所もある。仲池と道池の南側付近は、南に開く扇状地のため、比較的緩斜面を呈するが、八坂神社から屋島神社へと抜ける東西道路の北と南で2～3m（標高では道路の上が5m、下が2～3m）ほどの段差が認められ、小規模な崖を呈する。南嶺の西側ほど顕著ではないが、明らかに高低差があり、この点は段彩図（第10図）からも読み取ることができる。概ね、この崖面は標高5mの等高線に一致するかその付近に位置している。低い箇所は標高2mに一致する。このような観点で、南側の対岸の地形を確認すると、神櫛王墓周辺は島若しくは半島状を呈した可能性があることが認識できる。なお、海岸線の復元については第4章第94図を参照されたい。

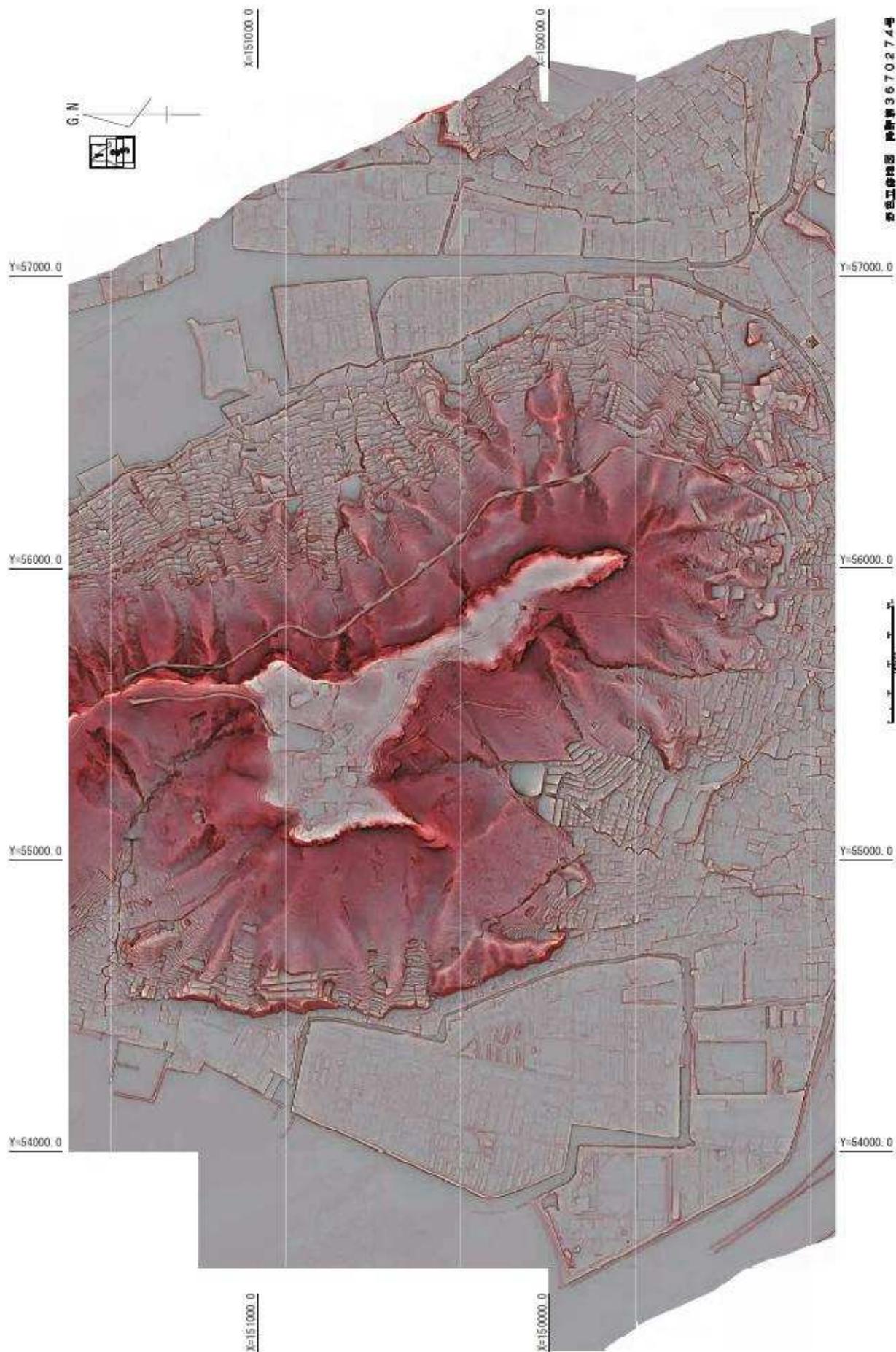
北嶺同様に、谷筋に上下でため池が構築されており、高所は概ね標高80m程度で、低所は標高40m付近である。



第6図 史跡天然記念物屋島赤色立体図 ( $S = 1 / 30,000$ )



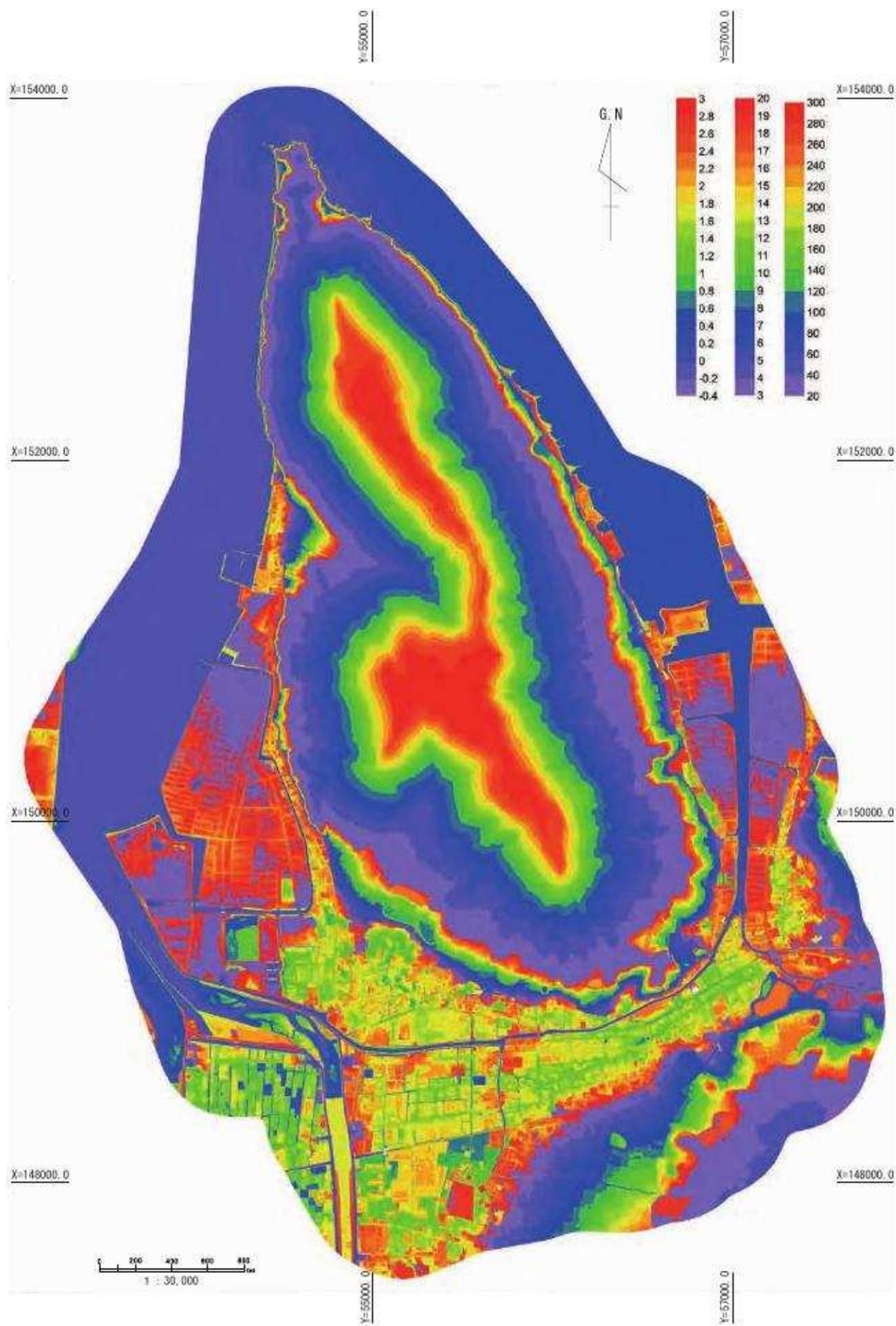
第7図 史跡天然記念物屋島赤色立体図 詳細①（縮尺任意）

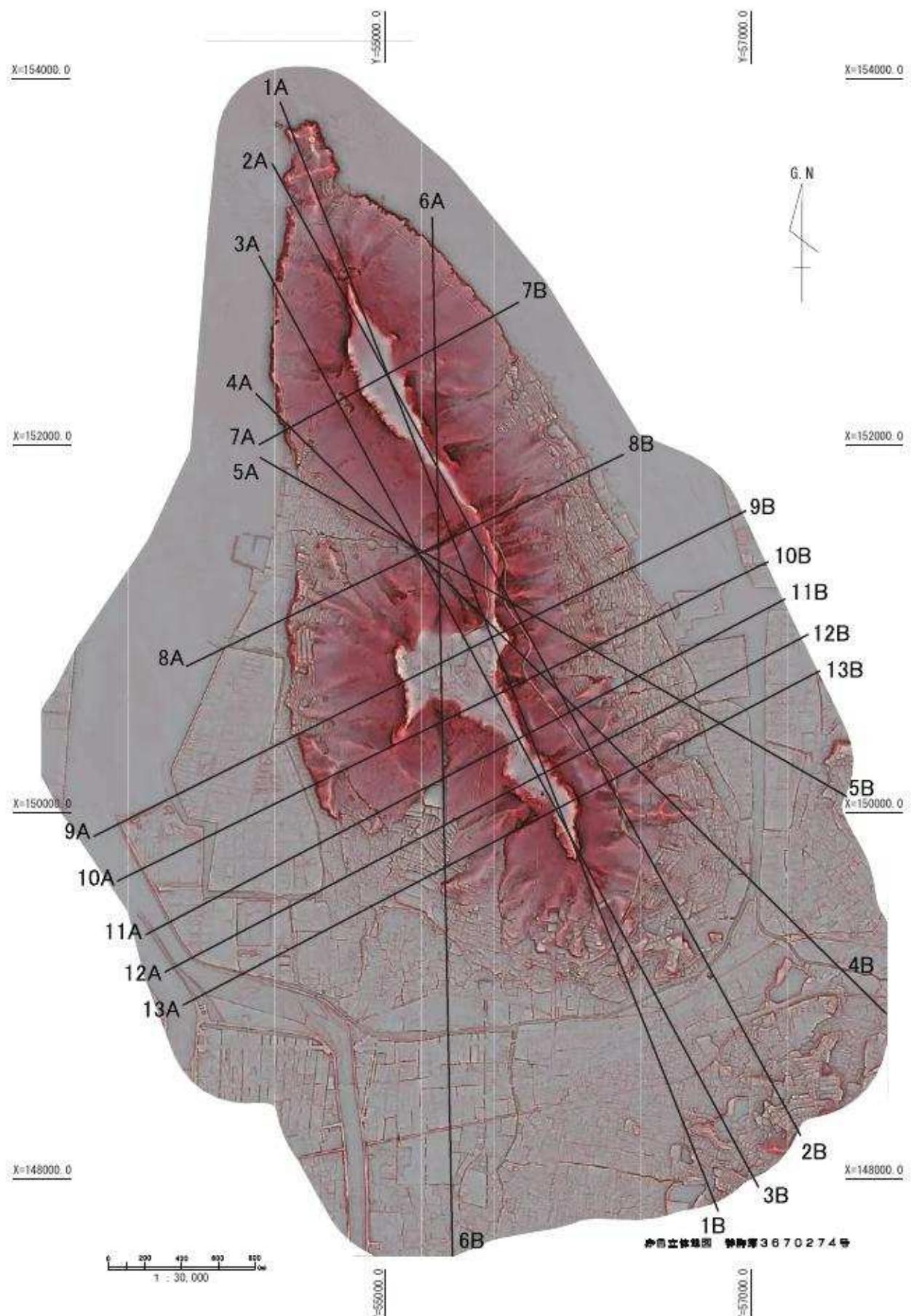


第8図 史跡天然記念物屋島赤色立体図 詳細②（縮尺任意）

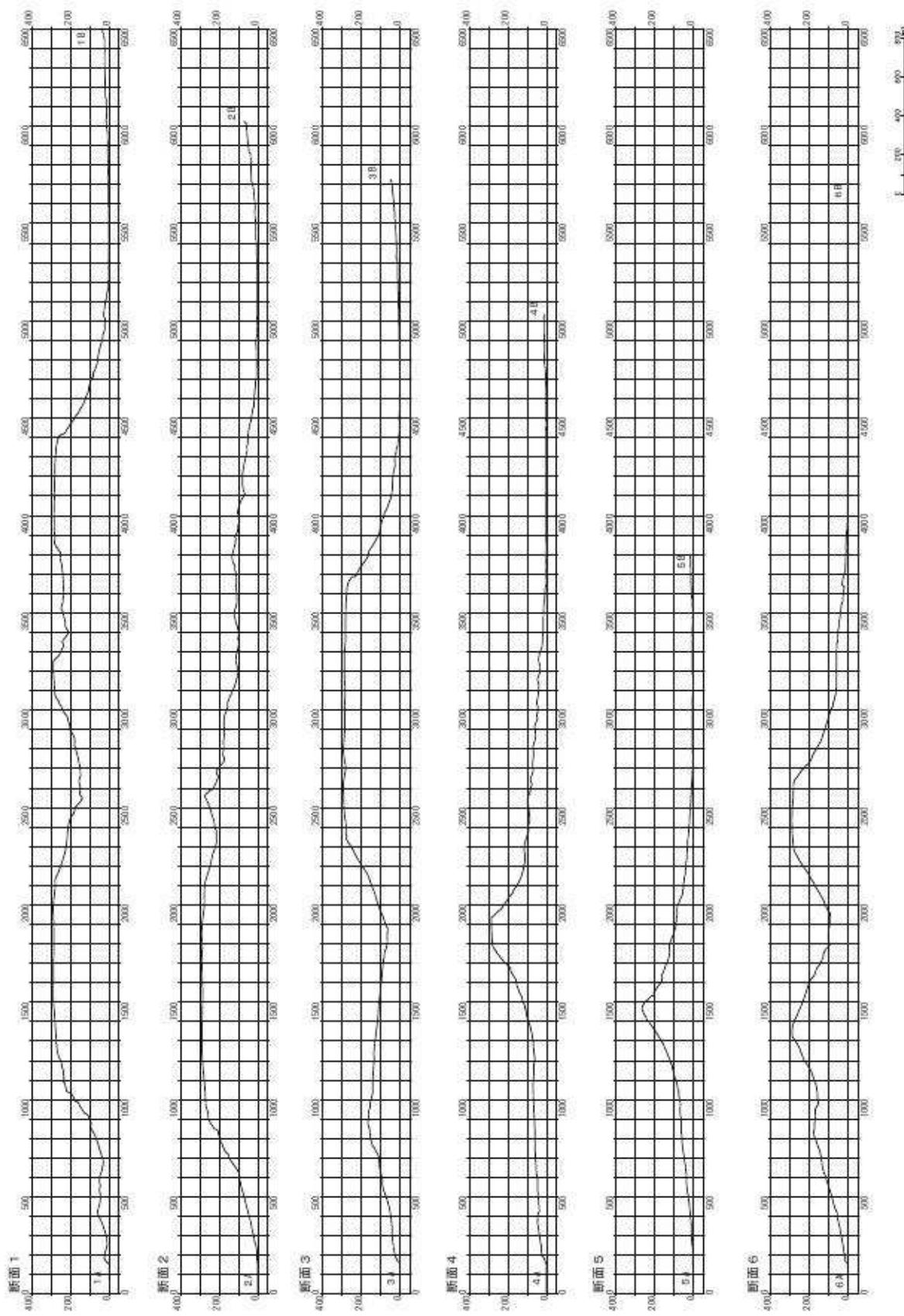


第9図 史跡天然記念物屋島赤色立体図 詳細③（縮尺任意）

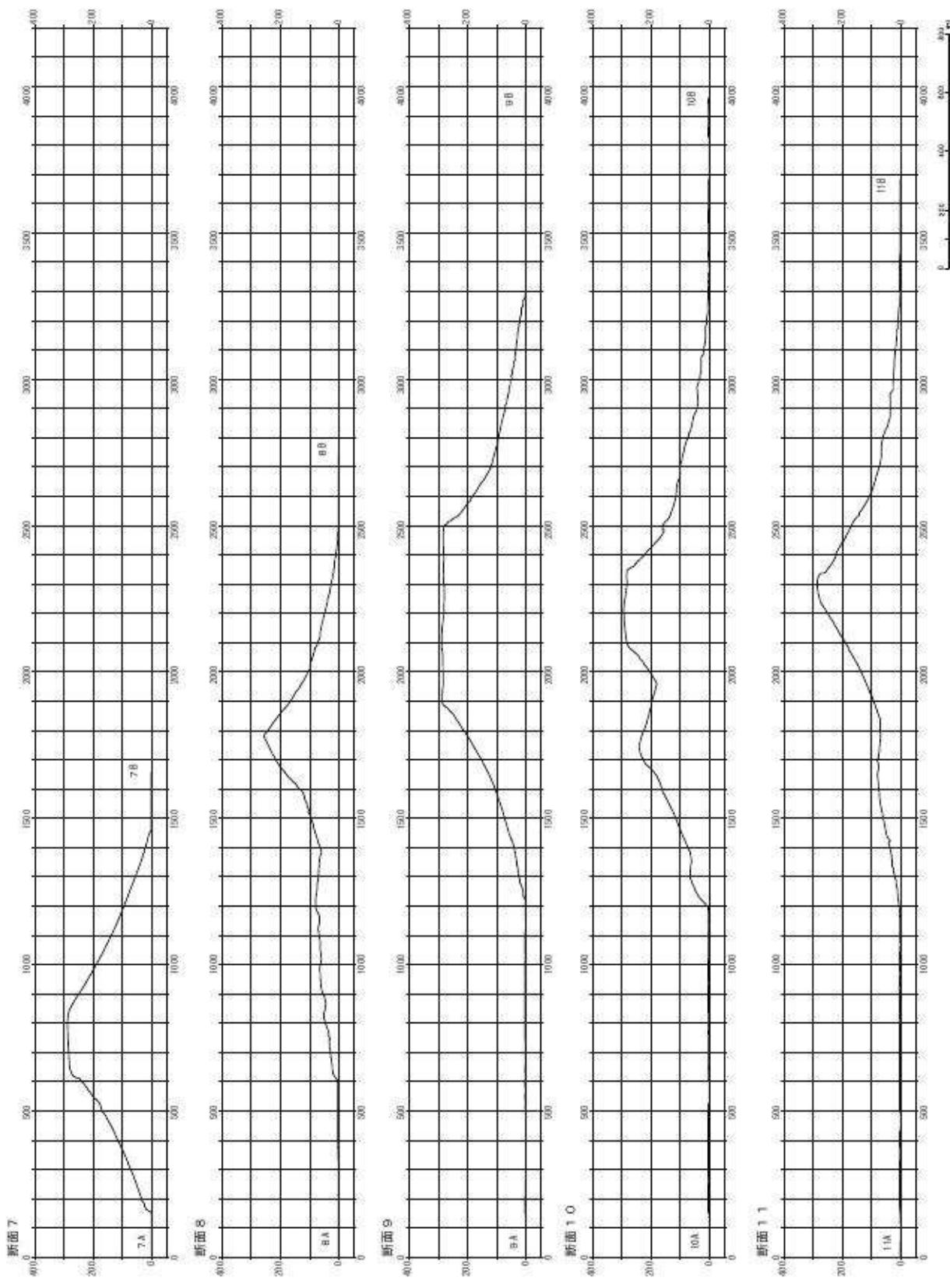
第 10 図 史跡天然記念物屋島段彩図 ( $S = 1 / 30,000$ )

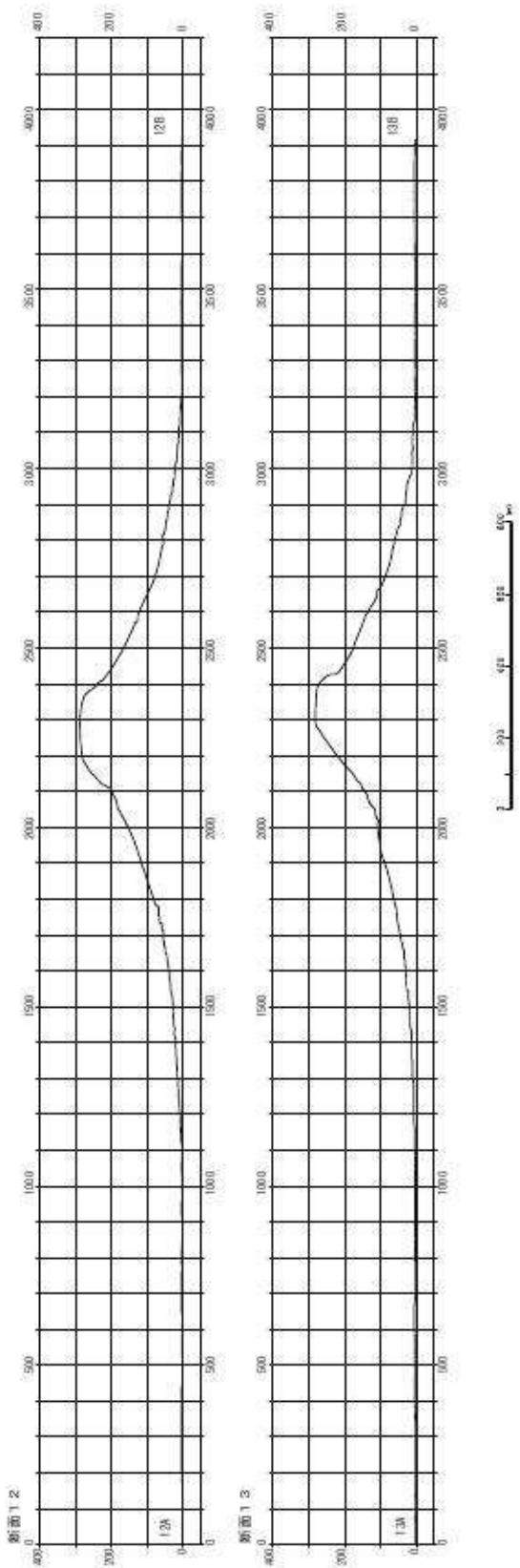


第11図 史跡天然記念物屋島断面図位置図 ( $S = 1 / 30,000$ )



第12図 史跡天然記念物屋島縦断面図 (S = 1 / 30,000)

第13図 史跡天然記念物屋島横断面図① ( $S = 1 / 20,000$ )

第14図 史跡天然記念物屋島横断面図② ( $S = 1 / 20,000$ )

山頂部も微地形が認められ、4つの谷がある。北側に開く谷は水族館と山上駐車場の2箇所、南側が屋島寺正面、東側は三角点の北側で東に開く谷である。8番札所屋島寺はその中央の尾根のピークから南に少し下がったところに立地しており、場所を明確に選定していることが読み取れる。弥生土器や屋島城関連遺物が当該地から出土していることも立地上頷ける。

#### ■断面図からみた形状的特徴（第12～14図）

既に屋島の形状については、長谷川修一氏によって、斜面の勾配とその形成要因について詳細に整理されている。いずれの断面からも、山上から勾配が急なところから緩やかになっており、いわゆる寺勾配を形成していることを確認することができる（長谷川2014）。この勾配変化点は概ね、標高100m付近である。これは、斜面の土地利用からも読み取ることができ、ため池が標高80m付近、田畠も70～80mが最も高所となっており、このような地形に相関した現象と理解することができる。すなわち、これ以上のおさになると、開墾を行うことが物理的に困難であったと考えられる。

第12図の断面1を見ると、屋島が北嶺と南嶺の二つの山から構成されている点が理解でき、両方ともほぼ同様な標高であることもわかる。第12図の断面4では、本書で報告する浦生地区の城壁が傾斜変化点に立地していることを理解することができる。また、第12・13図の断面5・8から櫓丘と称される（関野1917）北嶺と南嶺をつなぐ尾根筋が細い尾根であることも理解できる。

第12図の断面1～4から、屋島の南側が標高0m付近となり、さらに南側が高くなっている、島としての旧地形を示している。

断面図からみると、平坦面は南北方向に長く、東西方向の方が短い点も明確である。これが長細い台形を作り出しているものと考えられる。

#### ■その他

多くの山頂へ至る道を把握することができたほか、現在、道としては利用されておらず、認識されていない箇所にも細い帯状の平坦面を確認することができ、様々な道があったことを確認することができた。西側、東側も戦後の開墾で、山腹まで開墾した平坦面が顕著に認められる。

以上の成果は表層的に把握できる成果であり、今後は、今回作成した地形図のさらなる読み込み作業、地形と人工的な改変の関係性、それらを踏まえた目的的

な踏査、確認調査を実施する必要がある。これまで山上部を中心に調査を実施してきたが、屋島の歴史の解明という視点からも山麓の調査の重要性も増している。山麓の解明は史跡指定の構成要素となっている屋嶋城、屋島寺、源平合戦屋島の戦いの評価や屋島全体の歴史の解明と地形との関係性の解明に直結するものであり、避けて通ることのできない重要な課題と言え、長期的な視点での調査計画の立案と実施が必要であることは言うまでもない。

ここで述べたことは、現地を踏査すれば確認できる点も多々あることであるが、現在、多くの箇所が人の管理がなされておらず、容易に踏査が難しい箇所も多く存在している。また、大規模に地形を把握すること、現状で確認できない場所など、様々な条件下でも地形を詳細に把握することもでき、赤色立体図の読み込みとこの地形図に基づき、目的的に踏査を行うことができる。

### 第3節 踏査

#### A. 経緯と経過

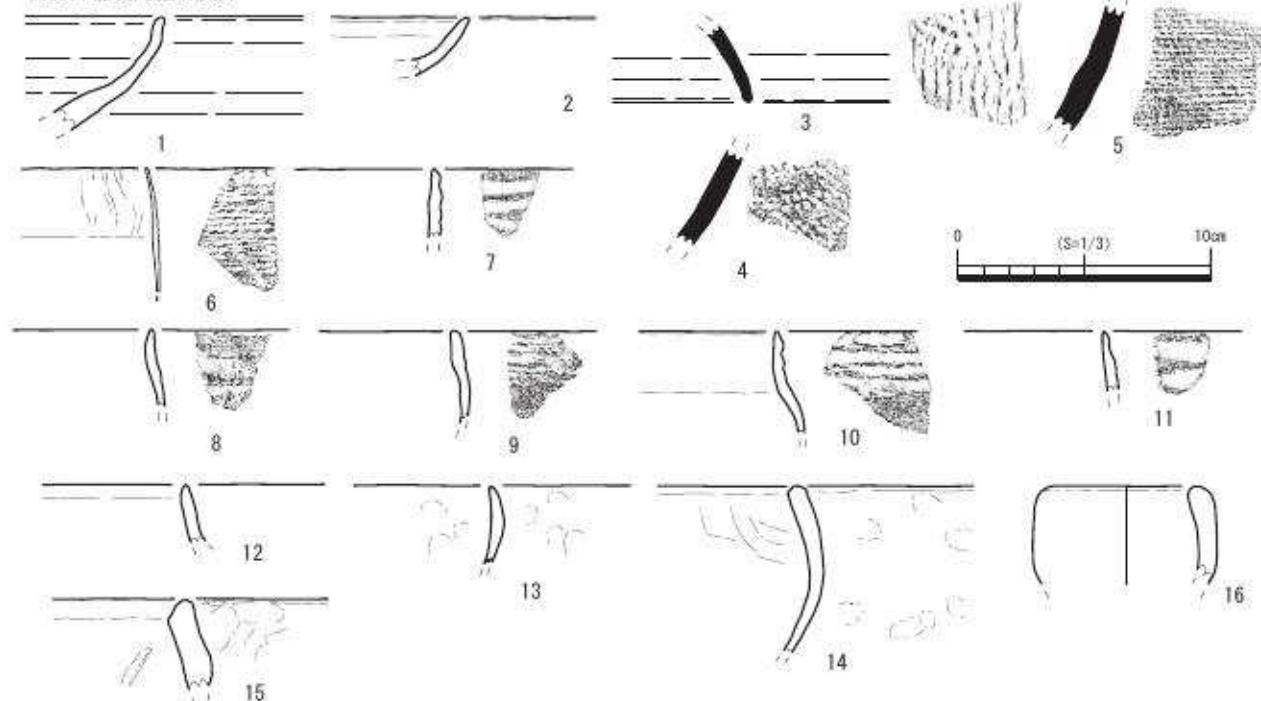
平成19～20、28～29年度を中心に踏査を実施した。19、20年度は北嶺山上付近の岩盤周辺、東西斜面地、南嶺山上のケーブルカー駅舎周辺、28、29年度はレーザー測量を元に、屋島山上の城門地区に類似する地形箇所の踏査、東斜面部の平坦面、北嶺山上の縁辺部、平坦部、石切丁場（洞窟周辺）などを中心に行った。今回の調査でも、斜面地は既に報告されているように（長谷川2014）、崩積土で覆われておりその多くが崩落した石が表面を覆い、現地を踏査しても基本的には斜面部は、山頂の安山岩の崩落した礫が堆積している。その中で、上記の南嶺の東側の斜面で認められる帯状の平坦地については現地を確認しようと試みたが、周辺がイノシシの寝床となっており、確認ができない。ただし、既述のとおり、斜面地については、石材で覆われている箇所が多く、踏査のみでは遺構有無の判断ができないものと考えられる。

#### B. 主な成果

##### ■北嶺山上部

過去の調査に基づき、礎石や基壇状の高まりが現地形から判断できないかという点から踏査を実施した。北嶺山上地区の調査において後述するように、集石や

鵜羽神社境内遺跡表採



第15図 踏査時採集遺物 (S = 1 / 3)

礎石状の大型石材の分布の範囲が確認できた。集石については、園路整備時に障害となる石材をまとめたものと考えられることが判明した。ただし、現状では、既に確認された礎石建物跡のような基壇状の高まりは明確には確認できなかった。踏査に基づくと、東側に平坦面がまとまっており、中央から西側及び北側に向かって傾斜していることも確認できた。ただし、平坦部が広く、礎石以外の掘立柱建物跡なども検討する必要がある。後述する26年度以降の調査は、この成果に基づいているが、明確な礎石などは確認できていない。

また、昭和40年代の国立公園の整備に伴い、休憩施設や園路の整備に伴い、土木工事が実施され、障害となる石材や土が公園整備に使用されたり、園路周辺に集積されたりしている。そのため、今回把握した分布が遺構に直結するかは不明である。そのため、園路周辺の集石は検証が必要である。

山上縁辺部には崖が発達している。ただし、西側の遊歩道よりも外側（西側）に平坦地が広がる箇所が認められる。

#### ■石切丁場跡1

屋島スカイウェイ（旧屋島ドライブウェイ）のトンネル北側にある屋島少年自然の家へと下る登山道の標高180m付近から花崗岩の露頭が見られ、標高100～120m付近では、壁面が垂直に切り立った箇所が多く確認できるようになる。加工痕等は認められないが、採石を行った可能性が想定される。登山道周辺で、大型と小型の2種類の大きさの矢穴が残る花崗岩を確認することができた。登山道周辺に、矢穴の残る花崗岩が点在しており、数量としては、小型の矢穴のものが多い。麓には石場の地名が残っている。周辺にはやや傾斜が緩やかになった箇所に平坦面などが認められ、採石に伴う作業場等である可能性もある。

#### ■石切丁場跡2

長崎鼻古墳周辺丘陵の尾根筋状の西面に花崗岩が点々と露出している箇所がある。露頭する花崗岩の大きさは様々であるが、小型の矢穴が残るものが多数認められる。

#### ■鵜羽神社境内遺跡

鵜羽神社境内遺跡は、浦生川の河口に位置する、名前のとおり、鵜羽神社の境内地に所在する製塩遺跡である。標高3m付近に位置し、先の旧海岸線を示す2mよりやや高い場所に位置する。遺跡は等高線に沿って神社境内地、特に本殿周辺を南北に横断するように

帶状に展開するものと考えられる。弥生時代後期から古墳時代を中心とした遺跡である。24～27年度に本市教育委員会と徳島文理大学によって発掘調査が実施されており、詳細は別途報告予定である。なお、第15図は20年度の踏査時に表探した資料である。

1は土師器の杯である。淡黄白色を呈し、白色砂粒を多量に含む。2は土師器の椀若しくは杯と考えられる。丁寧なヨコナデによる整形である。色調は淡黄褐色を呈し、白色砂粒を少量含む。

3は須恵器の杯身の蓋である。青灰色を呈し、黒色砂粒を含む。4・5は須恵器の甕の体部片である。4の外面は格子目叩きで内面はナデ調整、5は外面が平行叩きで、内面は当て具痕（青海波文）が残る。

6～14は製塩土器で、6は薄い器壁に細い細かな叩き目が施されるもので、内面は絞り状の痕跡が認められる。備讃V式（大久保2010）である。8～11は口唇部に大型の平行叩きが施されるもので、12～15は指印さえ状の痕跡が多量に残るもので、器壁が薄いものと厚いものがある。いずれも備讃VI式（大久保2010）である。いずれも明茶褐色を呈し、焼成が良いものが多い。前者が古墳時代後期前半、後者が古墳時代後期後半の製塩土器である。

16は土師器の小型品で、白色砂粒を多量に含み、雲母を含む。表面は黒色化（炭化）している。

#### ■南嶺山上地区

城門地区と同様な地形が、屋島ケーブルカー駅舎の南側に小規模な谷地形が認められ、小規模な石積み遺構が確認できる。詳細は第4章にて述べる。

#### 参考文献

- 大久保徹也 2010 「瀬戸内の弥生・古墳時代土器製塩－生産／流通の変遷－」『製塩土器の分布から見た塩の生産／流通の検討』四国考古学研究会・土器製塩研究部会

## 第4節 発掘調査

### A. 屋嶋城跡浦生地区の調査

#### ■これまでの経緯

調査地である浦生地区は、屋島を南嶺と北嶺に分ける大谷の奥、標高100m付近に位置する、国有林野(屋島西町林班ろ7小班)である。当該地は、関野貞氏によって、大正6年(1917)に屋嶋城跡の遺構として初めて学術的に紹介された場所で、谷を塞ぐ城壁として位置づけられ、屋嶋城は抱谷式の構造であったと指摘された(第16図:関野1917)。実際に明治6年(1873)に描かれた『浦生洛中地理絵図』(高松市歴史資料館蔵:第17図)には明確に土手として関野氏が紹介した城壁が描かれており、当時から土手状の大きな構造物と認識されていたことがわかる。ただ、「讃岐国名勝図会」には、浦生石塁に関する記載は見受けられないため、屋嶋城との関係性をどの程度意識されていたかは不明であるが、関野氏の論考に基づけば、浦生城壁は地元の人々にも屋嶋城跡の城壁という認識はなかったようである。また、既述のとおり、当該地から先は傾斜が大きく変化する場所で、城壁内部は「休場」と記載されており、厳しい登り道に備えて休憩場として認識されていたようである。

関野氏の論考以後は、関野氏とともに踏査を行った岡田唯吉氏によって大正10年に報告された史跡名勝天然記念物調査報告にも同様な記載がなされている(岡田1922)。ただし、その際に浦生の城壁の立面図(第18図)が掲載されている点は学術的に重要である。その後、昭和9年に史跡及び天然記念物に指定される際にも『日本書紀』に記載された屋嶋城跡の遺構として評価されており、厳密な城の構造に関する既述は、それ以後見受けられないが、屋嶋城跡の代名詞とされてきた場所である。

その後、確認調査を昭和55年度に本市教育委員会が実施し、台上遺構や石積み遺構が確認されたが、出土遺物が中世初頭のものであったことなどから、年代的位置付けができず、屋嶋城を構成する構造物としての位置付けが不明確となってしまった。また、その後も平成14年に城門が確認されるまで、遺構の存在が不明確であったことから屋嶋城跡の存在が不明確になってしまった。

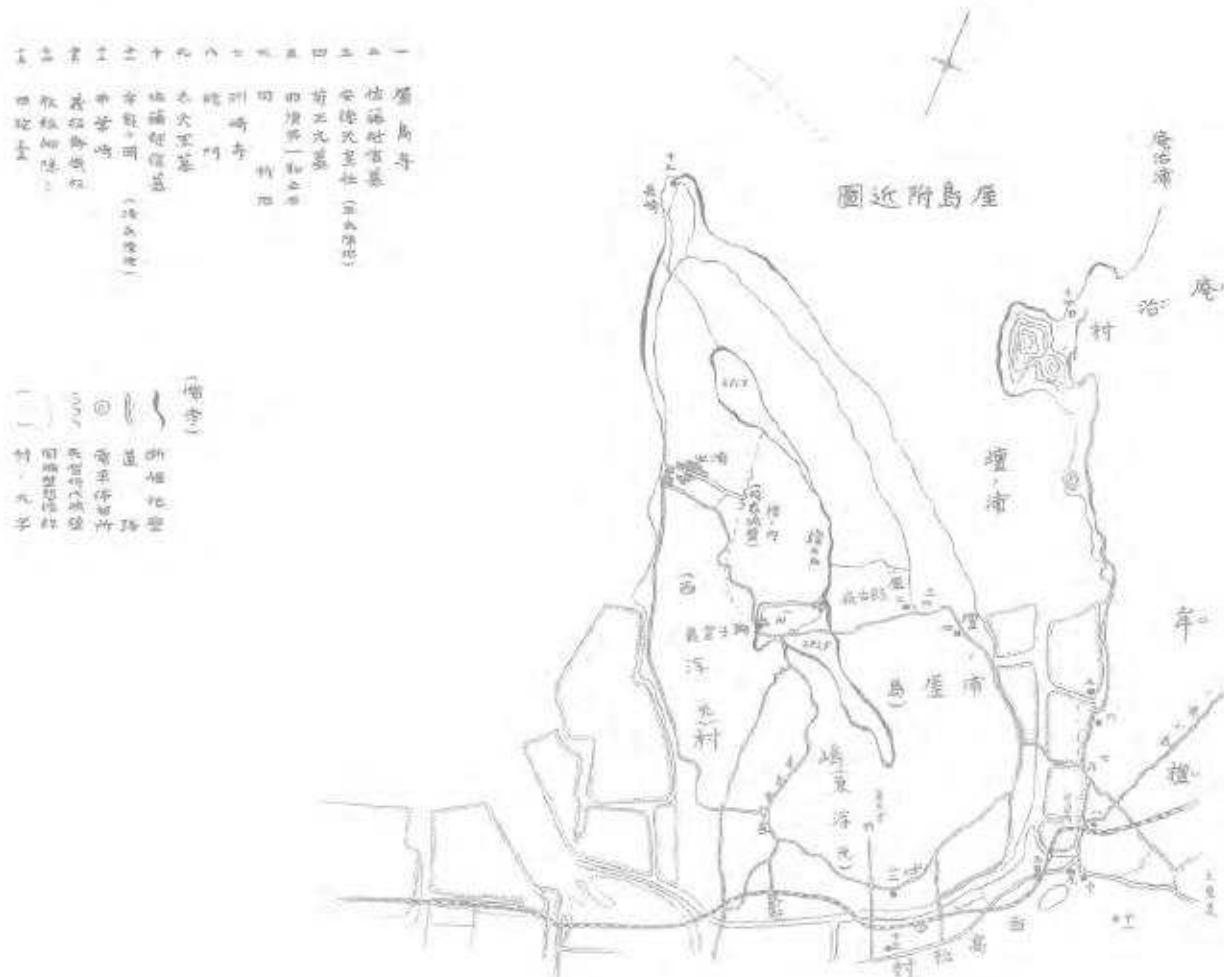
平成12年以降、屋嶋城跡に関する調査は山上で14年に確認調査により城門跡を確認したことを契機に、屋嶋城跡の調査を集中的に実施してきた。その中



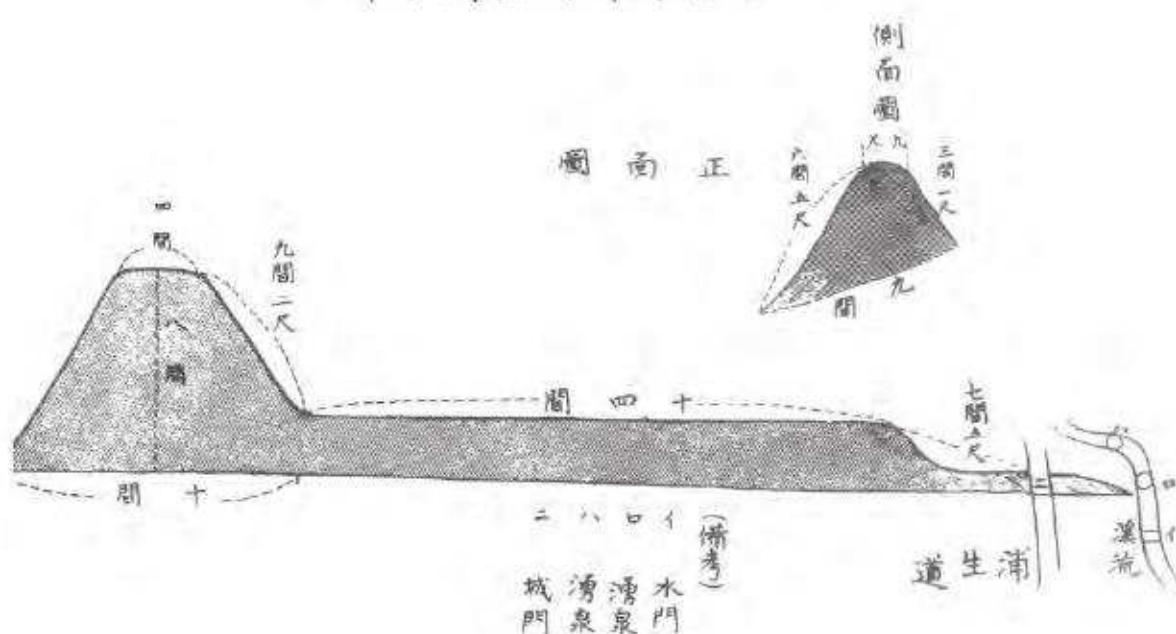
第16図 関野貞氏想定屋嶋城跡外郭ライン (S = 1 / 40,000 関野 1917 より転載)



第17図 浦生洛中地理絵図に描かれた浦生地区の城壁 (高松市歴史資料館蔵)



天時暫代城壁残存部圖



第18図 史跡名勝天然記念物調査報告に掲載された屋嶋城跡と浦生地区の城壁図（縮尺任意 岡田 1922より転載）

で昭和55年度に調査を実施し、位置付けが不明確になっていた浦生地区の位置付けが問題となり、確認調査によっては古代山城の一部を成す可能性が高まった。それらの解明を目指し、平成21年度より調査箇所を浦生地区に限定して実施することとした。各年度の調査期間については、下記のとおりである。

調査については、昭和55年度の確認調査箇所をベースとして、城壁構造の確認を目的として平成21～23年度に調査を実施し、さらに、城門が推定されていた箇所で24～25年度に実施し、物見台と呼ばれていた城壁最上部の台状遺構（張出部）の構造解明のための調査を26～28年度に実施した。さらに、城壁規模の確定のために、28～29年度に三次元レーザー測量を実施し、それに基づき、29年度に城壁の内外面で石積みの残りのよい箇所で調査を実施した。

#### 参考文献

- 関野貞 1917「天智天皇の屋島城」『史学雑誌』第28編第6号 史学会  
 岡田唯吉 1922「屋島(木田郡)」『史蹟名勝天然記念物調査報告』  
 1 香川県史跡名勝天然記念物調査会編

#### ■ 調査の経過

##### 1) 発掘調査

各年度の調査実施期間と発掘調査の担当者は下記のとおりである（第21図）。

##### 平成21年度

平成22年1月14日～3月31日

調査面積：29m<sup>2</sup> 担当：小川 賢・中村茂央

##### 平成22年度

平成22年10月12日～平成23年2月24日

調査面積：15m<sup>2</sup> 担当：小川 賢

##### 平成23年度

平成24年2月6日～平成24年3月30日

調査面積：44m<sup>2</sup> 担当：渡邊 誠・小川 賢

##### 平成24年度

平成24年12月6日～平成25年3月8日

調査面積：25m<sup>2</sup> 担当：渡邊 誠・小川 賢

##### 平成25年度

平成25年11月18日～平成26年3月6日

調査面積：18m<sup>2</sup> 担当：渡邊 誠

##### 平成26年度

平成27年1月7日～3月31日

調査面積：22m<sup>2</sup> 担当：渡邊 誠

#### 平成27年度

平成27年12月1日～平成28年3月29日

調査面積：60m<sup>2</sup> 担当：渡邊 誠・杉原賢治

#### 平成28年度

平成28年10月18日～平成29年3月27日

調査面積：25m<sup>2</sup> 担当：渡邊 誠・杉原賢治

#### 平成29年度

平成29年10月2日～平成30年2月5日

調査面積：20m<sup>2</sup> 担当：渡邊 誠・益崎卓巳

#### 2) 整理期間

本発掘調査の整理及び本書の製作は、年度ごとに担当者が実施するとともに、平成30年度にこれまでの調査成果の見直し、発掘調査図面の整理、出土遺物の整理作業、及び本書の執筆編集作業を下記の期間で実施した。

平成30年度 平成30年4月～平成31年2月

担当：渡邊 誠

#### ■ 調査成果

##### 1) 地表面における遺構の状況：レーザー測量成果に基づく検討（第19図～39図）

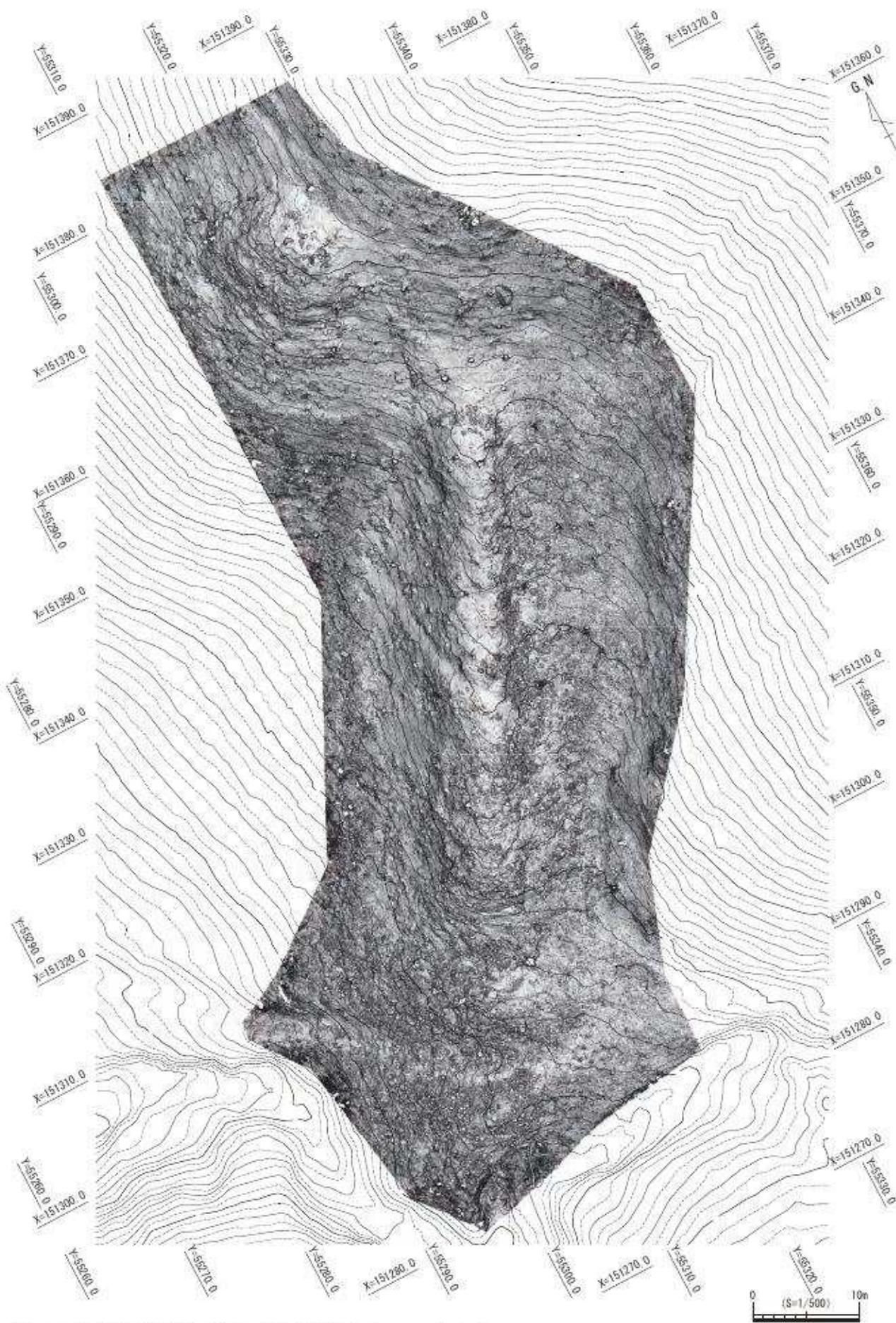
遺構の全体的な状況については昭和55年度の調査時も確認され、その後、平成21年度、28年度に全体の清掃を実施するなど、残存する遺構の全体像を把握した。また、より詳細に形状や規模を把握するために、既述のとおり三次元レーザー測量を実施している。形状や遺構に関する概要については昭和55年度と大きな変化はないが、55年度の所見に基づきながら、レーザー測量の成果について、ここで一度整理しておきたい。

##### a) 立地

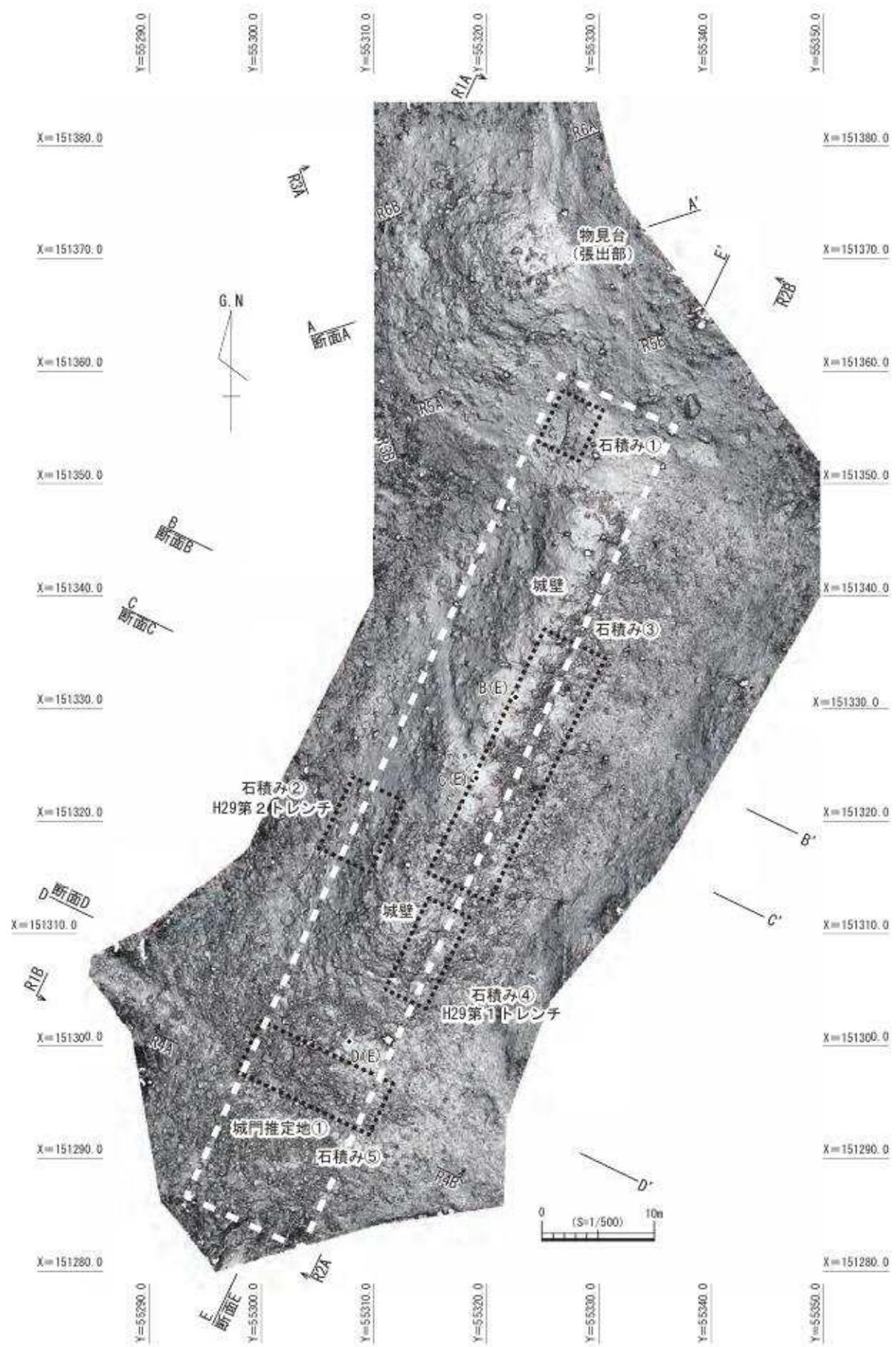
当該箇所は、屋島の断面図からも明らかのように、標高100m付近で、地形の傾斜の変化点にあたる場所である。城壁南側には浦生川、北側には非常に深い谷がある。

##### b) 平面形（第19・20図）

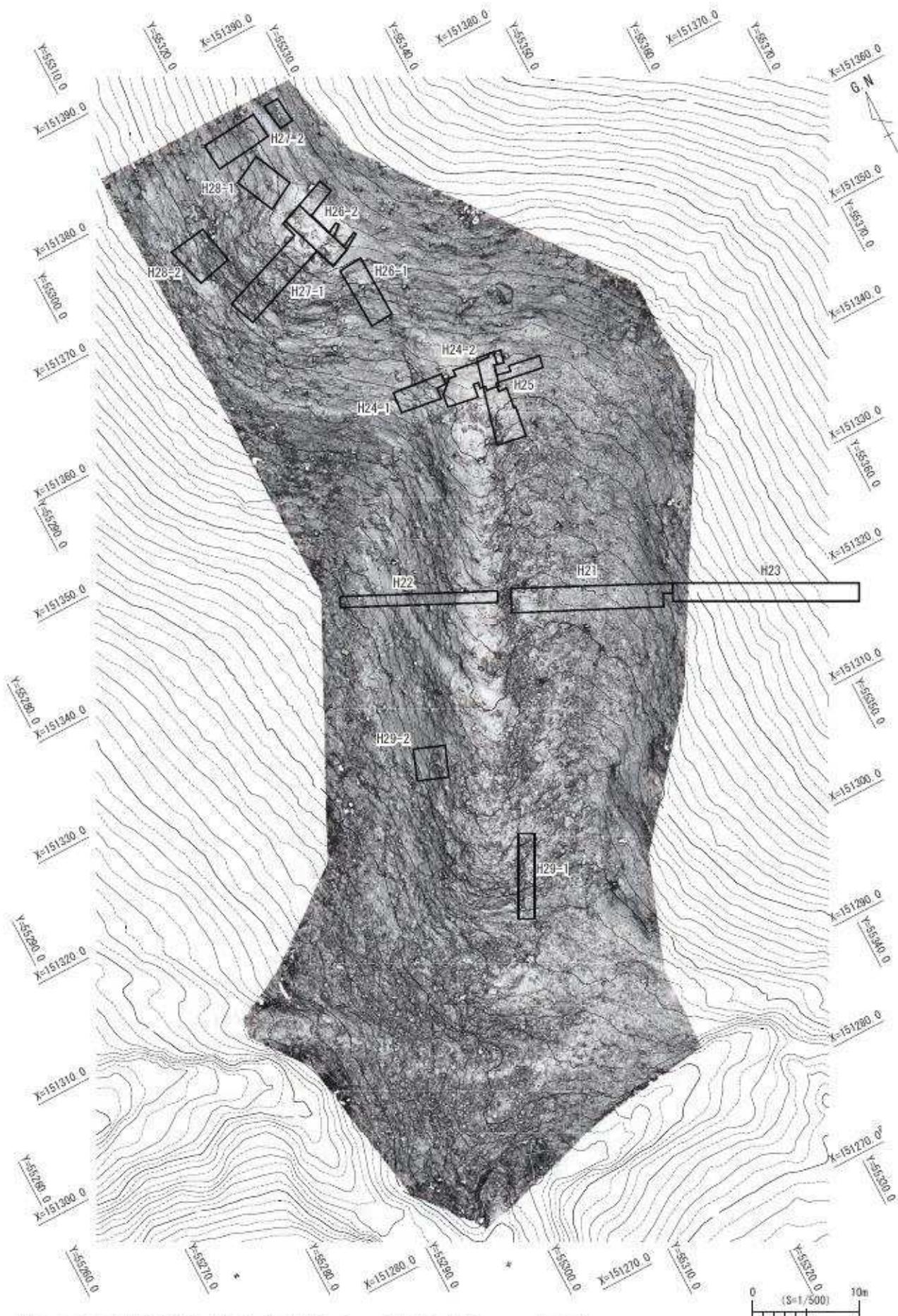
浦生川によって形成される谷部を遮るように直線的な城壁が築かれており、川から物見台（張出部）の手前まで、延長80m程度となり、さらに物見台（張出部）まで含めると100m程度となる。北側（山側）で台状遺構（張出部）が確認でき、人工構造物である

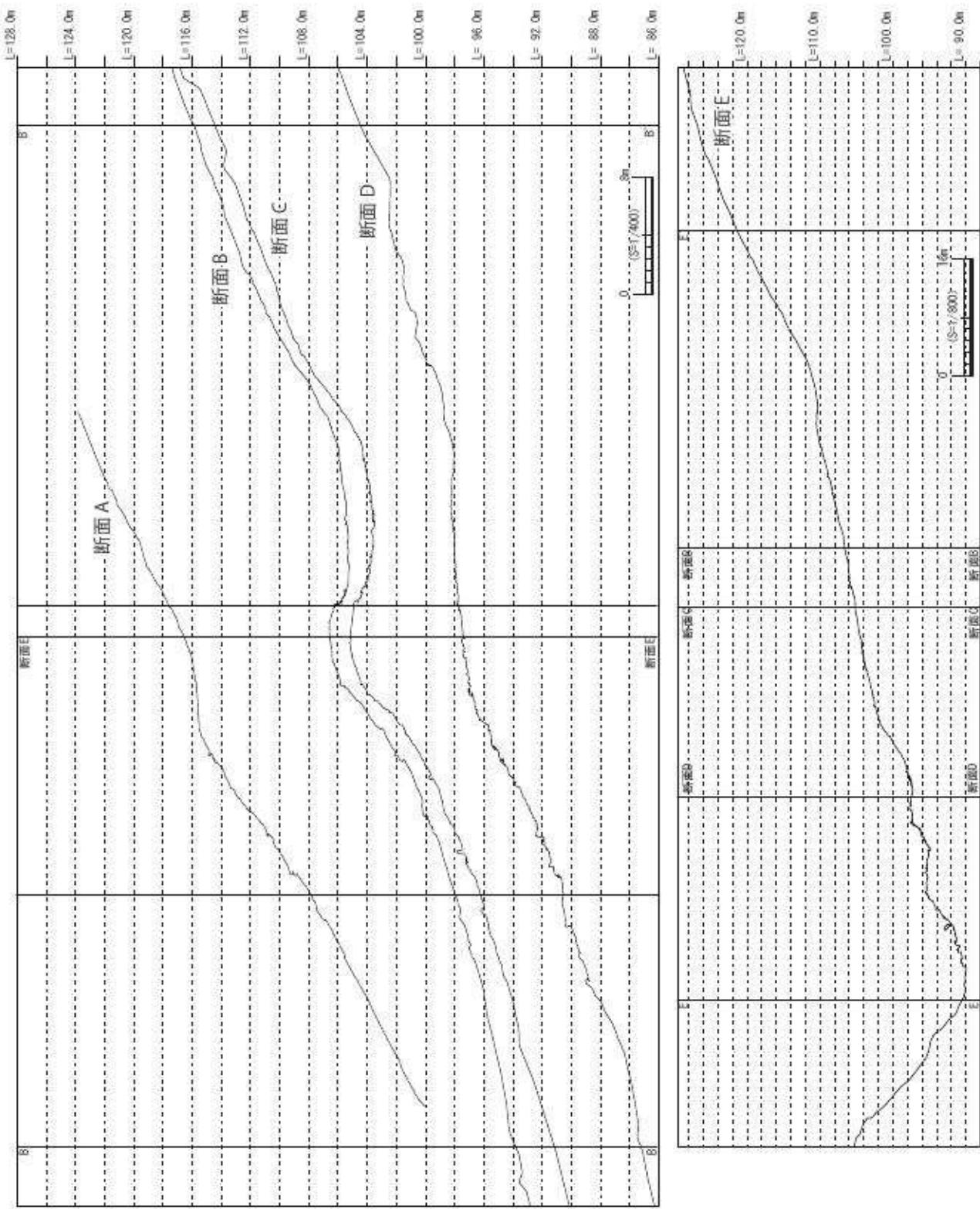


第19図 屋嶋城跡浦生地区の地形測量図 (S = 1 / 500)

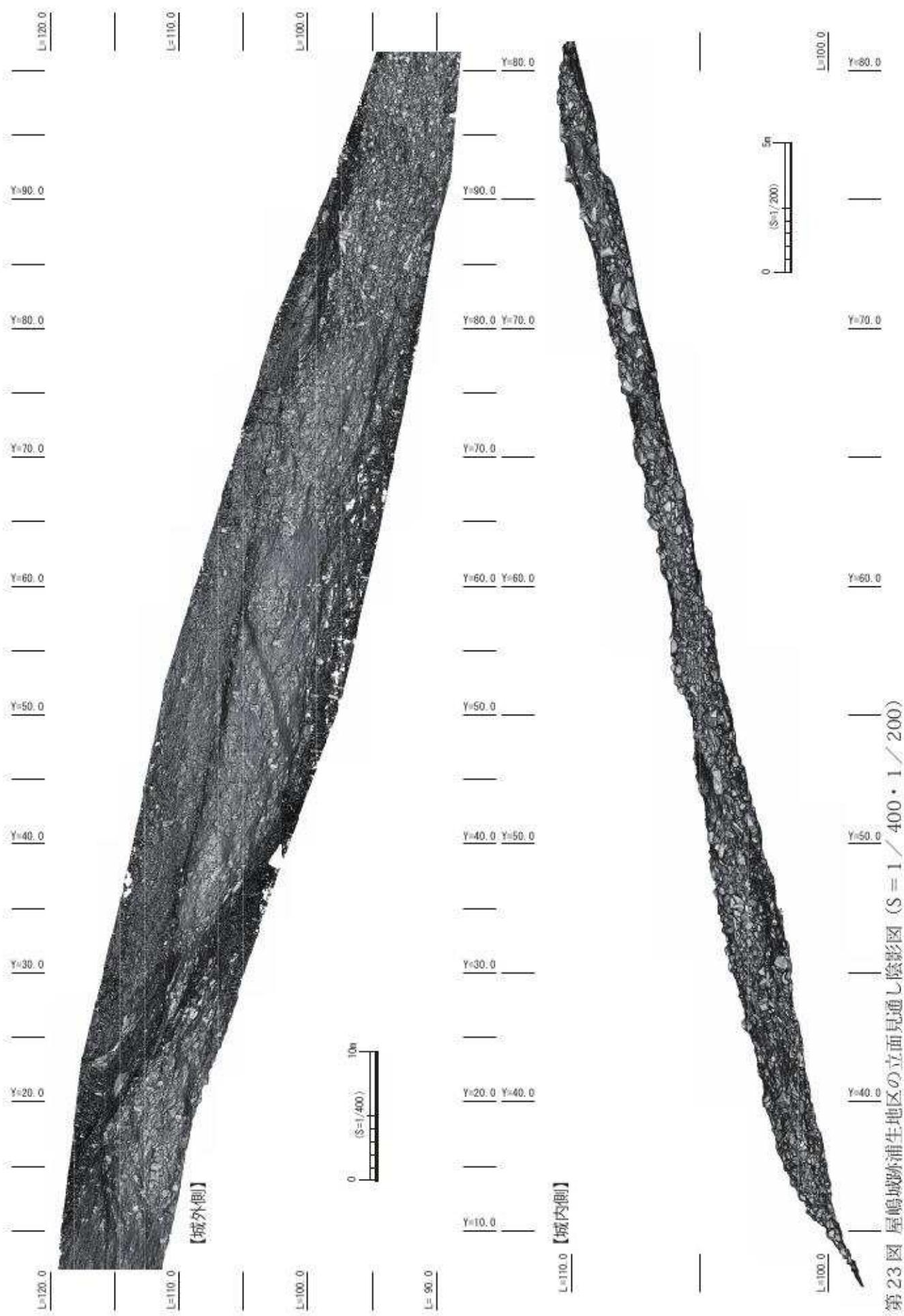


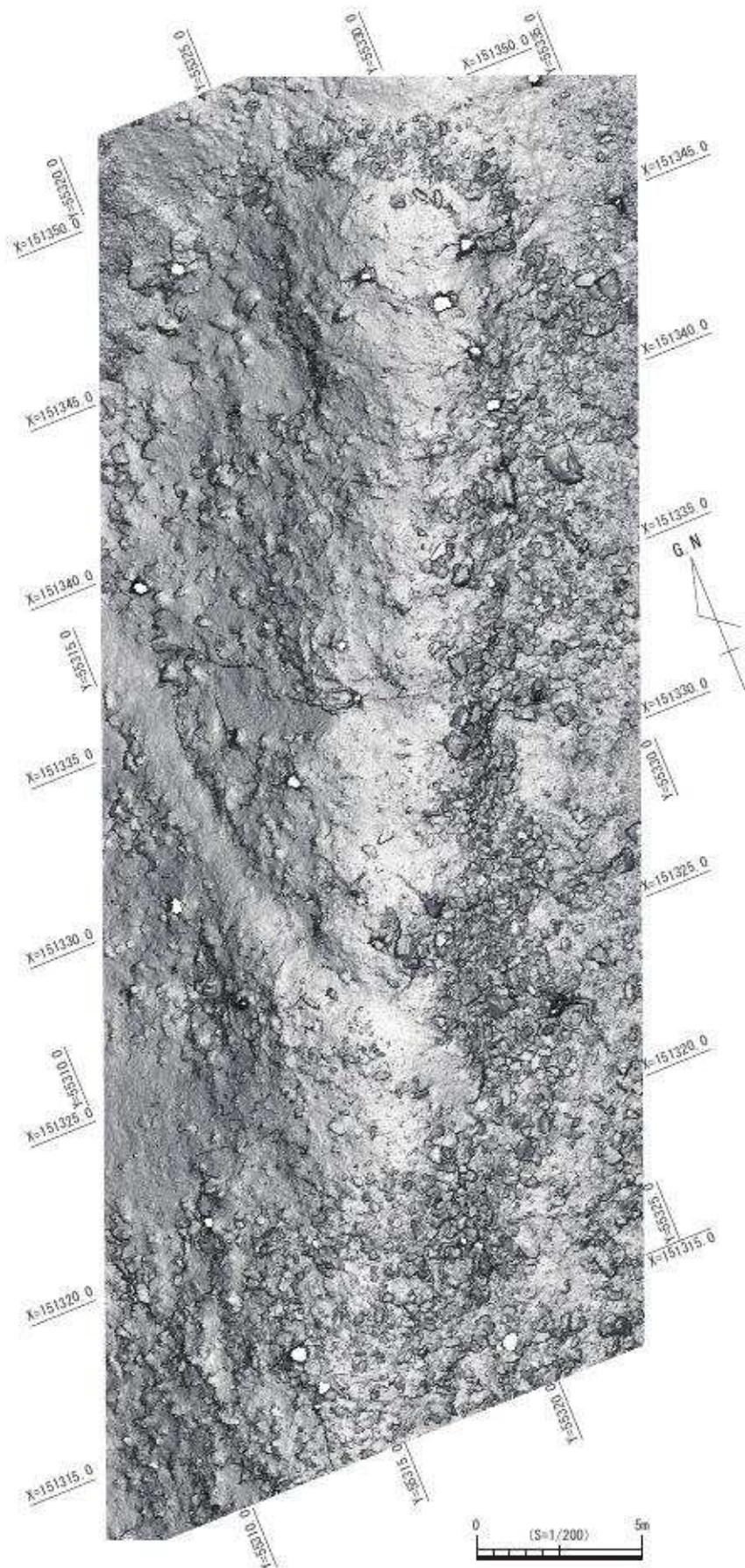
第20図 屋嶋城跡浦生地区の石積み及び断面図位置図 (S = 1 / 500)

第 21 図 屋嶋城跡浦生地区の年度別トレンチ位置図 ( $S = 1 / 500$ )

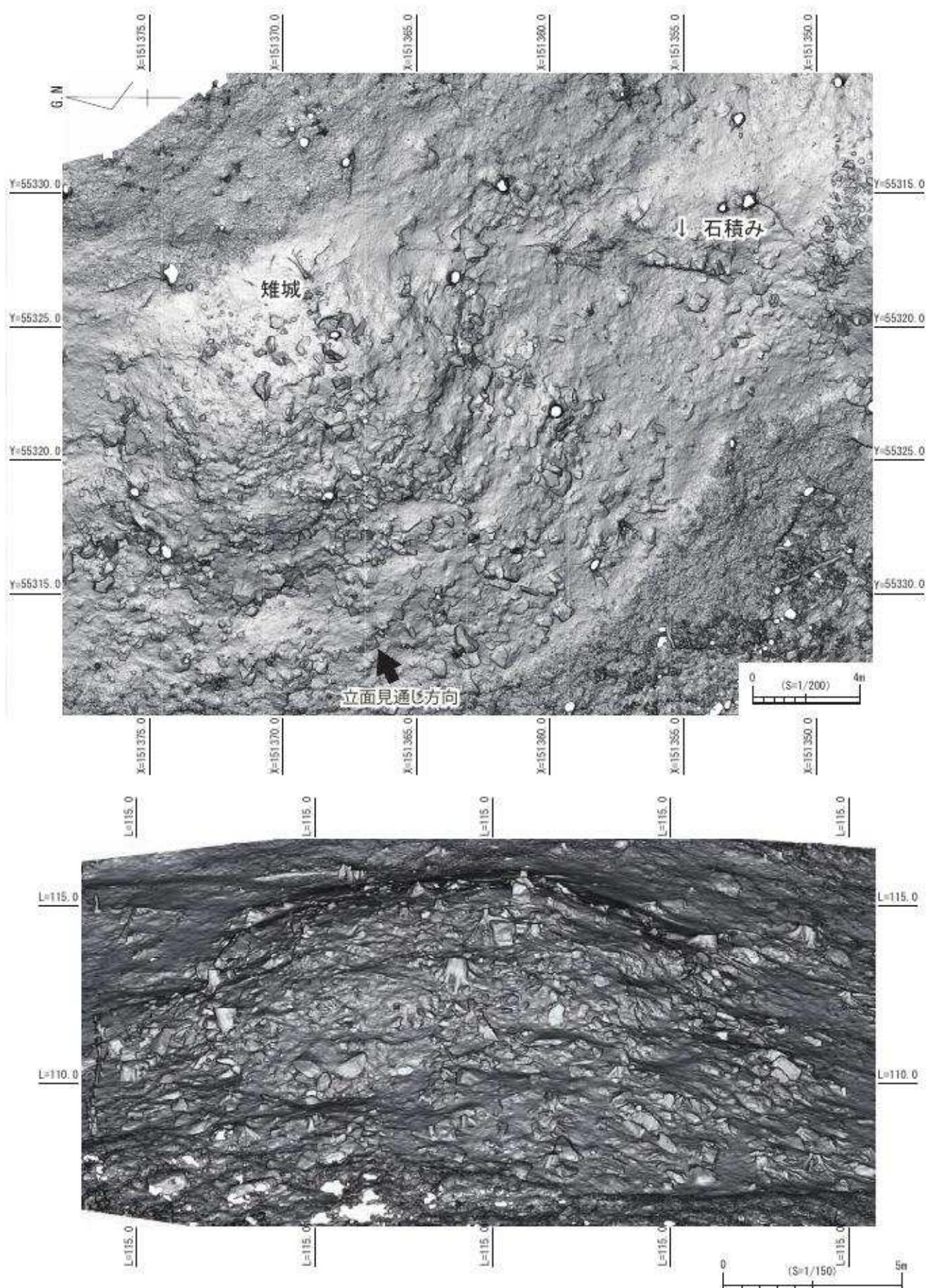


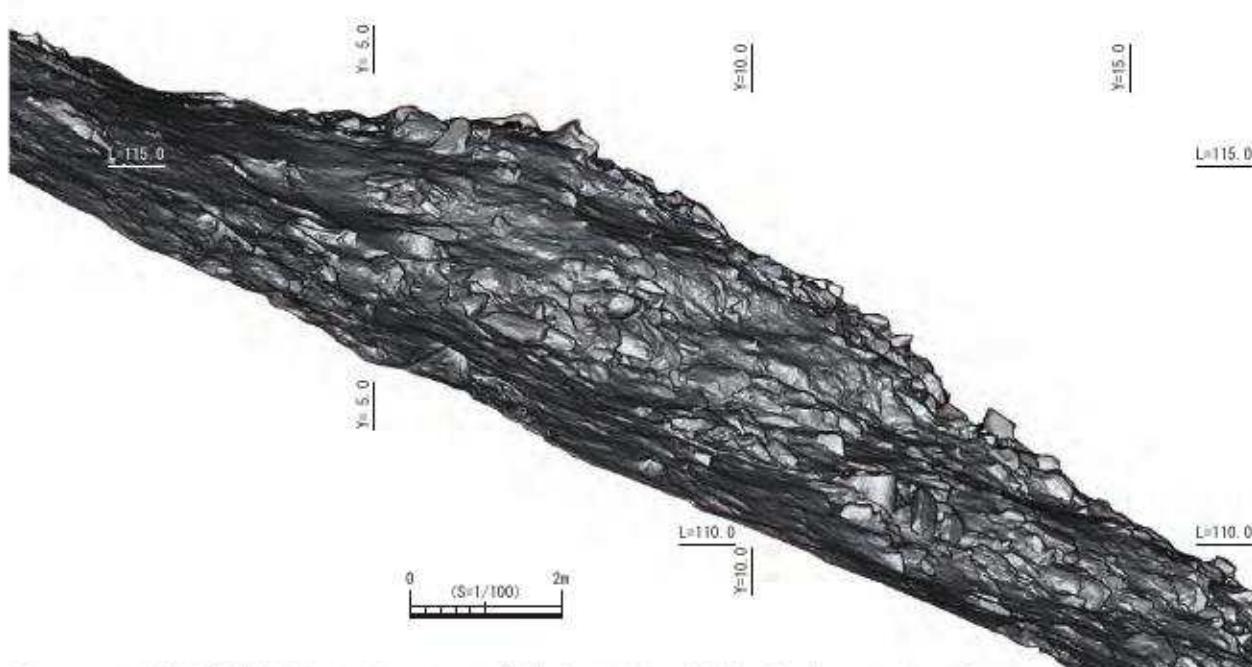
第22図 屋鶴城跡浦生地区の城壁断面図 (S = 1/400・1/800)





第24図 屋嶋城跡浦生地区の城壁平面陰影図 ( $S = 1/200$ )

第25図 屋島城跡浦生地区の雉城平面（上）・立面見通し（下）陰影図① ( $S = 1/200 \cdot 1/150$ )

第26図 屋嶋城跡浦生地区の北からみた雉城立面見通し陰影図② ( $S = 1 / 100$ )

ことは明らかである。この張出部は、古代山城では曲城や雉城と呼ばれ、形状が重要である。現地形の平面形からは隅丸方形を呈するように見え、雉城であったと想定できる。

この張出部の背面（山側）には、尾根筋が山上まで認められ、これが、関野貞氏が城壁と想定したものである。

#### c) 城壁（石積み）（第22～39図）

城壁は基底部で幅約7～8mと想定され、高さは場所によって異なるが、高い箇所で約4～5mとなるものと考えられる。城壁縦断では、城壁最北部と城門推定地で標高差約1.5mにも及び、物見台（張出部）の天端からすると標高差は約2.1mとなる。それゆえ、城外側から見るとさらに高低差が生じる。

城外側では昭和55年度に確認された最北部の石積み（石積み①）のみが残存し、中央部で石積み状を呈する箇所（石積み②：平成29年度第2トレンチ）がある。それ以外は崩落し、城外側に多くの石材が集積しており、歴時の景観を残す箇所は残っていない。このほかに以前に報告されているが、城外側で城壁から離れた場所に低い石積みが築かれているが、機能や築造時期は不明である。

一方、城内側は、崩落、変形をしているものの、石積みが残存する箇所（石積み③：昭和55年度・平成21年度、石積み④：平成29年度第1トレンチ）があり、40cm以下の小ぶりな石材を用いて築かれてい

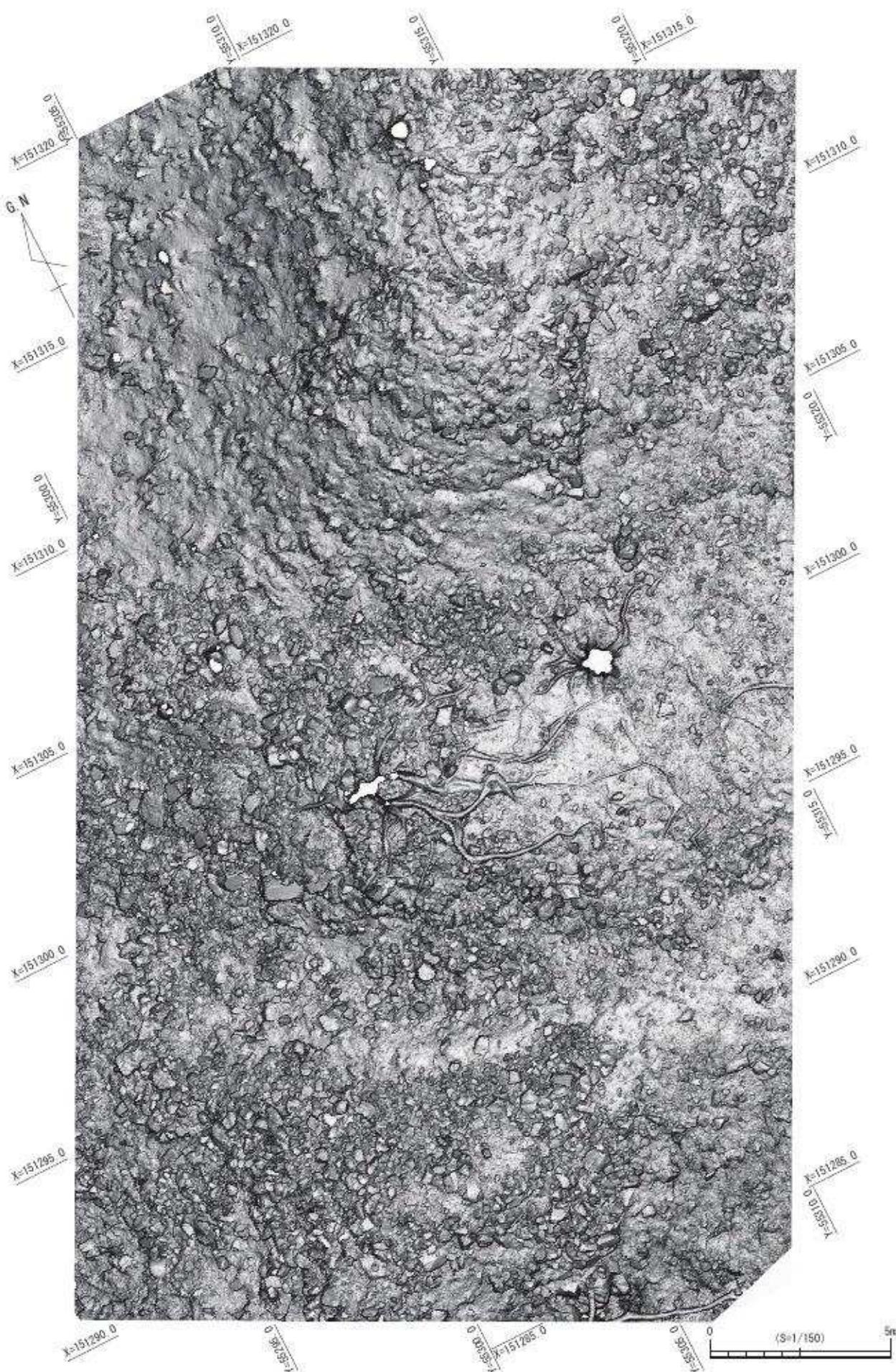
る。ただし、そのほとんどは崩落し、城内側の現地表面に石材が集積している。残存する部分も、現状では、崩落範囲と本来の範囲がやや不明確な箇所もある。後述するが、城内側の埋没範囲においては、比較的良好に石積みが残っている。

城門推定地は川沿いに登ってきたところに位置し、城外側の隅角部と想定される箇所に、1mを超える大型石材を使用する重箱積を確認することができ、それに連続していたであろう崩落した石積み状を呈する範囲（石積み⑤）がある。城外側隅角部から奥に約9mの箇所で同様な重箱積を確認することができ、城内側の隅角部と考えられる。ただし、城門を想定するためには、川側（谷側）にもう一つの側壁が存在したはずだが、現在は平坦になっており、列石状のものをわずかに確認できるが、詳細な位置は不明である。

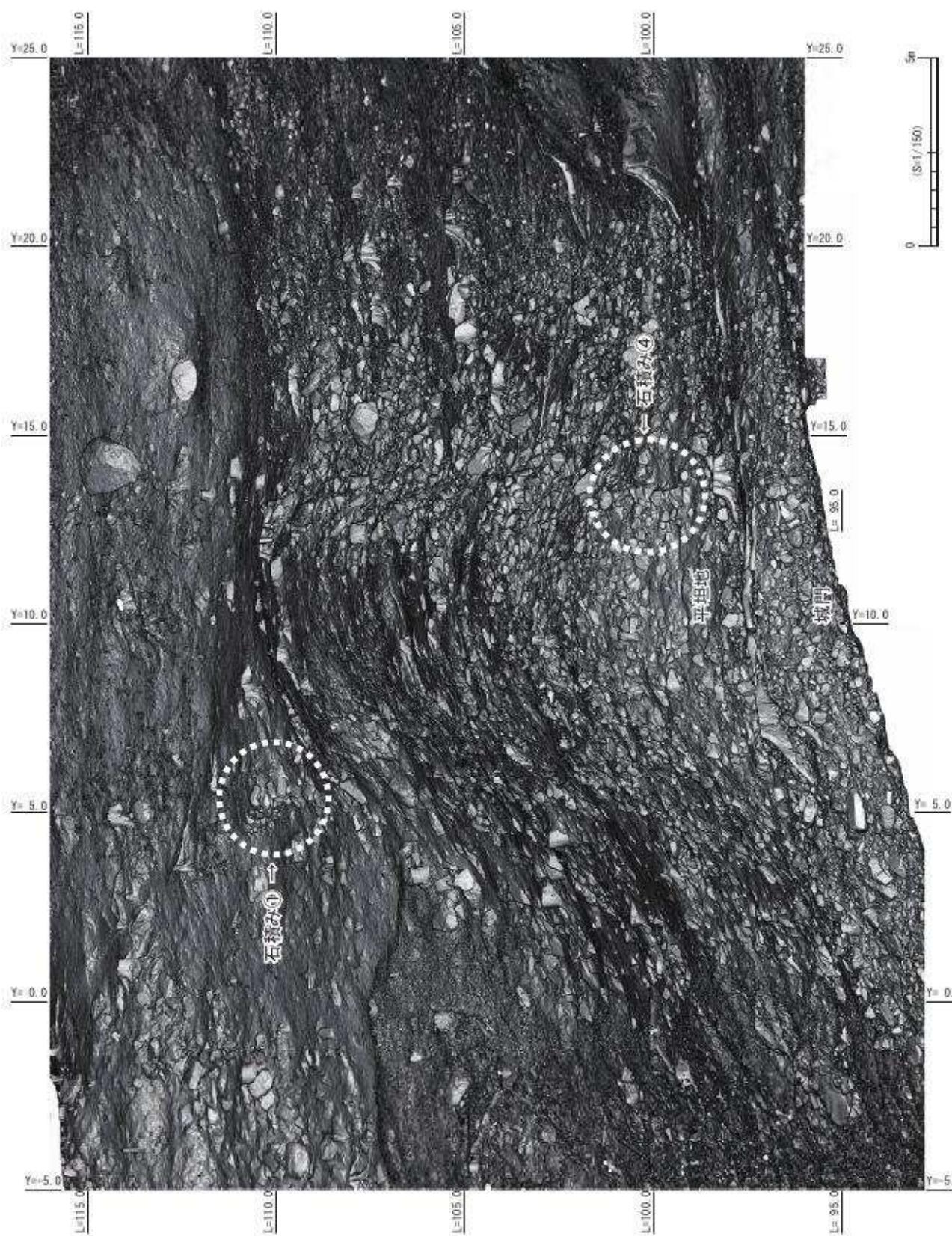
城外側から城門に向かって左側（山側）に、この城門推定地より一段高い場所に9m×8.8m程度の平坦面がある。さらにその向こうに、城壁が北側に向かって展開する。この平坦面がどのような場所であったかは不明であるが、もともと平坦地であった可能性がある。

#### d) 城内の空間

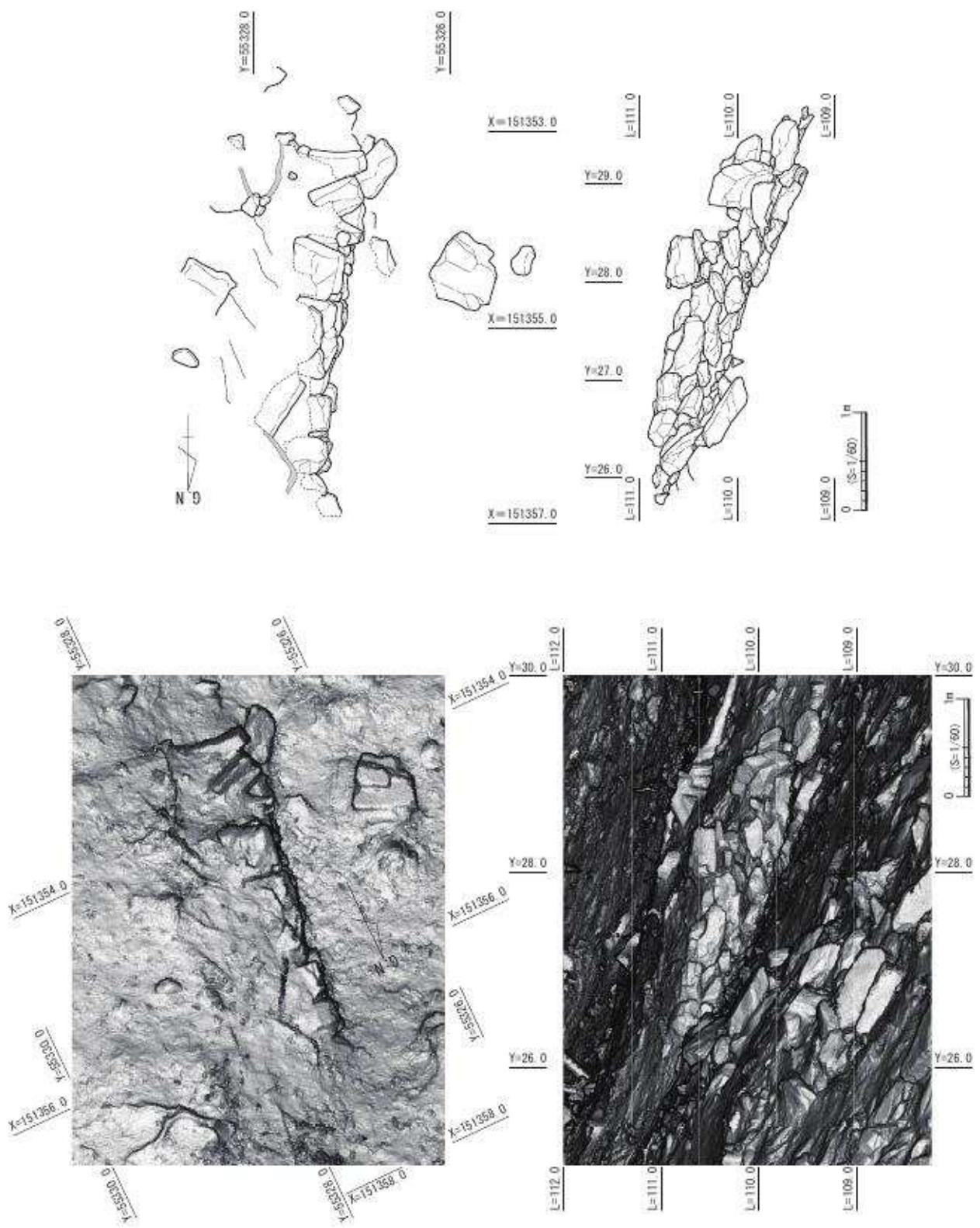
通路状に幅5m程の空間が城壁に平行して認められ、北から南へと城壁同様に傾斜している。その上部（山側）は斜面地ではあるが、やや緩やかに見える場所もある。



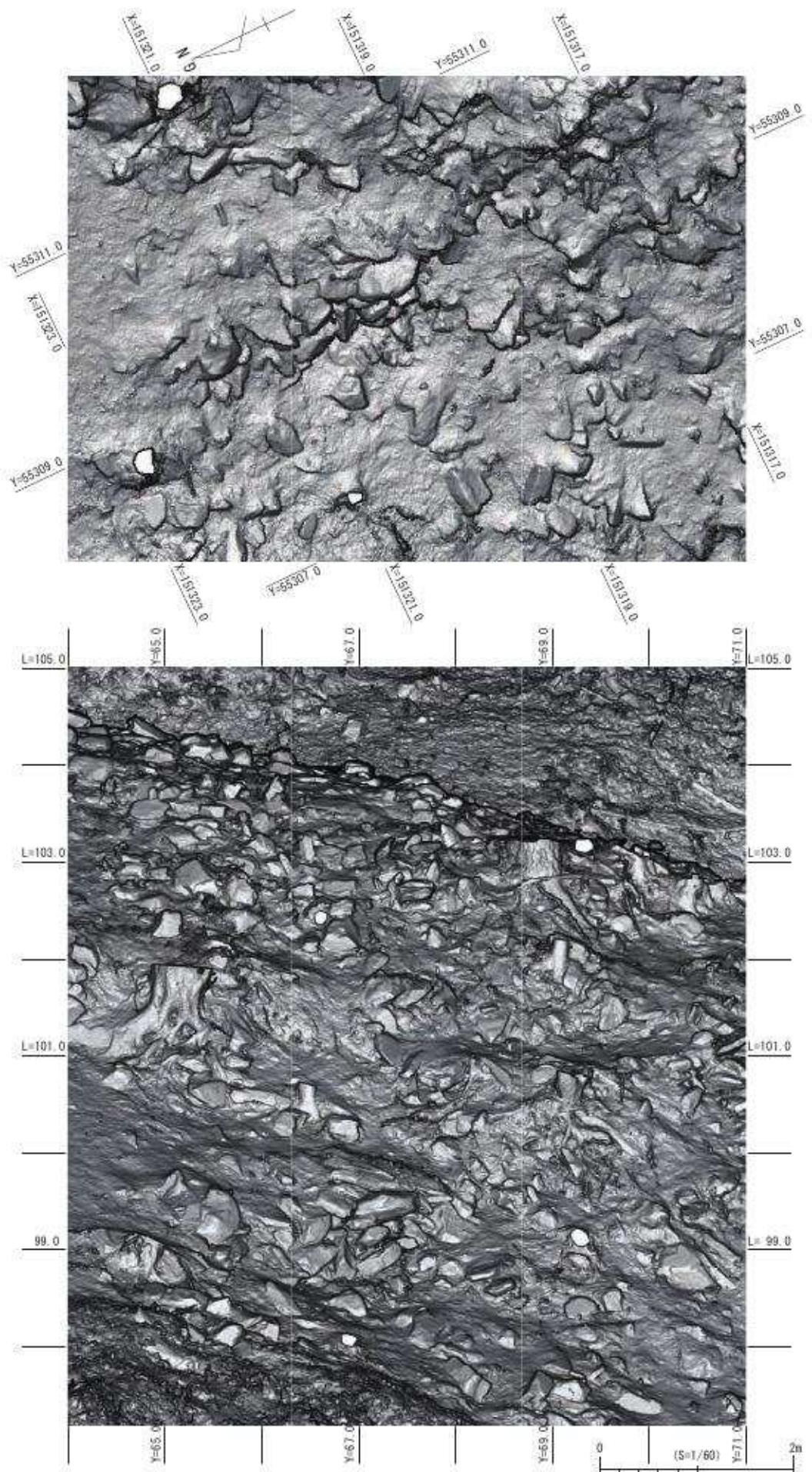
第27図 屋嶋城跡浦生地区の城門推定地平面陰影図 (S = 1 / 150)



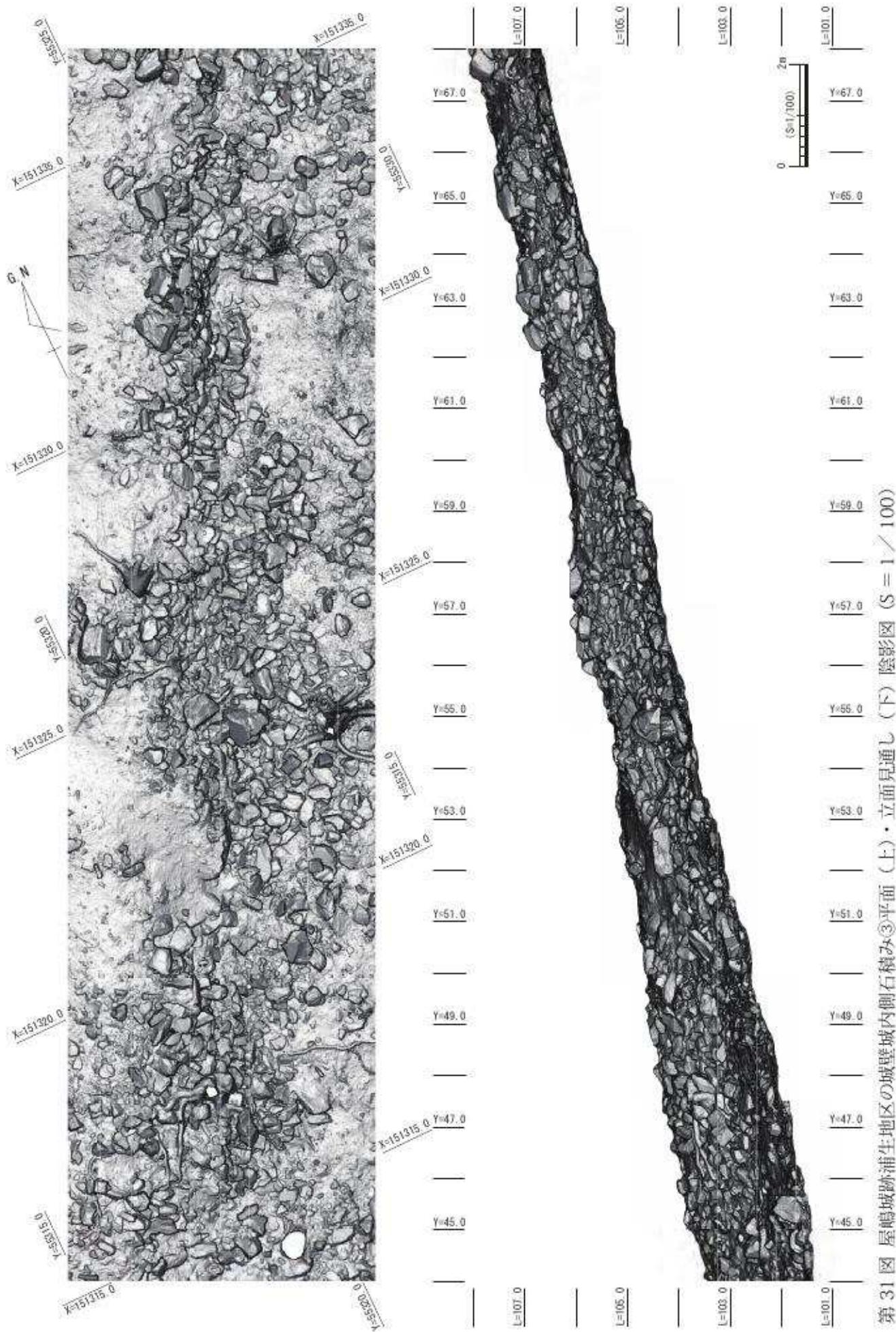
第28図 屋鳴城跡浦生地区の城壁立面見通し陰影図 ( $S = 1 / 150$ )

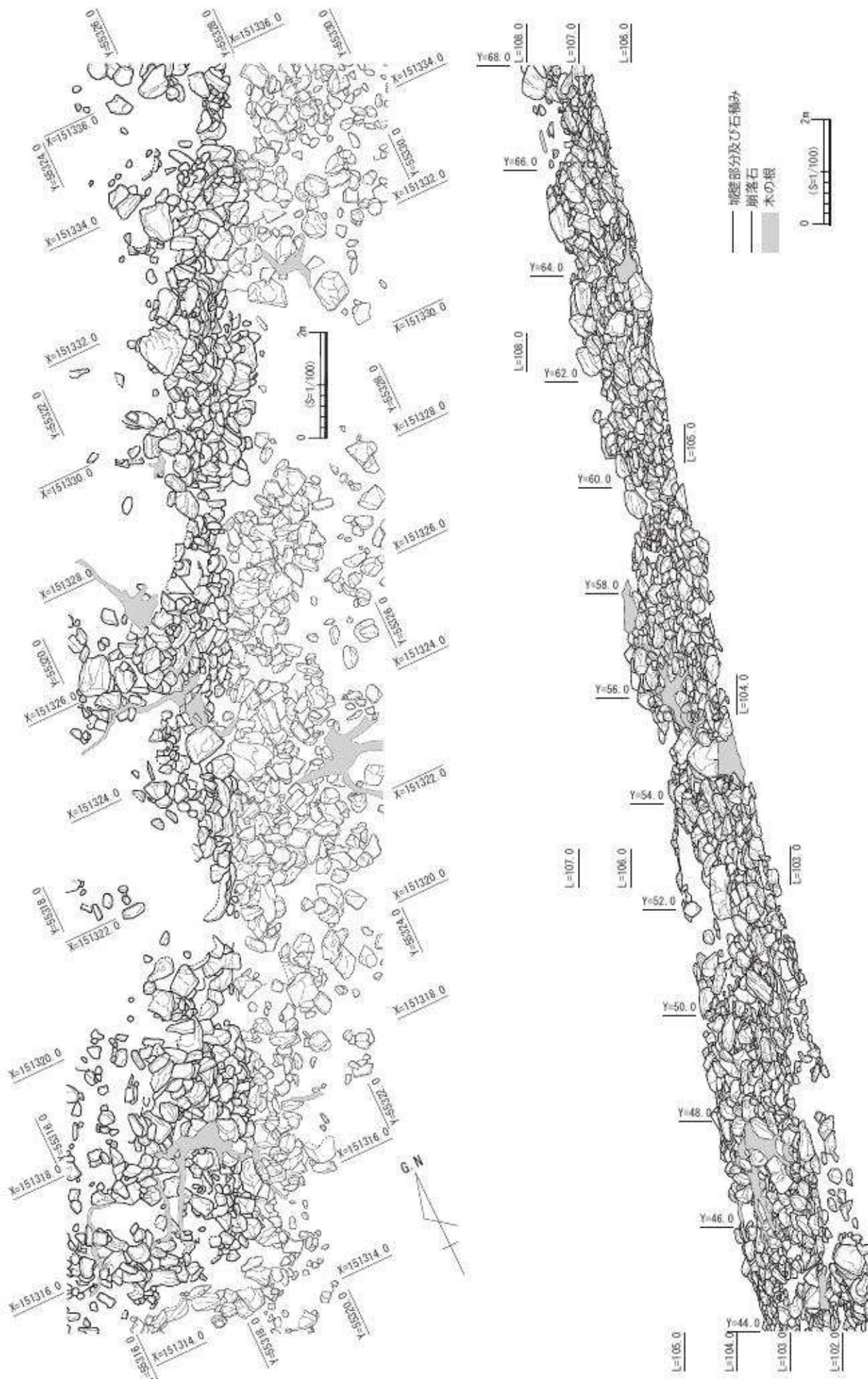


第29図 屋島城跡浦生地区の城壁城外側石積み①平面（上）・立面見通し（下）陰影図及び平面図・立面図（S = 1 / 60）

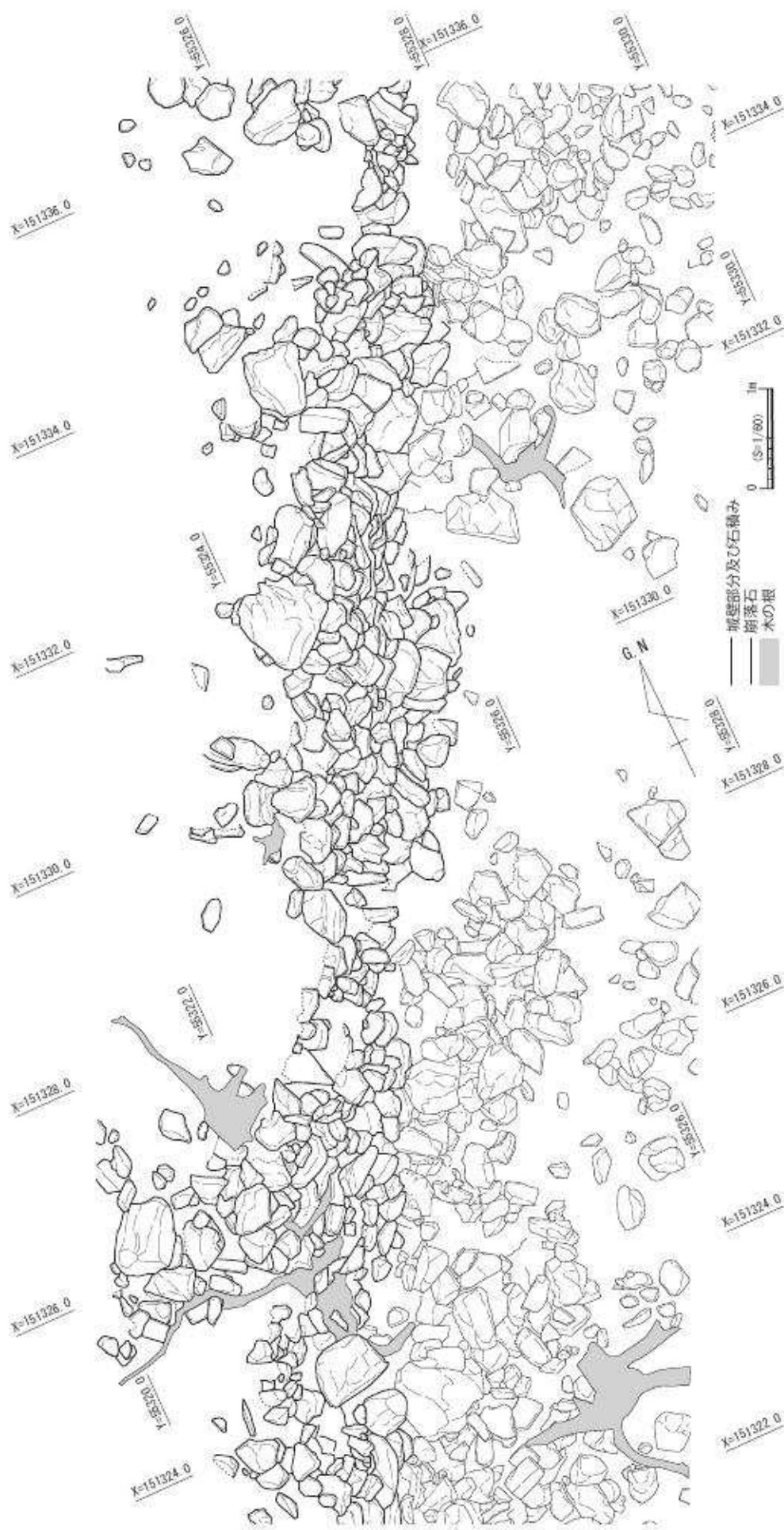


第30図 屋嶋城跡浦生地区の城壁城外側石積み②平面（上）・立面見通し（下）陰影図 ( $S = 1/60$ )

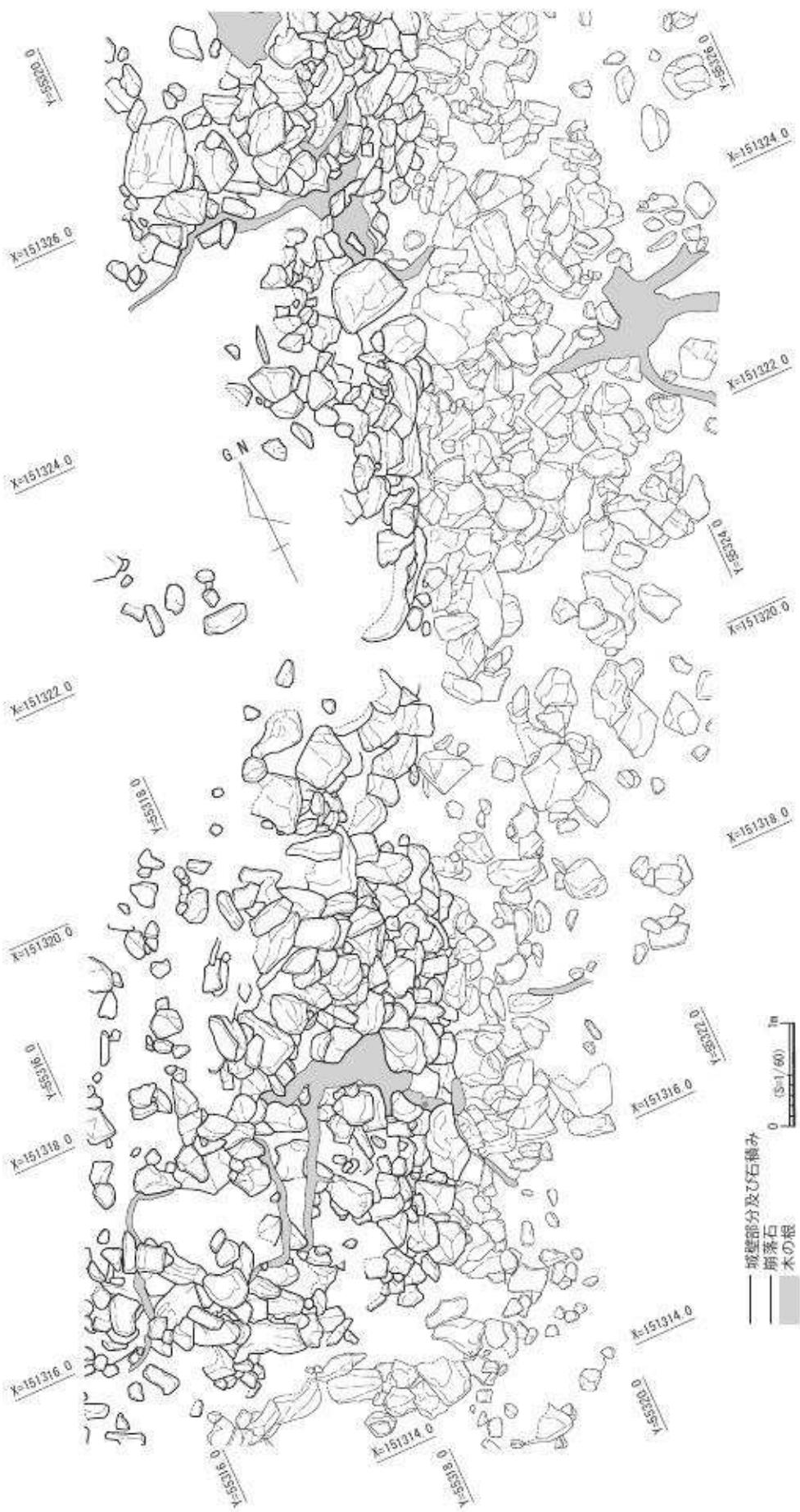
第31図 屋鳴城跡・浦生地区の城壁城内側石積み③平面（上）・立面見通し（下）陰影図 ( $S = 1 / 100$ )



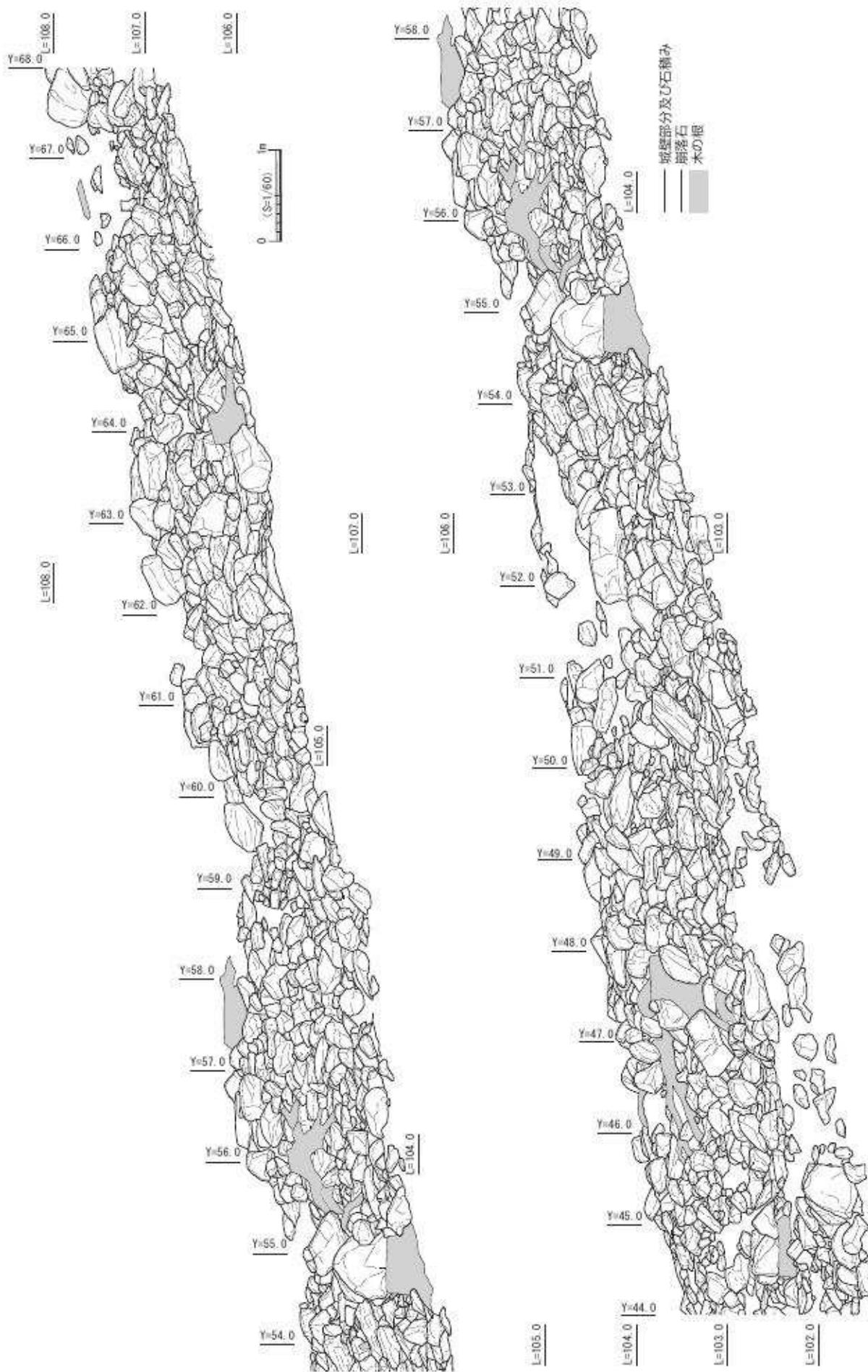
第32図 星嶋城跡浦生地区の城壁城内側石積み③平面図及び立面見通し図 ( $S = 1 / 100$ )



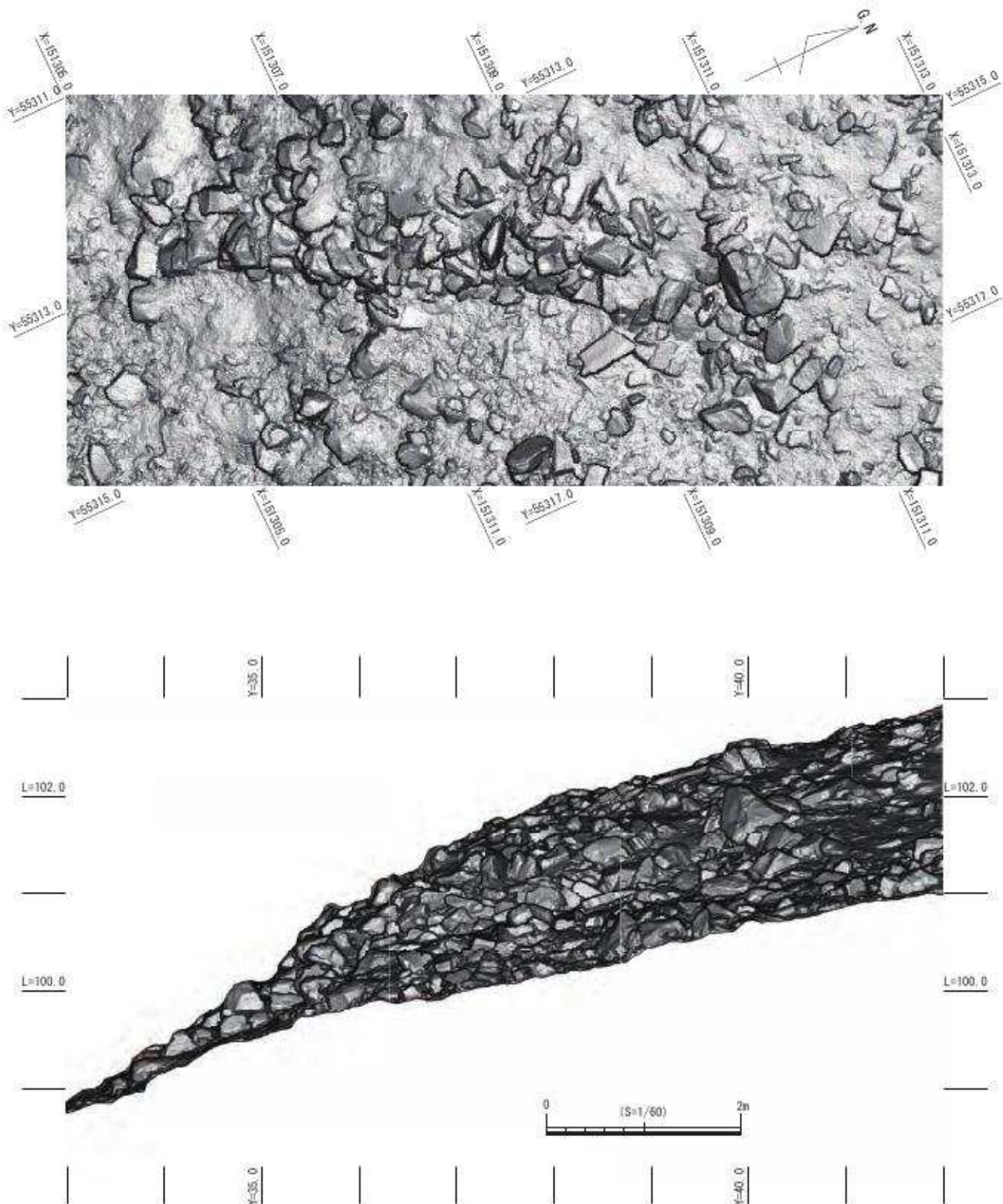
第33図 屋島城跡林浦生地区の城壁城内側石積み③詳細平面図① (S = 1 / 60)



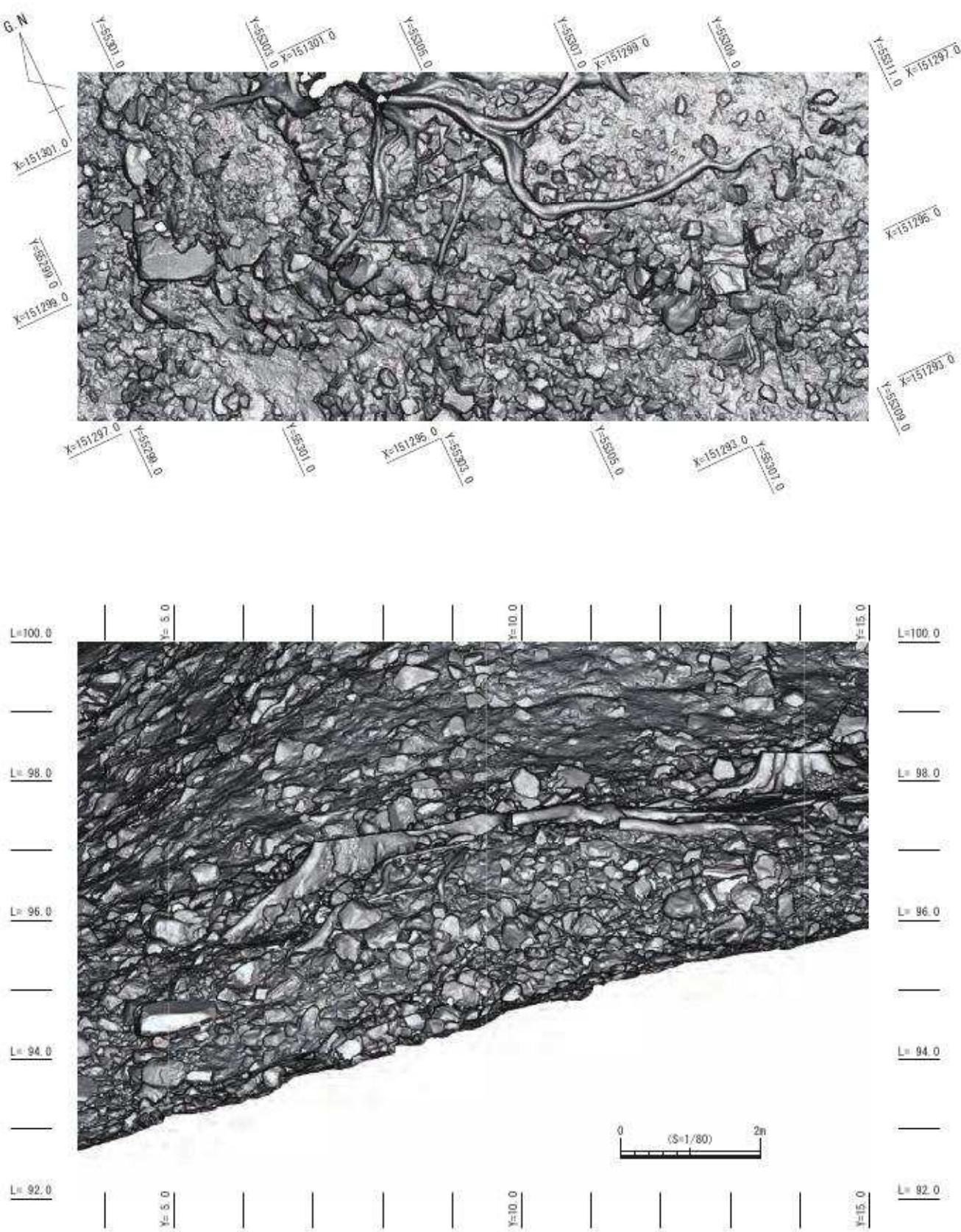
第34図 屋嶋城跡浦生地区の城壁内側石積み③詳細平面図② (S = 1 / 60)

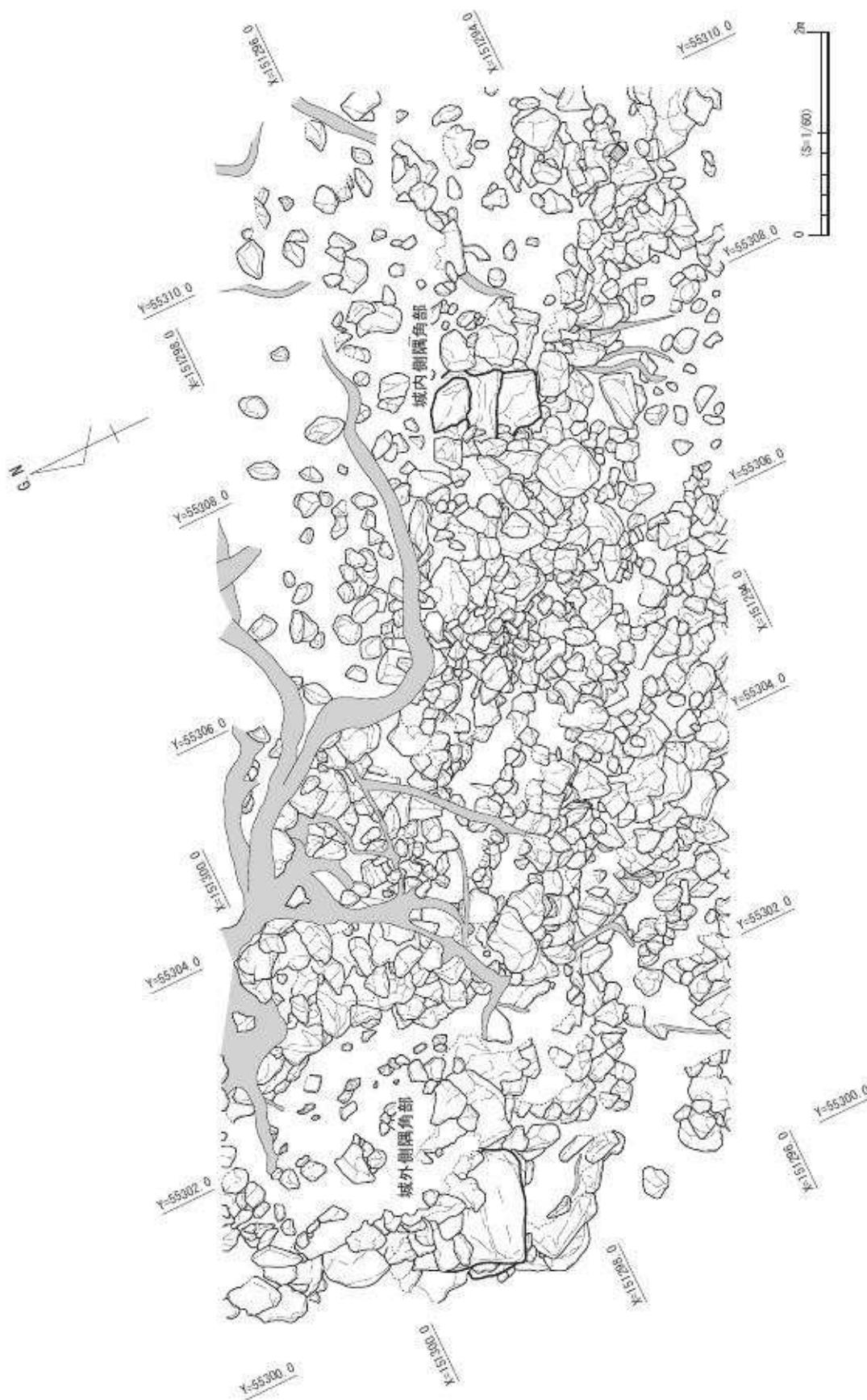


第35図 屋島城跡浦生地区の城壁城内側石積み③詳細立面見通し図 (S = 1 / 60)

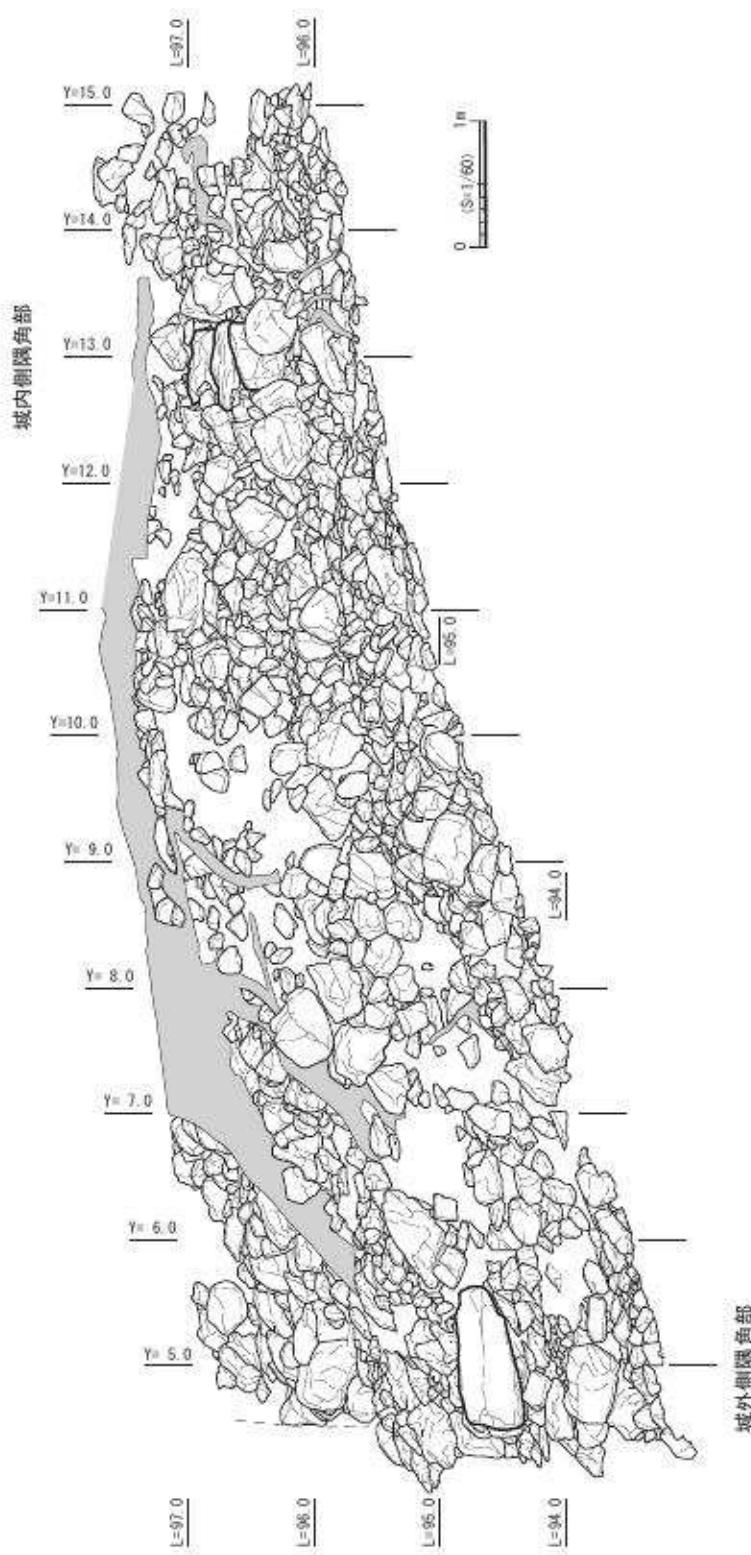


第36図 屋嶋城跡浦生地区の城壁城内側石積み④平面（上）・立面見通し（下）陰影図 ( $S = 1 / 60$ )

第37図 屋島城跡浦生地区の城門推定地石積み⑤平面（上）・立面見通し（下）陰影図 ( $S = 1 / 80$ )



第38図 屋嶋城跡浦生地区の城門推定地石積み⑤平面図 ( $S = 1 / 60$ )

第39図 屋島城跡浦生地区の城門推定地石積み⑤立面見通し図 ( $S = 1/60$ )

## 2) 城壁構造の調査：平成21・22年度

### a) 平成21年度（第40～42図）

#### ①調査の目的と方法

調査は、石塁内側において昭和55年度に調査を実施した、最も城内側の石積みが残っている箇所を対象として実施した。具体的には、55年度の調査トレンチと重複させたトレンチを設定し、当時の調査の検証を兼ねるとともに、石塁と呼ばれる城壁構造を把握するとともに、城内側の堆積状況、土器の包蔵状況等の再確認を目的として実施した。

#### ②調査成果

##### あ) 基本層序（第40・42図）

堆積状況は、上層から表土（第1層：昭和55年度I層）流土（第2～18層：55年度II層とIII層一部）、盛土（第25～33層：55年度V・VI層）、地山層（第34層：55年度第IV層）に大別することができる。

流土層は2分することができ、一層は、地山直上に堆積する崩落土で、安山岩を多量に含む砂質土（第18層）でこの層と地山との間で須恵器が出土した。もう一層は、この上位に間層（第10、13～17層）を挟み堆積し、山側斜面と石塁との間の窪みを充填する層で、中世土器を包含している。

石塁の基盤には盛土が認められ、小さな安山岩を含む砂及び礫混じりのシルト層で、比較的細かな層状に積み上げられている。ただし、この盛土はその後の25、29年度の調査で確認されているものよりもかなり分厚い堆積土として認識できた。石積みの崩落の可能性から根石との関係が明確にできていないため、判断が難しいが、一部は石積みの根固めの埋め戻し土である可能性も想定しておきたい。ただ、25、29年度の調査でも、同様な土が造成土として認められており、基本的には同様な構造であった可能性がある。また、城壁は北から南へとかなり傾斜しており、谷側（城門推定地）に向かって階段状に根石が下っていくものと考えられ、段差が生じるような箇所で、当該箇所のような盛土のように丁寧な手当が行われている可能性も想定できるであろう。

地山層は山側の斜面に向かって成形されたように水平を意識した傾斜となり、石塁側では地形に沿って下降している。山側は急傾斜となっており、一定程度の地形の切岸状に成形が行われているものと考えられる。

### い) 遺構（第40～42図）

#### ●城壁遺構

当該箇所は、石積みの遺存状況が最も良い。幅50cm程の石材が最も大きく、多くは40cm未満の比較的小ぶりな石材を用いて石積みがなされている。石材の多くは、最大幅を横方向に用いており、小ぶりな石材の使用とともに、石積み基本型（高松市教育委員会2016）を確認でき、古代山城に特徴的な石積みのあり方を確認できる。また、石積みのラインは25、29年度調査で確認された埋没していた石積みとともに一直線上に位置しており、本来の城壁の位置を比較的留めているものと考えられる。

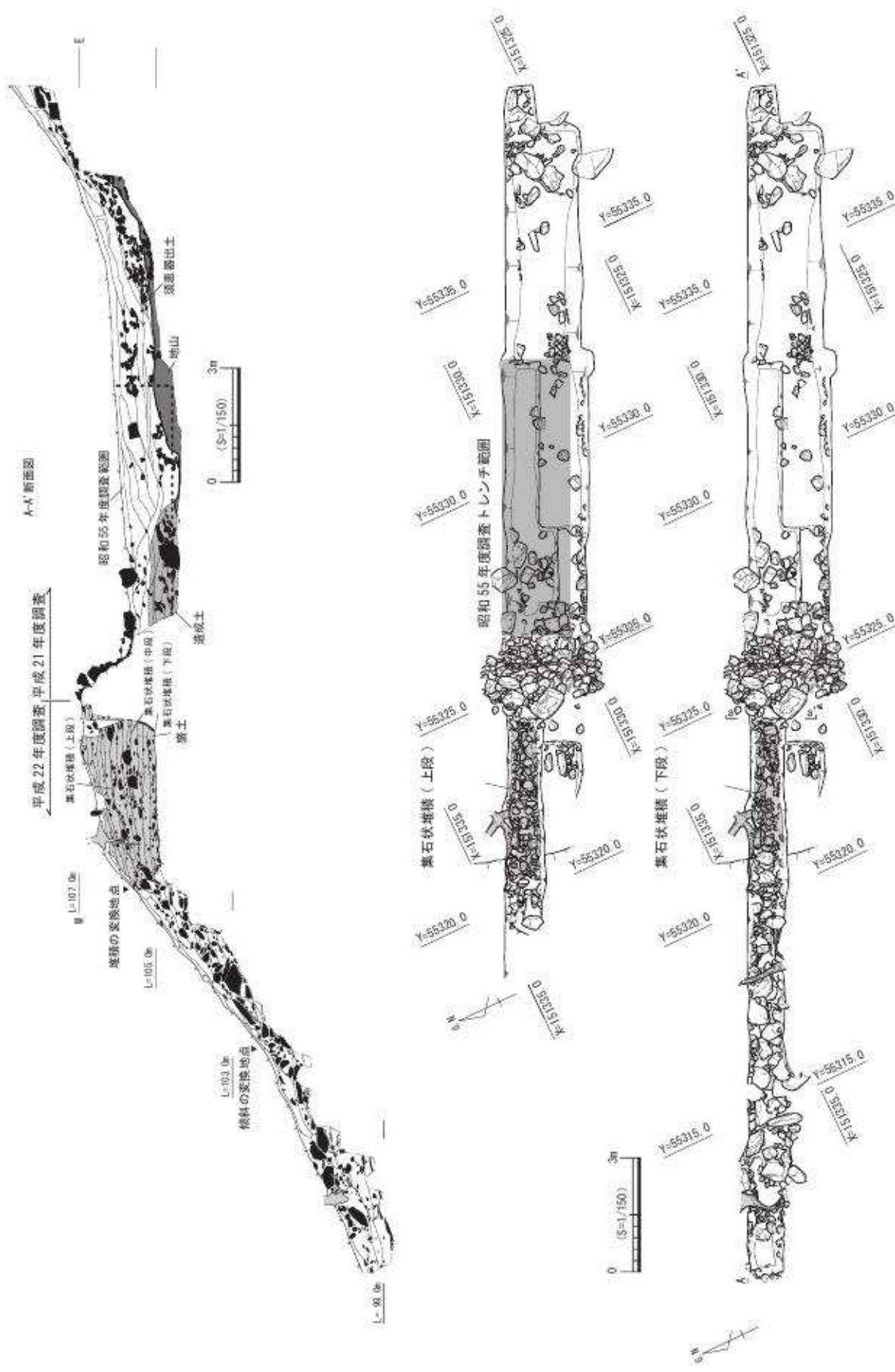
ただ、一見すると残存状況は良く見えるものの、実際には両側の崩落により変形をしている。部分的な見え方もあるので、即断はできないが、細かな石材を用いて隙間を埋めるように見える点は、古代山城の石積みとしてはやや違和感があり、後世の改変等を想定しておく必要もあるかもしれない。

既述のとおり、根石周辺は検出していないため、詳細な構造については明らかにできていない。埋没していた範囲の石積みは城内側へと突出しており、下半は控え積みのような状況で、上半の勾配は約75°で、勾配が大きく異なる。25、29年度に検出した埋没石積みはいずれも変形はしながらも垂直に近い勾配を維持していたことからも、異なる積み方若しくは変形の仕方であることは明らかであろう。どのような経緯によるものかは即断できないが、かなり変容していると言えるであろう。

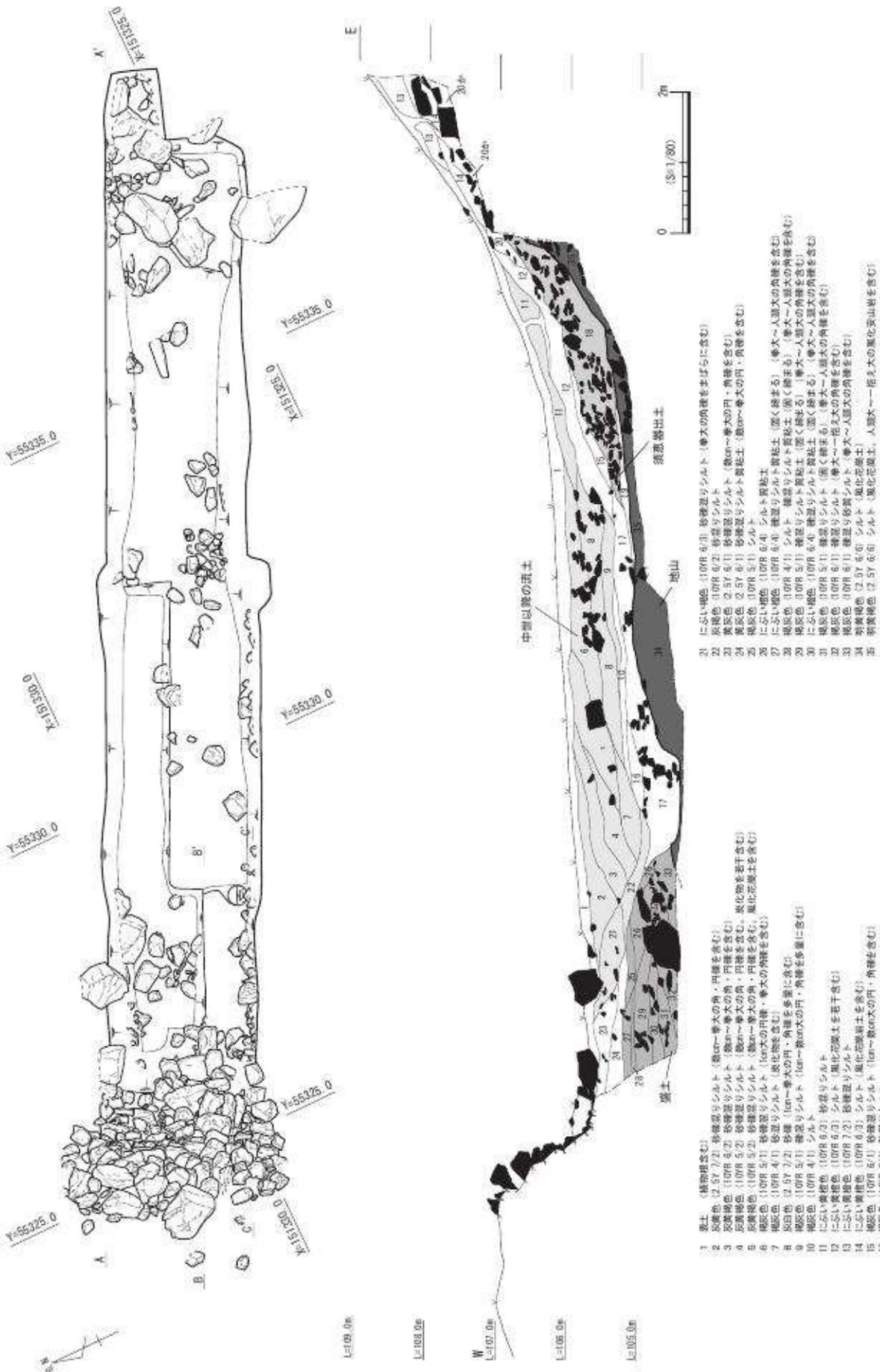
また、根石部分は石積みに向かって右半分が造成土によって構成されており、谷側（城門側）に向かって、階段状に根石が低くなっている可能性が想定される。造成を行っているものの、面的に平坦面を造成するのではなく、階段状に平場を造成した可能性が想定される。

#### ●溝状遺構

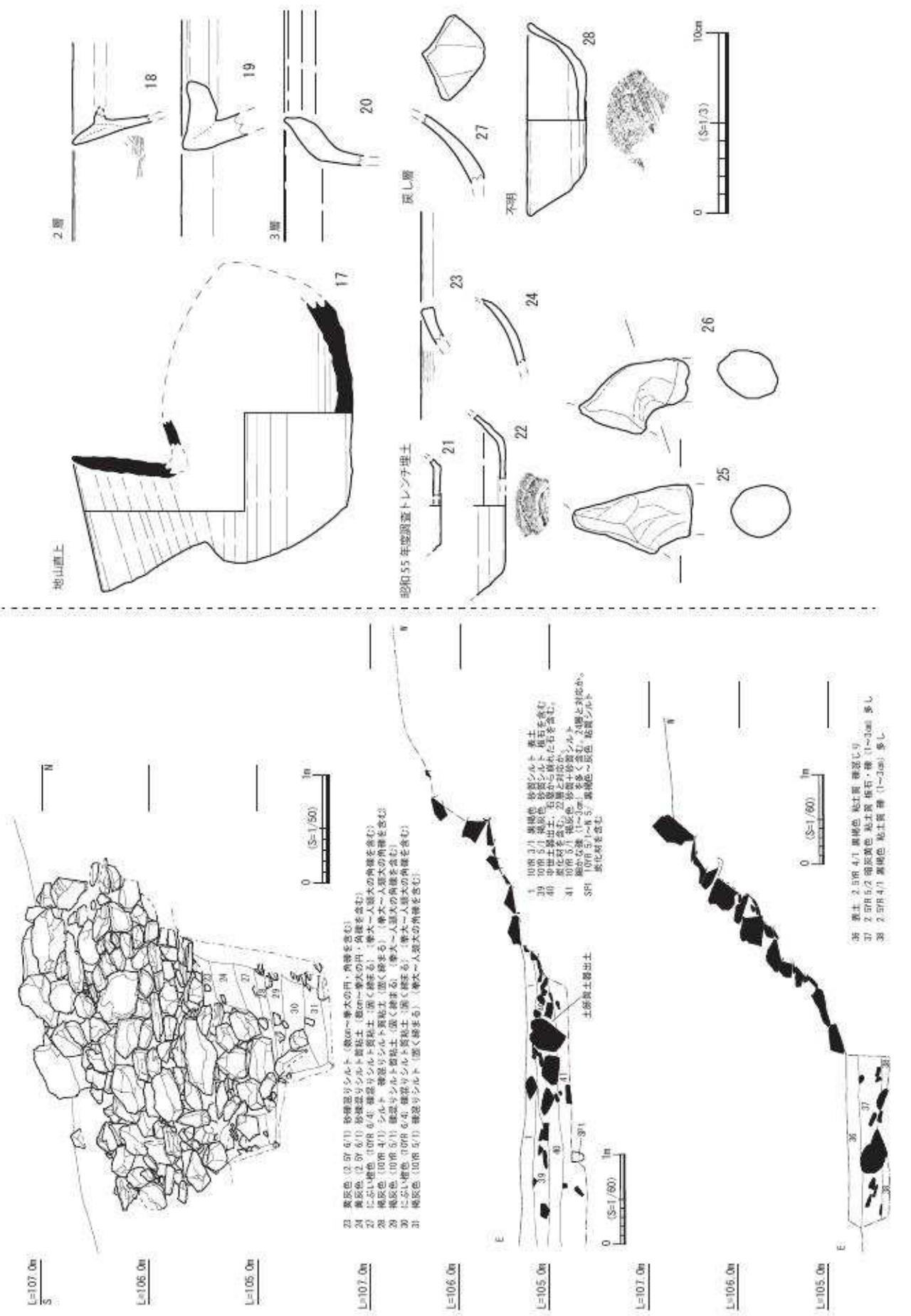
水平堆積した地山層と盛土層との間に昭和55年度の調査でも確認している幅約1.5m、深度0.3～0.4mの溝状を呈する遺構を確認した。位置関係から排水溝や通路等の可能性が考えられたが、検出範囲が狭小なため特定はできなかった。ただ、いずれにしても、往時の地山面が現在の地表面から約1.6m下であることが判明し、後世の堆積作用によって大規模に遺構が埋積してしまったことが明らかとなった。現存する石積みであっても、1.5m程の高さがあり、さらに、



第 40 図 屋島城跡浦生地区 H 21・22 トレンチ平面図・断面図 (S = 1 / 150)



第41図 尾崎城跡浦生地区H21-Trench平面図・断面図 (S = 1 / 80)



第42図 屋島城跡浦生地区H21トレンチ立面図・断面図 (S = 1 / 50・1 / 60)・出土遺物 (S = 1 / 3)

同等の深さがあることから、溝状遺構の底からすれば石積み天端との間に3mを超える高低差があったことになる。

### ③そのほか

トレンチ南西隅において、石積みらしき石材を検出しているが、大半がトレンチ北壁でみられる盛土層を切り込んでいること、現状の石墨が南側で大きく崩れていることから判断すると、石墨の一部が崩落した状態で埋没したものと推定される。

#### う) 出土遺物（第4-2図）

遺物は、地山層のほぼ直上で出土した須恵器平瓶があり、器形から7世紀後半のものと考えられる。最終埋没時の中世土器については土師器皿・鍋類の小片が多く、昭和55年度の調査結果と同様な状況となっている。

#### 【地山直上】

17は既述した地山直上から出土した須恵器の平瓶である。肩部の稜線は認められるが、やや弱く、7世紀後半頃と考えられる。底部外面は、ヘラ切りの後にナデによって調整しており、帯状に未調整部分が認められる。ヨコナデによって丁寧に整形する。灰白色を呈し、非常に精良な胎土である。

#### 【第2層】

18は土師質土器の足釜の口縁部である。口縁部の形状から佐藤分類のB類と考えられる。内面は横方向の刷毛目調整で整えている。色調は淡黄褐色で、白色砂粒を多量に含む。わずかに煤が付着している。13世紀後半頃のものと考えられる。

#### 【第3層】

19は土師器の上釜の口縁部片である。表面はナデ調整で仕上げる。口縁部を成形後、タガの部分は、粘土を折り曲げることで成形しているものと考えられる。色調は淡黄褐色を呈し、白色砂粒、茶色砂粒、雲母を多量に含む。20は土師質土器の土鍋の口縁部片である。口唇部をヨコナデによって整形している。淡橙褐色を呈し、白色砂粒、雲母を多量に含む。いずれも10世紀後半から11世紀前半と考えられる。

#### 【昭和55年度トレンチ埋土】

21は土師質土器の小皿で、いわゆるかわら投げに使用されるかわらけである。底部外面はナデ調整によって仕上げている。24は土師器の椀若しくは杯と考えられるものである。明橙褐色を呈し、白色砂粒を含むが、精良な胎土である。器面は磨滅しているが、外面は凹凸が認められる。22は土師器の杯である。ヨコ

ナデによる整形で、底部はヘラ切りである。淡茶褐色を呈する。23は弥生土器の甕の口縁部片と考えられる。内面は粗い刷毛目調整が認められる。外面は煤が付着し、胎土は白色砂粒と角閃石を多量に含む。25は土師質土器の足釜の脚部である。表面にはナデつけによる痕跡が明瞭に残る。白色砂粒を多量に含み、淡黄褐色を呈する。

#### 【表採・出土位置不明】

26は土師質土器の足釜の脚部である。明茶褐色を呈し、白色砂粒を多量に含む。

28は土師器の杯である。ナデ調整によって整形し、底部外面には板状圧痕が残る。淡黄灰褐色を呈し、27は龍泉窯系青磁の椀で、外面には鎬連弁が施されている。小片のため詳細は不明であるが、II類であれば、13世紀前半である。

#### ③小結

昭和55年度の調査時には、地山面まで確認されていたものの、城内側の平坦面までは調査が及んでいなかった。今回の調査で、トレンチの掘削を地形の傾斜変化点まで実施することで、城壁と背面の斜面地の間に平坦面が存在することが確認でき、その地山直上から平瓶が出土した。また、城壁の内側の石積みが残存している状況から、明確な夾築（両壁式）構造であったこと、城内側の往時の姿は、現地形とかけ離れており、土砂がかなり埋積してしまっていることも明らかになった。同時に、現地表面に認められる城壁の石材の多くは、城内が土砂等で埋積した後に崩落したということも明確になった。

遺物は平瓶を除けば、基本的には埋積した土中からの出土であるが、出土遺物は、弥生時代後期後半、7世紀後半、10世紀後半から11世紀前半、13世紀前後、近世以降のものが認められ、当該地周辺の土地利用時期は複数ある。特に、平瓶が地山面から出土したこと、それ以降の遺物はそれよりも上位層から出土することから、今回確認した城内側の構造が機能していた時期は7世紀後半以降ということが明らかとなつた。これは石墨と呼ばれてきた城壁遺構が当該期に構築されたことを裏付けるものである。加えて、次に注目されるのが、かなり埋積した段階にあたる、13世紀前半から14世紀にかけての段階である。利用目的は不明であるが、当該地に何等かの形で再利用されており、特に煮沸具・中国陶磁器が持ち込まれている点は注目される。

## b) 平成22年度（第40・43・44図）

### ①調査の目的と方法

22年度の調査では、21年度のトレンチを、城壁を横断して、城外側へと延長させ、城壁構造並びに城外側の構造（石積みの有無）等を把握することを目的として実施した。

### ②調査成果

#### あ) 基本層序（第43図）

表土（A層）を取り除く、基本的には城壁天端以下は城壁の盛土部分で、16～20cm程度の層状に盛土（D層）が確認できる。城外側は城壁が崩落して崩れた土（B、C層の一部）の下に確認できたC-10～14層は水平堆積をしており、城壁の盛土の可能性がある。

#### い) 遺構（第43・44図）

現状では、城外側法面及び天端については、石を築く箇所は認められず土を基調とした表層となっている。壁面の崩落が考えられる外側の法面の角度は40°前後、天端の西端から約4.5mの地点でさらに緩斜面となり、この裾部で24°前後となる。城壁天端の調査の結果、城壁部分は既述のとおり、安山岩を多量に含むシルト質細砂や粘土による層状の盛土により構築されていることが明らかとなった。下方につれ安山岩が目立つようになり、平面的には3面において石材が層状に認められた。

城外側の法面の掘削においては、城壁外壁の遺存状況は明確にならなかった。堆積状況については、天端肩部で変化し水平堆積が見られなくなり、表土及び流土の下に石を基調とする土石の堆積を確認したが、石垣状に築かれたものは確認できなかった。また、現況の裾部に相当する傾斜の変換地点では大振りの安山岩が多数認められるが、外壁の基底に相当しうるものではない点も明らかで、さらに埋没しているか、崩れてしまった可能性がある。ただ、その中で、石積み想定箇所やその外側に大型の石材が集積している点は重要で、この城壁が障壁となって山側からのこれらの石材の供給は想定できないことから、これらの石材は明らかに城外側の石積みを構築していた石材と言える。そのため、遺構としては遺存状況は良くないが、城壁内部の堆積範囲、集積する大型の石材の範囲から城壁の規模はおおむね想定することができる。同時に、これらの石材の状況から、当時の城壁は石積みによる夾築構造であったことは明らかであろう。

### う) 出土遺物（第44図）

掘削に伴う出土遺物は、城外法面の流土層から中世土器が少量あったのみで、図化できるものはなかった。城門推定地とされる箇所で表採されたものが、29である。土師質土器の足釜の口縁部の破片である。口縁部はヨコナデによって仕上げる。淡灰茶褐色を呈する。佐藤分類のB類で、13世紀後半のものと考えられる。

城壁外法面トレンチからは土師器の杯（30・31）の破片が出土した。2点ともヨコナデによって整形し、器壁が薄い。淡黄灰色を呈し、茶褐色砂粒、白色砂粒を含む。底部にはヘラ切り痕跡が確認できない。

出土遺物は13世紀後半の年代である。石積み石材崩落後の埋没年代を示す可能性がある。

### ③小結

平成21、22年度の調査により、少なくとも屋嶋城跡と同時期の城壁遺構であることは明らかになり、その内部構造も城門地区で認められた土石を用いたもので、構造的に類似性が認められる。ただし、山腹という立地から、盛土に用いられる土は花崗岩の風化土をベースとし、安山岩を含む上で、いわゆる崩積土起源のものである点は重要である。

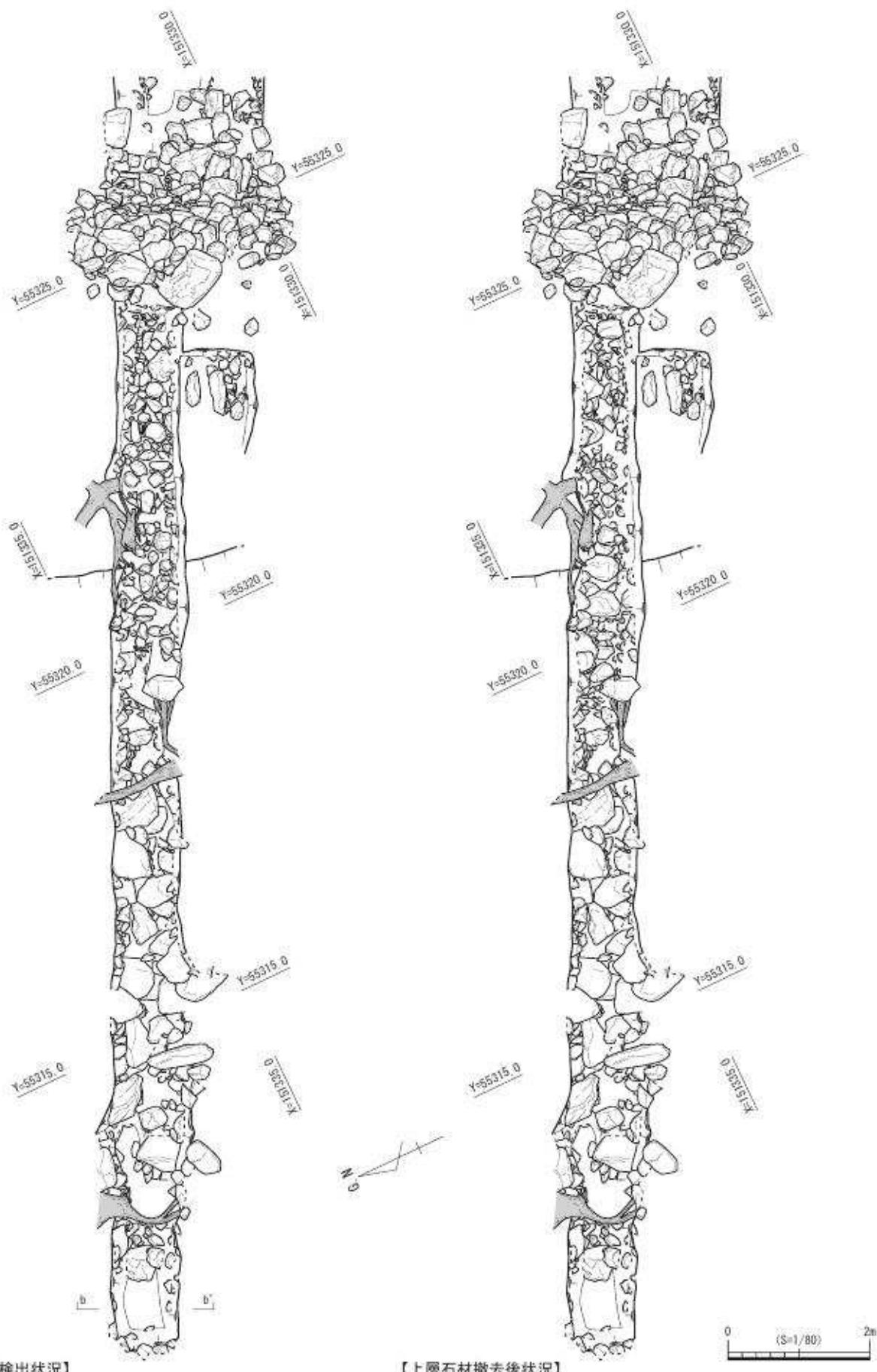
以上の成果の一方で、これまで、遺構の通称として「浦生の石壁」が用いられてきたが、構造的に石壁と言葉難くなってしまった。本来的には、この遺構により屋嶋城跡として国指定史跡を受けた経緯をもつが、関野氏が想定した抱谷式の城壁構造となる可能性は想定しづらいことから、屋嶋城跡の一部と位置づけられるものの、区別して、22年度以降、浦生地区として呼称することとなった。

## 3) 城内の緩斜面部の調査

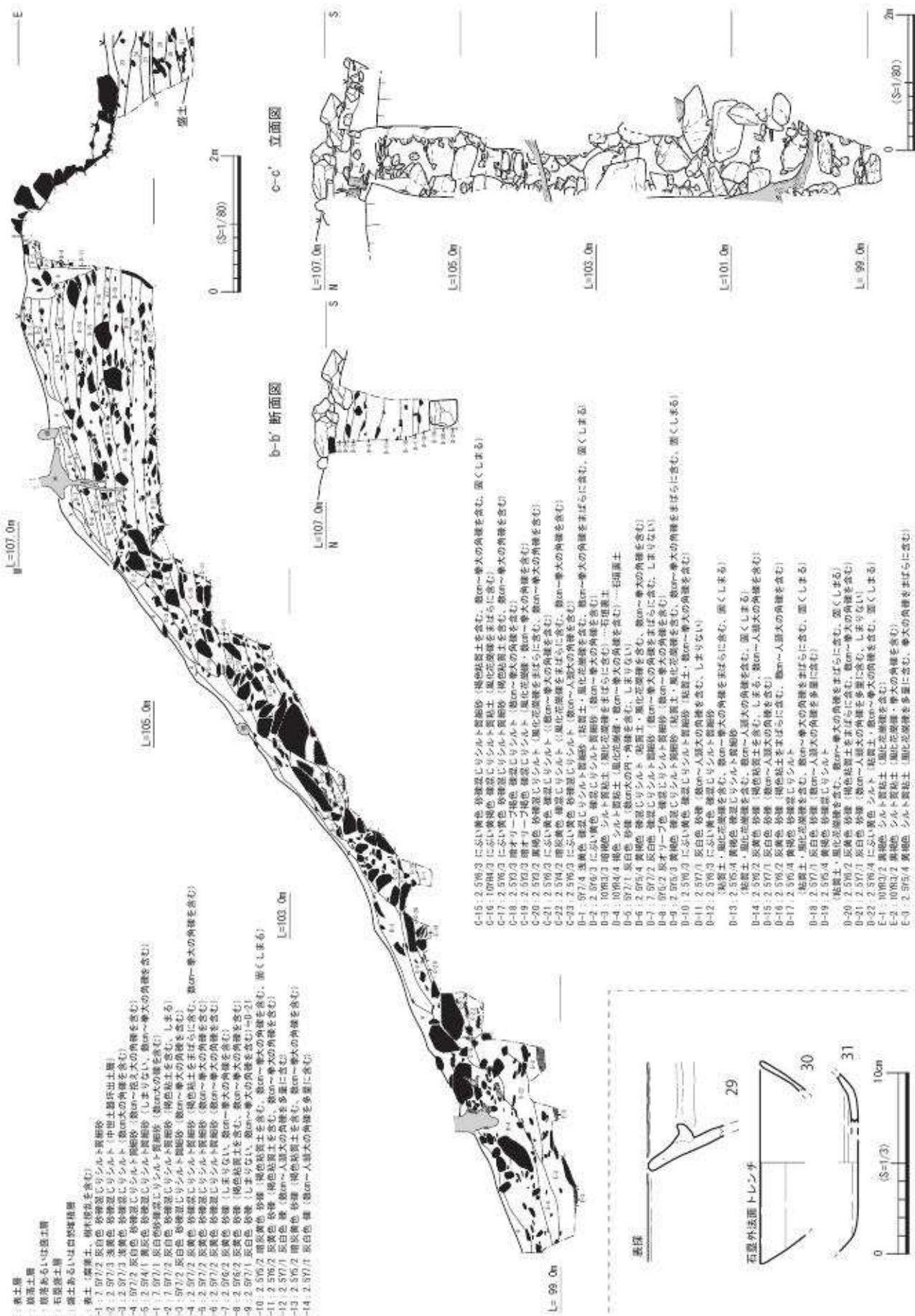
### a) 平成23年度（第45図）

#### ①調査の目的と方法

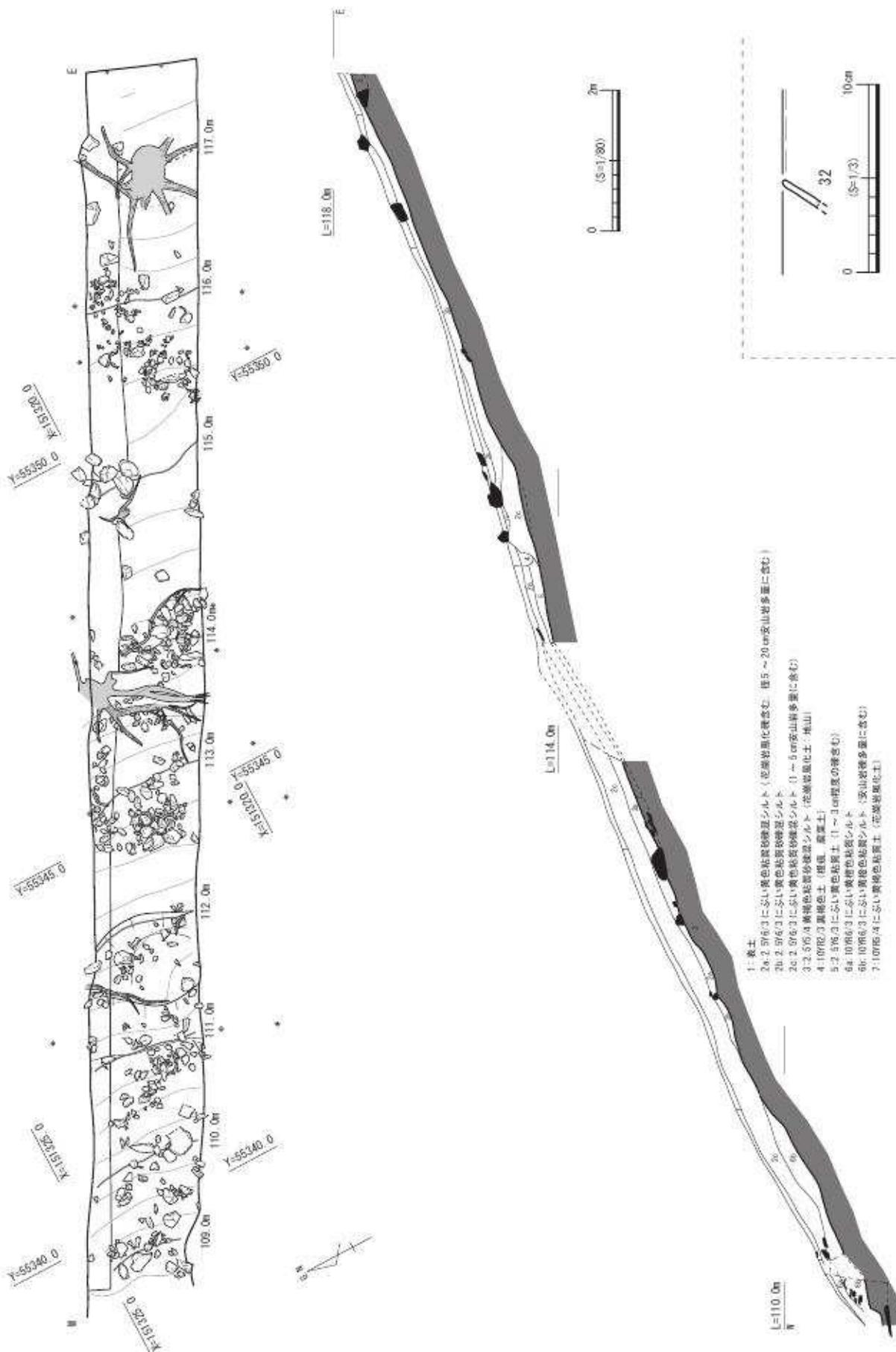
トレンチ設定箇所は、21年度トレンチの山側でわずかに緩斜面となっている箇所である。21年度の調査では、城壁背面（城内側）の斜面地を削平した状況が確認でき、出土遺物が削平した面の上位に当たる斜面地に由来する可能性が想定されていた。そのため、城壁背面の断面構造についての資料を蓄積するとともに、城内側における遺構の所在確認を行うことを目的として、21、22年度の調査トレンチを城内側に延長する位置関係でトレンチを設定し、調査を実施した。調査はすべて人力により実施し、調査後は養生し、埋



第43図 屋嶋城跡浦生地区H 22 トレンチ平面図 ( $S = 1 / 80$ )



第44図 星嶋城跡浦生地区H22トレンチ断面図・立面図 (S = 1 / 80)・出土遺物 (S = 1 / 3)



第45図 星嶋城跡発生地区H23 ドレンチ断面図・立面図 (S = 1 / 80)・出土遺物 (S = 1 / 3)

め戻した。

## ②調査成果

### あ) 基本層序（第45図）

表土（第1層）の下に、砂礫混じりの粘質のあるシルト層（第2層）が堆積しており、崩落石と考えられる安山岩を含んでいる。それらの含有状況で分層ができる。その下位にあたる黄褐色粘質土（花崗岩風化土：第3層）があり、地山面と考えられる。安山岩を含む場合（第6・7層）があり、いわゆる崩積土と呼ばれる屋島の斜面を形成している土層である。基本的には、この崩積土が地盤となって遺構が形成されていると考えられる。

### い) 遺構（第45図）

全体的に緩斜面を呈するものの、平坦面を造成するような行為は認められず、遺構も確認できなかった。また、地山面までに、大小様々な躰（安山岩）を含む堆積層が確認でき、層の厚みが80cmとなる箇所もあった。崩積土の上層は城壁内部と同様に、山頂部からの大量の土砂によって斜面部もある程度覆われていることが明らかとなった。

地山面の直上では、わずかに炭化材を確認した。これは城門地区でも認められたもので、築城時の伐採などに伴う野焼きを示す可能性も想定できるが、時期は不明である。

### う) 出土遺物（第45図）

古代以降と考えられる土師器の杯が1点出土したもの、21年度調査で確認されたようにまとまって遺物が出土する状況は認められなかった。

32は土師器の杯の口縁部の小片である。

## ③小結

今回の城壁背面の斜面部の調査では、人工的な造成面などは確認できなかった。また、土砂が比較的厚く堆積していることも判明した。既述したレーザー測量による平面図では明確な平坦面は見い出せない。それよりも、城内側からみた場合、城壁と当該地の間の空間には明確な段差があり、当時の構造を反映している可能性が想定される。当該地の調査を行う場合、面的な調査が必要であり、今後の課題である。

## 4) 城門推定地の調査：平成24・25年度

### a) 平成24年度（第46～48図）

#### ①調査の目的と方法

多くの古代山城で城門が確認された箇所の特徴と類似した城壁内の窪地が、昭和55年度の調査時に確認されていた石積みの南側で認められ、当該地周辺に城門が所在する可能性が以前より指摘されていた。そのため、55年度に確認されていた石積みが分断されている箇所周辺を城門の北側の隅角部周辺と想定して、その石積みに対して直交するようにトレーナーを設定し、城門に伴う門道部側壁の石積みの確認を目指して実施した。調査はすべて人力により実施し、調査後は養生し、埋め戻した。

## ②調査成果

### あ) 基本層序（第48図）

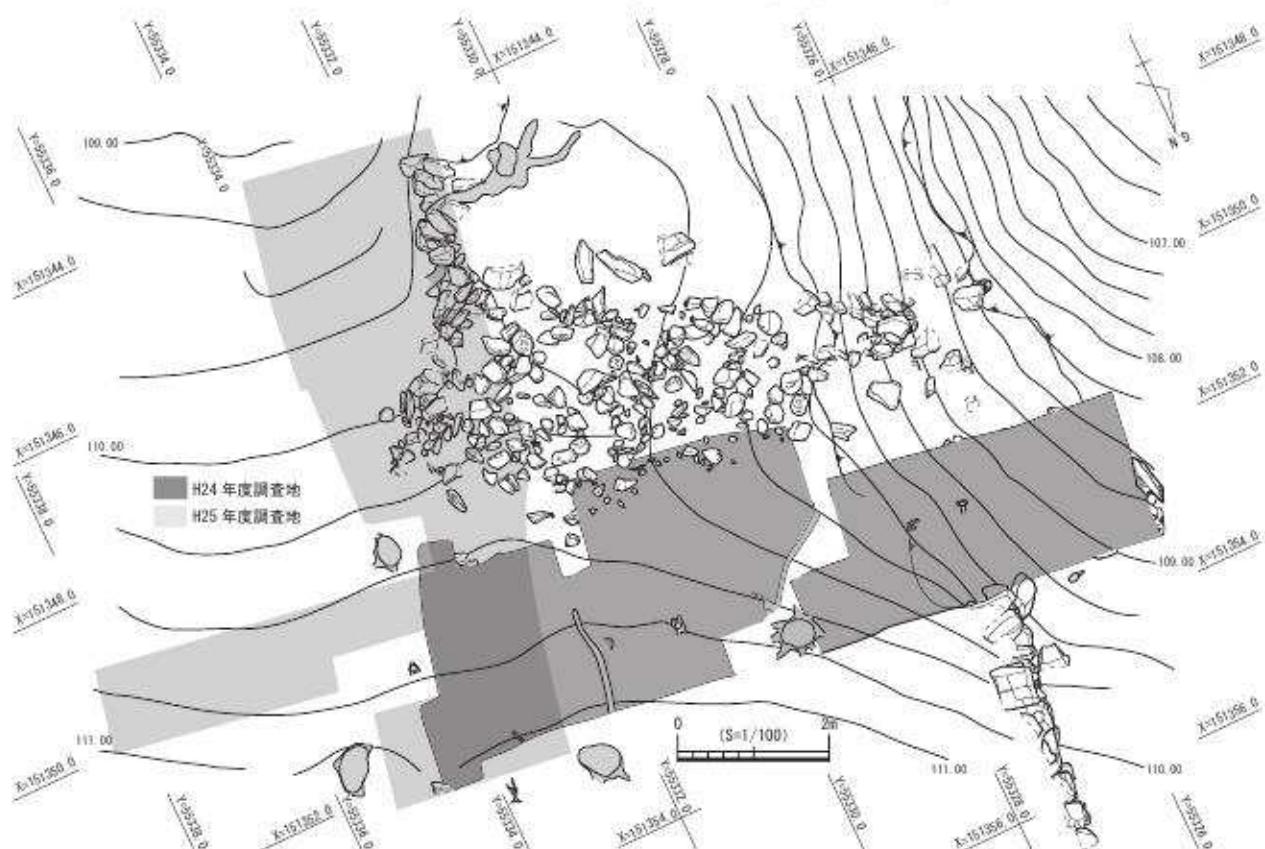
腐葉土（第1層）の下に、表土（第1層）があり、さらにその下位に黄褐色のシルト質粘質土（第3層）が比較的厚く堆積している。特に、第3a層は、5～10cm程度の安山岩を含み、集石を覆うように水平に堆積しており、石積みの背面の盛土を構成している。ただし、細かな層状盛土ではない。また、城内側の石積みが途切れる場所の東側（山側）では、さらに城内側へと延びるように見え、後述する城内側の石積みとの関係が不明確であるが、城壁の構造などについて考える上では今後重要な土と言える。さらにその下位に集積された安山岩（幅25～30cm程度）の層が確認でき、城壁の構築層（第4層）と考えられる。

城内側と城外側で地山層と考えられるにぶい黄色若しくは黄褐色のシルト質粘質土（第6・10層）を確認した。双方の標高差が約2.1mあり、城外側に向かって地山は下っており、第4層は城外側に向かって厚みを増す（深くなる）と考えられる。

### い) 遺構（第47図）

門道を明確に示す石積み、遺構は確認できなかった。昭和55年度に確認された石積みの南側は一部崩落石を除去することで、根石と思われる石がわずかに確認できたものの、石積みが残存する状況は確認できず、崩落が著しい。ただし、大型の石材が城外側に認められ、これらが、石積みを構成していたものと考えられる。また、調査の目的であった、この石積みに対して垂直方向に延びる門道側壁を構成する石積みや痕跡としての列石などは確認できなかった。

ただ、これに対して、城外側の石積みに平行する城内側の新たな石積みを確認した。内外に残存する石積みの天端はほぼ同じ標高で、それぞれは城壁の内外を構成する石積みと考えられる。北側の石材はやや小ぶり

第46図 屋嶋城跡浦生地区H 24・25 トレンチ平面図 ( $S = 1 / 100$ )

りで、南に向かって石積みが高く（根石が深く）なるよう、次第に石も城外側と同様に40～60cm程度の大きさの石材となる。ただし、城内側の石積みは多くの古代山城の場合、城外側に比べて小ぶりになる傾向があり、当該石積みの石材も同様な傾向が認められ、城外側に比べるとやや小ぶりである。

24年度の調査区では、確認された石積みが南側の城壁に連続するか、門道を構成するかを判断できなかった。また、この石積みに挟まれた部分、すなわち城壁の内部を構成する部分は多くの石材が確認でき、人頭大の（20～30cm程度）の安山岩が非常に粗く集積されたような状況で充填されており、基本的に水平に設置したような状況であるが、石材の方向は一定の規則性は認められず、石積み部分と明らかに設置の意識に差異が認められる。

城壁の断割りは行わなかったため、この集積された石材がどの程度用いられているかは判断できないが、地上の傾斜から城外側は厚くなると考えられる。山上の城門地区の城壁構造（高松市教育委員会2016）と比較すると上記の3a層は盛土層に対応し、第4層は土石層に対応する可能性があり、重要な成果を得ることができた。当該地の調査で確認された石積みの石材と城壁内部の構築材と考えられる石材には、大きさに

明確な違いが認められ、石を使い分けている状況も確認することができた。

#### う) 出土遺物

図化できる遺物はないが、これらの遺構を覆っていた埋土は中世と考えられる土師質土器の小片を包含しており、この時期に埋没した可能性が高い。

#### ③小結

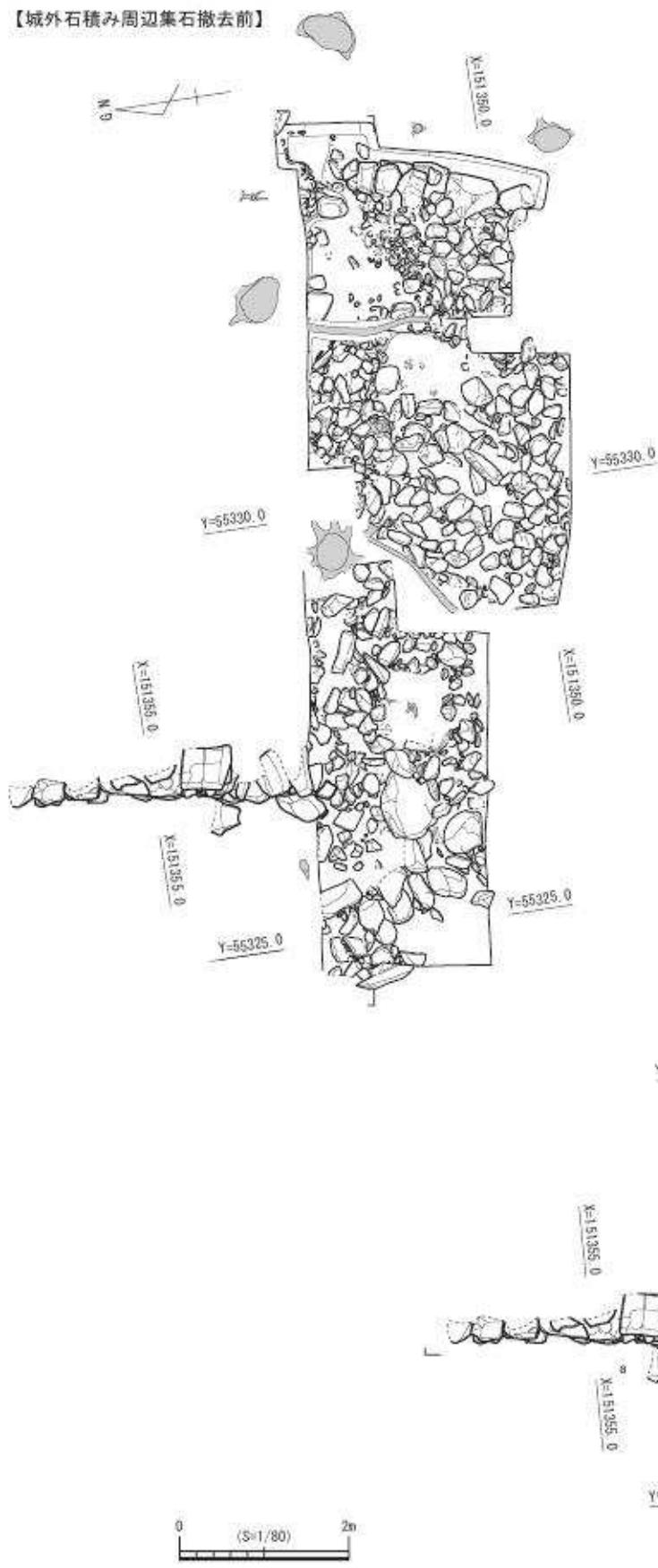
調査目的であった城門は確認できなかったが、55年度に確認した石積みに平行する城内側の新たな石積みを確認することができた。また、城壁内部の石積みの北側では地山を確認することができ、周辺の地形をどの程度、改変しているか、さらには確認した石積みが城内側の石積みとどのような関係性にあるかを確認するため、引き続き、25年度に調査を実施することとした。

#### b) 平成25年度（第46・49～51図）

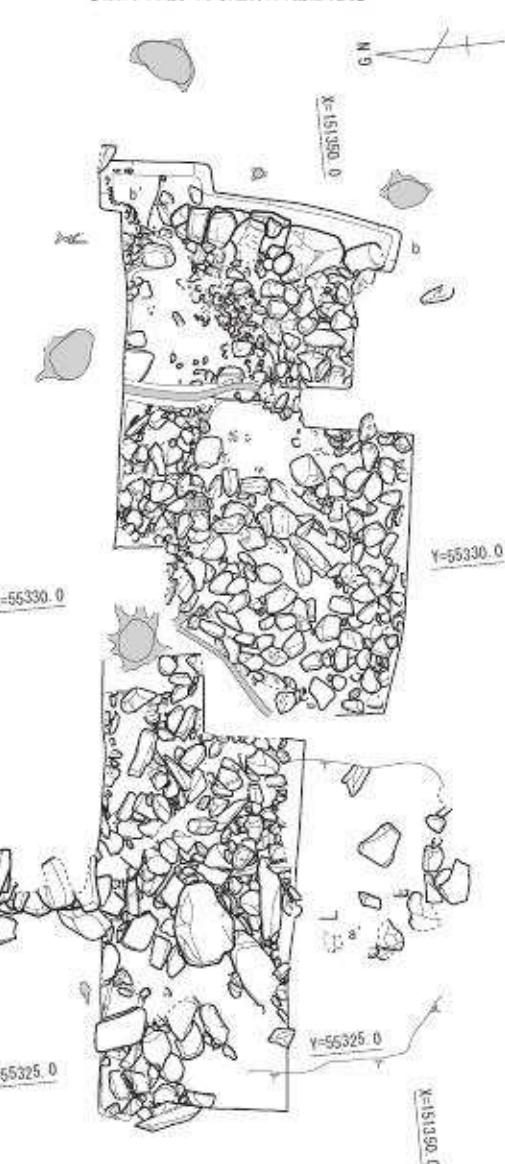
##### ①調査の目的と方法

24年度の調査に引き続き、確認した城門推定地の城外石積みに対して平行する城内側の石積みがどのように展開するかを確認するためにトレンチを設定し、城壁の状況及び城門等の遺構の所在確認を行うことを

【城外石積み周辺集石撤去前】



【城外石積み周辺集石撤去後】



第47図 屋嶋城跡浦生地区H 24 トレンチ平面図 (S = 1 / 80)



第48図 屋鳴城跡浦生地区H24トレンチ断面図・立面図 (S = 1 / 50)

目的として調査を実施した。また、城内側の地形を確認するため、24年度に確認した石積みに対して垂直方向にトレーンチを設定して掘削を行った。調査はすべて人力により実施し、調査後は養生し、埋め戻した。

## ②調査成果

### あ) 基本層序（第50・51図）

第51図の断面⑤⑦からみると調査区周辺は北から南へと大きく傾斜していることが理解できる。表土は腐葉土（第1層）で、その下位に褐色の砂礫混じり土（第2層）、にぶい黄褐色砂質土（第3層）が覆っている。なお、城内側の基本的な石積みを覆う土は、第1・2層であるが、24年度の調査時に確認した土との関係は、一部が削平され、露出している点、24年度の土層確認箇所が石積みよりも北側であった点から確認できなかった。

さらに、その下層には灰黄褐色砂礫混じり土（第4層）、同様な土で礫が少ない第5層が堆積している。この第4層からは19世紀以降の陶磁器片が出土しており、上層については200年ほどの間に堆積したものと考えられる。第5層は、石積みで厚く堆積し、城内側にかけて堆積が薄くなる。さらにその下位に、黒褐色砂礫混じり土、褐色砂礫混じり土などで構成される第6層が堆積している。断面⑦のように、第6e層には大型の石材を包含しており、城内側が一定程度、埋積した後に、石積みが一定程度崩落し、さらに埋積が進んだものと考えられる。後述するように5層以下については、年代を決める遺物は出土していない。第4層～第6層については、土質は異なるものの、比較的類似したやや黒ずんだ色調の花崗岩起源の土が堆積している。いずれも南に向かって傾斜しながら堆積している。

さらに下の地山直上に堆積する炭化材を多量に含む褐色砂礫混じり土（第7層）は、石積みの根石の下へと入り込み、城壁から城内側に向かって、傾斜地や窪地を埋めるように、比較的水平に堆積し、谷部に向かっても一定程度の平坦面を設けながら下っているように見受けられる。そのため、石積みを行う際の根石周辺の整地に伴う造成土と考えられる。これは21年度に確認された第41図の第27～33層と同様なものと考えられる。また、一部が根石よりも高い範囲に及ぶことから、同様な土を用いて、一定の埋戻しによる根固めも行われているものと考えられる。断面⑥の第6f層も同様な造成である可能性がある。これらの

造成土の城外側の状況については24年度の調査時にも確認できていないので、城外側へと同様な造成土が延びるかは不明である。

地山はにぶい黄褐色粘質土の安山岩を含むもの（第8層）で、いわゆる崩積土である。この地山自体も北から南へと傾斜している。

### い) 遺構（第50・51図）

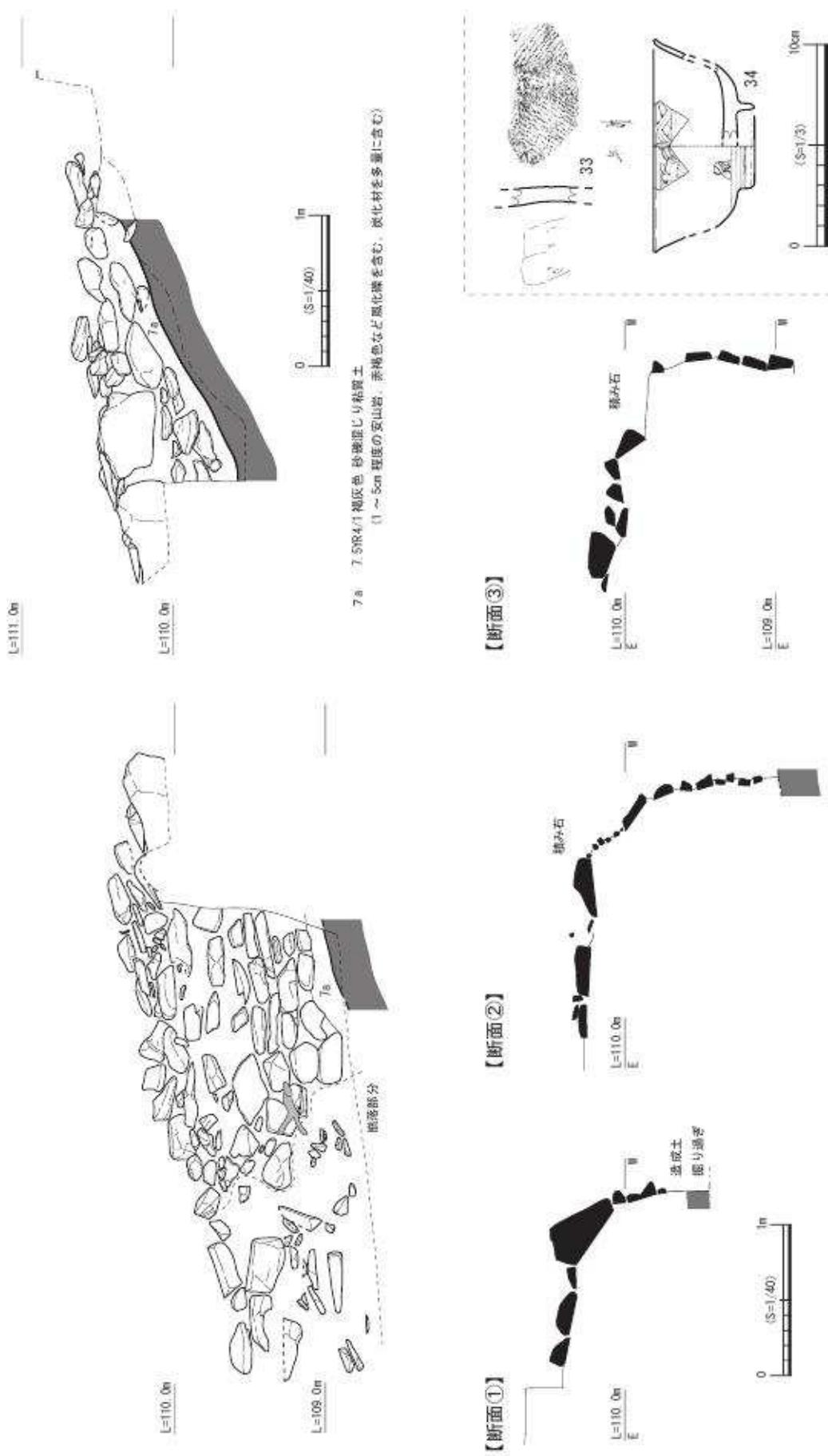
24年度に引き続き、門道を明確に示す石積み、遺構は確認できなかった。調査の結果、24年度に確認した城内側の石積みは南側の城壁に向かって延びていることが明らかとなり、埋没している範囲においても、変形しながらも城壁が良好に残っていることも明らかになった。そのため、経年的な堆積作用によって城内側が埋まり高くなつたことで、大雨等時に城内側からの水みちが形成され、城壁の一部が流出したこと、当該調査地の窪みは形成されたものと考えられる。

石材は、最大幅40cmで、多くはそれより小さいものである。石積みは小ぶりの横長の石材が使用して、石積み基本型（高松市教育委員会2016）で積まれている。石積みの保存のため、石積み間の土は最小限の除去とし、上部の状況に応じて、無理な検出は行っていない。

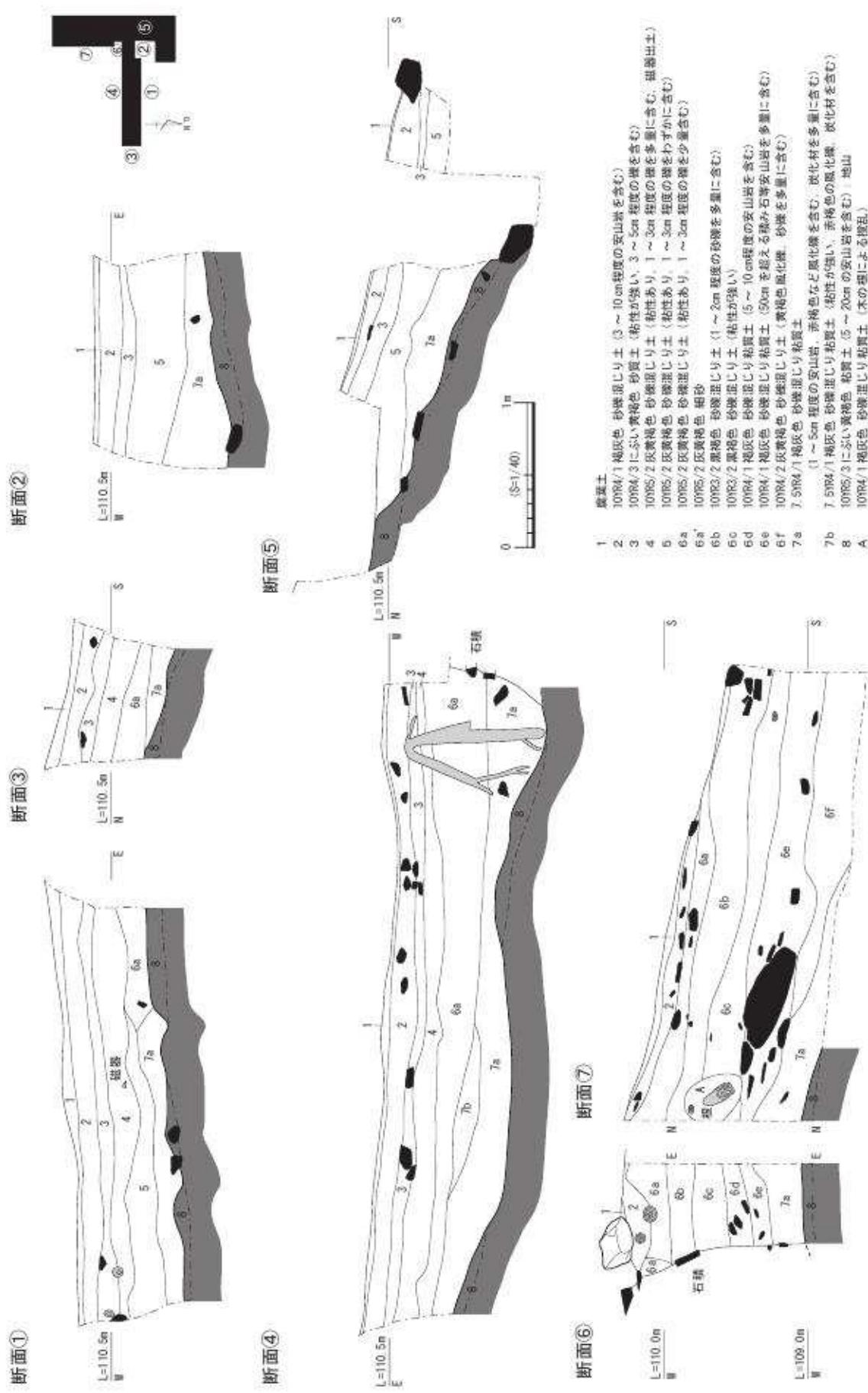
城外側の現存する石積みと今回の調査で明確となつた石積みの距離は、上端部で約7.5mである。現存する石積みの上部にさらに石積みが築かれていたかは不明であるが、城壁は斜面地に築かれているため、南側（谷側）に向かうに従い、上部に築かれていた石積みがあつたと推測される。現状では、最北部（最上部）は1石程度で、南に下るに従って石積みの段が増えていく、確認できた範囲の最南部では高さ約1.4mの石積みが残っていた。以上のことから、城壁は低い方から山側に向かって地形に擦り付けているものと考えられる。南側に行くほど、大きく孕んでおり、石積みが城内側へ大きく変形している。石積みの根石部分は先の造成土（第7層）の上に非常に小さな石で積んでおり、その上部にもあまり大きな石材を用いていない点も明らかとなり、21年度調査を追認することができた。また、最北部の根石の北側（山側）には掘り込みが確認でき、造成土は根石の城内側でも確認できることから、①まず、地山を掘り込み、②根石を設置しながら、造成も必要に応じて行い、さらに③根石の前面（城内側）を埋め戻すという順序で施工されたと考えられる。そのため、造成土と根石の城内側の土の見分けがつかないものと判断される。既述の21年度の調査では根



第49図 屋嶋城跡浦生地区H 25 トレンチ平面図 (S = 1 / 80)



第50図 屋鳴城跡発生地区H25トレンチ立面図・断面図 (S = 1 / 40)・出土遺物 (S = 1 / 3)



第51図 屋嶋城跡浦生地区H-25トレーンチ土層図 (S = 1 / 40)

石と造成土の関係は明確にできていないが、根石を据える際、地山の上に造成を行った後に石積みを行うという点は共通しており、この点は城門地区の石積みのあり方と異なる点である。しかし、褐灰色砂礫混じり粘質土は比較的広範囲に認められることから、同様な土を用いて、造成を行ったものと考えられる。

また、24年度に確認していた石積みに挟まれた部分、すなわち城壁の内部を構成する部材は、人頭大の(20~30cm程度)安山岩で非常に粗く集積したような状況であった。基底部までの断ち割りは行わなかったため、この集積された石材がどの程度用いられているかは判断できないが、山上の城門地区の城壁構造などと比較を行える重要な成果を得ることができた。今回確認できた石積みの石材と城壁内部の構築材と考えられる石材には、明らかにサイズに違いが認められ、石を使い分けている状況も確認することができた。

#### う) 出土遺物(第50図)

城内側に設定した東西方向のトレンチ及び石積みに平行したトレンチから土師質土器の小片が数点出土したが、時期決定ができる遺物はなかった。第4層及びその上層から33は須恵器表の体部片で、外面は平行叩き、内面はナデ調整によって仕上げている。34は19世紀後半以降と考えられる端反椀である。

#### ③小結

調査目的であった城門の存在が否定されたとともに、城壁内側に埋没している石積みが良好に残っていることが判明した。このことによって、城内側の城壁周辺に散在している大型石材の多くは、城内が埋積した後に、崩落した石積みの石材であることも明らかとなった。第4層の出土土器の年代からも、比較的近年まで、石積みが良好に残存していた可能性が高い。石積みの残存状況は、一定程度石積みが埋没したことによって生じたものと考えられる。

また、25年度の調査によって、城壁は北から南へと下る地形(地山)に擦り付けていることが判明し、雉城と考えられる物見台と呼ばれている箇所とどのように接続するのか、雉城のさらに北側の谷部までの間に城壁があるのか、さらには、関野貞氏推定の城壁の有無などに関する検討の必要性が高まった。いずれにしても、城内側については、地形に擦り付けており、地形を取り込んで、城壁を構築していることは明らかとなった。

### 5) 雉城部の調査: 平成26~28年度

#### a) 平成26年度(第52~54図)

##### ①調査の目的と方法

当該箇所は、昭和55年度においても、表土を除去することで、人工的に作り出された平坦面であること、石積みの崩落が著しい点が明らかにされた箇所であった。

24、25年度の調査によって城壁が物見台と呼ばれている張出部へどのように延伸するかが課題となつた。そのため、この雉城と考えられる物見台(張出部)の構造と城壁との関係を主な主題として調査を行うこととした。調査は、周辺測量を行った後、トレンチを2箇所に設定した。掘削は人力で行い、調査後は養生し、埋戻した。

##### ②調査成果

###### あ) 基本層序(第54図)

第1トレンチは流出が著しく、表土(黒褐色粘質シルト: 第1層)直下に、構造物が確認できる。第2トレンチは、表土が流出しており、にぶい黄褐色粘質シルト(第2層)が堆積し、後述する石積み状に見える石材を覆っている。石積みの背面の盛土もほぼ同質同色の土で現状では含有物における差異しか認められない。さらに一段下がった箇所では地山起源のにぶい黄褐色(やや明るい)のやや粘質及び湿潤な粘質シルト(第3層)が堆積している。いずれも、流出作用の大きな場所であり、基本的には構築されていたもの(遺構)の残存部分を確認したもので堆積土ではないと考えられる。

地山はにぶい黄褐色粘質シルトで安山岩及び風化礫を多量に含み、しまりが強い。

###### い) 遺構(第53・54図)

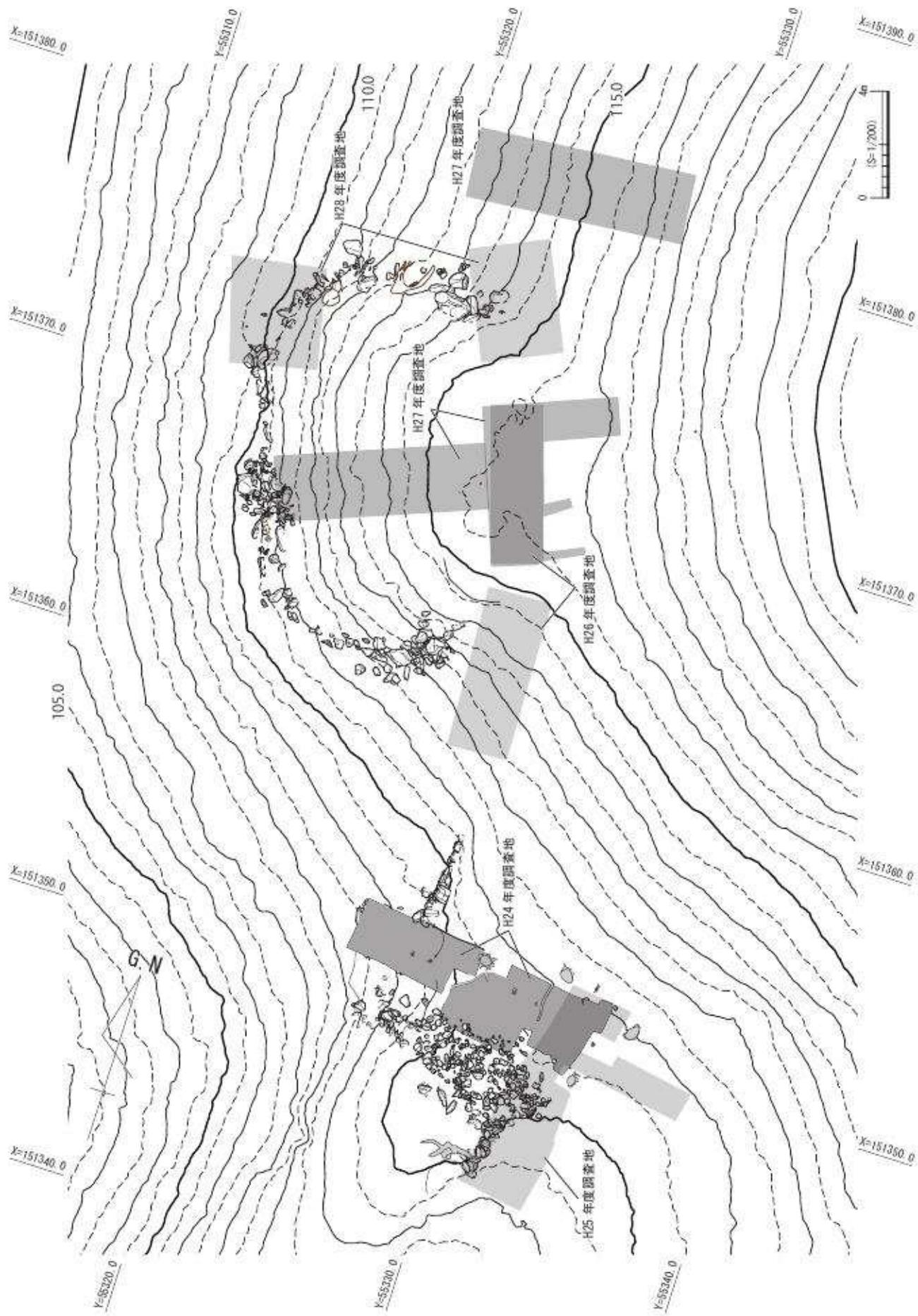
###### 第1トレンチ

調査前から城内側へと石面を捕えて設置しているような石列状の構築物が確認できたため、平面測量を実施した後、表土を除去した。その結果、想定以上に集石した状況が確認されるとともに、概ね南北方向に石列が築かれていることが明らかとなった。

そのため、26年度の調査では、集石の測量にとどめ、次年度以降に一部、石材の取上げを行いながら、調査を実施することとした。

###### 第2トレンチ

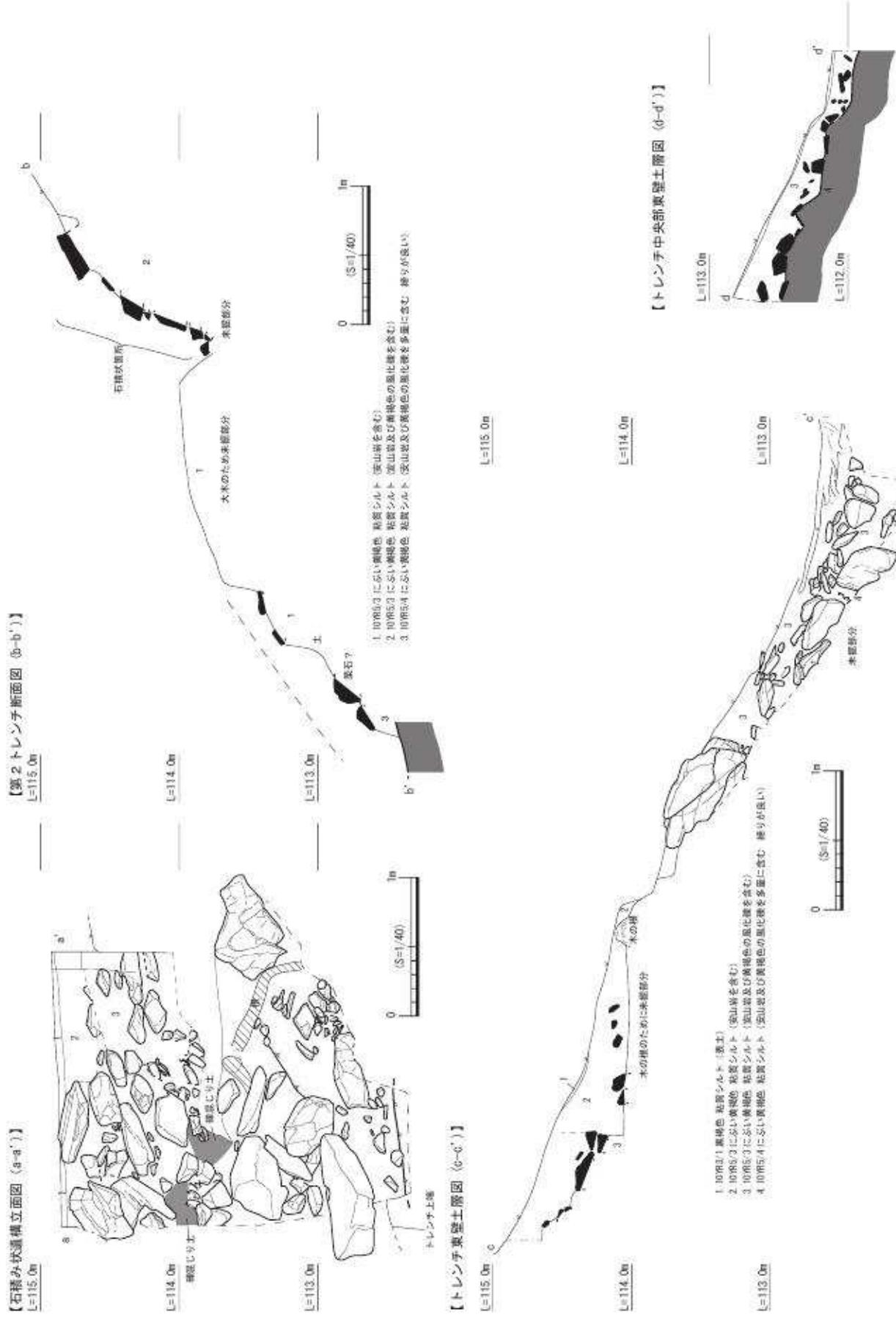
調査前から測量及び現地目視によって地形の傾斜



第52図 屋鳴城跡浦生地区H 26～28トレンチ位置図 (S = 1 / 200)



第53図 屋嶋城跡浦生地区H 26 トレンチ平面図 (S = 1 / 60)



第54図 屋嶋城跡浦生地区H-26トレンチ立面図・土層図 (S = 1 / 40)

変換点が確認できた。さらに、この傾斜変換点付近が24年度の城壁の外側の石積みを延長した箇所にあるとともに、その場所に大型の石材が所在していたため、城壁と物見台（張出部）との接続箇所と想定し、第2トレンチを設定した。

表土の掘削によって、想定していた箇所の石積みは大きく崩れしており、明確な石積み遺構を確認することができなかった。ただし、傾斜変換周辺の石材の直下で地山と考えられる土を確認したことから、概ね、物見台（張出部）の根石周辺とみてよいであろう。また、物見台（張出部）全体で、この根石と同様な高さで傾斜が変化し、急な勾配となることからも傍証できる。この傾斜変換点周辺、さらにその下位に大型の石材がまとまって崩落したような状況で集積していることから、本来は物見台（張出部）の表面は石積みが構築されていたと考えられる。城壁部分と同様な状況であろう。

トレンチ上部では、上記の石積み想定箇所から奥側（北側）に2mほど入った箇所で石積み状の遺構を確認した。確認できた範囲で約1.3mの高さがある。勾配はほぼ90°で城壁が延伸してくる箇所では石積みは崩落しており、接続状況は確認できなかった。当該調査では、石積み状遺構の構造については明らかにはできなかったが調査当時は下記の4点を想定した。

①テラス状の平坦面を挟んで、物見台（張出部）の表面は2段の石積みとなっており、確認した石積み状の遺構は上段側である。

②検出された石積み状遺構は裏込めにあたり、石積みは崩落している（城門地区の調査等により、石積みの背面の栗石が石積み状を呈する場合がある。）。

③上段の石積み状遺構が古く、後に拡張した（若しくは工程差）。

④土層から、遺構を覆っている崩積土が偶然、石積み状に見える。

遺構の性格、類例等から①は現状では考えにくいが、今後、調査区を複数箇所で設定し、構造について検討したが、27・28年度の調査によって、④であることが明らかとなり、盛土材として使用される石材の一部が石積み状に見えたものと考えるに至った。

#### う) 出土遺物

表土から土師質土器の小片が1点出土したが、年代を明らかにできるものは出土していない。

### ③小結

調査目的であった城壁との接続については明確な遺構としては確認できなかったが、残存する地形、周辺の崩落している石材などから概ね推定することができた。また、物見台（張出部）の構造を考える上で、石積み状遺構を確認した。さらに、当遺構の形状及び構造を明らかにするために、調査方法を検討し、調査を行っていく必要性が高まった。

### b) 平成27年度（第52・55～58図）

#### ①調査の目的と方法

26年度の調査時に、城壁の雉城と呼ばれている張出し部上面に石列を確認したことから、27年度の調査では雉城の上面を中心に2箇所にトレンチを設定して、雉城の構造把握を目的として調査を実施した。

#### ②調査成果

##### あ) 基本層序

###### 第1トレンチ（第57図）

表土（第1層）の下は、にぶい黄橙色の礫混じりシルト（第2層）が堆積している。さらに、第2層に安山岩を含む土（第3層）、灰黄褐色礫層（第4層）、にぶい黄褐色礫層（第5層）が堆積している。第3～5層の堆積状況から、後述する石積みの城内側には幅1.5mほどの通路上の空間があることがわかる。また、東側（山側）をやや掘り込むように空間が確保されていることが明らかである。地山（第6～7層）は、にぶい黄褐色粗砂混じりシルトでいわゆる崩積土である。

###### 第2トレンチ（第57図）

表土（第1層）を除くと、残存している構築材と考えられる盛土及び石材が確認でき、基本的には堆積は認められず、流出過程にある状況を示しているものと考えられる。

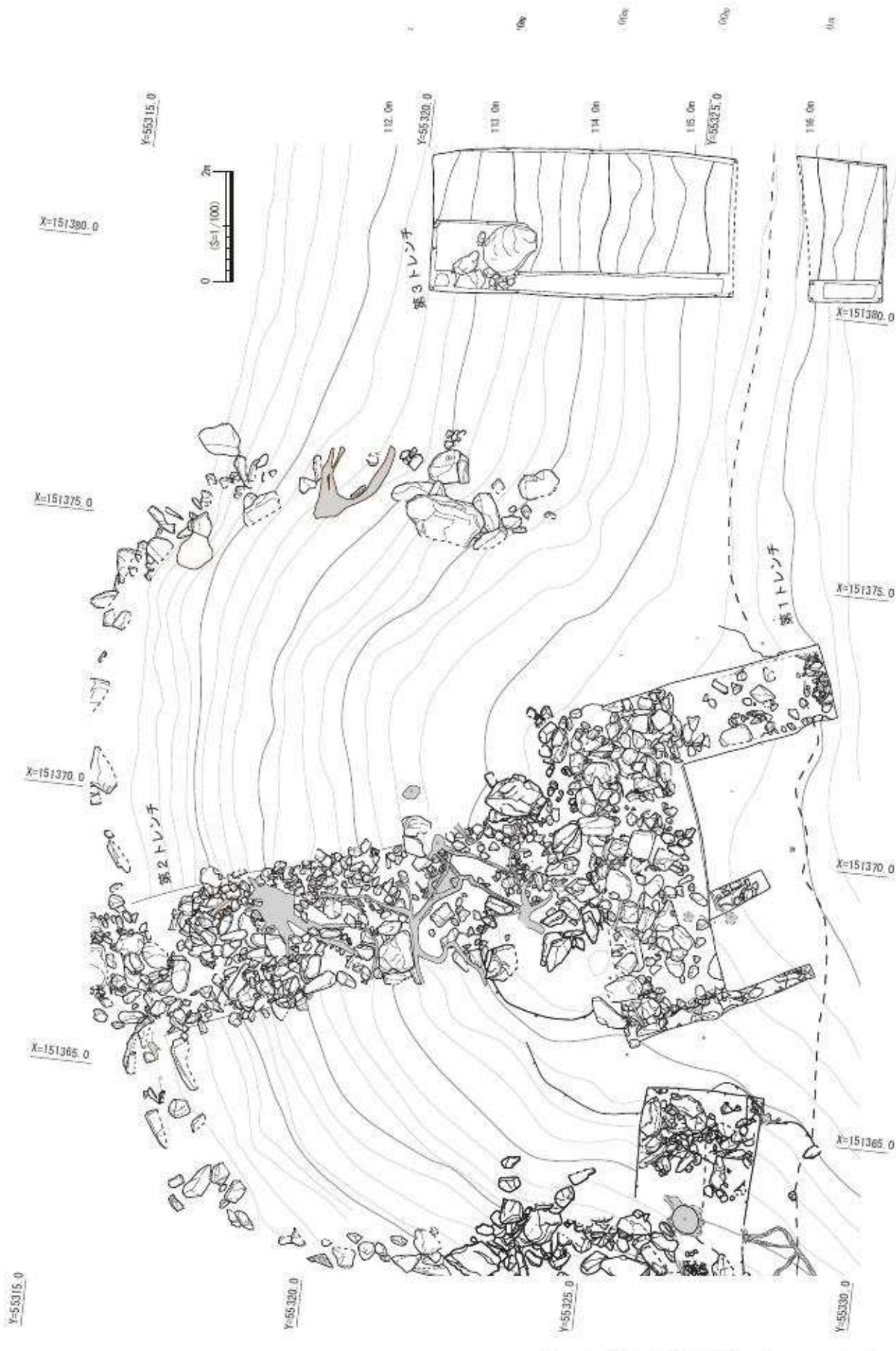
###### 第3トレンチ（第58図）

表土（第1層）、灰黄褐色粗砂やにぶい黄褐色安山岩を含む土（第2～3層）などの崩積土起源の土で覆われていた。一部断割りを行ったが、古い段階の崩積土（第4～8層）によって基盤が形成されており、これは屋島の山麓斜面の基盤を形成している崩積土と考えられる。

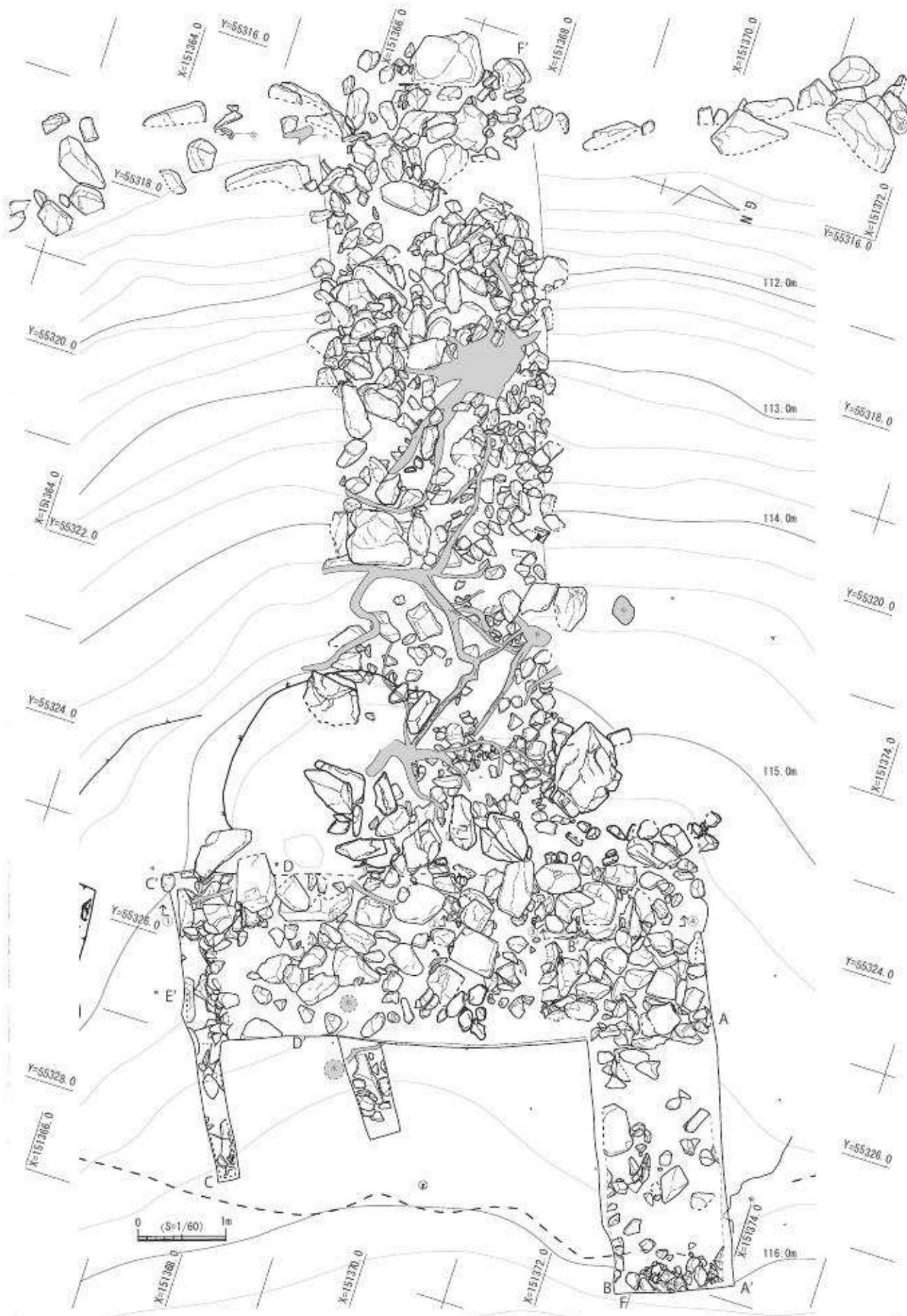
#### い) 遺構

###### 第1トレンチ（第56・57図）

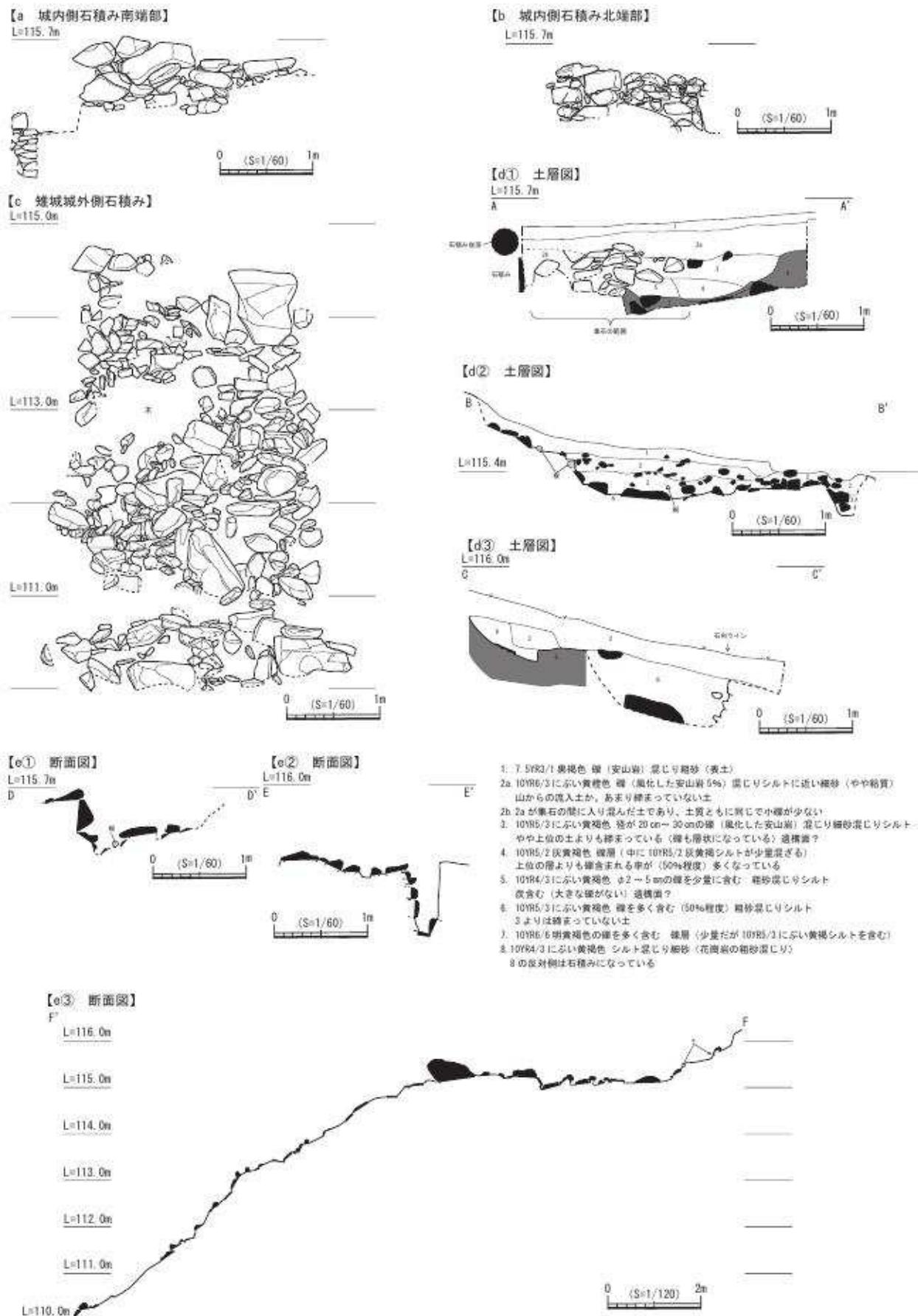
雉城の上部平坦面から西側の斜面部に設置した。調査の結果、石列が予想された部分で石積み状遺構を確



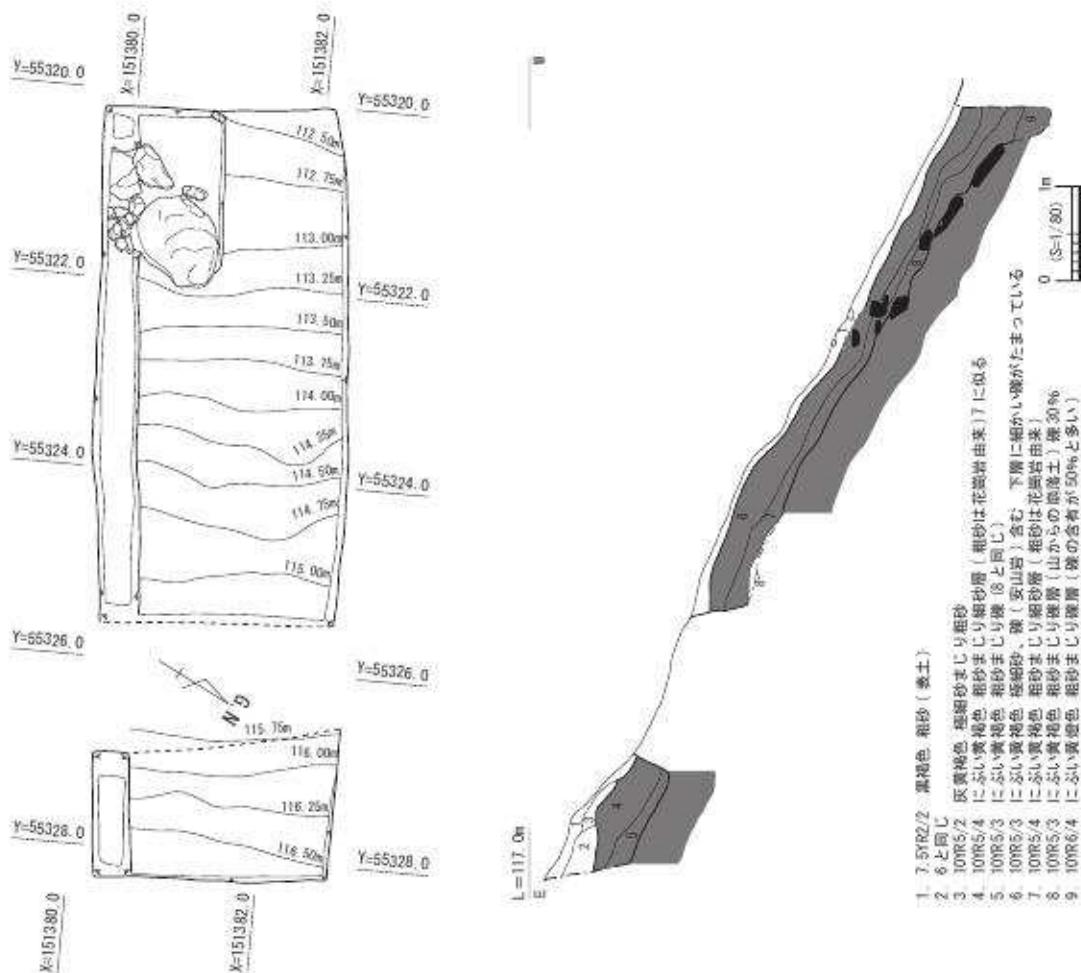
第55図 屋鳴城跡清生地区H 27 レンチ平面図 (S = 1 / 100)



第56図 屋島城跡浦生地区H 27-1・2トレンチ平面図 (S = 1 / 60)



第57図 屋嶋城跡浦生地区H 27 トレンチ立面図 ( $S = 1 / 60$ )・断面図 ( $S = 1 / 60 \cdot 1 / 120$ )



第58図 屋嶋城跡浦生地区H 27-3 トレンチ平面図・断面図 (S = 1 / 80)

認することができた。この石列は高さ50～80cmに及ぶ石積み遺構で、直方体を呈する自然石(30～50cm)を使用している。この石列は物見台(張出部)の城内側の構築物で、この石積みの城内側(山側)では、人頭大(10～30cm程度)のやや扁平な石材を丁寧に集積して設置した状況を確認した。ただし、南側は非常に小ぶりな石材を用いており、場所によってやや異なる印象を受ける。この集石は先の石積みと山側の斜面との間に形成される断面三角形状の空間を埋めている。基本層序で述べたように、山側とこの石積みの間には1.5mほどの空間が設けられており、その一部が集石で形成されているものと考えられる。

トレンチ南端の断割り調査の結果、他の古代山城同様に、地山の直上で炭化物を確認することができ、築城時の野焼きの痕跡と考えられる。これらの集石はその上面に構築されていることから築城時に構築したものと想定される。この集石は、斜面部に位置していることから、通路状の平坦面の確保や排水機能等を考慮

して敷設された可能性が想定でき、鬼ノ城の角楼背面において確認されている階段状を呈する石積みの遺構に類似した機能であった可能性もある。

いずれにしても、城内側に小規模な石積みがあり、その城内側に1.5mほどの通路状の空間を設けて、その石積み側を小ぶりな石材を丁寧に敷設しているものと考えられる。

#### 第2トレンチ(第56・57図)

雉城西側斜面部で石積状を呈する状況を確認していくため、外面側の構造についての情報をさらに蓄積するため、調査を行った。しかし、表土直下で、盛土内に石材が多量に含んでいる状況を確認するとともに、これらが部分的に石積み状を呈したように見えることを確認した。また、大型の石材が斜面部に転石として点在しているため、当初はこれらを用いて外面に石積みを行っていたものと推測されたが、基本的には崩落してしまっていると判断に至った。いずれにしても、盛土内にはかなりの石材が使用されており、城門地区

の城壁構造に類似している点は重要である。

### 第3トレンチ（第5・8図）

雉城の北側に続く斜面に位置し、城壁がさらに北にある谷へと延伸するかどうかを確認することを目的として設定した。調査の結果、城壁、特に石積みなどの存在を確認することはできなかった。そのため、当該地と同様な斜面が、さらに北側の斜面に向かって続いているものと考えられる。

#### う) 出土遺物

集石の中から土師質土器の小片が出土したが、時期決定ができる遺物は出土しなかった。

#### ③小結

今回の調査によって、雉城の城内側に面をもつ石積み遺構があり、その前面と山の斜面を埋めるように集石がなされていることが判明し、城内側の構造が明確になった。さらに、雉城外面は本来、石積みであり、現在は大規模に崩落していることから、26年度に確認した石積み状の構築物は盛土の一部であることが判明した。第3トレンチの調査で、雉城の北側斜面には城壁は延伸しない可能性が高いことを確認することができ、城壁としては物見台（張出部）までと考えられる。

### c) 平成28年度（第5・9～6・1図）

#### ①調査の目的と方法

27年度に引き続き、雉城と呼ばれている張出し部の形状及び構造を確定することを目的に調査を実施した。隅丸方形状の物見台（張出部）の北東側、北西側の2箇所にトレンチを設定して実施した。

#### ②調査成果

##### あ) 基本層序（第5・9・6・0図）

第1・2トレンチともに表土（第1層）直下及び落石を含むにぶい黄褐色粘質土を撤去すると石積みが残っていることが判明した。地山（第4層）はこれまでの調査で確認されている黄褐色を呈するやや粘質及び湿潤な粘質シルトに安山岩を多量に含むもので、いわゆる崩積土である。

##### い) 遺構（第5・9・6・0図）

#### 第1トレンチ

張出し部の北東側の形状を確認することを目的として設定した。この部分は、大型の石材が近隣に転石していた。調査の結果、根石周辺のみであるが、東西方向（城外方向）に延びる石列及び1～3段の石積みを

確認することができた。本来の石積みの範囲は明確ではないが、天端付近であることから、1～1.5mの石積みがあったものと想定される。石材は50cm程度の石材を横方向に使用し、石積み基本型（高松市教育委員会2016）で積まれている。大きなものになると1.5mを超えるものもある。また、城外側に向かって根石が低くなることから、次第に石積みの高さは増したものと想定される。また、根石については城壁部分とは異なり、造成土は認められないため、地山に直接的に石材を設置している。

また、トレンチ中央部において南北方向に細長い石材を使用した石列とそれが崩れた状況を確認できた。この石列自体の残存状況は良くないが、26・27年度に確認した城内側の石積みの延長に当たることと、さらに北、東側へとは延びないことが確認できた。そのため、この石積みは物見台（張出部）の城内側の表面を構築しており、本来は、本調査区で確認した東西方向の石積みと隅角部を形成していたものと考えられる。

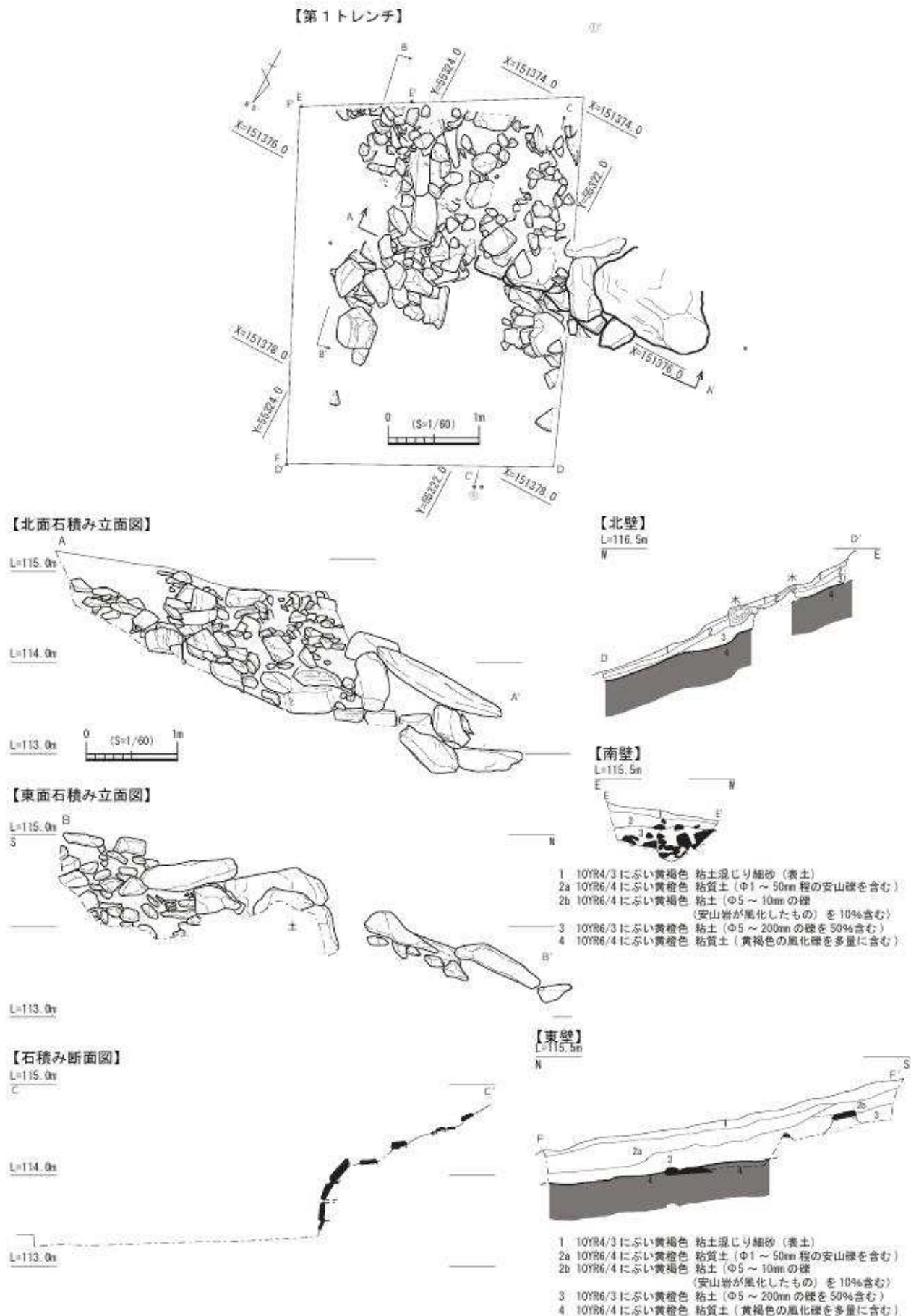
#### 第2トレンチ

張出し部の城外側（北西隅部）の形状を確認することを目的として設定した。確認できる現地形が隅丸方形状を呈していたことから、物見台（張出部）は方形（雉城）になることが想定していた。遺構の保存のため、城壁周辺は極力掘削を避けたが、調査の結果、第1トレンチの石積みの延長線状に当たる箇所で、垂直（南北方向）方向に交わる石積みを確認した。隅角部は変形しており、当時の状況を示していない可能性があるが、40～60cmの石材を用いた石積みを確認することができ、石積み基本型（高松市教育委員会2016）であると考えられる。既に崩落が著しく、トレンチ内部に崩落したものと考えられる石材が多数確認でき、実際に石積みの残存状況もあまりよくなかった。残存する天端高さから、本来の高さは城外側で約5.5mと想定でき、その根石周辺が確認できたものと考えられる。残存したわずかな石積みから、本来の形状を推測することができ、方形の物見台（張出部）であったことが推定できる。

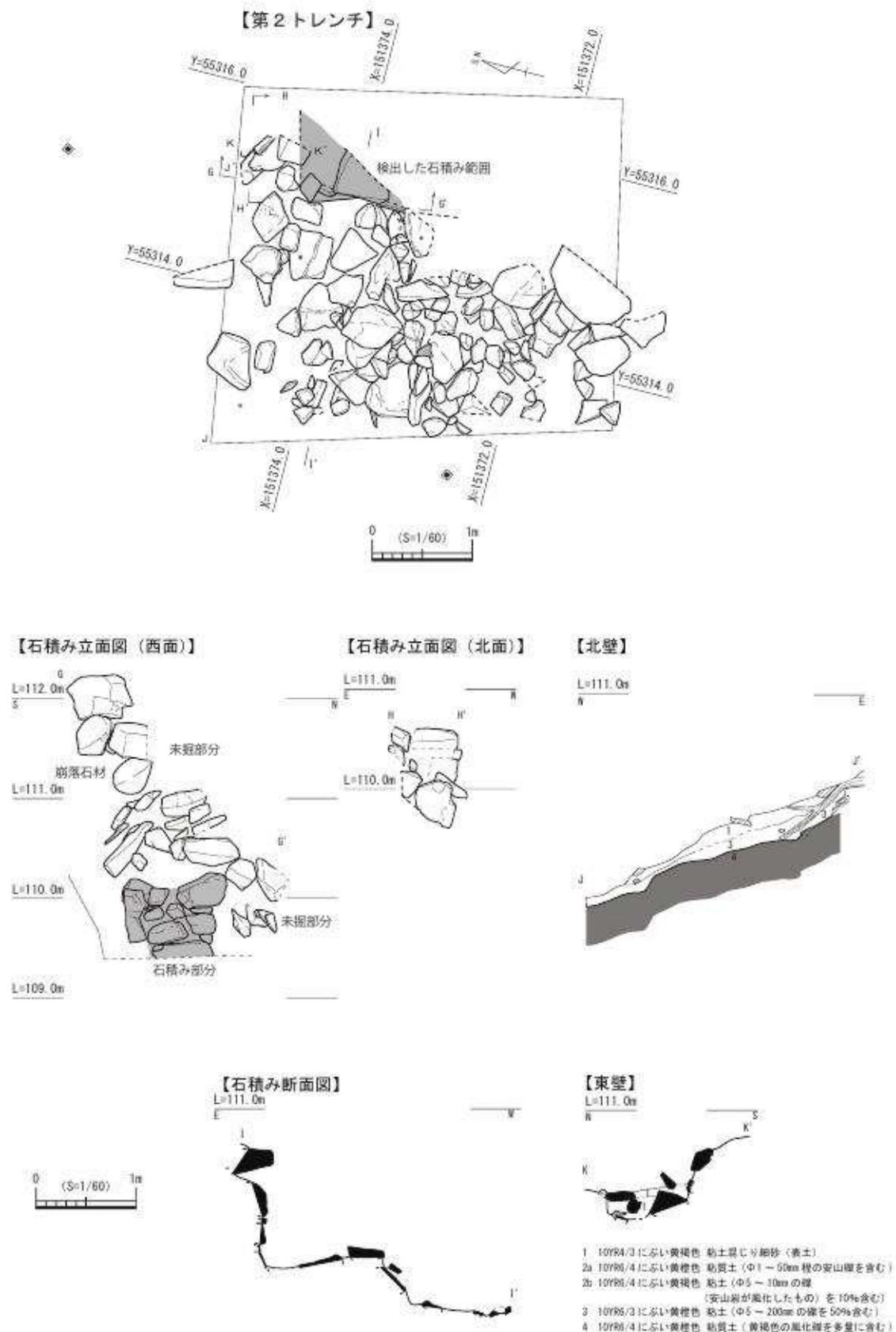
##### う) 出土遺物（第6・1図）

トレンチ調査では遺物は出土しなかったが、3次元測量のための城壁全体の清掃時に崩落石に混じって採集されている。

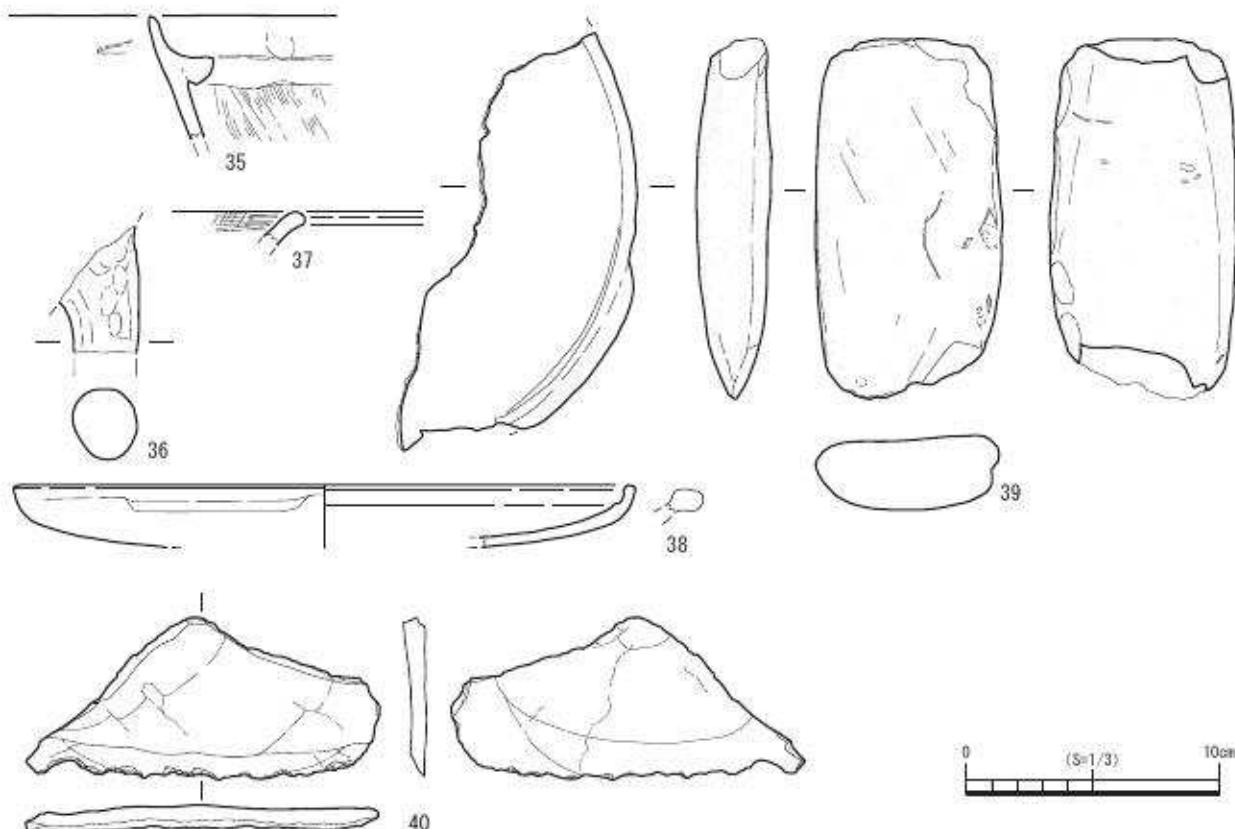
35～37が土師器である。35は足釜の口縁部、36が脚部である。35は佐藤編年（佐藤1995）の



第59図 屋嶋城跡浦生地区H 28-1 トレンチ平面図・断面図 (S = 1 / 60)



第60図 屋嶋城跡浦生地区H 28-2 トレンチ平面図・断面図 (S = 1 / 60)



第61図 屋嶋城跡浦生地区清掃時表採遺物 (S = 1 / 3)

B類で形状から13世紀後半と考えられる。粗い刷毛目調整で仕上げた後、タガの部分を成形している。白色砂粒のほか、角閃石、雲母等を含んだ非常に粗い特徴的な胎土である。37は小片のため、詳細は不明であるが、甕の口縁部の可能性が考えられる。38は鉄製の焰烙と考えられる。39・40は石器で、39はやや扁平であるが石斧、40は安山岩の大型の刃器である。

いずれも、屋嶋城跡の年代を示すものではないが、弥生時代中期頃、13世紀後半頃の当該期周辺の利用状況を考える上では重要な遺物と言える。

### ③小結

当該調査によって、張出し部の形状を確認することができ、雉城であることが明確となった。また、これまでの成果から判断すると、城壁と雉城の間において、明らかに遺構が確認できない範囲があることから当該地域も自然地形を利用しつつ、城壁、雉城を配置しているものと考えられる。第1トレーナー及び26・27年度で確認した城内側の石列若しくは小規模な石積みラインと城壁の城外側の石積みラインは一直線では接続しないことと城壁を地形に擦り付けて構築していることから、直接的に接続していない可能性を想定して

おきたい。

## 6) 城壁ラインの調査：平成29年度

### a) 平成29年度（第62～65図）

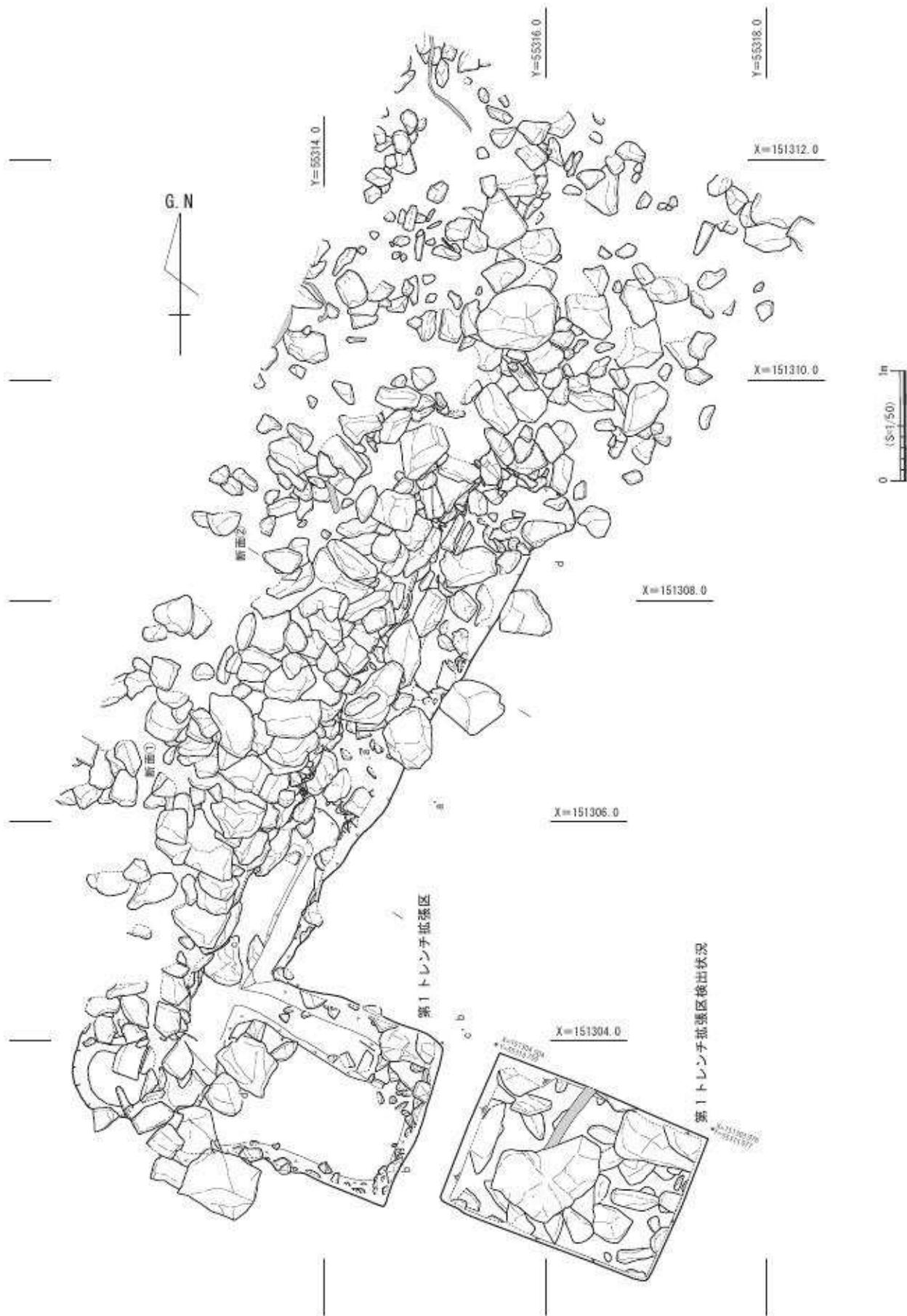
#### ①調査の目的と方法

平成28年度に実施した測量成果、21・22年度の調査成果によって、城壁の残存状況の良い場所を確認した。そのうち、第20図の石積み②と④について、城壁基底部を確認することで、全体の形状及び規模の確定を目的として実施した。調査では転石と判断できるもののみを除去しながら実施したが、基本的には石積みの変更・解体は行わず、最少規模での調査目的の達成を目指した。そのため、転石の撤去によって遺構への影響が懸念される際は、無理な除去作業は行わず、遺構の保全、安全面を十分に確保して確認調査を実施した。人力による掘削・埋め戻しを行った。

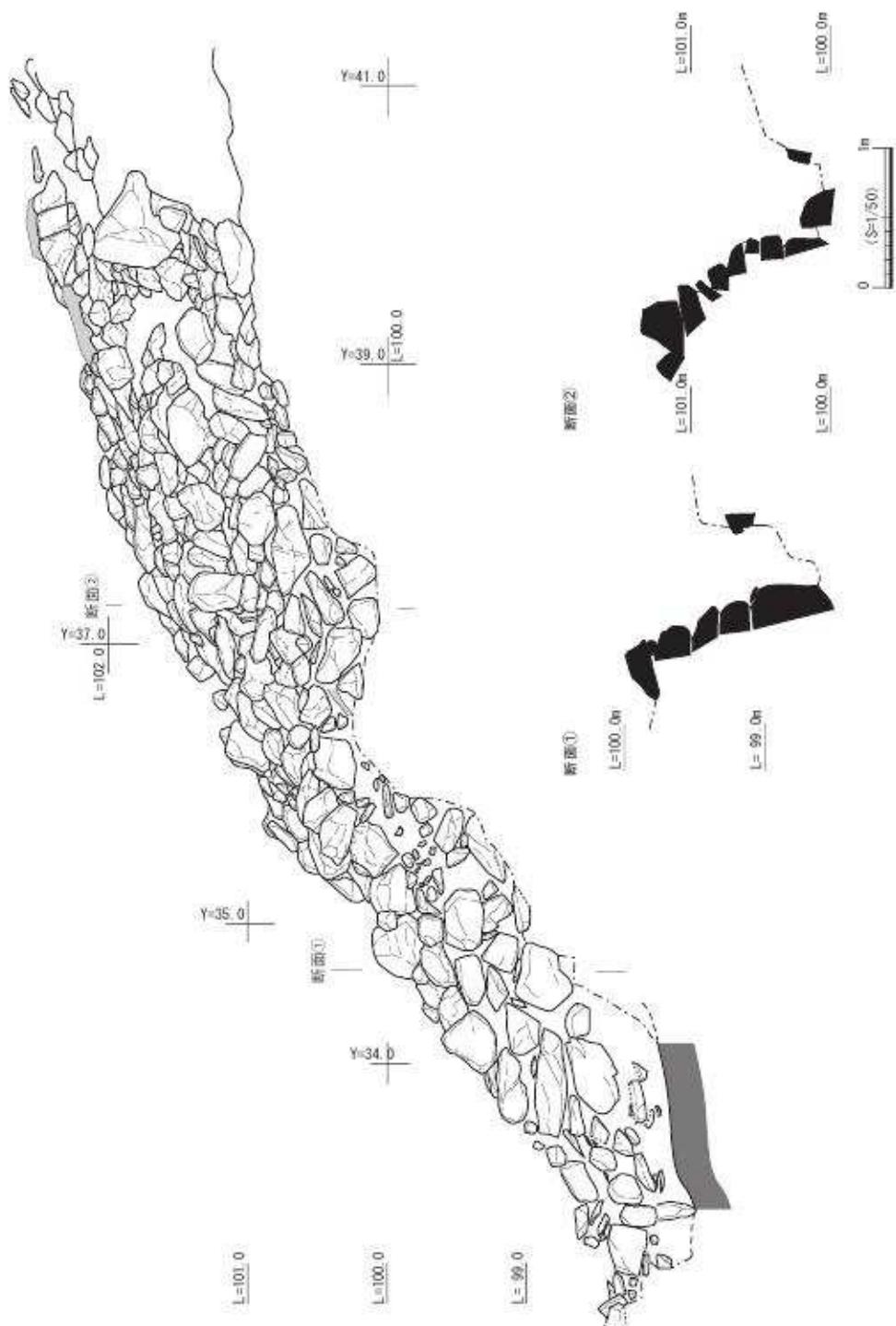
#### ②調査成果

##### a) 基本層序（第64・65図）

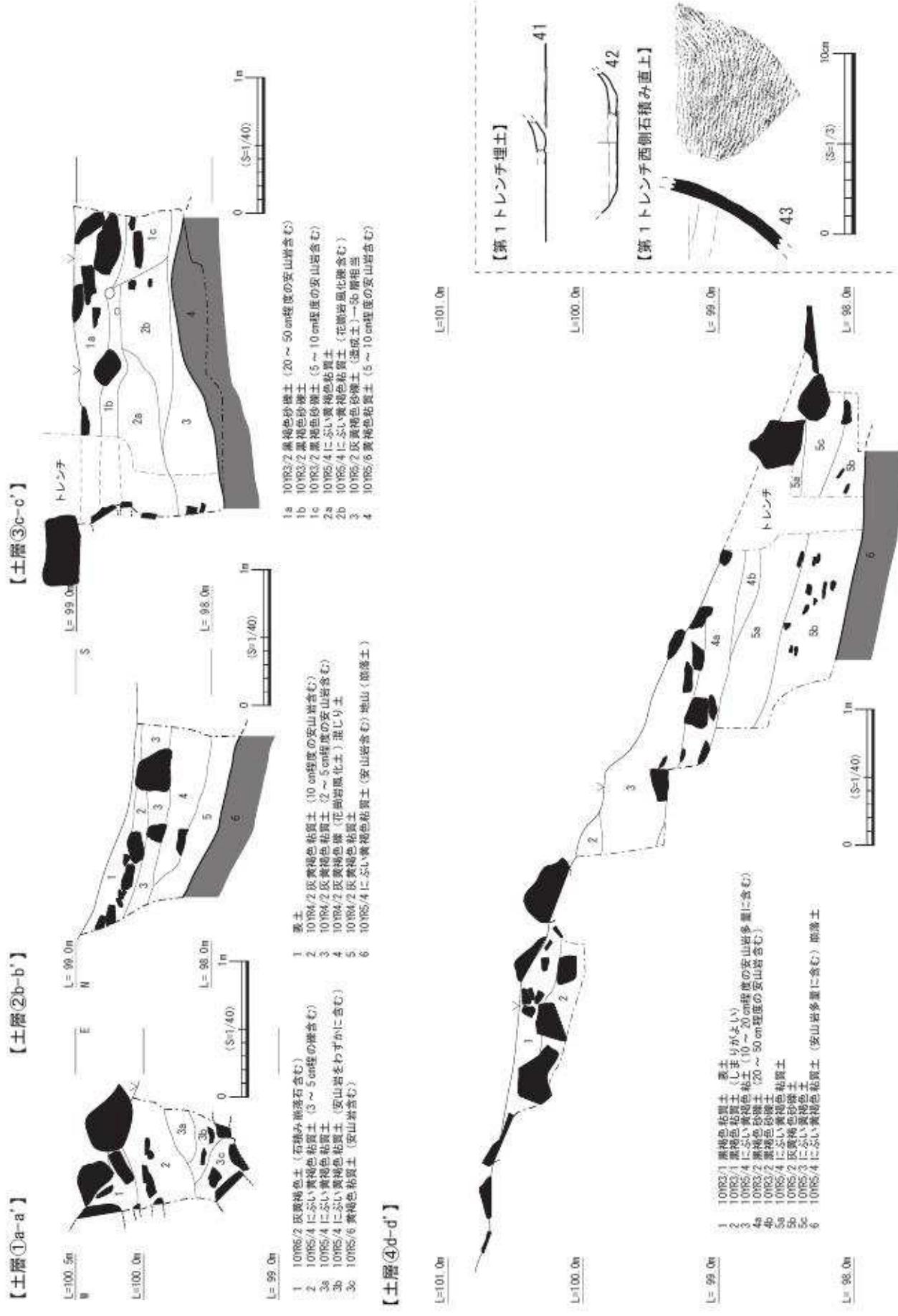
石積みは地表より上に見えており、どの程度埋没しているかを確認するために城内側の掘削を行った。第1トレーナーは城壁前面（城内側）が後世の流土によって埋没していた。



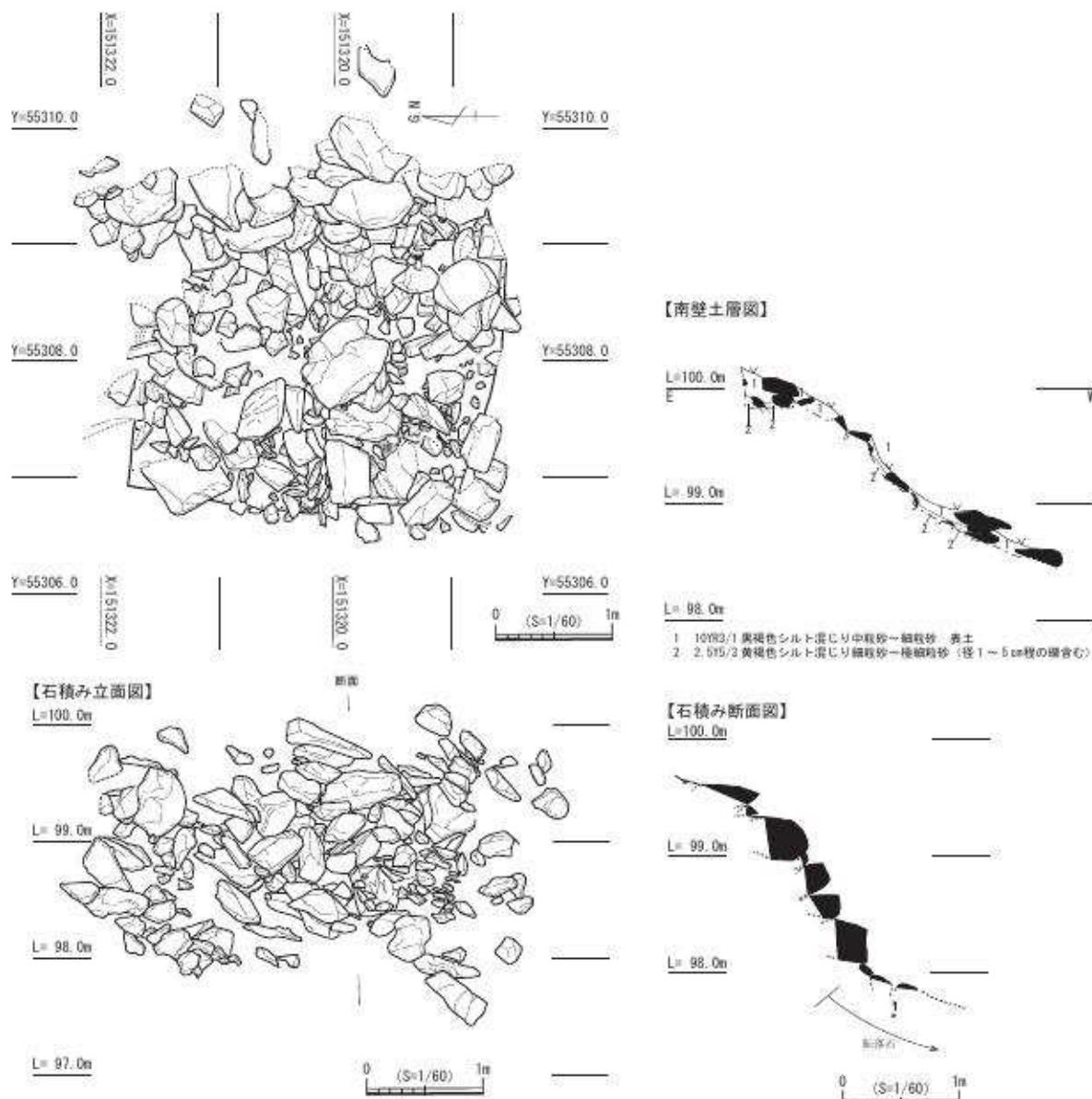
第62図 屋鳴城跡発生地区H 29-1 レンチ平面図 ( $S = 1/50$ )



第63図 屋島城跡浦生地区H 29-1トレンチ立面図・断面図 (S = 1 / 50)



第64図 屋嶋城跡発生地区H 29-1 レンチ断面図 (S = 1 / 40)・出土遺物 (S = 1 / 3)



第65図 屋嶋城跡浦生地区H 29-2 トレンチ平面図・立面図・断面図 (S = 1 / 60)

断面④(第64図)に基づき、その石積みの前面部堆積状況を確認すると、表土(第1層)の下層には、黒褐色粘質土(第2層)、10~20cm程度の安山岩等の砂礫を多量に含むにぶい黄褐色粘土(第3層)が堆積している。低い箇所には黒褐色砂礫土(第4層)が堆積している。その下層がにぶい黄褐色粘質土(第5a層)、さらに下層には灰黄褐色砂礫土(第5b層)が確認できる。後者は根石下位にも認められ、東西トレンチ断面③の第3層に対応するものである。この第3層は地山が城壁に向かって下っていくのを造成土によって平坦化する目的で設けられたものと考えられる。以上の点から断面④の第5b層、断面③の第3層は造成土と考えられ、21、25年度調査で確認されたものと同様と考えられる。断面④の第5a層、断面③の第

2a層についても同様な可能性が想定できるが、堆積状況の対応関係から、現状では先の第5b層のみを造成土と考えておきたい。

地山(断面④の第6層、断面③の第4層)は城内側から城外側に向けて下っているため、その上部に盛土をして石積みを構築している。そして、さらにその石積みの根石及び造成土部分の前面(城内側)に土を盛つて補強するとともに、平坦部を形成しているものと考えられる。

第2トレンチは、表土直下に落石が累積しており、残存する石積みを残すために、それ以上の掘削は行っていない。そのため、表土(第1層)のみを除去した。い) 遺構

第1トレンチ(第62~64図)

城内側の石積み構造及び城壁ラインを確認することを目的として設定した。この部分は列石状に石材が並んでおり、その下層に石積みが残存している可能性が想定された箇所である。掘削を開始すると、北側部分は大型の石材が崩落した状況で出土し、移動させることができなかつたため、南側のみ掘削を行った。その結果、南側へと傾斜して列石状に残っていた箇所で、40～50cm程度の石材を用いた1～1.2mほどの石積みが埋没していることが判明した。石積みの石材間の土を安定性の問題から除去していないが、石積み基本型（高松市教育委員会2016）で積まれている。根石は階段状に南側（谷側）へと下っているものと考えられ、地形に擦り付けながら、水平面を形成し石積みを行っている状況を確認することができる。明確な根石は判明していない箇所があるが、土層との関係からみると、根石の下には25年度調査で確認したように、やや小ぶりな石材を設置している。石が明確に確認できていない箇所も、やや奥まった箇所で石積みが残存しているものと考えられる。基本層序で確認したように、根石前面（城内側）及び根石下層の土が非常に類似しており、これまでの調査と同様な所産と言えよう。

既述のとおり、当該トレンチの南端部から城門推定地までの間には不自然な平坦面が認められる。城壁も崩落したよう傾斜し、安定勾配（約1割程度（45°程度））となっている。ただし、当該箇所が後世の流出によって形成されたとするには不自然な平坦面である。そのため、築城当初は当該調査区の南端部に石積みの垂直壁があった可能性が想定され、城門までに方形の空間があったと考えられる。これらの想定に基づけば、城壁内側の石積みの当初の高さは3m程度であった可能性が想定できる。さらに、今回検出した石積みを城門推定地へと延伸させた箇所には、重箱積みが残存することが明らかになった。古代山城の石積みにおいて重箱積みが用いられる一般的な箇所の一つに城門の隅角部がある。この点を踏まえると、重箱積みの箇所が城門の城内側の隅角部と推定できる。城外側の隅角部と想定される箇所には、大型石材を用いた重箱積みだったと考えられる崩落しかけた石積みが残存し、城外側の城壁ラインとも一致する。以上のことから崩落が著しいが、城門の北側側壁のラインはほぼ推定することができた。

#### 第2トレンチ（第65図）

城外側の石積みがかろうじて残存していた箇所で、城外側の城壁ラインを確定できる箇所である可能性が

想定された場所である。調査の結果、表土を除去すると、崩落した石積みの石材が累積していることが明らかとなった。かろうじて、残存しているように見えた石積みも、表土除去後の詳細な観察に基づくと、上部の石積みが形状を保ちつつ、崩落した可能性が高いことが想定でき、本来の形状を残すような形状ではあるものの、基本的に移動していることが明らかとなった。いずれにしても、今回の調査によって、城外側の石積みは最北部で残存するものを除くと、基本的には崩落してしまっていることが明らかとなった。

#### う) 出土遺物（第64図）

出土遺物はわずかで、第1トレンチから、土師器、須恵器片が出土している。

##### 第1トレンチ埋土

41・42ともに土師器の小皿の破片である。いずれも橙褐色を呈し、白色砂粒を含む。

##### 城内石積み崩落上面

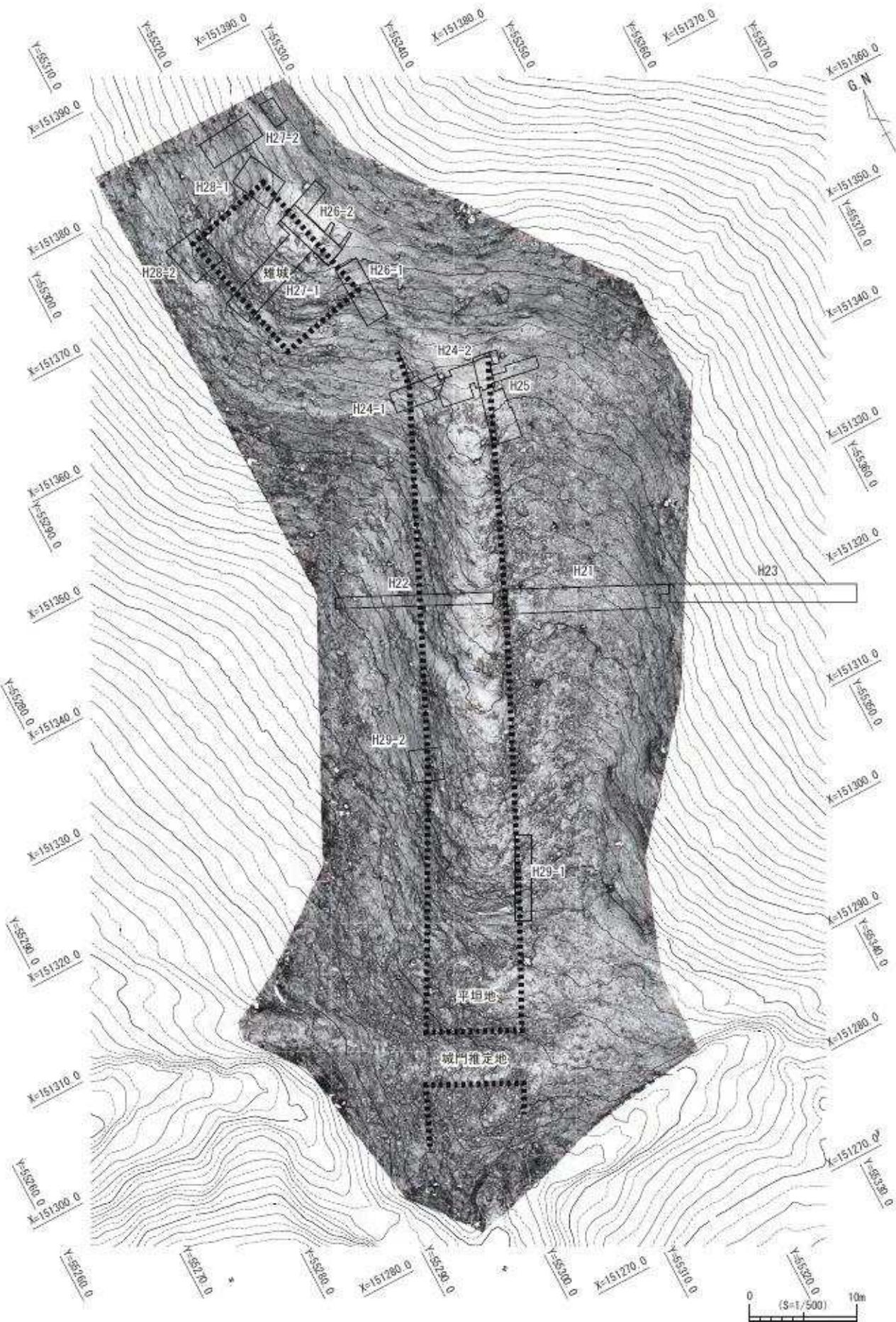
43は須恵器の甕体部の破片である。外面は平行叩き、内面はナデ調整によって仕上げる。青灰色を呈し、白色砂粒を含む。12世紀後半以降と考えられる。

#### ③小結

今回の調査によって城外側・城内側とともにラインが確定し、城壁の幅が明確になった。21年度、25年度の調査と同様に、城内側の城壁石積みが埋没し、良好に遺存していることも確認することができた。加えて、城内側の石積みラインが確定することで、城門と考えられる城内側の隅角部及び城門北側側壁を特定でき、城門推定地が城門である可能性が高まった。

以上、平成21年度から29年度にかけての調査によって、浦生地区の城壁の平面形は第66図のように復元することができ、構造の解明の基礎を構築できた（第4章参照）。ただし、城門推定地部分の調査は今後の課題である。

また、上記の点以外で、12～13世紀の出土遺物がまとまって表採され、特に龍泉窯系の青磁碗等の希少財が持ち込まれている点は注目される。このほか、調理具が多数認められることから、当該地で何等かの作業が行われたものと考えられる。同様な傾向を示すものとして、船岡山古墳、御殿町水池南遺跡などを挙げることができ、背景は不明であるが、中世前半期に高地（標高100m未満）に展開する遺跡として浦生地区は注目される。



第66図 屋嶋城跡浦生地区城壁平面形 (S = 1 / 500)

## B. 北嶺山上地区の調査

### ■ 調査の経緯

北嶺は、これまで、昭和55年度、平成10～13年度に既に調査が実施され、12年度に屋島寺の前身と考えられる2間×3間の礎石建物跡を確認し、その東側では掘立柱建物跡を確認していた。さらにその外側で石積みの基壇状の遺構も確認していた。遺構が確認されていない調査地点においても、9～12世紀の遺物がかなりの頻度で出土しており、古代において断続的な可能性はあるが、連続と利用された場所であったことを確認していた。

しかし、史跡としての屋島の潜在価値は未だ十分には掘り起しが行えていない状態と言え、特に北嶺山上については千間堂跡の確認後、大きな成果は得られていなかった。また、屋嶋城跡についても、城門跡の発見以後、既述の浦生地区でも地道な成果ではあるが、構造の解明が進められてきたが、北嶺については人工構造物が分布調査でも認められないため、屋嶋城跡に関する確認調査は実施していなかった。北嶺は、南嶺とほぼ同様な標高であるものの、山頂の縁辺部が断崖となるという特徴的な地形で、城壁遺構のような構造物は明確ではなかったが、北嶺山上の確認調査において1点ではあるが、7世紀後半代の須恵器が出土しており、何らかの形で利用されている可能性が想定された。

城門跡の調査と併行して、屋嶋城跡調査整備会議からも北嶺の調査を実施すべきとの意見を得たため、19年度に踏査を実施し、調査候補地を決定し、20年度に確認調査を実施することとなった。

また、その後、屋島寺の歴史の解明を主な目的として北嶺山上に位置する千間堂跡周辺の調査を重点的に実施することになり、26年度から3年計画（1年延長）で、調査を実施することになった。この一連の調査の目的は、地名として残る千間／軒堂、さらには北嶺の広大な平坦な地形から、多くの建物若しくは大型の建物が存在する可能性が想定され、それらの実態解明を目的として実施した。まず、25年度にこれまでの調査成果を参考しながら、基壇状の高まりや大型の礎石などの分布を確認するために、踏査を実施した。その中で、第67図に示したような箇所で、集石や礎石状の大型石材の分布の範囲が確認できた。その後、園路近くの集石については、昭和40年代の北嶺における園路整備時に障害となる石材をまとめたものである可能性があ

ることも判明した。一方で、既に確認されていた礎石建物跡のような基壇状の高まりは目視では確認できなかつた。

このほか、踏査の中で建物と直接的に関係はないが、次のような点も確認できた。

- ・広大な平坦地に見える北嶺山上も、東側に平坦面がまとまり、中央の園路から西側に向かって、さらに北側に向かって傾斜した地形である。
- ・南嶺同様に、北嶺でも千間堂広場、さらに北側で現在も水が貯まる箇所が2箇所あり、貯水池等をはじめとして水が確保できる場所がある。
- ・南嶺から遊歩道沿いに歩き、北嶺に向かって鞍部を登りはじめると、右の尾根に上っていく石段がある。さらにその石段を登り切って尾根上に出ると、石畳が通路状に千間堂広場に向かって一直線に敷設されている。これらの構造物は、いつのものかは不明であるが、現在の北嶺に向かう遊歩道とは異なるルートであり、遊歩道以前のルートであることは間違いないが、時代や目的については不明である。

### ■ 調査の経過

#### 1) 発掘調査

各年度の調査実施期間と発掘調査の担当者は下記のとおりである（第67図）。

##### 平成20年度

平成20年9月1日～平成20年12月17日

調査面積：16.4m<sup>2</sup> 担当：山元敏裕・中村茂央

##### 平成26年度

平成26年10月20日～平成26年12月24日

調査面積：63.5m<sup>2</sup> 担当：渡邊 誠

##### 平成27年度

平成27年8月17日～平成27年9月14日

調査面積：7.5m<sup>2</sup> 担当：渡邊 誠・杉原賢治

##### 平成28年度

平成29年2月23日～平成29年3月30日

調査面積：10.0m<sup>2</sup> 担当：渡邊 誠・杉原賢治

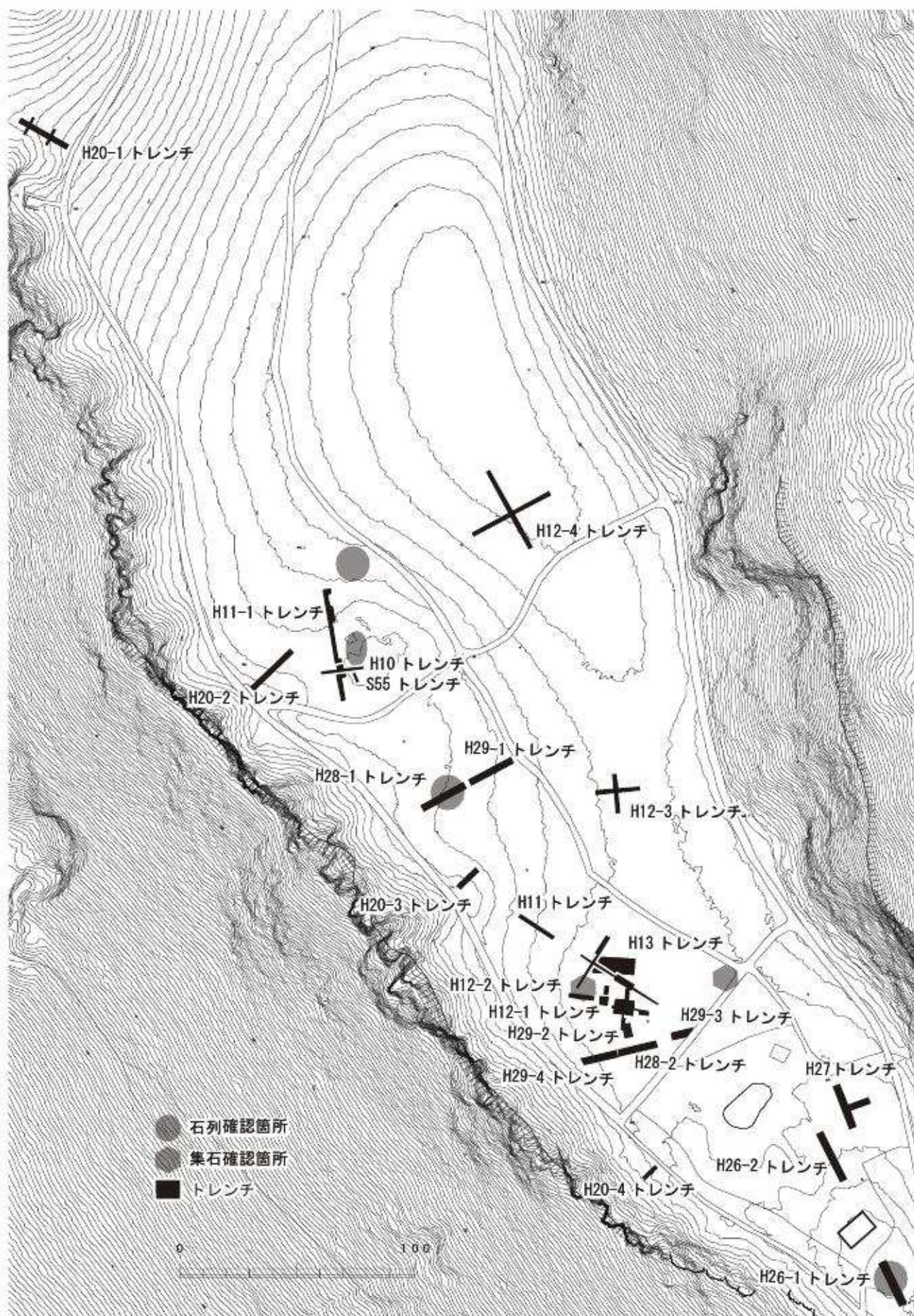
##### 平成29年度

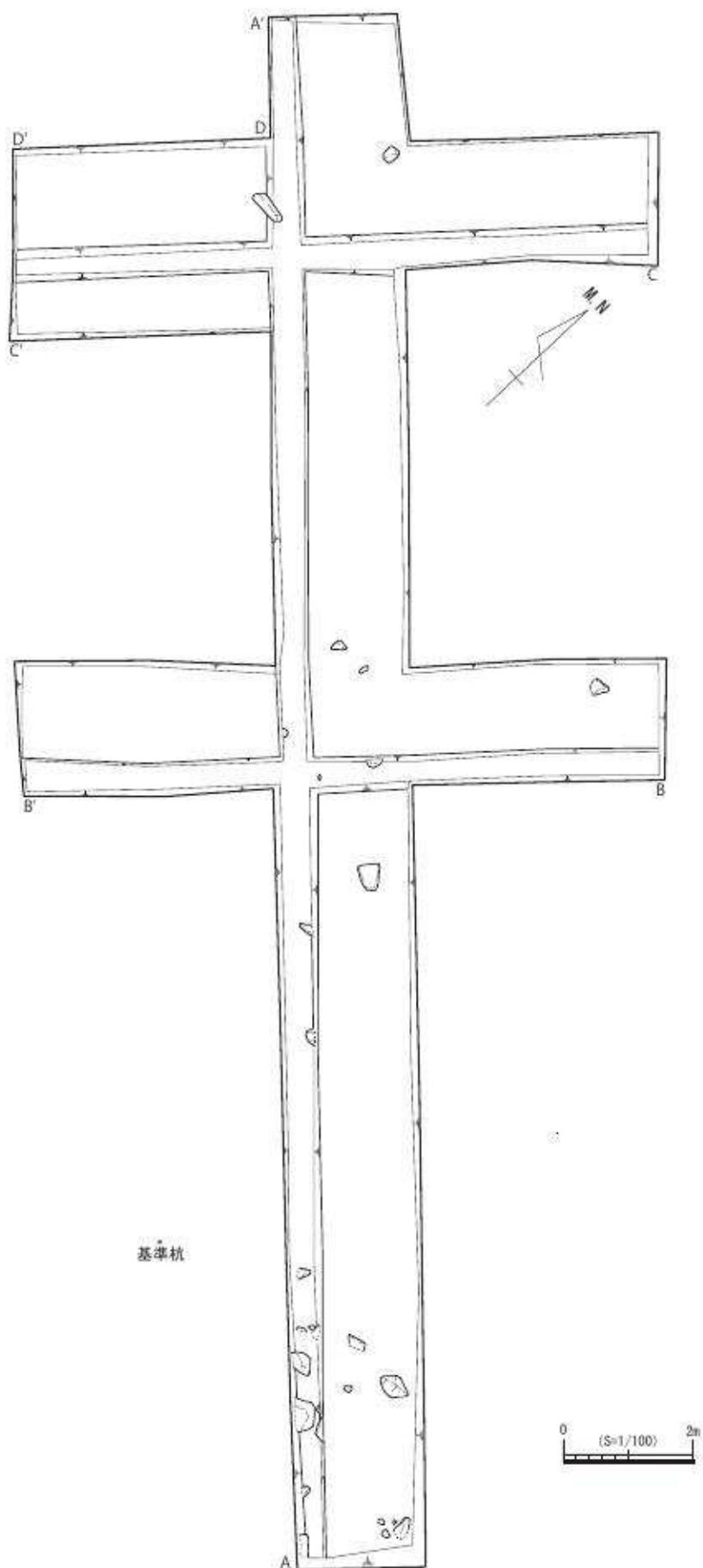
平成30年2月6日～平成30年3月30日

調査面積：14.2m<sup>2</sup> 担当：渡邊 誠・益崎卓巳

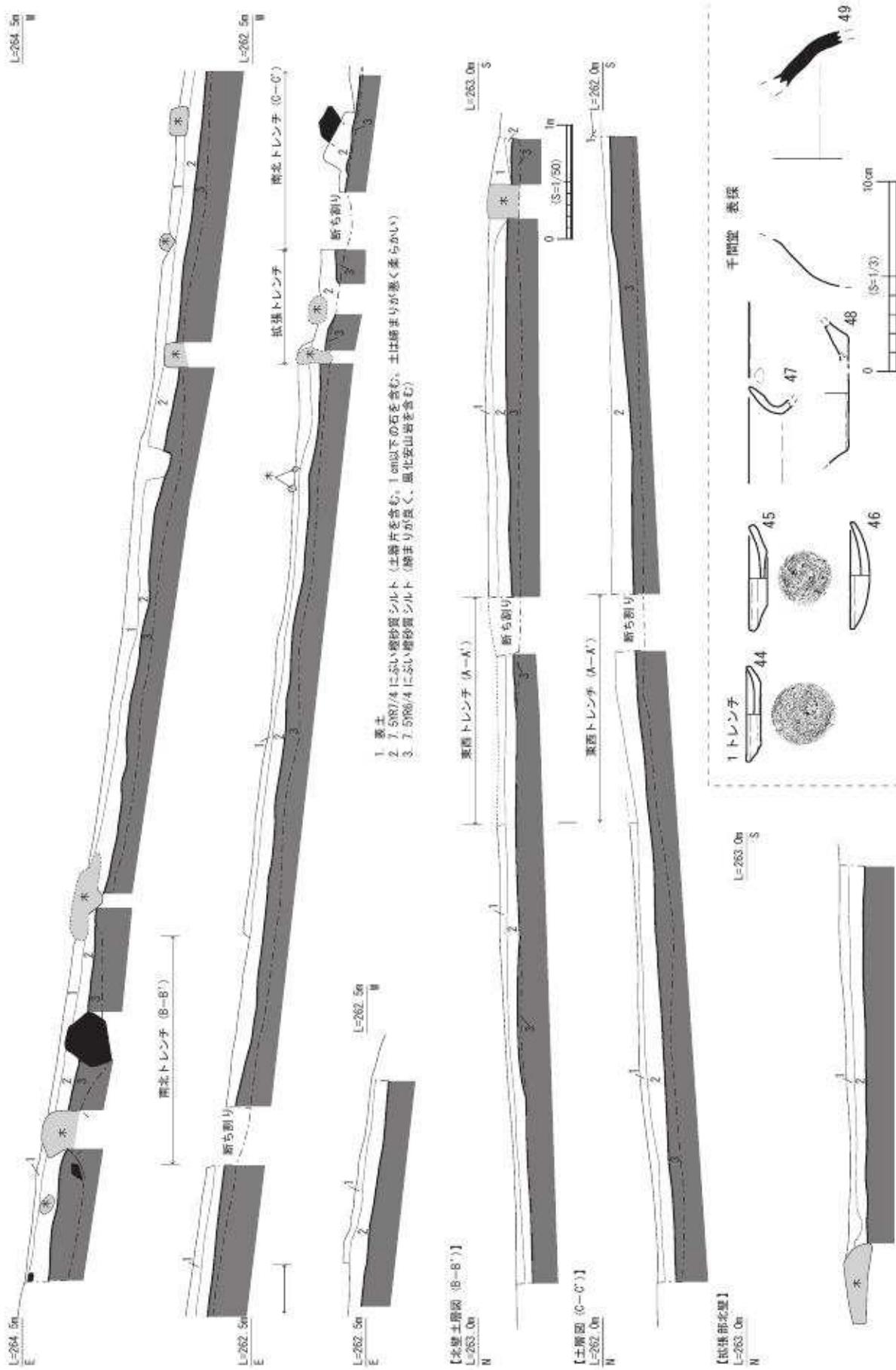
#### 2) 整理期間

本発掘調査の整理及び本書の製作は、年度ごとに担当者が実施するとともに、平成30年度にこれまでの調査成果の見直し、出土遺物の整理作業、及び本書の

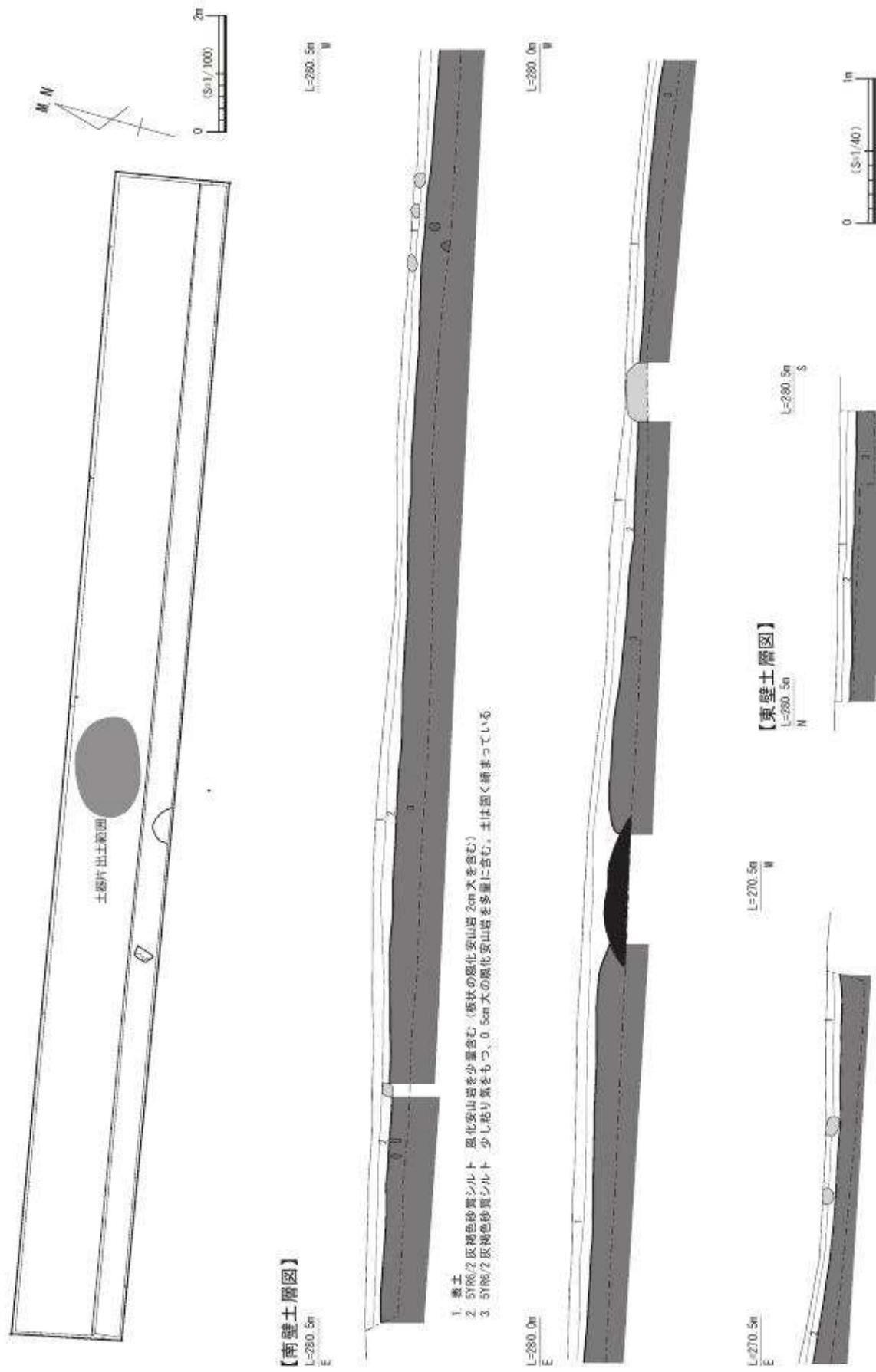
第67図 北嶺山上地区調査区位置図 ( $S = 1 / 2,250$ )



第68図 北嶺山上地区 H20-1 トレンチ平面図 ( $S = 1/100$ )

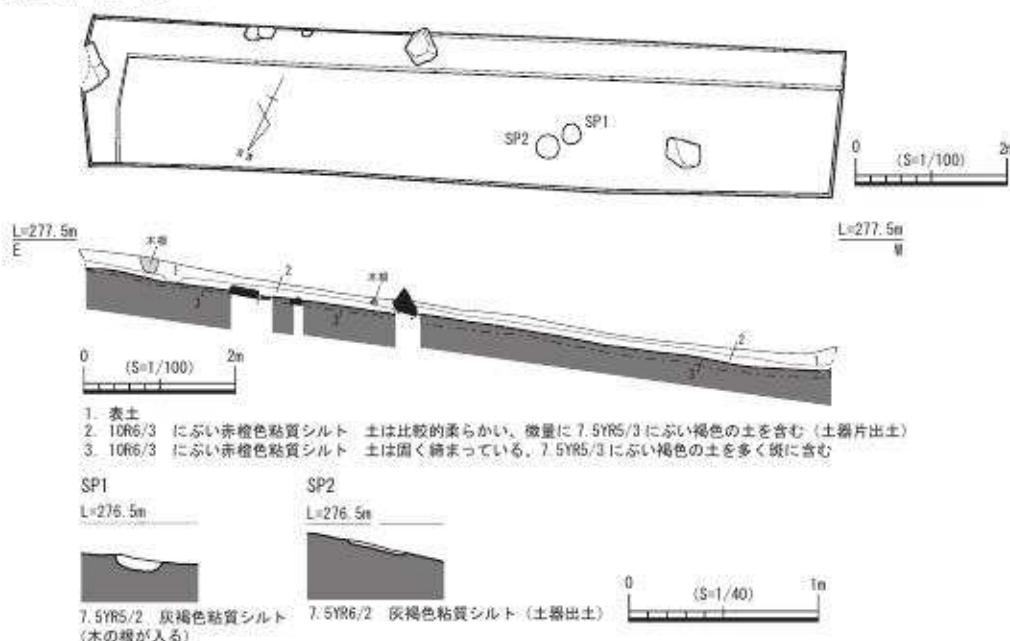


第69図 北嶺山上地区 H20-1トレンチ土層図 (S = 1 / 50)・出土遺物 (S = 1 / 3)



第70図 北嶺山上地区 H20-2 トレンチ平面図・土層図 (S = 1 / 100 • 1 / 40)

## 【第3トレンチ】



第71図 北嶺山上地区 H20-3・4トレンチ平面図・土層図 (S = 1 / 100・1 / 40)

執筆・編集作業を下記の期間で実施した。

平成30年度 平成30年4月～平成31年2月

担当：渡邊 誠

た後、人力掘削により遺構・遺物の確認作業を実施した。

北嶺山上西側の遊歩道沿いに平坦面が確認された箇所にトレンチを設定し（第67図）、北側から第1トレンチと呼称した。

### ■ 調査成果

#### 1) 屋島城跡関連調査：平成20年度

##### a) 平成20年度（第68～71図）

###### ① 調査の目的と方法

調査にあたっては、これまでの南嶺における城壁確認調査の成果を取り入れ、防御正面にあたる西側斜面の断崖上部で、面的に平坦面が確認された4箇所でトレンチを設定し、確認調査に支障のある樹木を伐採し

###### ② 調査の成果

###### a) 基本層序

###### 第1トレンチ（第69図）

表土（第1層）下位は土器片を含むにぶい橙砂質シルト（第2層）、その下が地山と考えられるにぶい橙砂質シルトで固く締まっており、風化安山岩を含む。

###### 第2トレンチ（第70図）

表土（第1層）下位は板状の風化安山岩2cm大を含む灰褐色砂質シルト（第2層）、その下が地山と考えられる灰褐色砂質シルトで固く締まっており、5mm大の風化安山岩を多量に含む。

#### 第3トレンチ（第71図）

表土（第1層）下位は土器片を含むにぶい赤橙色粘質シルト（第2層）、その下が地山と考えられるにぶい赤橙色粘質シルトで固く締まっている。

#### 第4トレンチ（第71図）

表土（第1層）下位は風化安山岩を微量に含むにぶい赤褐色砂質シルト（第2層）、その下が地山と考えられる風化安山岩を多量に含むにぶい赤褐色粘質シルトで固く締まっている。トレンチ中央部より外側では缶・ごみを含む褐色土が堆積している。公園整備事業に伴う攪乱若しくは二次堆積と考えられる。

##### い) 遺構

#### 第1トレンチ（第68図）

東西方向で1mの比高差があり、緩やかに傾斜している。遺構に伴うものではないが、トレンチの西側で上記の第2層から弥生土器が出土している。遺構は確認できなかった。

#### 第2トレンチ（第70図）

東西方向で0.6mの比高差があり、非常に緩やかに東から西に傾斜している。トレンチ中央部で弥生土器と考えられる土器片がまとまって出土している。遺構は確認できなかった。

#### 第3トレンチ（第71図）

トレンチは東西方向で1mの比高差があり、緩やかに傾斜している。西半でピットを2基確認したのみである。規模はSP1が直径25cm、SP2が直径30cmであり、深さはそれぞれ6cm・2cmと非常に浅く、削平されているものと考えられる。土層埋土はいずれも灰褐色粘質シルトである。

#### 第4トレンチ（第71図）

東西方向で1mの比高差があり、中央部から西側で岩盤が確認され、その箇所から傾斜がやや急になる。遺構は確認できなかった。

##### う) 出土遺物（第69図）

第4トレンチを除く各トレンチから出土しているが、全般に出土量は少なく、出土遺物の大半は第1トレンチからのものである。第1トレンチでは、南西部の第2層を中心に色調・胎土から弥生土器の個体と考えられる口縁部・底部片がまとまって出土している。第2トレンチでも第2層から弥生土器甕が出土してい

る。

44～46は土師質土器の小皿で、いわゆるかわら投げのかわらけである。44、45の底部外面には糸切り痕跡が認められるが、46は丸底で、型づくりである。47は弥生土器の甕の口縁部である。白色砂粒を多量に含むほか、角閃石を含んでいる。弥生時代後期後半である。48は弥生土器の甕の底部と考えられる。器面は摩耗が著しい。胎土は47に類似する。

49は千間堂周辺で表採されたもので、須恵器の壺の体部と考えられる。外面は自然釉が認められ、内面はヨコナデによる調整が認められる。

#### 2) 千間堂跡周辺の調査：平成26～29年度

まず、千間堂南側の地域を中心として、26、27年度（第72図）に調査を実施し、その後、28、29年度（第80図）に千間堂の周辺及び北側にて調査を実施した。

##### a) 平成26年度（第73～75図）

###### ①調査の目的と方法

25年度の分布調査に基づき、現在の千間堂広場の四阿の南側の森林の中に大型石材が並ぶように認められる範囲と現在の千間堂広場の地形などの状況を確認する目的で、2箇所にトレンチを設定し、人力掘削により遺構の平面・断面及び堆積状況、出土遺物などの確認を行った。一部断ち割りを実施し、土層の確認を行った。調査後は養生し、埋め戻した。

###### ②調査成果

###### a) 基本層序（第75図）

###### 第1トレンチ

北側に1.5mほど高低差があり、表土（第1層）直下に暗赤褐色粘質シルト（第3a層）の地山面を確認した。また、トレンチ南端で、花崗土やコンクリートを含む造成土等が確認され、現在の地形の一部は造成若しくは攪乱後の状況であることが判明した。

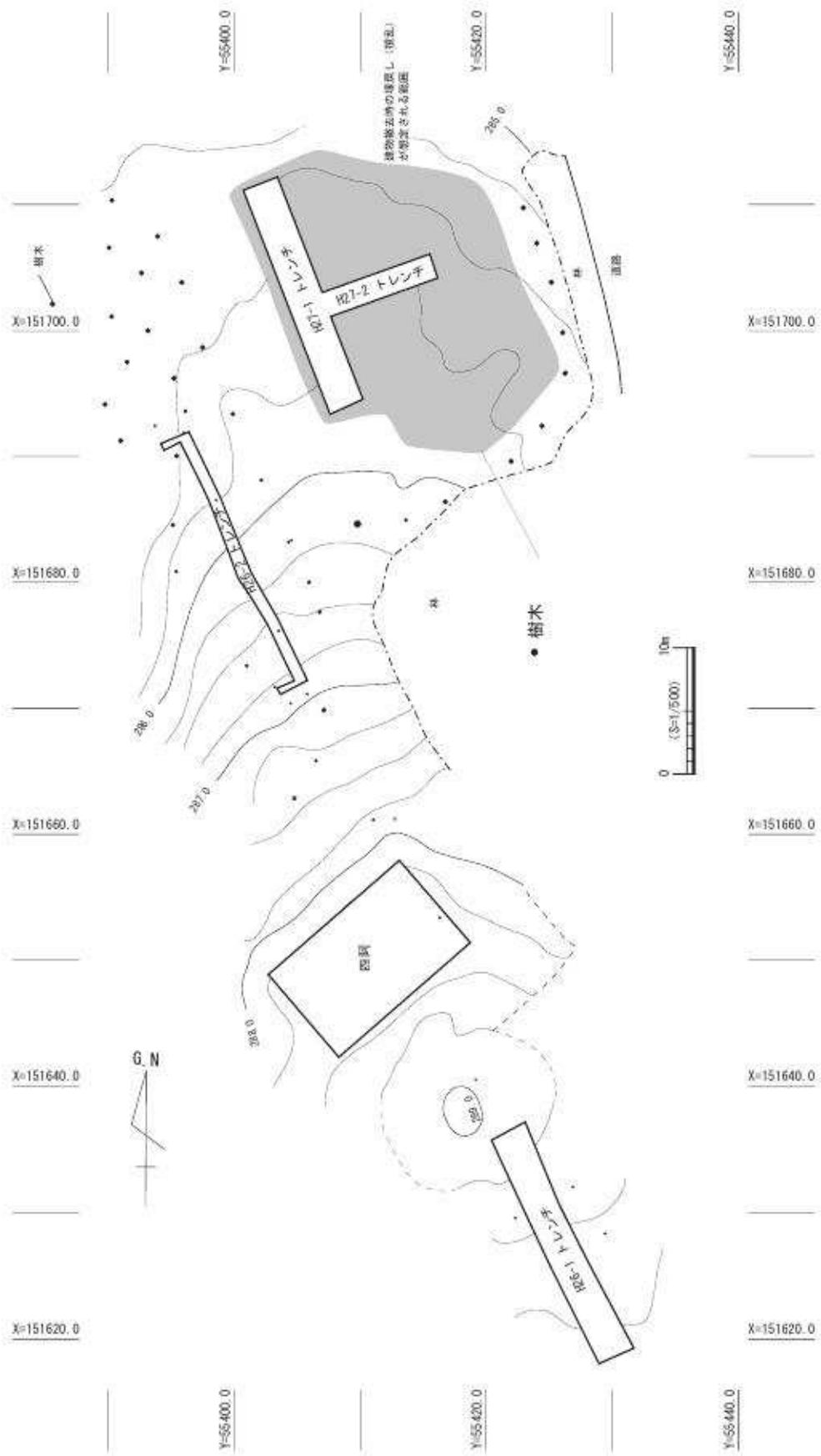
###### 第2トレンチ

南に向かって50cmほど低くなっている。表土（第1層）直下に暗赤褐色粘質シルト（第3a層）の地山面を確認した。

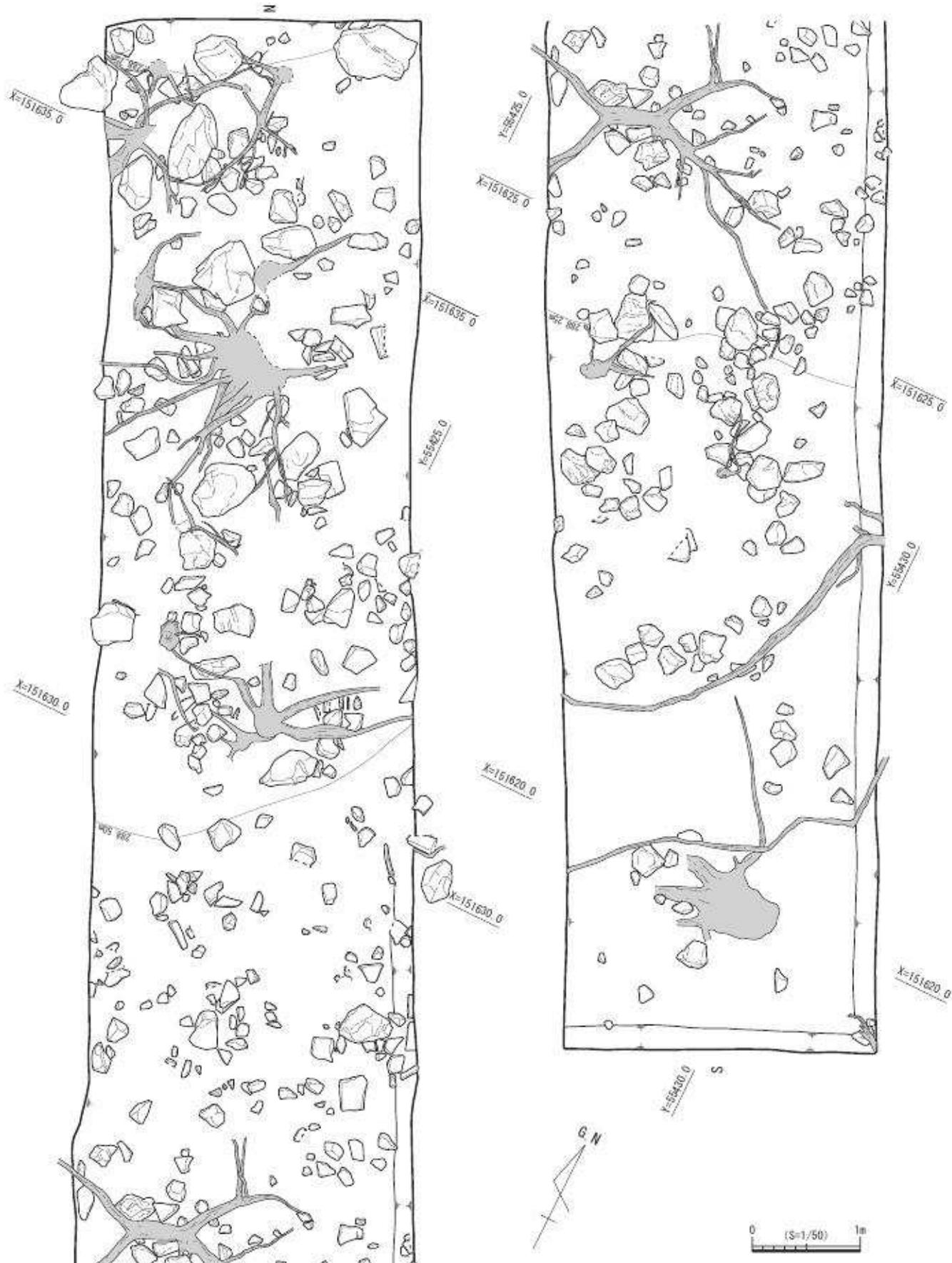
##### い) 遺構

###### 第1トレンチ（第73図）

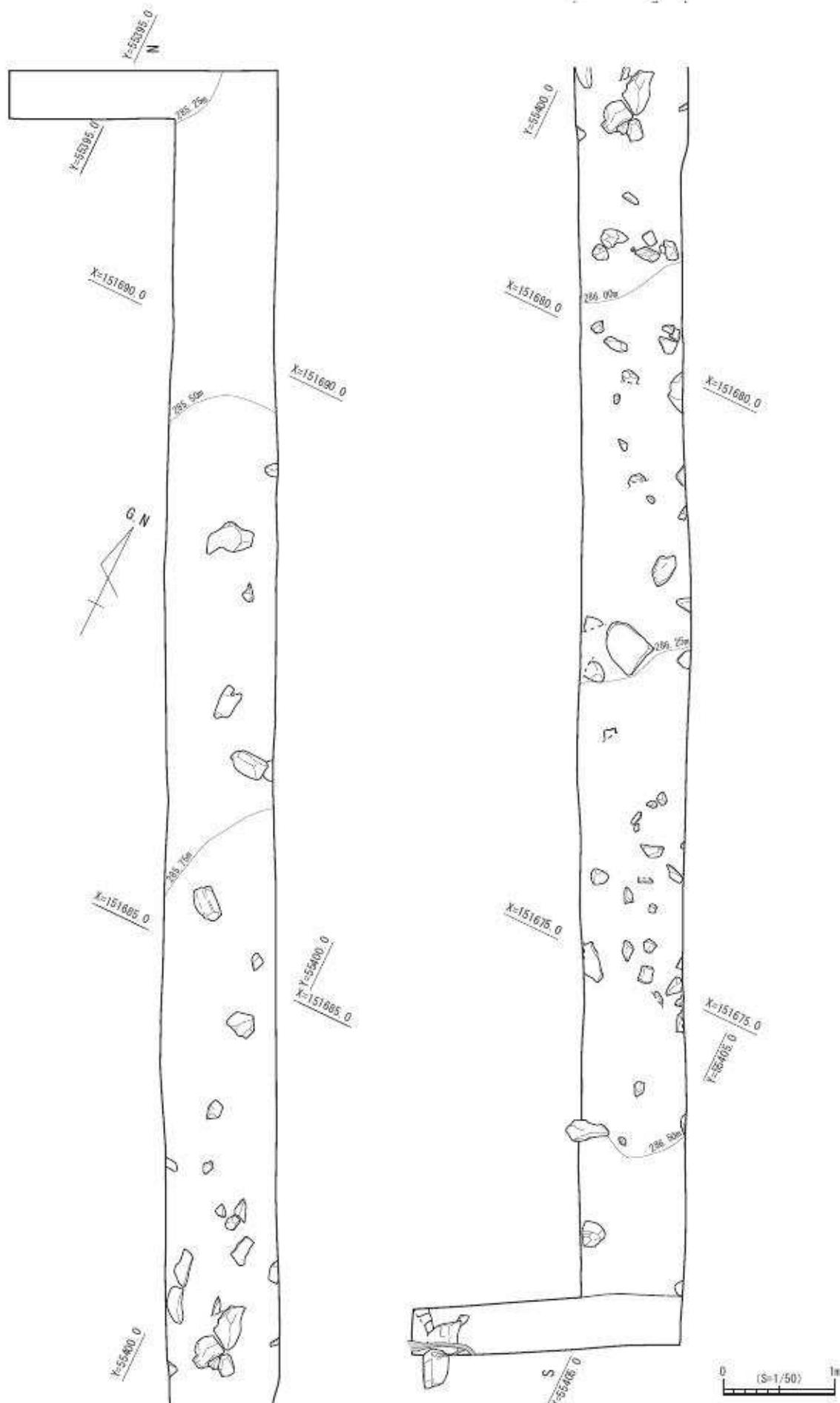
比較的平坦な面が確保できる箇所で、表面で、石列のような配置で石が露出していたことから、礎石建物跡の存在が想定されていたが、明確な建物遺構の確認



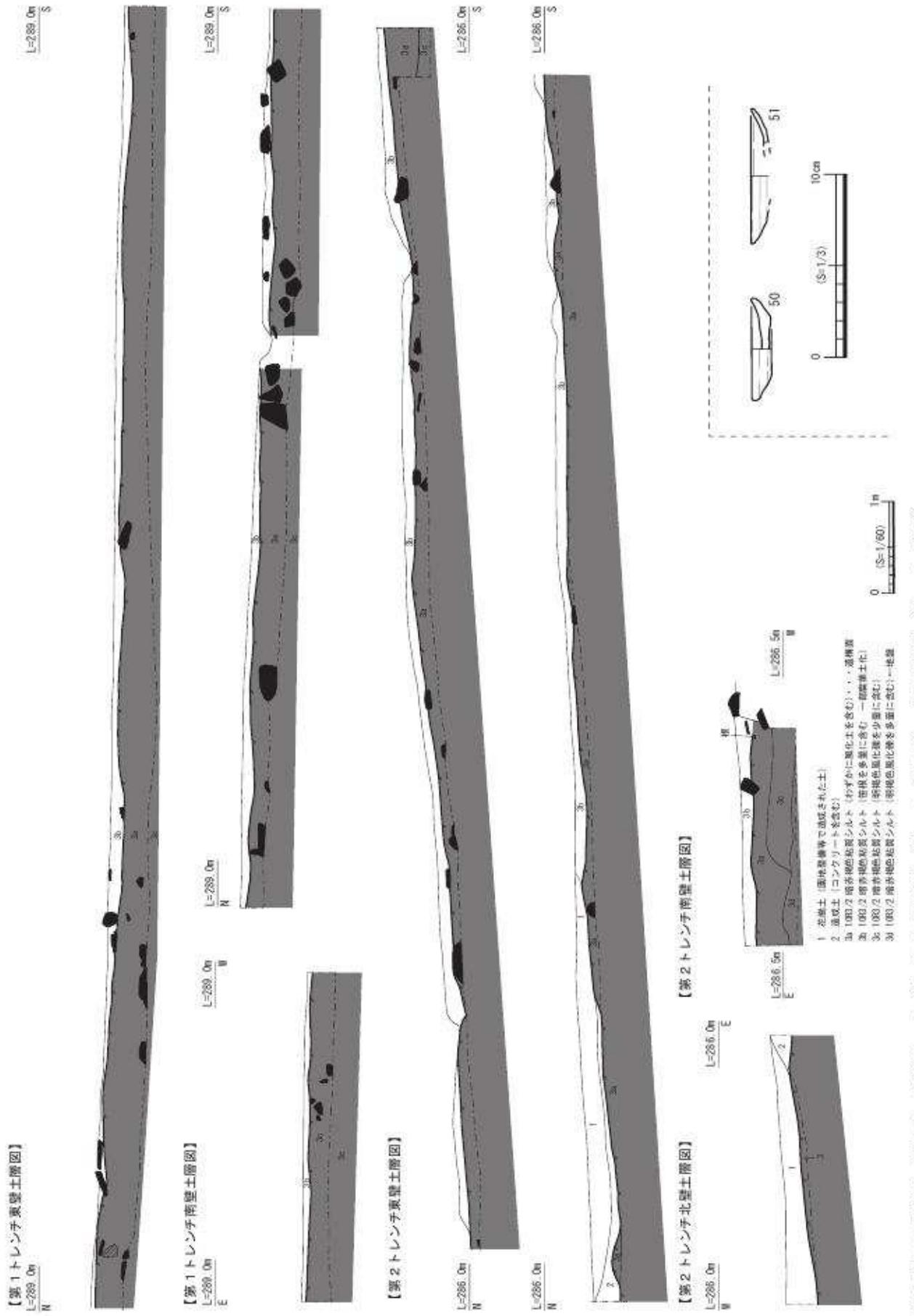
第72図 北嶺山上地区 H26・27 トレンチ位置図 (S = 1 / 500)



第73図 北嶺山上地区 H26-1 トレンチ平面図 ( $S = 1 / 50$ )



第74図 北嶺山上地区 H26-2 トレンチ平面図 (S = 1 / 50)



には至らなかった。ただし、大型石の下層に根石を敷き並べており、あたかも礎石の様相を呈するものも確認された。ただし近世以前の遺物が出土していないことからも、これまでの北嶺の調査状況とは異なり、施設等があった可能性は低いと想定した。

#### 第2トレンチ（第74図）

南から北に向かって緩やかに傾斜しており、トレンチの南北で、1.5mの標高差がある。10～30cm程度の石材が点在するが、遺構は確認できなかった。遺物の出土していない。

##### う) 出土遺物（第75図）

50はいわゆるかわら投げで使用されるかわらけで、51は備前焼の灯明皿の小片である。これらの遺物から18世紀以降と考えられる。

#### ③小結

調査目的であった千間堂跡に関連する施設は確認できなかった。また、中世以前の遺物が皆無であることから、周辺に建物等は想定しにくい。現地を管理していた古者の話によれば、昭和40年代の北嶺の環境整備時に調査区北側に四阿を設置し、周遊の遊歩道を設置する際に出た残土等を当該地周辺に残置したということから、表面から想定される石材は、その整備の際に集められた可能性が高い。現在広場として利用されている箇所は、広場を整備する際に一部、盛土や削平がなされていることも確認することができた。

#### b) 平成27年度（第76・77図）

##### ①調査の目的と方法

26年度に引き続き、屋島寺の歴史を解明すべく北嶺山上に所在する千間堂跡周辺の調査を重点的に実施したものである。ただ、27年度は千間堂広場内で環境省が施設整備を予定している箇所について確認調査を実施し、広場整備以前の状況を確認することとした。ただし、当該箇所は近年まで建物（茶屋千軒（うどん屋））があった場所である。

調査は、まず、T字型にトレンチを設定し、人力掘削により遺構の平面・断面及び堆積状況、出土遺物などの確認を行った。一部断ち割りを実施し、土層の確認を行った。調査後は埋め戻した。

##### ②調査成果

###### あ) 基本層序（第77図）

###### 第1トレンチ（南北トレンチ）

トレンチの約1/2で地山（遺構面）が残存する範囲を確認した。その範囲では、表土及び造成土（攪乱土）の下で赤灰色粘質シルトの地山（第6層：遺構面）を確認でき、当該箇所では、表土、攪乱（第2層）、地山起源の灰赤色粘質シルト（第3層）、旧表土と考えられる暗灰赤色シルト（時代不明：第4層）の堆積層を確認した。一方攪乱は、表土から80cm程度まで及んでおり、想定以上に大規模であることが明らかとなった。

###### 第2トレンチ（東西トレンチ）

堆積状況は第1トレンチと同様ではあるが、トレンチ西側の一部で地山を表土から40cm下で確認できたが、それ以外は攪乱であった。東端のサブトレンチでは攪乱が表土から90cm以上及んでいることが明らかとなった。

##### い) 遺構（第76図）

2つのトレンチとともに、当該地に所在した茶屋千軒の基礎及び建物解体工事によって、地山（遺構面）が大規模に攪乱されており、第1トレンチの西側約1/2程度、第2トレンチの西部の一部のみで地山面を確認することができる程度であった。第1トレンチでは、その範囲においてピットと考えられる遺構を1基確認したが、出土遺物はなく、時期及び遺構の性格については不明である。遺構及び遺物は極めて希薄である。

##### う) 出土遺物

攪乱から現代の磁器の破片のほか、須恵器片1点が出土したが、時期等は不明である。

#### ③小結

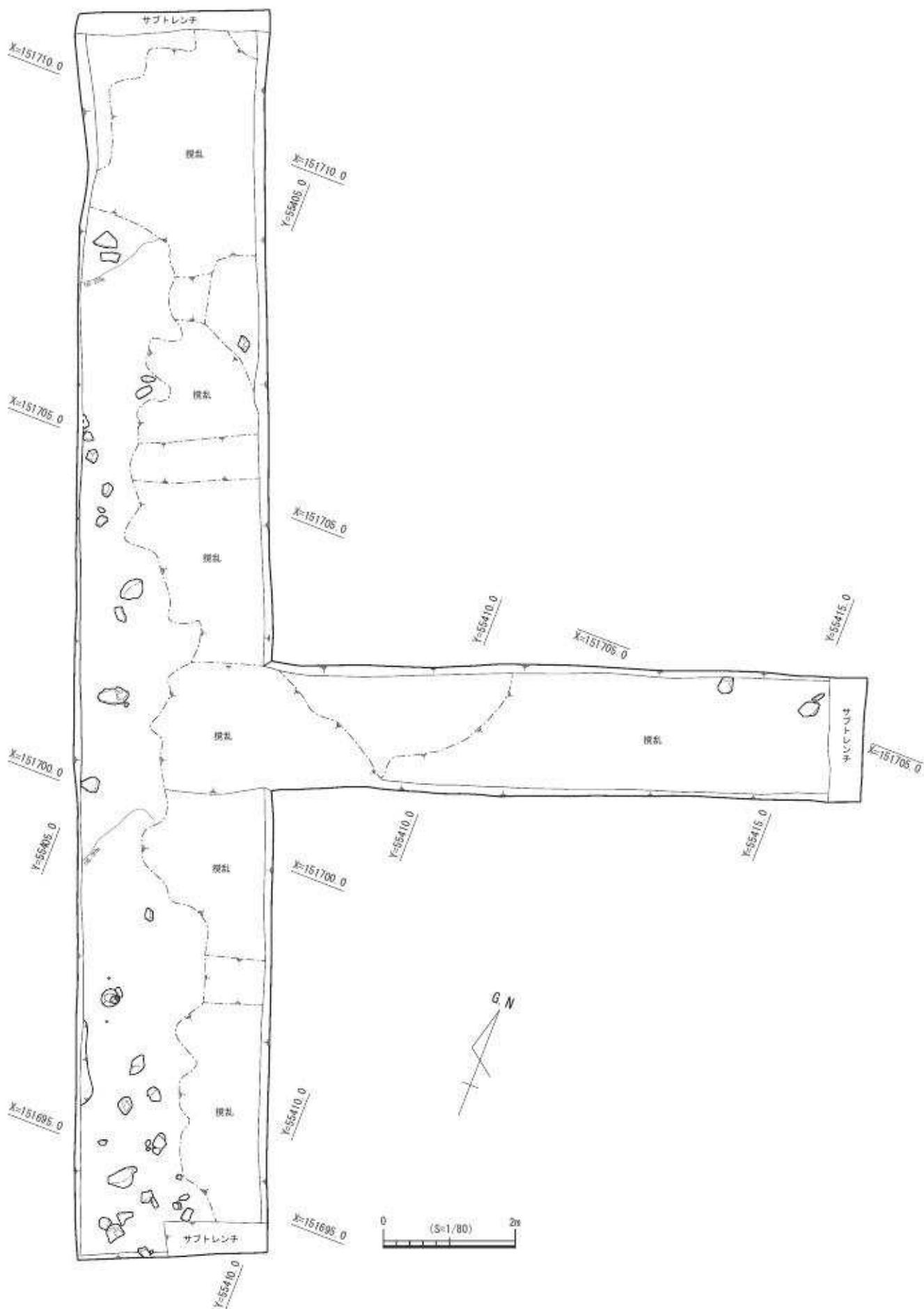
環境省によって施設整備が計画されている範囲は、以前に所在した茶屋千軒によって大規模に攪乱されていることが判明した。また、当該地を知る方の話によれば、第1トレンチより東側は大規模な掘削を行って貯水槽を設置していたとのことである。第2トレンチ東端におけるサブトレンチ調査でも、地表面から90cm以上の攪乱が及んでいることを確認しており、第1トレンチより東側は大規模に攪乱されていると想定される。

以上のような点から、当該地に遺構及び遺物が遺存している可能性は極めて低いと考えられる。

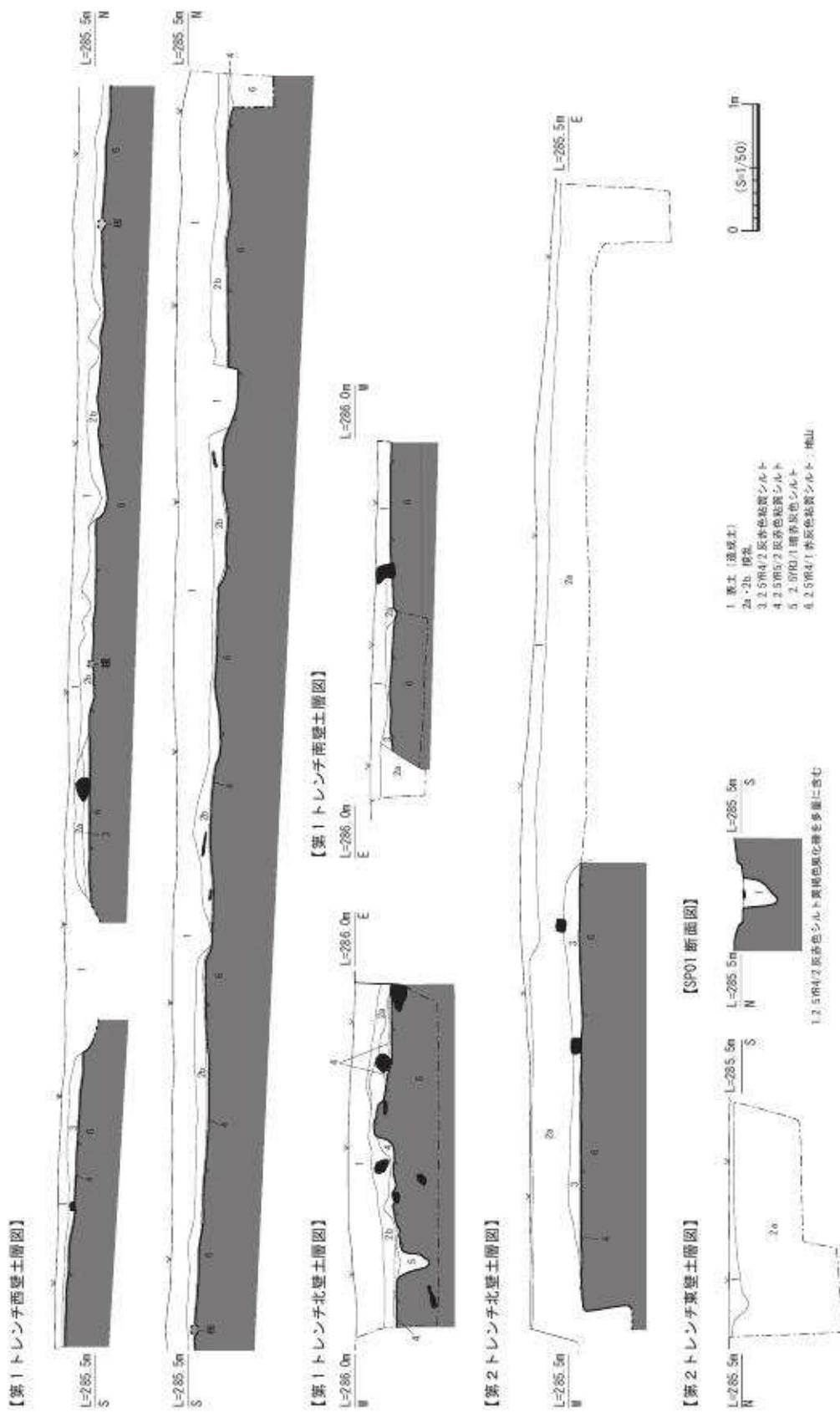
#### c) 平成28年度（第78～83図）

##### ①調査の目的と方法

12年に確認された礎石建物跡以外に礎石建物跡の有無を目的に、礎石建物跡の北側の大型石材が分布す



第76図 北嶺山上地区 H27 トレンチ平面図 ( $S = 1/80$ )



第77図 北嶺山上地区 H27 レンチ土層図 (S = 1 / 50)

る箇所（第1トレンチ）と隣接する南側の平坦地（第2トレンチ）で発掘調査を実施した。調査は、人力掘削により遺構の平面・断面及び堆積状況、出土遺物などの確認を行った。一部断ち割りを実施し、土層の確認を行った。調査後は埋め戻した。

## ②調査成果

### あ) 基本層序

#### 第1トレンチ（第8-2図）

上層から表土（第1層）、その下に、遺物を包含する灰褐粘質土（第2層）を確認し、さらにその下ににぶい赤褐粘質土（第3層）の地山となる。部分的に断ち割った箇所で、その下層に安山岩及び風化礫を含むにぶい赤褐粘質土が認められる。

#### 第2トレンチ（第8-2図）

上層から表土（第1層）、その下に、炭化物・遺物を包含するにぶい黄橙色粘質シルト若しくは灰黄褐色粘質シルト（第2層）を確認し、さらにその下ににぶい黄橙色粘質シルト（第3層）の地山となる。部分的に断ち割った箇所で、その下層に粘性の強い黄褐色粘質シルトが認められる。

後述する黄橙色シルトが地山の上で確認でき、遺物を含むことから上層の一部が盛土である可能性が想定された。

### い) 遺構

#### 第1トレンチ（第8-1図）

トレンチは東から西へと緩やかに傾斜しており、地

面で東と西で0.7mほどの標高差がある。大型石材が点在していたため、建物の可能性を想定していたが、建物跡は確認することができなかった。土師器の甕と考えられる破片が、比較的まとまって出土した。当該トレンチの東側はより平坦な地となるので、隣接地に建物等が展開する可能性が想定された。

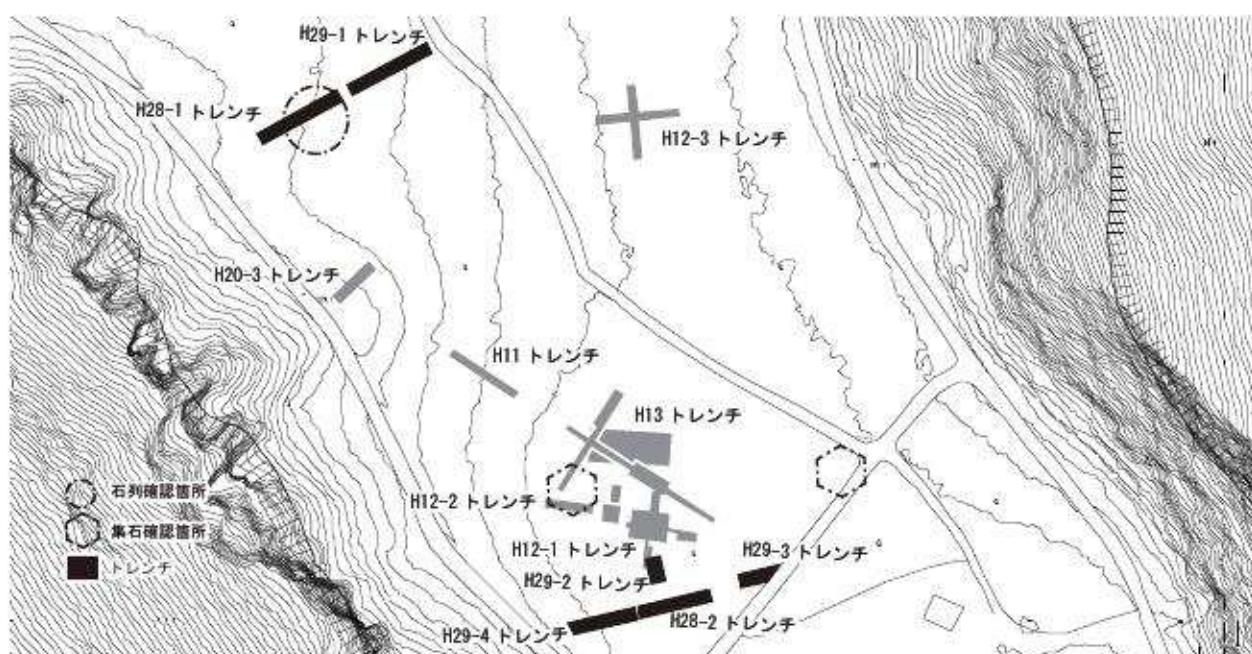
#### 第2トレンチ（第8-1図）

平坦地が広がっていることから、建物跡が所在する可能性があったが、遺構は確認できなかった。ただし、遺物を包含する地山起源の土（第2a層）を確認した。これは盛土の可能性があったが、申請した調査範囲に広がっていることが明らかであったので、掘り下げは行わず、次年度以降にこの広がりを確認することとした。

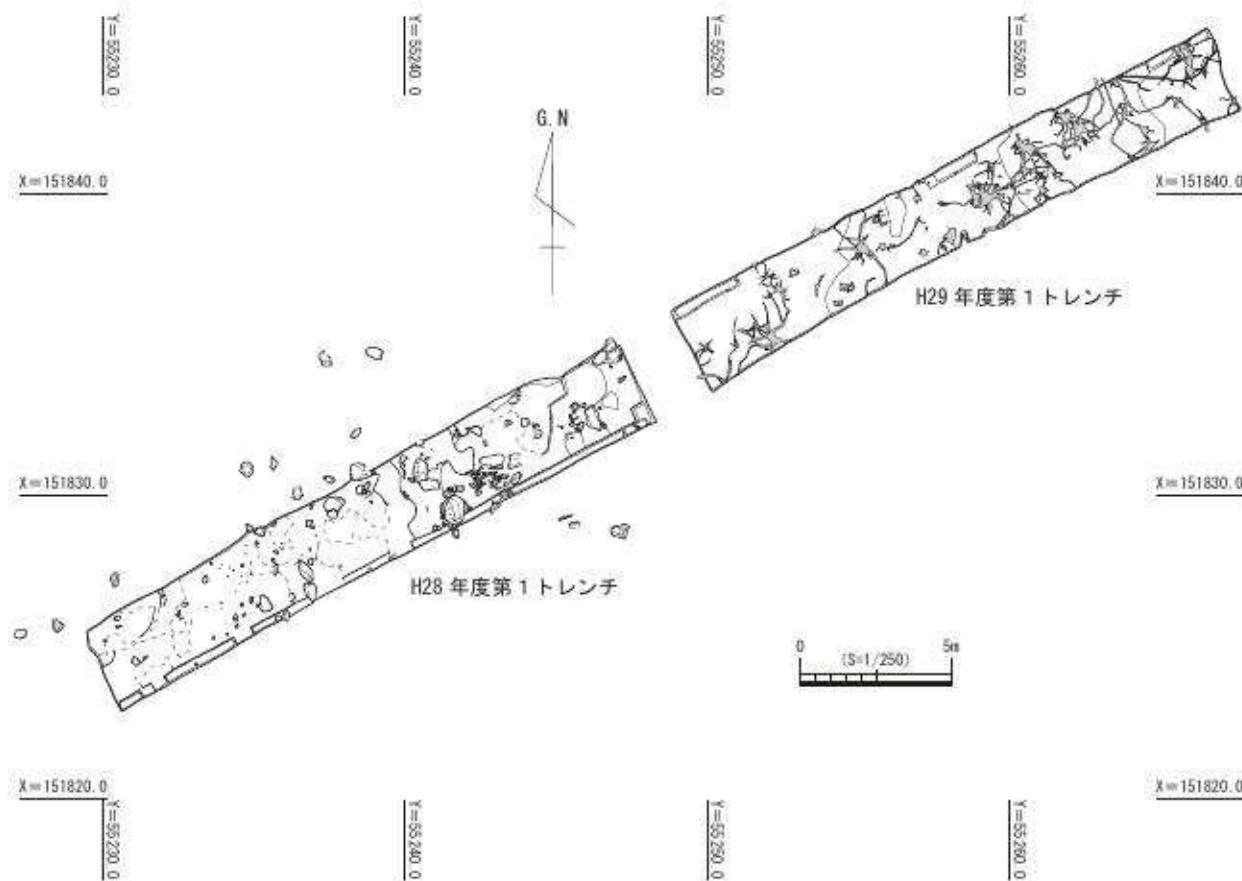
なお、第2トレンチでは地山の土質が周辺と異なることが判明した。通常は屋島特有の安山岩の風化土で赤褐色を呈するが、本調査区で確認できた土質は黄褐色シルトであった。香川大学長谷川修一教授に現地を確認していただき結果、南嶺に所在する屋島疊層に似た経緯（安山岩形成後に、周辺から流れてきて堆積したもの）で形成された堆積土が局所的に残存したものの可能性が高く、今後、その広がりを解明していく必要性も生じた。

### う) 出土遺物（第8-3図）

第1トレンチからは多数の土師器片、第2トレンチからは9世紀中頃以降と考えられる須恵器の杯や蓋等が出土した（第8-3図）。第1トレンチ出土の土師器は



第78図 北嶺山上地区 H28・29トレンチ位置図 (S = 1 / 1,600)

第79図 北嶺山上地区 H28-1・29-1 トレンチ位置図 ( $S = 1 / 250$ )

風化が著しく、部位を特定できるものはない。

#### 第1トレンチ

6.2は弥生時代後半以降の甕の口縁部と考えられる。白色砂粒と雲母を多量に含む。表面は磨滅が著しい。

#### 第2トレンチ

5.2～5.4は須恵器の蓋で、いずれも小片で、非常に扁平である。5.3・5.4はややいびつな形状のものもあるが、9世紀中頃のものと考えられる。5.5～5.7、5.9～6.1は須恵器杯の口縁部等の破片である。5.5、5.7、6.0、6.1は、やや厚手で、青灰色を呈し、白色砂粒、黒色砂粒を含む。形状から9世紀中頃のものと考えられる。それ以外の杯は淡灰褐色を呈し、薄手でやや内湾気味の杯部の形状である。いずれも破片のため、判断が難しいが10世紀前半以降のものと考えられる。5.8は椀の口縁部片と考えられる。

#### 表採

6.3・6.4は土師器の小皿で、いわゆるかわら（かわらけ）投げで使用されているものである。ヨコナデ整形で、底部には糸切痕跡が残る。いずれも明橙褐色を呈する。

以上のほかに、第2トレンチから炭化材と鉄滓と考えられるものが3点ほど出土している。12年度の調査でも鞆の羽口と考えられる破片が出土している。

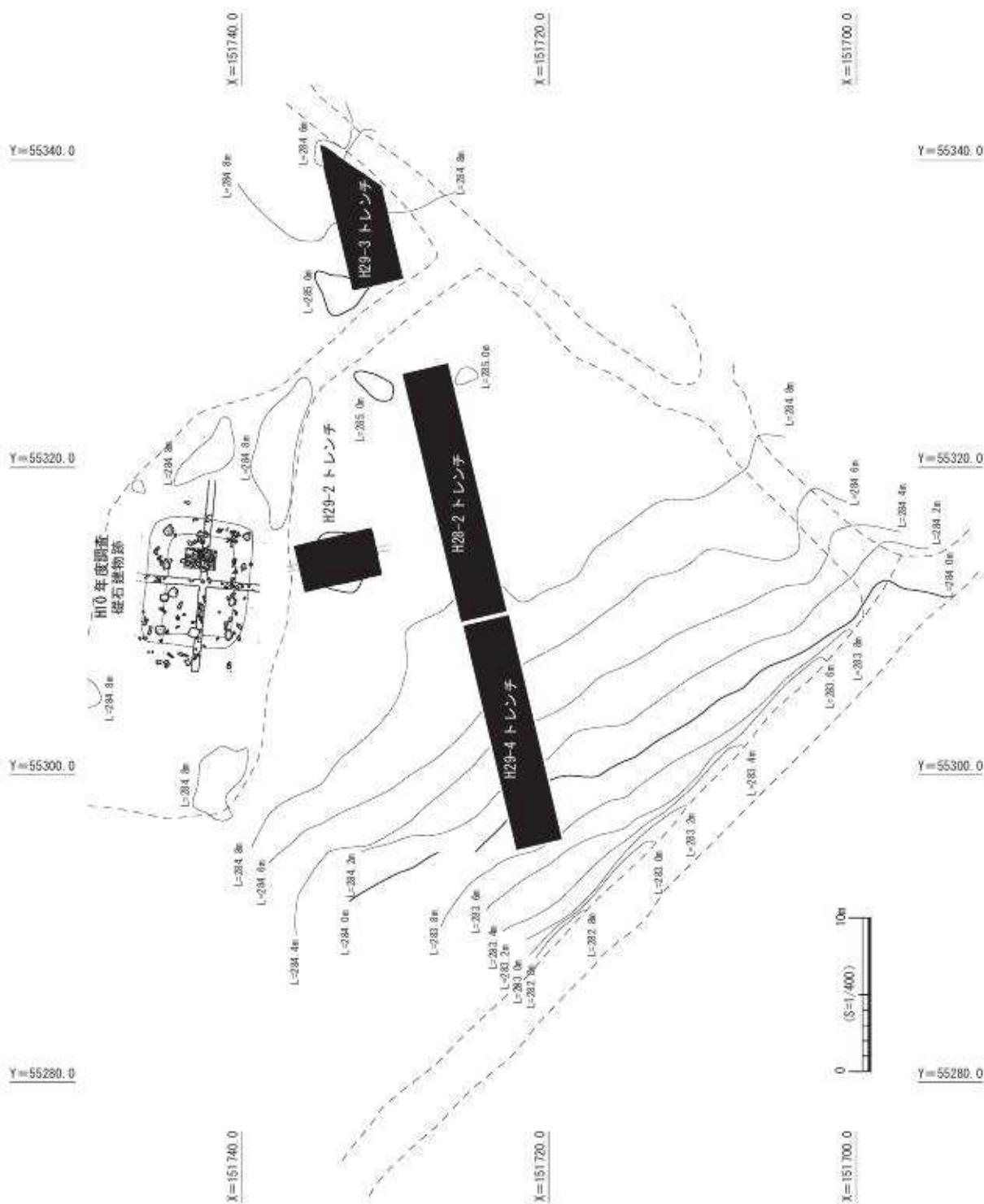
#### ③小結

調査目的であった千間堂跡のような礎石建物跡を確認することはできなかったが、遺物がまとまって認められたことから、近隣に施設が存在した可能性をうかがい知ることができた。また、第2トレンチでは、本調査の目的ではないが、花崗岩起源の堆積物を確認することができ、南嶺山上の屋島疊層に類似する堆積土を確認することができた。天然記念物屋島としての新しい価値を付与する成果を上げることができた。

#### d) 平成29年度 (第84～89図)

##### ①調査の目的と方法

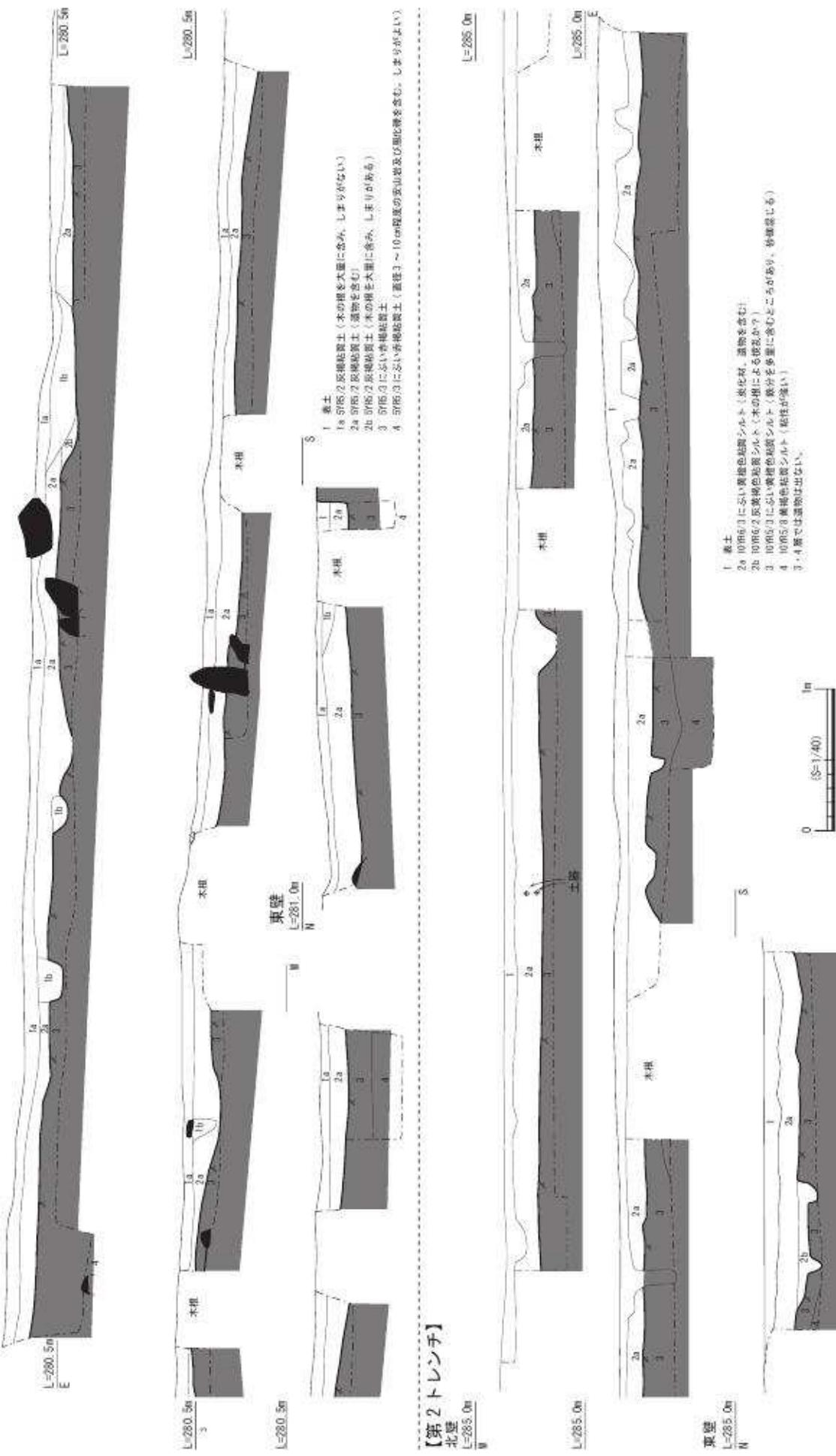
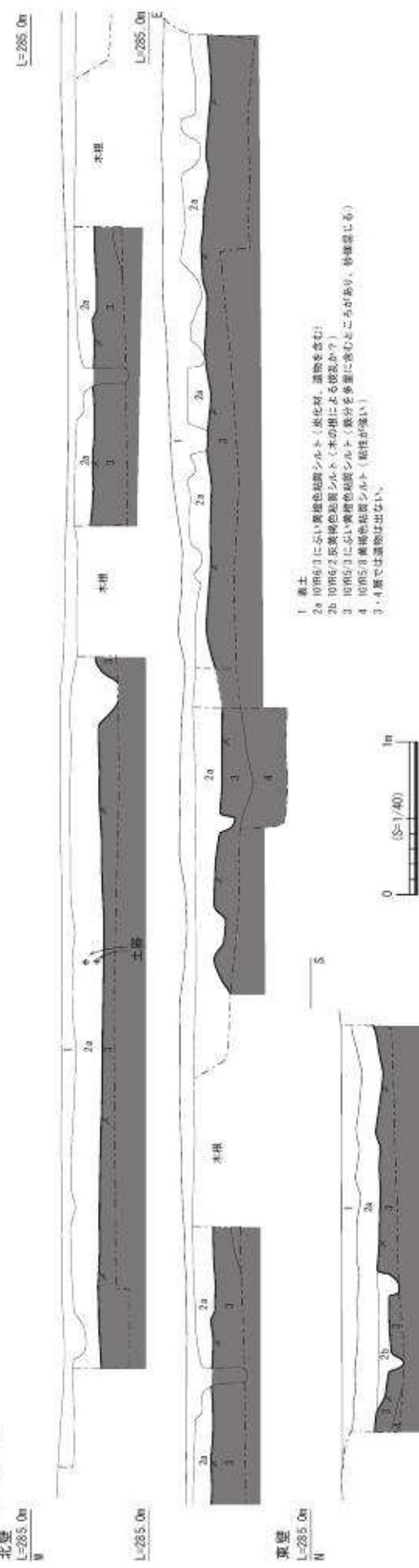
28年度の調査成果を受け、千間堂跡周辺の4箇所で発掘調査を実施した。28年度の第1トレンチの東側の隣接地のトレンを第1トレンチ、28年度の第1トレンチで確認された盛土の範囲の特定と屋島疊層に類似するような、安山岩形成以後の堆積物の分布範囲



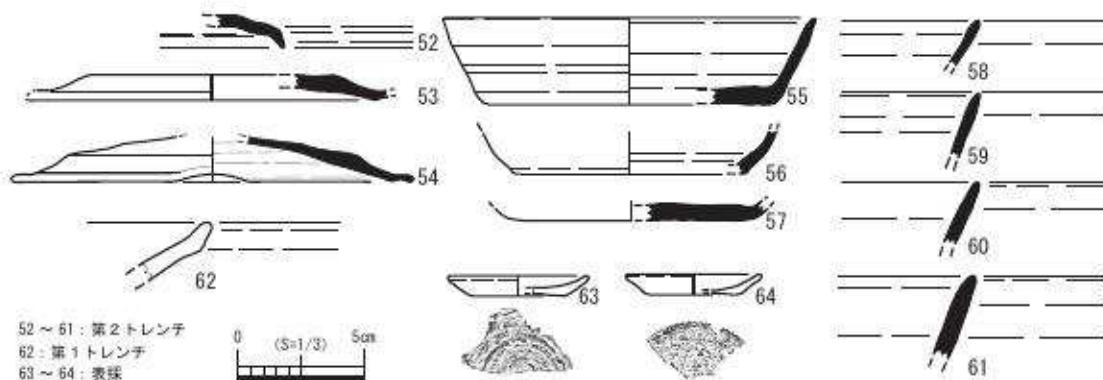
第80図 北嶺山上地区 H28-2・29-2～4レンチ位置図 (S = 1/400)



第81図 北嶺山上地区 H28トレーニング平面図 (S = 1 / 100・1 / 80)

【第1 レンチ】  
南壁【第2 レンチ】  
北壁

第82図 北嶺山上地区 H28 レンチ土層図 (S = 1 / 40)



第83図 北嶺山上地区 H28 トレンチ出土遺物 (S = 1/3)

の特定を目的としたものを第2～4トレンチとした。なお、第2トレンチは12年度の礎石建物跡南トレンチに近接するものと考えられるが、調査時には既存の調査のトレンチは確認できていない。調査は人力掘削により遺構の平面・断面及び堆積状況、出土遺物などの確認を行った。一部、遺構の断割りを実施し、土層の確認を行った。調査後は埋め戻した。

## ②調査成果

### あ) 基本層序

#### 第1トレンチ（第85図）

表土（第1層）直下に灰赤色粘質シルトの地山（第2・3層）を確認した。さらに掘り下げると、褐色礫を含む灰赤色粘質シルト（第4層）となる。

#### 第2トレンチ（第86図）

表土（第1層）直下に遺物を包含する堆積層があり、その下層が地山若しくは地山起源の土によるにぶい黄橙色粘質シルトの盛土層（遺物は含まない。第4b～d層）があり、この層が、28年度の調査の第2a層に相当するが、2a層は遺物を包含していた。地山はにぶい黄橙色粘質シルト（第6層）で、28年度調査の第3層に相当する。

#### 第3トレンチ（第87図）

表土（第1層）の下に、灰黄褐色粘質シルト（第2層）が確認でき、さらにその下に遺物を包含しないにぶい黄橙色粘質シルト（第3層）がある。この層が盛土と考えられ、28年度調査の第2a層に相当するが、2a層は遺物を包含していた。さらにその下の角礫を含むにぶい黄橙色粘質シルトが地山である。

#### 第4トレンチ（第88図）

表土（第1層）の下に、にぶい黄褐色粘質シルトや

灰褐色粘質シルト（第2層）が確認でき、特に2a～c層は炭化材や遺物を含み、28年度調査の第2a層に相当する。これらは、トレンチの中央よりやや西側で認められなくなり、概ね等高線が少し密集してくる箇所と一致している。さらにその下に礫混じりにぶい黄橙色粘質シルト（第3層）があり、この層が盛土と考えられる。さらにその下の茶褐色・赤褐色の5～20cm風化礫を含むにぶい黄橙色粘質シルト若しくは灰褐色粘質シルトが地山である。

第2～4トレンチでは、28年度に確認された屋島礫層に似た土（花崗岩系の風化礫か）の分布範囲を確認することを目的として調査を実施したが、明確な範囲を限定することはできていない。その中で第4トレンチでは西に向かって、花崗岩系の風化土から安山岩系の風化土に変化することを確認できたが、その変化は非常に漸移的であった。また、盛土層については、礎石建物跡周辺で確認でき、第3トレンチのように、地表面の凹凸と一致した。東西の広がりについては範囲を限定することができた。

### い) 遺構

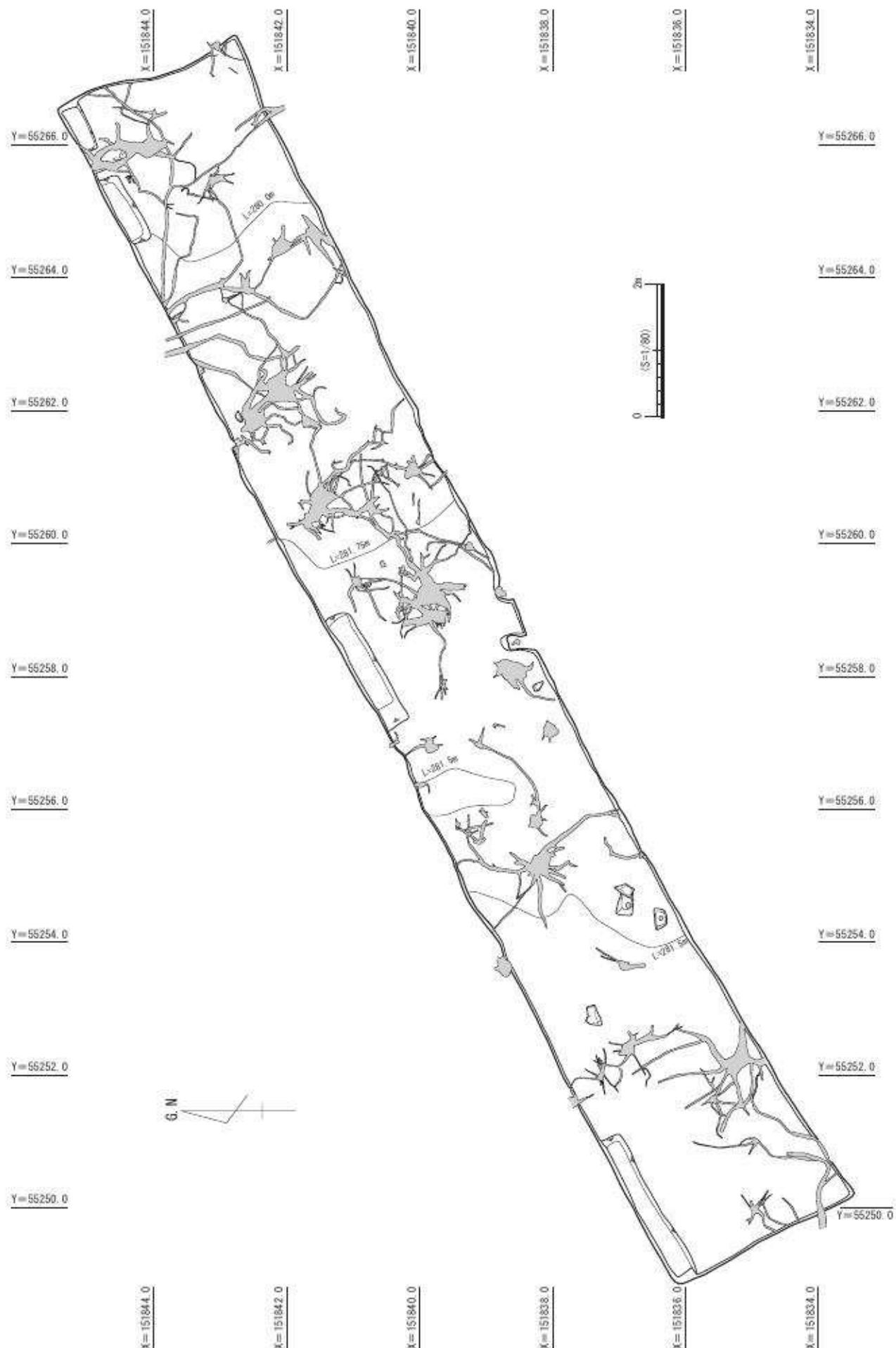
#### 第1トレンチ（第84図）

遺構は確認していない。石材の点在を確認することができたが、礎石などの遺構ではないと考えられる。

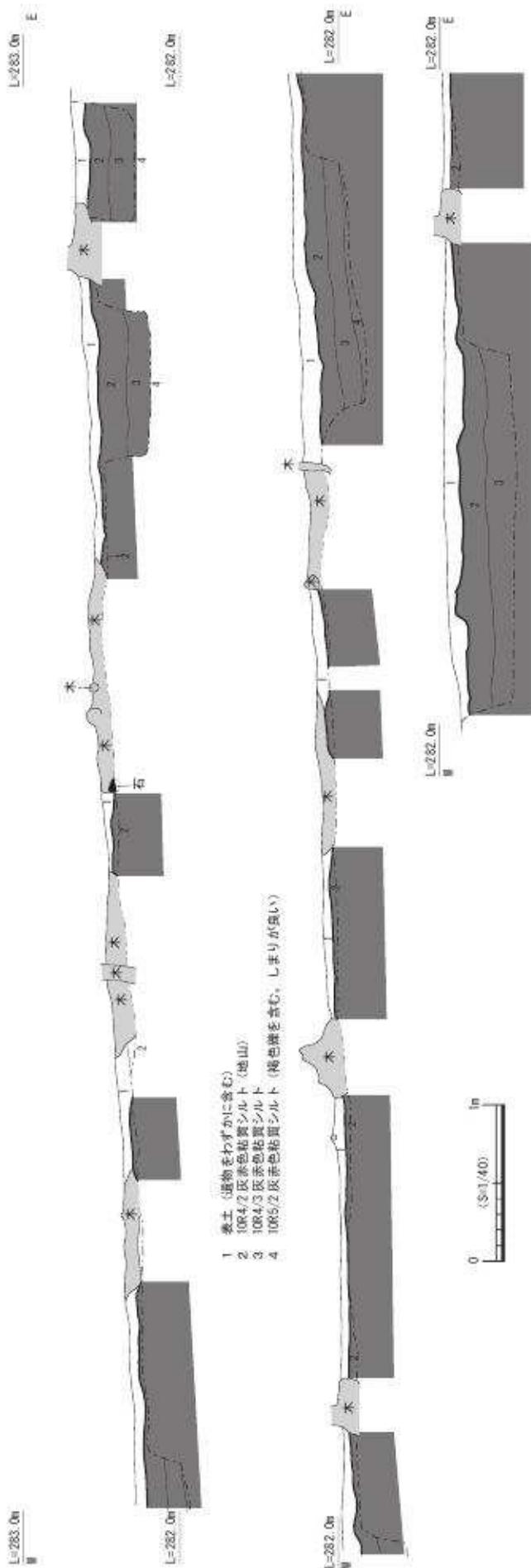
#### 第2トレンチ（第86図）

### ●SK1

過去の調査で確認した平安時代の礎石建物跡の南面に位置し、礎石列に平行するように東西方向の溝若しくは土坑と考えられる遺構を確認した。樹木のため、遺構の広がりは明確にできなかったが、現地形から延長が3mほどと考えられる。部分的ではあるが壁面が赤く焼けている箇所があり、埋土には多量の炭化材と



第84図 北嶺山上地区 H29-1 ドレンチ平面図 ( $S = 1 / 80$ )



第85図 北嶺山上地区 H29-1トレシチ土層図 (S = 1 / 40)

碎片化した土器片を含む。

また、この遺構の南北（礎石建物跡に向かって前後）方向で地山起源の盛土を確認しており、この盛土の広がりは礎石建物跡に平行して東西方向に認められ、第3トレシチでも確認している。ただし、南側は現地形からは明らかではない。

このほかにピットを確認するとともに、石材が散布していることを確認したが、石材については表土直下で、少し浮いた状況で検出していることから、2次的にもたらされたものと考えられる。

#### 第3トレシチ（第87図）

遺構は確認していない。トレシチ中央部で、段状の落ちを確認することができ、造成土の東端の可能性が考えられる。

#### 第4トレシチ（第88図）

遺構は確認していない。

#### う) 出土遺物（第89図）

いずれのトレシチにおいても、表土直下から遺物が出土している。なお、第2トレシチでは、遺構及び堆積層に多量の遺物の細片を含む。出土遺物はいずれも細片であるため、時期を比定できるものはない。

#### 第2トレシチ

##### 表土掘削時

65は須恵器の皿の破片である。

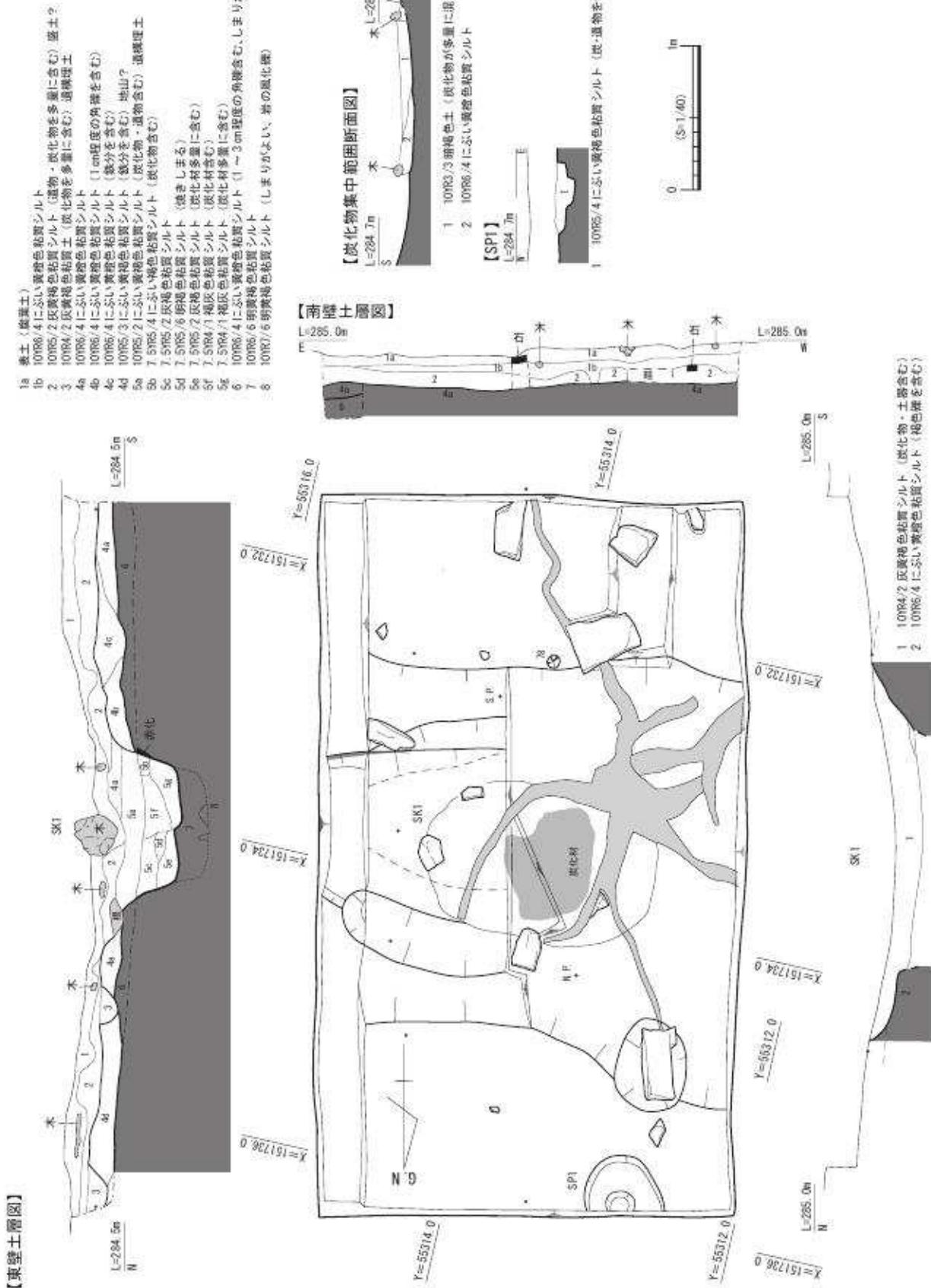
##### 第2層

66は土師器の小皿である。67は土師器の杯である。68は弥生土器の甕の底部と考えられる。橙褐色を呈し、白色砂粒を多量に含む。69は土師質土器の甕若しくは鉢の口縁部片と考えられる。外面は刷毛目調整で、内面は横方向の刷毛目調整で仕上げている。70は須恵器の甕の体部片である。外面は格子目叩き、内面はナデ調整で仕上げる。一部指押さえが残る。

##### 木の南側一段下げ

71は土師器の小皿である。器壁の磨滅が著しい。72は土師器の杯と考えられる小片である。73は須恵器の杯の破片である。底部切り離しはヘラ切りである。74は須恵器杯の小片である。

##### 中央部一段下げ



第86図 北嶺山上地区 H29-2 トレンチ平面図・土層図 (S = 1 / 40)

第87図 北嶺山上地区 H29-3 トレンチ平面図・土層図 ( $S = 1/60$ )

7.5は土師器の杯の小片である。器壁の磨滅が著しいが、ヨコナデによる整形痕跡が認められる。

#### 清掃時

7.6は土師器の杯である。小片のため詳細は不明である。

#### 遺構面取り上げ

7.7は須恵器の多口瓶の肩部片である。多口瓶特有の突帯がめぐっている。胎土が粗い点が特徴的である。

7.8は土師器の杯である。器壁の磨滅が著しい。

#### SK1

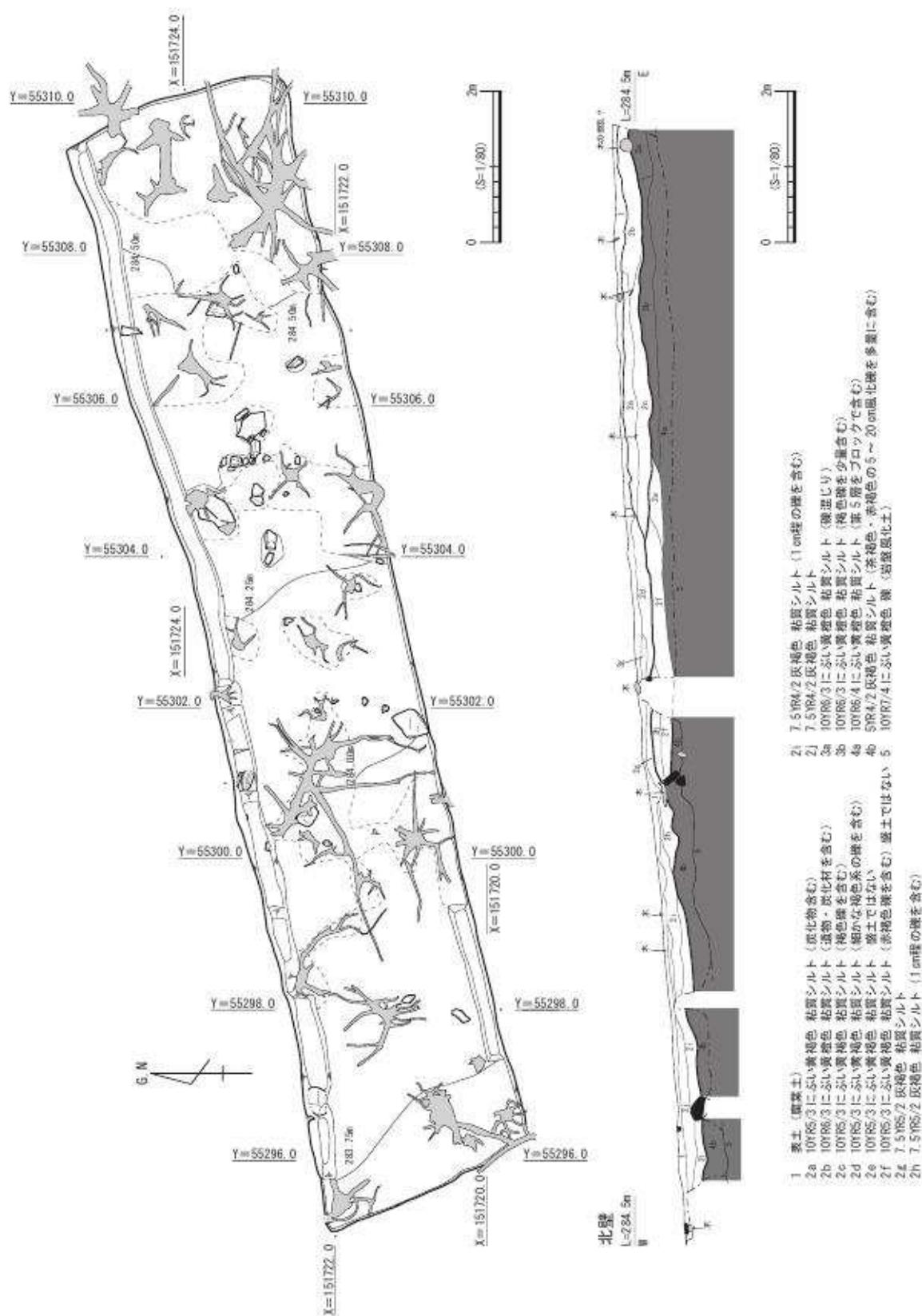
7.9は須恵器の杯の小片である。

#### 第3トレンチ

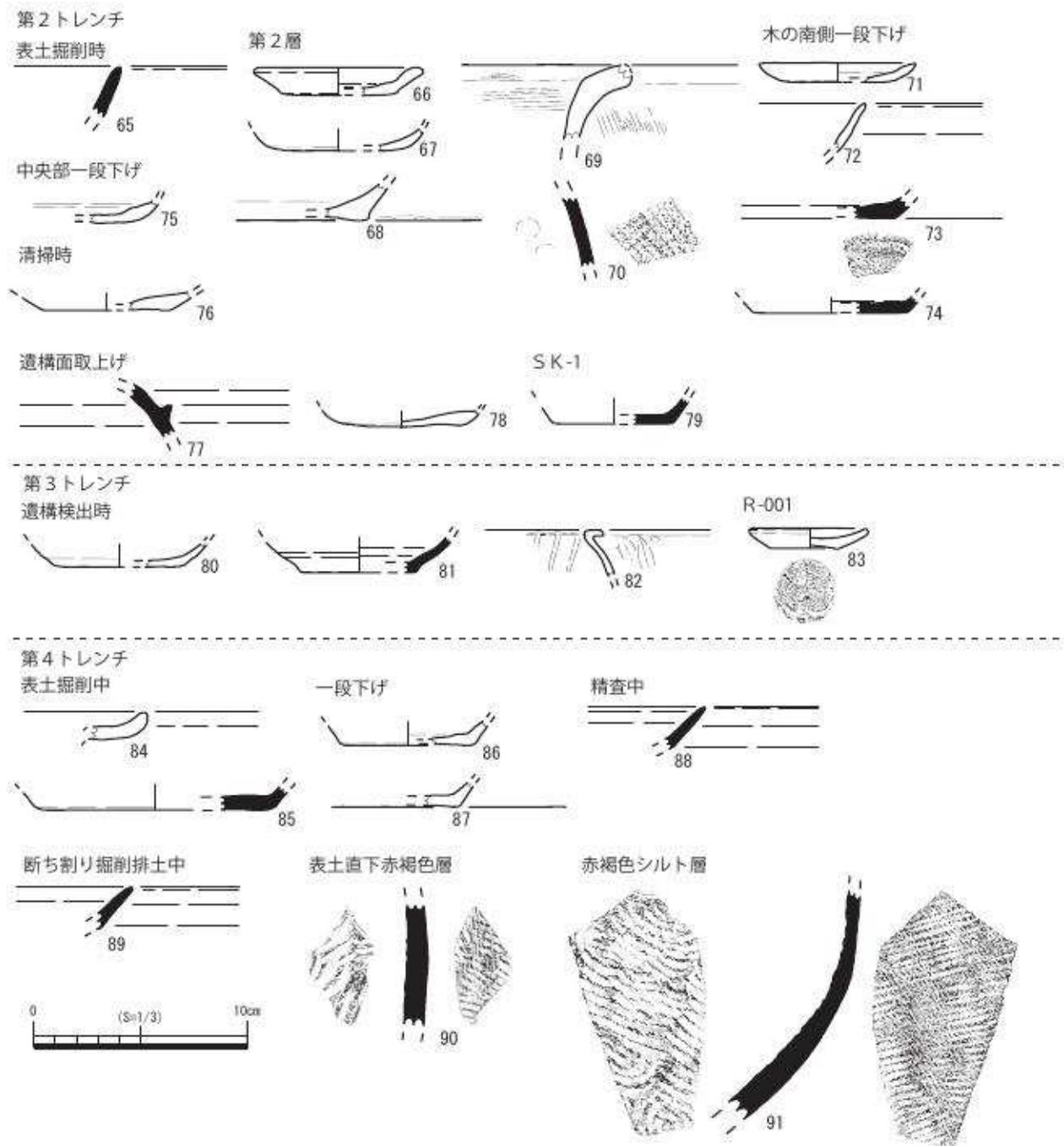
##### 遺構検出時

8.0は土師器の杯の破片と考えられる。器壁は磨滅している。8.1は小片のため詳細は不明であるが、須恵器の皿の破片と考えられる。8.2は施釉陶器の小型壺である。釉は黄白色を呈する。

##### 遺構面取り上げ



第88図 北嶺山上地区 H29-4トレーンチ平面図・土層図 (S = 1 / 80)



第89図 北嶺山上地区 H29トレンチ出土遺物 (S = 1 / 3)

8.3は土師器の小皿で、いわゆるかわら投げのかわらけである。ヨコナデによる整形で、底部外面は糸切りである。

#### 第4トレンチ

##### 表土掘削中

8.4は磨滅が著しく詳細は不明であるが、弥生土器甕口縁部の破片の可能性がある。茶褐色を呈し、白色砂粒を多量に含む。8.5は須恵器の杯である。

##### 一段下げ

8.6・8.7は弥生土器の甕の底部若しくは土師器の

杯である。小片で、磨滅が著しく詳細は不明であるが、器壁の厚みから考えると後者の可能性が高い。

##### 精査中

8.8は須恵器皿の口縁部片である。

##### 断割り掘削排土中

8.9は須恵器皿の口縁部片である。

##### 表土直下赤褐色層

9.0は須恵器甕の体部片である。外面は粗い平行叩きで部分的に刷毛目状の工具で表面をナデた痕跡が残る。内面は当て具痕（青海波文）が残る。

### 赤褐色シルト層

9-1は須恵器表の体部片である。外面は粗い平行叩きで部分的に刷毛目状の工具で表面をナデた痕跡が残る。内面は当て具痕（青海波文）が残る。9-0と同一個体の可能性もあり、7世紀後半に遡る可能性がある遺物である。

8-5・8-8・8-9ともに28年度に出土した9世紀中頃の須恵器杯に類似するものである。

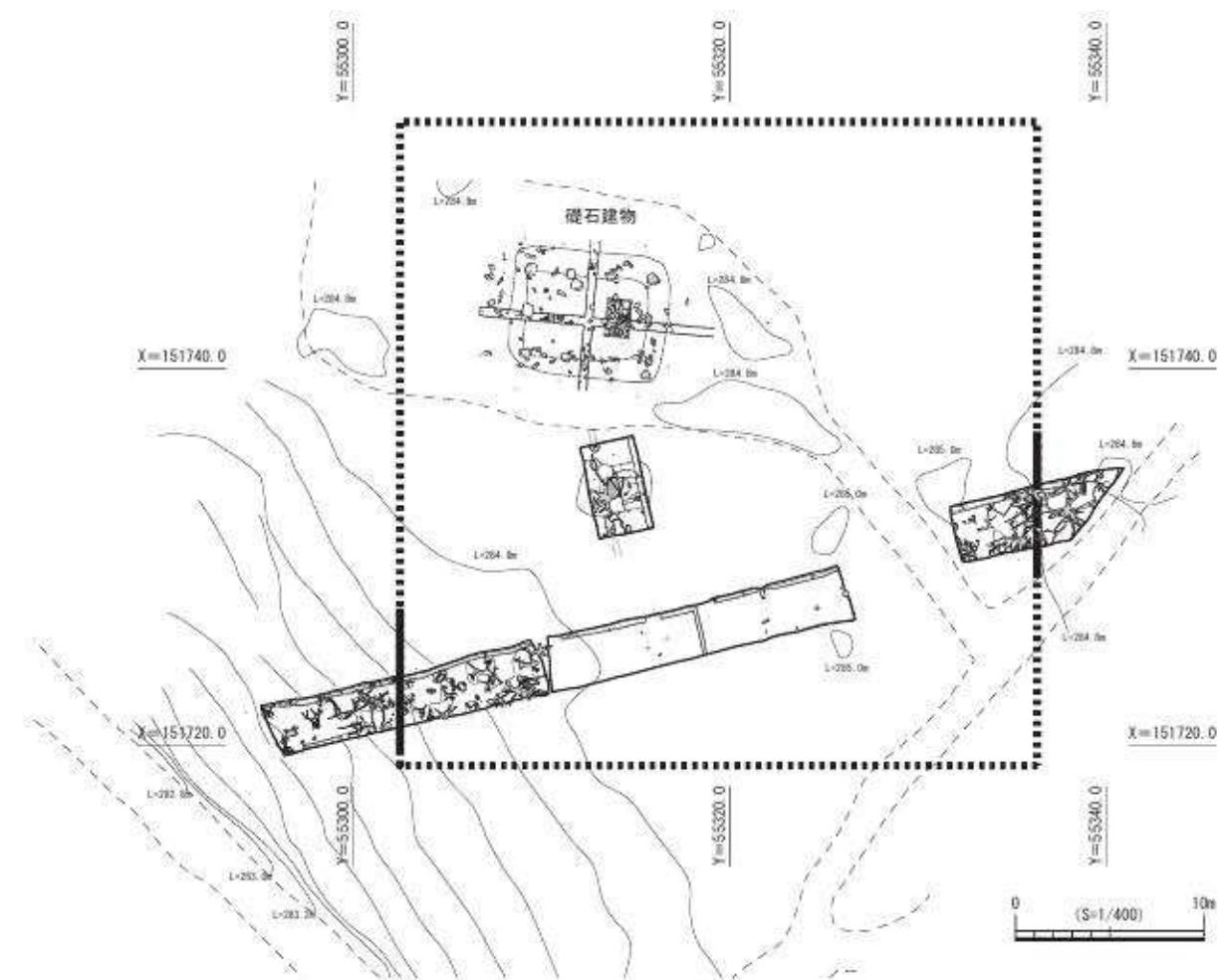
以上、7世紀後半から8世紀代の可能性のある遺物と、9世紀中頃～11世紀頃の遺物が出土しており、これまでの既往の調査と大きな差は認められない。

### ③小結

今回の調査（第2トレーナー）によって、礎石建物跡の南面で火を使った行為を行っていることが明らかとなつた。この行為が礎石建物の修繕などに伴うものか、修行や建物造営時などの儀式に伴うものかは明確にできないものの、鉄や銅などの滓が伴わないことから、

後者の可能性がある。礎石建物跡の南側に位置し平行するように設置され、累積的に形成された遺構ではないことから、盛土（整地層）との関係を考慮すると、建物建築に伴い利用された遺構と考えられる。

なお、28年度に確認した花崗岩系風化礫土の堆積層の範囲は想定よりも広く、明確な分布の範囲は確認できていないが、これらを用いて、礎石建物の前に基壇状の盛土造成を行った後、土坑状の遺構が形成されたと考えられる。また、この盛土の上層の遺物を含む堆積層についても、周辺からの堆積作用が想定できないことから、人為的なものと考えられる。その範囲はこれまでの12、13年度の調査成果を踏まえて、判断するとさらに北側にも分布しており、13年度第2調査地点の第2層は一連の調査で確認した盛土層に相当する可能性が想定される。これらの点から南北は3.5m以上と考えられ、東西は第3・4トレーナーの成果から約3.4mと推定でき、やや南北に長い、方形を呈する範囲に分布しているものと考えられる（第90



第90図 北嶺山上地区 千間堂跡周辺整地土想定図 (S = 1 / 400)

図)。盛土の中からは基本的に9世紀中頃の須恵器が出土することから、礎石建物跡の造営に先立って行われたものと考えられる。この造成範囲は地形図の平坦面とも対応するものであるが、その範囲に対して礎石建物跡は明らかに西側に偏っており、また、南側に空間がある点は注意される。ただし、既述のとおり、礎石建物跡の前面で確認された土坑以外には明確な遺構は確認されておらず、建物前面の空間は儀式若しくは修行空間のようなものとしての機能が想定される。

遺構は確認できていないが、7世紀後半から8世紀代に遡る可能性のある遺物が出土しており、以前の調査でも破片が出土しており、屋嶋城跡との関係性も注目される。

以上4年に渡って、屋島北嶺山上の調査を実施してきた。表面観察で起伏(凹凸)などが確認される場合に遺構が確認できるものの、北嶺山上は広大な平坦面であるため、石材の散布などを頼りにしてトレントレングチ設定を行い調査を実施してきたが、遺構は確認できなかった。そのため、北嶺山上の調査については、平坦面にトレントレングチ調査を数多く実施することで、遺構や遺物の有無を確認せざるを得ない。それらの成果を踏まえた上で、将来的には遺構や遺物がまとまって認められる箇所において、面的な調査を継続的に実施していく必要がある。

## C. 南嶺山上地区の調査（第91図）

## a) 平成29年度

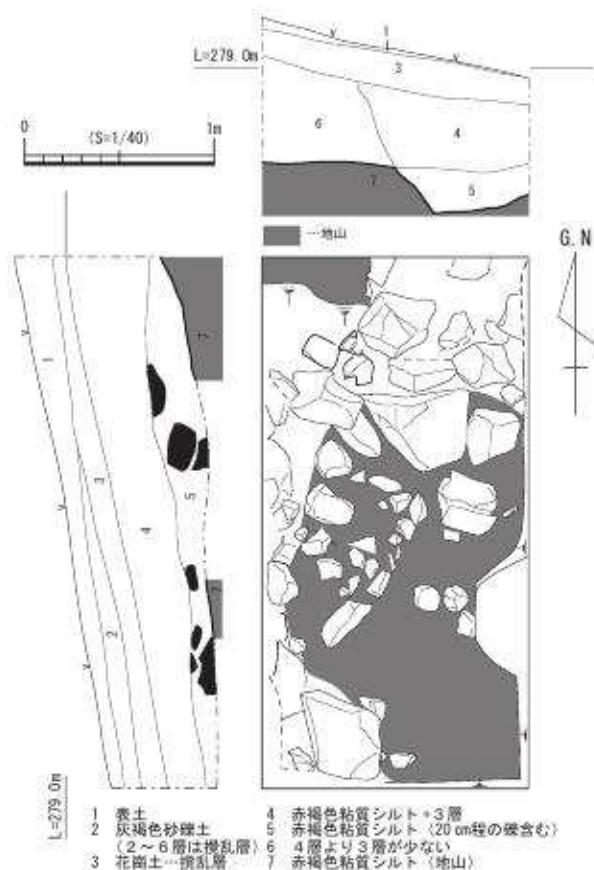
## ①調査の目的と方法

調査地は、北嶺へと向かう遊歩道入口の東側に位置する。環境省による瀬戸内海国立公園屋島集団施設地区再整備事業（北嶺エントランス整備：看板設置）が予定されている箇所で確認調査を行った。調査は平成29年11月6日から平成29年11月10日に実施した。調査面積は5m<sup>2</sup>である。

## ②調査成果

## a) 基本層序

調査地は、北から南へと傾斜する地形で、表層からは旧地形が残存している可能性が想定されたが、表土（第1層）直下から50～80cm程度の擾乱層（第2～6層）が認められ、その下位に地山を確認することができた。この擾乱層は、西側の道路（谷側）に向かってさらに深くなっているようで、本来の地形が周辺の園路などの整備に伴って、大幅に改変されたものと想定される。



地山は赤褐色粘質シルト（第7層）で、擾乱土の中にはやや大ぶりな安山岩の石材も放り込まれていた。

## い) 遺構

大規模に擾乱されており、遺構は確認されなかった。

## う) 出土遺物

近代以降と考えられる磁器片等がわずかに出土した。

## ③小結

調査の結果、当該地は周辺よりも低い場所でありながら、地山起源の土を用いて、埋め戻されていたことから、周辺の遊歩道整備時に、大規模に擾乱された後、整地されたと考えられる。当該地は、高低差があるものの、城門が推定される（第4章参照）箇所に比較的近接しており、関連遺構などの存在が想定されたが、調査の結果、既に現地形を留めていないものと判断することができた。部分的な調査ではあったが、周辺の駐車場等の整備時にも大規模に改変されている可能性が高いことも分かった。



調査区全景（南から）



調査区全景（北から）

第91図 南嶺山上地区 トレンチ平面図・土層図 (S = 1 / 40)・調査写真

## 第4章 まとめと今後の課題

### 第1節 屋嶋城跡

#### A. 浦生地区の城壁とその構造

第3章で報告した調査成果を踏まえ、浦生地区の城壁について立地や構造の点からその特徴について掘り下げて検討しておきたい。

##### ■浦生地区の立地と構造

既述のとおり、浦生地区は屋嶋城の城外に所在する。瀬戸内海、屋島の北西に向けて開けた谷の中腹標高約100mに位置し、城壁の最も高い雉城の上部では、瀬戸内海を見渡すことができる。当時、城壁周辺は伐採され、開けていたと考えられ、海からも目立つ存在であったであろう。対唐・新羅との戦いは海戦も十分想定されるが、緩傾斜部と急傾斜部の接点という立地に加え、海（敵軍）からの視界において目標とされやすい立地は、誘導的意味を含め、浦生地区の城壁は屋嶋城における最初の交戦の場として設置されたものであろう。

本来、この浦生地区の城壁の背面、すなわち、谷の山頂付近に大手を想定することができるが、現状では未確認である。谷筋を登っていくのが登城路と考えられるが、城壁は、この谷の傾斜が変化する標高100m付近に谷を堰き止める砂防ダム状に構築されている。

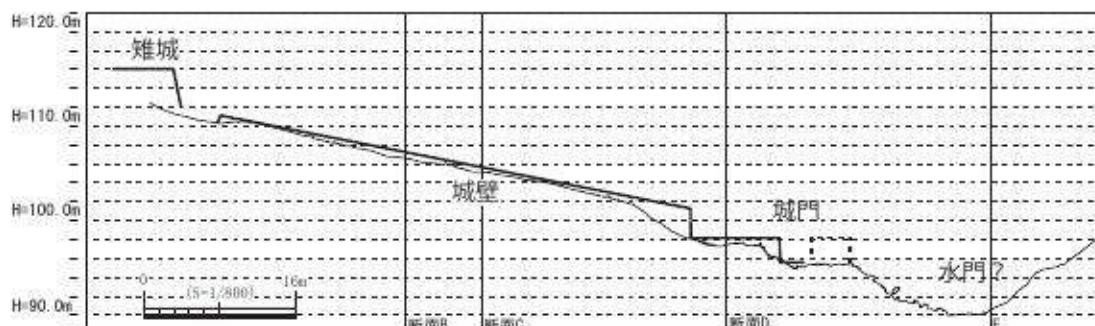
これまでの調査をもとに考えると、城壁は延長約80mで浦生川側には水門、さらにその北側に城門、城壁の最高部（北側）には方形の張出部（雉城）が展開し、谷筋から北側（城外側からみて左側）へと登っていくような登り石垣状の景観を形成しており、見た目としては大野城跡の百間石垣に類似した構造と言える。城壁天端を現在の最も高い箇所として、根石の高さを城外側北側の石積みが残る箇所、城門推定地の隅

角部、城壁天端ライン等を参考に定めると、城壁高さは高い箇所で5m程となる。後述する城門横の平坦部においても4.5m程となる。

既述のとおり、雉城は城壁が地形に擦り付けていることから、城壁から突出させて構築しているというよりは、単体で張出部を構築していると考えの方が理解しやすい。これまで、城壁との連続性を想定してきたが、改めて、城壁と地形との関係を考えると、関野氏が注目した尾根と谷の間を塞ぐように城壁を構築し、それに対して最も高所に雉城を構築しているものと考えられる。そのため、接続部分が不明確であり、城壁の城外側の石積みも地形に擦り付けているものと判断できる。以上のような城壁と雉城の構造は明らかに、朝鮮半島で認められるような城壁の一般的な構造とは異なるものであり、屋嶋城跡の城門地区の甕城の在地化（日本化）した構造と同様なものと考えておきたい。この点から、浦生地区の未完成と判断される場合（龟田2018等）もある。既述のように、地形に合わせた屋嶋城ならではの構造であると認識できるならば、一見中途半端な施工に見えるこれらの構築物も完成した構造と考えることもできよう。

雉城からは、見晴らしのみならず、城内へと侵入すべく、谷筋を上がってきた敵兵を見下ろす場所にもなり、まさに、側面から攻撃する雉城としての機能の場所が計画的に配置されていると言える。また、下から仰ぎ見ると、かなりの高低差があり、下から攻めるにはやや不利な条件となる。

次に、この浦生地区の城壁が城外側に位置しているという点から、屋嶋城全体における構築順序について考えておく必要がある。山上の城壁構築の前後関係が問題となるが、浦生地区先行構築説の場合は、史書上、



第92図 浦生地区の城壁縦断想定図 (S= 1 / 800)

水城は大野城より先行することと山頂自体の急峻さから、類推することができるが、規模とその含意が異なることから、同一視はできない。次に山上の城壁構築後の増築説について考えてみたい。既述のとおり、敵軍の最初に上陸する場所として想定され、最初の交戦場と想定される点、屋島の地形を利用した立地である点から、攻撃される場所かつ一方で敵を誘導する場所を手厚く増強し、防御を固めている点から理解しやすい。ただし、その段階が同時期の施工か若しくは山上の城壁構築直後か、その後の維持管理の中での増強（増築）であるかは現状では即断できないが、交戦を想定しているとすれば、同時若しくは直後と考えた方が良いであろう。

#### ■城壁構造

調査所見からも明らかなように、城内外ともに、石積みで構築し、その内部は、屋島特有の盛土、すなわち、多くの石材を含む土で構築されている。この点は、山上の城門周辺の城壁構造と類似しており、現地の地盤が屋島特有の崩積土で構築されているという点からも理解できるが、傾斜地に築く上で、土のみならず、石材を含有させることでせん断抵抗が高まる効果も期待できる。ただし、施工時は通常の突き固め作業がしばらく、構築時の締め固め作業の方法が問題となる。

平成21年度の調査成果からも明らかなように、城内は背面の山上から大雨時に土石流などによって土砂や石材が多量に供給されたことが想定され、かなり埋没していることが判明している。表面に中世段階の遺物が表採できることからも、ある程度城内側は早くに埋没した可能性もある。それゆえ、城内側の石積みが保存された可能性が高い。

平成29年度の調査によって、城門の城内側の隅角部が明確となったが、同時にその上面の平場の意味も検討する必要性が高まった。岡田唯吉氏の図面からも明らかなように（岡田 1922）城門推定地の北側（山側）が平坦であることが知られていたが、これまで崩落の可能性しか想定されてこなかった。城外側の城壁の崩落状況、背面の埋没状況などから想定すると、基本的にはいずれも安全勾配で斜面が安定化していることから、土石流などによる崩落とは想定できない。それゆえ、城壁側（北側）も安全勾配で安定しており、当初から、第92図のような空間があったことが想定できる。現状では、幅9m、奥行き8.8mの空間がどのように使用されていたかは、これまで調査を実施していないので、明らかではないが、城門から櫓状に続くような建

造物が設けられていたと考える方が自然であろう。

#### ■城門

城門の北側については上記の調査成果に基づくと、奥行き約8.8mとなる。ただし、南側の側壁部分は列石状に推定できる程度で、大規模に崩落しているものと考えられ、当初の形状はまったく推定できない。先の城門北側の構造を元に、高さを復元するならば、中央部で概ね3m程度となるものと考えられる。第90図のようになる。現在、遊歩道の関係で、城門入口部はスロープ状を呈しているが、本来の城門がスロープ状になるのか、懸門になるのかは不明である。城門推定地については、今回の一連の調査でおぼろげながら構造が見えてきたものの、今後の調査が重要である。

### B. 屋嶋城の城壁ラインと城壁構造

次に、以上の成果を踏まえ、屋嶋城の全体構造についても整理しておきたい。この点については、「屋嶋城跡II」（高松市教育委員会 2008）において詳述されているが、その後の古代山城に関する調査研究の進展、さらには本事業での調査成果、現地踏査の成果を踏まえ、改めて、整理しておきたい。

#### ■城壁（外郭線）ライン

既述のとおり最初に、屋嶋城跡の城域を明確に示されたのは閔野貞氏である。閔野氏は、浦生地区の城壁を中心に、北嶺から浦生地区へと伸びる尾根筋を城壁ラインと想定し、北嶺、南嶺を囲む城壁ライン（抱谷式）を想定した（閔野 1917）。しかし、その後の本事業における調査成果に基づき、これまで山城の城壁ラインについては、山上のみで完結するライン（南嶺全周4.0km、山上全周7.0km）を想定してきた（高松市教育委員会 2008 ほか）。その中で、調査研究の進展によって、閔野氏が重要視した浦生地区の城壁の位置づけが屋嶋城を考える上で課題となつた。ここでは、21年度以降の調査、レーザー測量及びそれに基づく現地踏査の成果を踏まえ、過去の成果を見直しておきたい。

まず、本事業で調査を行った浦生地区から見ていきたい。第3章の調査成果、前節の検討によって、浦生地区の城壁は、浦生川とその北側にある谷の間を塞ぐように築かれ、雉城の背面の尾根筋に城壁遺構は擦り付けている。しかし、その尾根筋自身を城壁と見立てることは難しく、城壁ラインは、浦生川から尾根筋までの間を塞ぐように築かれており、山上の城壁とは遺構としての連続性は認められない。そのため、他の古代山城で確認されつつある山上とは別に構築された城

壁（小規模土壁の一種）と考えられる。

一方、山上では、現在のところ南嶺のみで城壁遺構が確認されており、北嶺では城壁遺構は確認されていない。また、南嶺の談古嶺から北嶺へと向かって下る鞍部状を呈する箇所に2条の濠（山元2005）が掘られている。以上の遺構はいずれも標高270m付近に構築されていることが指摘されていた（山元2005）が、レーザー測量によても裏付けられ、一定の測量に基づく計画的な施工が想定される。これらの点を最大限考慮するならば、いわゆる古代山城特有の城壁遺構は、南嶺のみで完結する可能性が高いと考えられる。ただ、古代山城の場合、城壁は地形に左右され、起伏があることが常であるが、屋島ならではかもしれないが、ほぼ同一の標高で構築されている点は注目すべき点であると言える。

北嶺は、レーザー測量及び外観からも明らかなように、急峻な崖が多く、南嶺のように山頂部からやや下ったところ（標高見たてる270m付近）は基本的には断崖絶壁（崖地）にあたり、城壁を築けるような場所はほとんどない。地形と標高のみで想定するならば、北嶺西側の最北部の魚見台から先端部にかけての範囲が唯一、緩やかな谷と尾根上地形が展開しており、遺構の存在が想定できるが、現状では遺構は確認できていない。また、南嶺と北嶺をつなぐ尾根筋は、非常に細く、急峻な地形であることから両側に城壁を築くような箇所がない。また、先の標高からすると270mより低くなる箇所もある。仮に城壁ラインを想定するならば、現在の北嶺へと設けられている遊歩道（標高250～270m）周辺が最も有力にはなるが、これらの遊歩道の原形がどこまで古くなるかは不明である。ただし、尾根上で南北の行き来は困難な箇所があり、斜面部の緩やかな箇所を通る道（土壇状の構造）があった可能性は想定できる。関野氏が構想したように、先の浦生地区からは北嶺へのアクセスの方が明らかに早く楽である。瀬戸内海の眺望という点からも、明らかに北嶺の方が立地的に優れており、既述のとおり遺構は確認されていないが、見張りや狼煙場としての利用などは十分に想定でき、いわゆる古代山城の城壁ラインの外側に位置する異なる機能を有した場（北嶺山上）の可能性は否定できない。いずれにしても、屋島城の城壁ラインについては、南嶺で完結する可能性が高いものの、屋島城という軍事施設としての機能の範囲については、今しばらく北嶺における調査を行った上で判断する必要があろう。

## ■城壁構造

これまでの調査成果から大きく2つの構造に分類できる。①両壁式（夾築式）の高さ5mを越えるような城壁、②内托式の2m程度の城壁である（高松市教育委員会2008）。

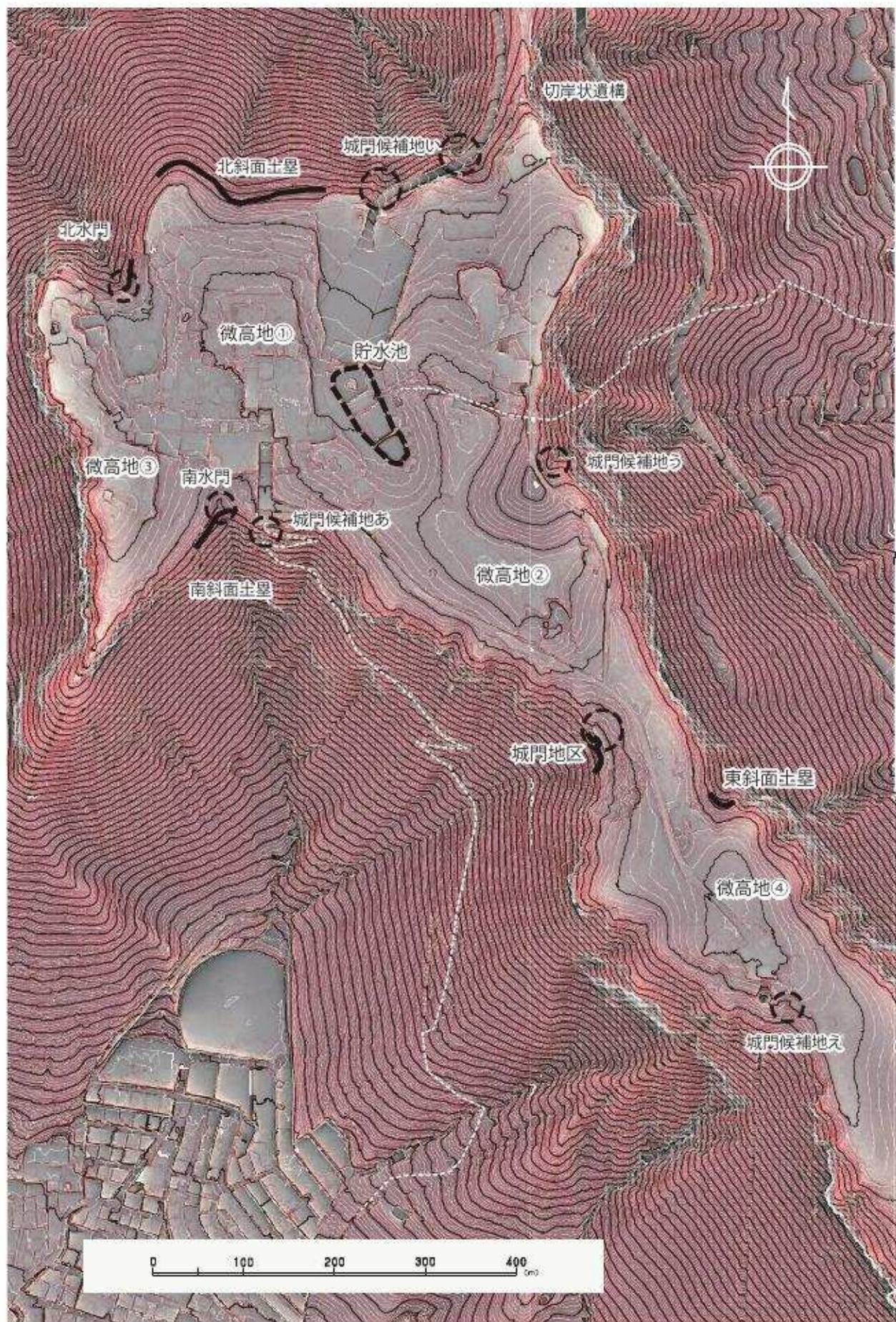
①は浦生地区、城門地区、②は南嶺北斜面、西斜面、東斜面の城壁である。既述のとおり、これらの遺構は標高を同じくして構築されており、計画的に配置され施工されたことがうかがえる。①と②の違いにおいて、現状で明らかな点は城門に接続しているかどうかであり、城門地区及び浦生地区では城門があり、城門地区においても、現在整備されている箇所よりも南側の山林中に残る城壁遺構（石積み）は②と類似した構造になるという点が指摘できる。以上の点から、①と②の構造の違いは、地形ではなく、立地も含めた機能差によって生じている可能性を想定しておきたい。すなわち、城門周辺は高い石積みを構築することで、堅牢かつ威容を構造として示したものと想定される（高松市教育委員会2008）。

## ■城門の配置

現在、屋島城では、城門が1箇所しか見つかっていないものの、一般的な古代山城では複数の城門が確認されており、未だ確認されていないが城門が存在したと考えられる。ここでは、城門地区の立地条件を一つの拠所として、唯一の確認例である城門の配置について検討しておきたい。

まず、城門地区の立地から考えると、瀬戸内海に面した場というだけではなく、南側すなわち内海、さらには陸路もかなり意識した場所に立地していると言える。地形の制約による構造の違いはあるものの、現在見つかっている遺構、地形から想定しても、南向きの箇所に規模の大きな遺構が配置されているようにも見える。現在確認されている城門は、既に報告しているように朝鮮半島の技術を取り入れた構造が明瞭に認められるものの、表城などは、地形を利用した在地化（倭国／日本型）した構造と言える（高松市教育委員会2016）。地域性／特殊性を強調するわけではないが、北と南に分かれた山の構造、立地、視界などを最大限利用した形で、屋島城の城壁や城門が構築されている可能性を考えておく必要がある。

次に、未発見の城門の可能性について想定しておきたい。既に、『屋島城跡』Ⅱにおいて、明治8年作成の「屋島寺境内並持林田畠図」をもとに、登山道について検討が行われている。ここでは、第3章のレーザー測量



第93図 南嶺山上詳細地形図と屋嶋城跡遺構想定図 ( $S=1/6,000$ )

に基づき、山城関連遺構の分布と地形との関係を見ていくこととする。浦生地区を除く現在確認されている山上の遺構群はすべて標高270m付近に分布している。この共通性や最も調査の進んでいる城門地区の立地条件について検討してみると、城門地区は崖が形成されない、小規模な谷状地形に立地しており、赤色立体図でみると半円状の谷地形で、かつ緩斜面であることが分かる。先の標高とともに、同様な地形という視点で南嶺の範囲を観察すると次の4箇所を城門候補地として想定することができる。

#### あ) 屋島寺山門付近

##### い) 屋島スカイウェイ（旧屋島ドライブウェイ）

の駐車場の入口から東側の小規模な谷付近

##### う) 屋島南嶺の東側の谷筋付近

##### え) 屋島ケーブルカー駅舎の南側付近

これらに、城門地区、浦生地区の城門を含めると城門の数は6箇所となる。以下、各候補地について検討しておきたい。

#### 城門候補地 あ) 屋島寺山門

現在も遍路道として使用されており、平安時代末以降に南嶺に移動して以降、寺院の正面玄関として使用されているものと考えられる。現在の景観は『讃岐国名勝図絵』からも確認でき、江戸時代の景観を残していることが分かる。必ずしも、それ以前に遡る明確な根拠はないが、西斜面で南面に向かって開く大きな谷であること、遍路道の存在からもともと麓からの道があったと想定できることから登城路があった可能性が高いため、城門が存在した可能性を考えておきたい。

#### 城門候補地 い) 屋島スカイウェイ（旧屋島ドライブウェイ）駐車場の入口から東側の小規模な谷

当該箇所は、屋島城において瀬戸内海に向かって最も開けた谷であり、城としても大手に当たると考えられる場所である。そのため、かなり大規模かつ莊嚴な城門があった可能性が想像される。道路が横断していることで、地形が大規模に改変されており、城門は遺存している可能性は低い。谷地形としては少し北にも谷があり、候補地としては2箇所が想定される。

#### 城門候補地 う) 屋島南嶺の東側の谷筋

南嶺の中で、東側に比較的開けた谷状の地形で、現地の石材散布などは確認できず、明確ではないが、やや奥行きのある谷であり、城門が想定される箇所は標高から現在の園路の周辺である。基本的には屋島城は東面の遺構が少なく、西面を意識した構造であることは当然ながら留意しておく必要もある。

#### 城門候補地 え) 屋島ケーブルカーの駅舎南側

上記のう）と同様に現在確認された城門の所在する地形に類似する場所で、現地にもわずかであるが石材の散布が確認されるが、量は多くない。時期は明確ではないが、石段状の遺構も確認できる。

以上の箇所は、屋島の長い歴史の中で、後世に大きく改変されている箇所もあり、すべての箇所で城門が確認できる可能性は低いが、今後、地道な調査を継続していく必要がある。

なお、城壁遺構については、これまで確認されている箇所以外では赤色立体図上で同様な平坦面は確認できない。

#### ■建物等の城内施設

城内施設については現状では最も調査研究が遅れており、屋島寺における確認調査で当該期の須恵器が出土している程度である。最終的には発掘調査によって確認しなければならないが、将来の調査に備え、ここでは、屋島寺の立地を参考に建物群が展開する候補地について考えてみたい。

まず、レーザー測量に基づく赤色立体図と等高線図を重ねたもの（第93図）を詳細に観察してみると、平坦な山上にも微地形、すなわち、やや高く平坦な尾根と谷が存在することが分かる。ここでは尾根上の平坦な高い場所を便宜的に微高地と呼んでおく。

このような観点から現在、屋島寺が所在する場所を見てみると、南嶺のほぼ中央に位置する微高地状の平坦地（微高地①）で周辺には3つの谷が展開していることが分かる。また、この微高地は南東側へと延び、山頂の三角点のある周辺の微高地と連続する（微高地②）。南嶺の西側では、現在の県木園周辺に同様な平坦な微高地（微高地③）が認められる。さらに、南部では旧屋島ケーブル駅舎周辺に同様な安定した場所が確認できる（微高地④）。その微高地（尾根）の周辺には大小様々な谷若しくは鞍部状の地形が展開している。

以上の地形をもとに、上記の4箇所について現在確認されている遺構等の関係をみておきたい。

**微高地①** まず、先の屋島寺は南嶺のほぼ中央に位置する微高地に選地していることから、かなり意図的に場所が選ばれたものと考えられる。当該地から7世紀中頃～8世紀前葉の須恵器が複数出土していることが注目される。屋島寺の発掘調査では遺構は確認されていないが、やはり、現在の境内地周辺に建物等が所在した可能性は想定される。また、弥生時代の遺物もまとまって出土しており、居住地として適当であった

ことも注目される。

**微高地②** 屋島寺から南東方向に位置し、北と南東方向に展開する尾根である。この尾根は先の屋島寺が立地する尾根と連続する尾根であり、微高地①とともに、候補地としては建物が所在する可能性が高い場所である。平成9年度の調査では、弥生土器が多数確認され、いわゆる高地性集落として位置づけられるが、先の微高地①と類似した環境と言える。

また、青海波文の残る甕の体部が出土しており、後述する7世紀後半から8世紀代の遺物として注意しておく必要がある。当該地は城門地区から登城した際に最初にアクセスできる場所となる。また、城門候補地のあ、うとアクセスできる箇所である。現在は山林になっており、やや分かりにくいが、このように地形からみると、南嶺において微高地①から②にかけての範囲が最も広い平端面を確保でき、その中央部には現在「瑠璃法池（血の池）」と呼ばれている貯水池と考えられる湧水地があり、水の確保も見込めるところから、南嶺の中心部と想定される微高地と言える。

**微高地③** 獅子ノ巖南西側の尾根上で、現在の県木園周辺である。ただし、面積はそれほど広くないが、瀬戸内海に最も近い場所になり、施設が展開している可能性がある。

**微高地④** 城門地区の背面東側に位置する細い尾根から連続して旧ケーブル駅舎へと延びる尾根である。調査等は行われていないが、城門地区、東側で唯一確認されている城壁遺構に近接する点からも可能性が想定される。

以上の整理から、大きく3つの範囲（微高地①・②、③、④）が想定される。立地が異なることから、機能が立地に応じて変わっている可能性も想定される。いずれにしても今後の発掘調査が必要不可欠である。

さて、以上の検討を総合的に考えると、城壁・城門の配置（造営）と建物群は対応するような配置に見え、地形に制約を受けながら山城は構築されているものの、防御施設と建物群が展開する微高地との関係性が認められ、城の防備に関する意識が漠然とではあるが、見えそうである。屋島城は天然の要害に守られ、その場凌ぎ的に見える遺構配置、さらには見た目に平坦な屋島山頂の地形という条件から、これまで、あまり具体的に諸遺構間の関係性に関する検討はできていなかった。近年の調査研究の蓄積とレーザー測量による微地形を把握できる状況となつたことから、ようやく以上のような把握が可能となったものである。

このような成果によって、屋島城についても、他の古代山城における地形との関係性の中で諸施設の造営が計画されている状況と類似した状況を確認することができ、ある種の共通性を見出すことができる。本節で述べた地形に基づく想定は、最終的には発掘調査による検証が必要不可欠であるが、軍事施設としての造営における考え方と微地形との関係を念頭に置きながら、分布調査と発掘調査地の選定が今後必要であろう。

#### ■山麓の関連遺跡の存在

山城とはいえ、島という立地から必ず港湾施設が麓の海岸線沿いにはあったはずであり、小山南谷・新田本村遺跡群のような山城関連施設の遺跡が山麓に展開している可能性も想定される。特に、南麓、東麓には一定の緩斜面が認められ、関連施設が所在する可能性を想定しておく必要があるかもしれない。実際、赤牛崎では屋島城と同時期の遺物が出土している（高松市教育委員会 2003）。

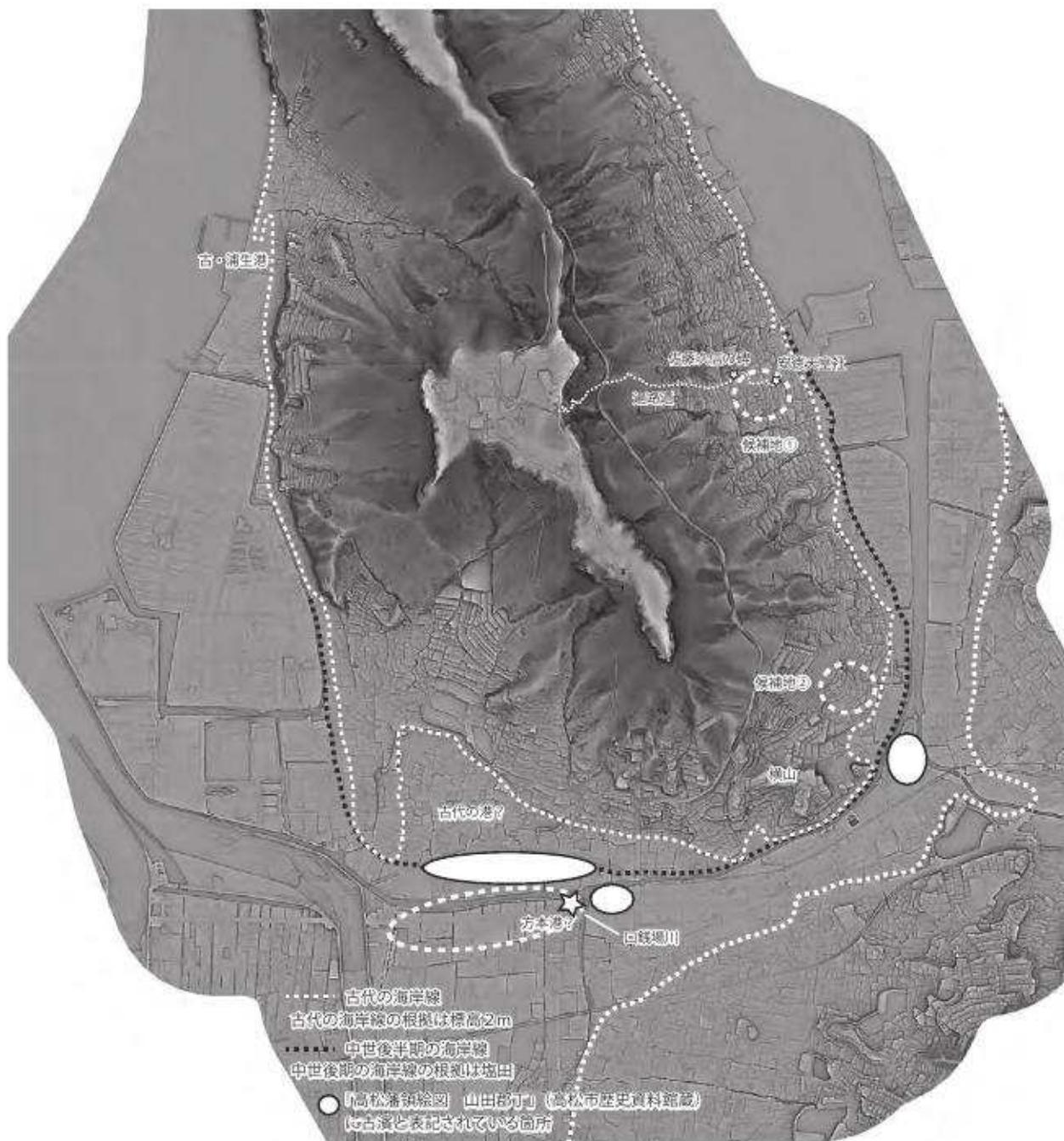
また、この点についても先の微地形から海岸線の復元、港湾施設の立地、微地形からみた遺構群の展開などについて検討する必要がある。現状では麓の発掘データは極めて希薄で、関連するものとしては平成15年刊行の『史跡天然記念物屋島』Iに報告されたもののみである。ここでは、その足掛かりとして、レーザー測量に基づき、海岸線の復元を行ってみたい。

第3章で既述した海岸線付近の地形の特徴に標高を重ねて考えてみたい。海岸線復元の根拠は海岸線付近に展開する段丘状の崖と標高との関係で、崖の外側（海側）になると標高は2mとなる。この標高に基づき、第94図は作図したものである。屋島城の段階の港と後世の『兵庫北関入船納帳』に登場する方本（潟元）港は恐らく、堆積作用による地形（海岸線）の変化によって、異なる立地と想定され、ここでは、それらを分けて考えてみたい。

#### ●潟元周辺

既述のとおり、屋島小学校の南の仲池及び道池といったため池より南側は地形が低くなり、低地であったことが明瞭であるが、そこから西に向かうと現地形では明瞭な高低差を見出しつくくなる。この点は当然ではあるが、赤色立体図でも同様に把握できる。ただ、明治30年の地図では半島状に突き出た地割りが認められる。

再度、赤色立体図の当該地周辺の平坦部の濃淡を見ると、湾状に小学校の南側が低くなっていることは読み取ることができるし、崖が見えなくなる箇所は南へ



第94図 屋島旧海岸線復元図及び源平合戦関連候補地位置図（縮尺任意）

の地形の連続性を示していることが分かる。さらに、レーザー測量によって作成した地形図をもとに段彩図（第10図）によって、地形を視覚化すると、南に短く延びる半島状の地形と湾状の空間が少し鮮明化し、南へと延びる半島状の痕跡が見える。米軍の航空写真からも明らかであるが、想定半島部は農地化しており、現在残る地割や段差などから判断すると、本来的には、現状よりは高い尾根筋が現在の湯元駅付近に延びていたものの、周辺の地形の平準化（低地部の埋め立てなど）の際に、想定半島部の土砂が利用された可能性が想定

され、元々の地形がかなり改変されている可能性を想定しておきたい。そのため、ここでは上記の地割や地形、さらには、現在も現地の所々に残る段差を元に、海岸線を復元している。この場合、仲池、道池の南側には小規模な湾状の空間を想定することができる。古くは湾が入り込み、西風を受けるような半島状の地形があった可能性を想定しておきたい。

この点については、既に、類似した復元が佐藤竜馬氏（佐藤 2003）、山元敏裕氏（山元 2006）、出石一雄氏（出石 2006・2010）、乗松真也氏（乗松 2015）、松

本和彦氏（松本 2016）によって指摘されているが、時期設定や変化について必ずしも明確でない。ここでの想定は、屋島城築城期を含む、それ以前の海岸線として想定しておきたい。屋島城との関係から言えば、この潟元周辺（後の方本）と浦生周辺が山上の遺構分布からも重要な場所である。浦生については近年まで港として使用されており、かなり古い地形を残している可能性（山元 2006）が想定できるが、潟元については、南部に塩田が中世から近世にかけて展開すること、さらには高松藩初代藩主松平頼重が相引川を掘り直すまでに、陸続きとなっており、古代以降、陸地化という形で地形が変化していったことが想定でき、その意味で、今後の調査が必要である。

次に、中世後半期の港として方本港について検討しておきたい。本書で行った地形のみからの復元を手掛かりとすると、堆積作用による陸地化とその結果、整備される塩田を根拠として、南麓側の海岸線の変遷を考えるならば、「兵庫北関入船納帳」にみられる方本港が機能した頃の海岸線を第9・4図のように復元した。源平合戦における源氏が屋島へと渡った際の逸話からも明らかのように、平安時代末には河川等の堆積作用によって、屋島と高松間の内海はかなり浅くなっていたと考えられる。その後の具体的な変遷は明らかではないが、少なくとも、現在の屋島陸上競技場周辺及び対岸に最初期の（具体的な年代は不明）塩田があったことが『高松藩領絵図 山田郡丁』に描かれた古濱から想定されることから、この周辺までは陸地化が進んでいたと推測される。屋島側の地形から見ても、概ね、方本港の場所は陸上競技場の南から新川の河口にかけての範囲と言える。

この方本港については、近世初頭の絵図の検討及び周辺の土地条件等の検討から、現在の口銭場川河口付近の可能性が既に田中健一氏によって指摘されている（田中 2018）。田中氏は、江戸期の絵図の検討、特に正保元年（1644）「正保国絵図讃岐国」に描かれた、屋島南麓対岸発着の航路の記載を一つの手がかりとして、周辺の地形について、土地条件図及び現地形の浸水範囲図から旧地形を検討されるとともに、古い塩田の位置、口銭場川の直線的に北上する流路と「口銭場」という名称、地形から見える新川の旧河道、河口付近の堆積と港湾との位置関係（観音寺の港との対比）に関する詳細な検討から、現在の屋島中学校南側の口銭場川河口付近（高松側）を方本港と推定している<sup>註1)</sup>。

厳密な箇所については、今後の発掘調査等に委ねる

しかないが、本書の地形復元のみならず、田中氏による絵図の検討を定点とした旧地形及び河川と港の歴史的変遷のあり方を検討することで、おおよその範囲が推定できることは明らかではないだろうか。

### ●浦生港

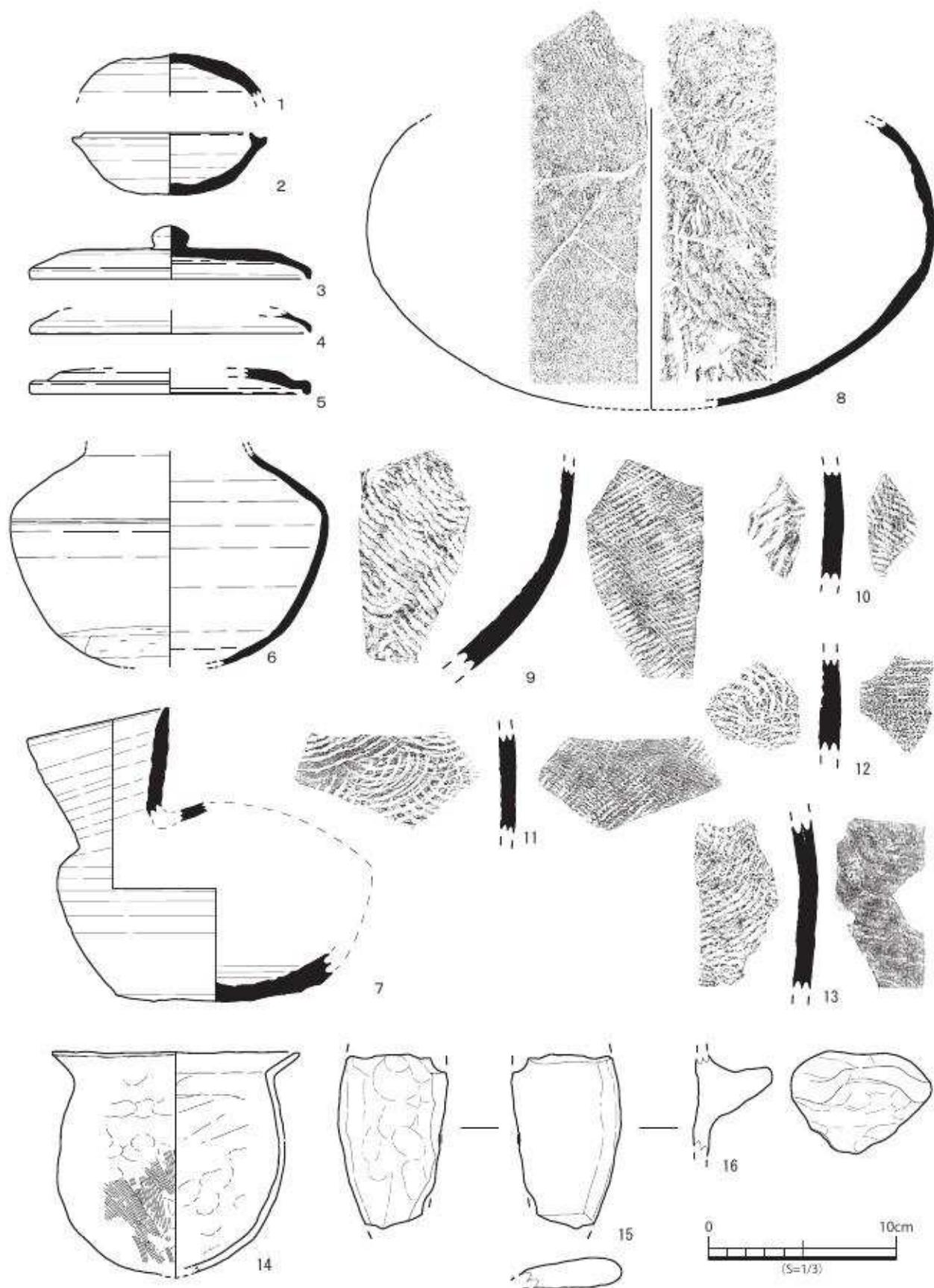
既述のとおり、浦生にも小規模ながら内湾状の地形が復元でき、女木島の南の潮流は浦生へと向かうものであり、小規模ながら港湾施設も想定される。実際に近年まで港として利用され、屋島ドライブウェイ（現在の屋島スカイウェイ）設置以前において、高松から荷が運びこまれ、山上へと浦生を拠点として人力によって搬入されていた。

この他、港湾施設としては長崎鼻や石場等の港は採石に伴う可能性が想定される。現在確認できないが、遍路道が現在の檀ノ浦付近に八栗寺に向かう遍路道が降りていくことを考えると、檀ノ浦周辺に港湾を想定することもできる。

### ■土器からみた年代

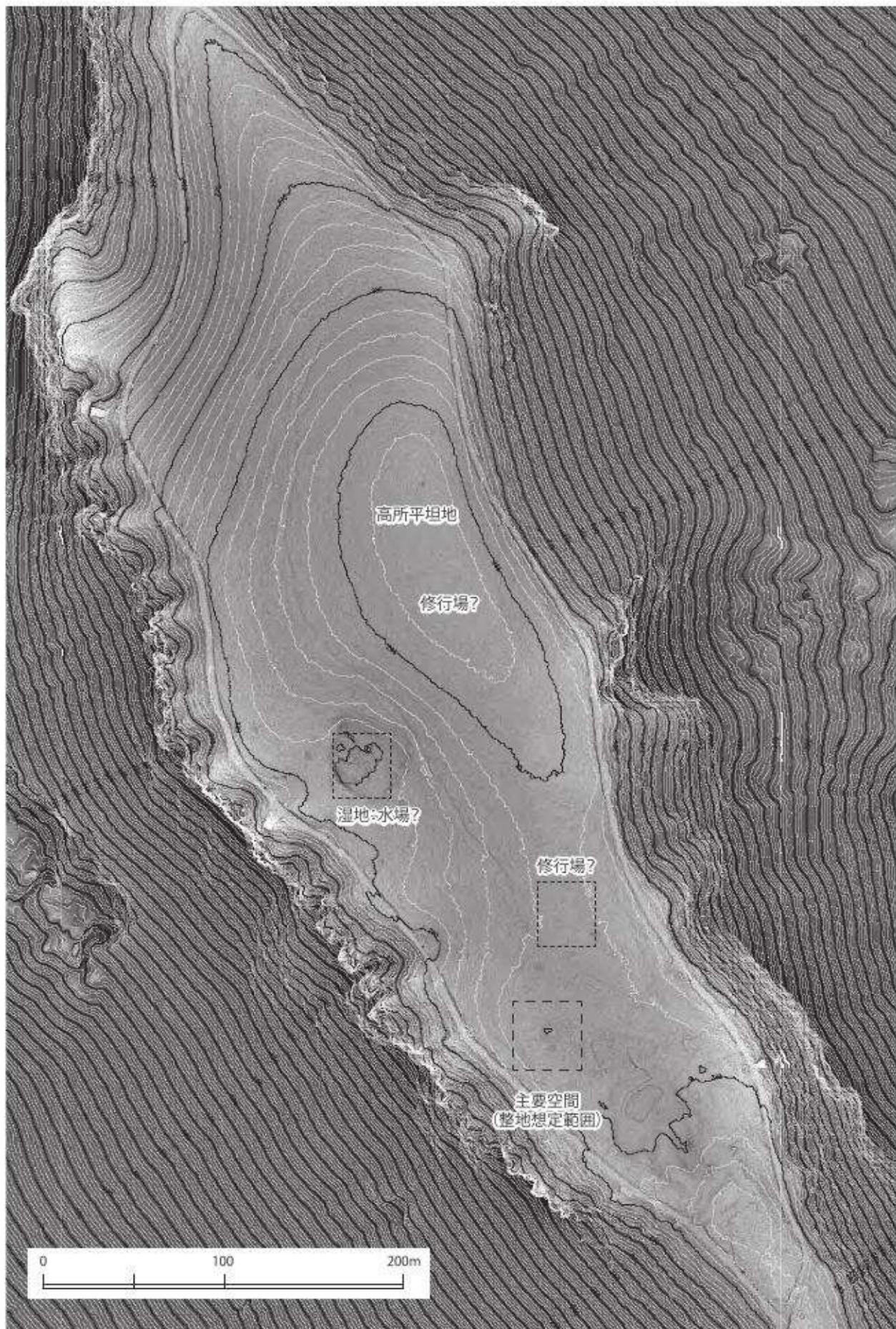
これまでに屋島城から出土した遺物は第9・5図の6～8、14である。今回報告した平瓶を含めて量的には非常に少ないが、ほぼすべてが完形に近い残存状況であることは特徴的で、基本的には地山直上で出土する点は、山城が機能していた段階の廃棄等によって現在に至っていることを示している。その意味では、8世紀前葉以降の遺物が認められない点は注目される。分布から述べると、屋島寺周辺で供膳具、城門や城壁周辺で貯蔵具（須恵器壺や瓶）や調理具（土師器甕）が出土しており、機能によって分布域が異なるように見える点も今後検討が必要である。

また、この他にも屋島寺境内地における調査で、須恵器杯身、蓋等が出土しており、7世紀中頃から8世紀前葉程度の時期幅のものである。また、明確な時期は特定しづらいが、7世紀後半から8世紀代の遺物として、内面に青海波文を残す甕の破片が北嶺山上、南嶺山上の調査で出土している。加えて、移動式の甕と考えられる破片や土師器の縁の取っ手が出土しており、これらの遺物は屋島城の機能した時期を示す可能性がある。今後の調査に期待せざるを得ないが、これらの遺物群は屋島城の存続時期や後述する屋島寺の創建地の選地の問題を考えいく上で注目される遺物群である。



2～5：屋島寺出土（高松市教育委員会 2006）6・8・14：城門地区出土（高松市教育委員会 2008・2016）7：浦生地区出土（本書）  
1・9・10：北嶺山上出土（1：高松市教育委員会 2005、9・10：本書）11～13・15・16：南嶺山上出土（高松市教育委員会 2005）  
(なお、既報告資料（『史跡天然記念物屋島』I 及び『屋島寺』掲載）については再実測（拓本）及び再トレースを行っている)

第95図 屋島城跡及び屋島山上出土7世紀後半から8世紀代の可能性のある遺物 (S= 1 / 3)



第96図 北嶺山上詳細地形図と屋島寺関連遺構想定図 ( $S=1/3,000$ )

## 第2節 北嶺山上地区の調査

### A. これまでの発掘調査と本事業の成果

さて、今回の調査では当初、千間堂跡の南側の千間広場及びその南側での調査を実施した。しかし、明確な遺構は確認できず、昭和40年代の北嶺の国立公園の環境整備に伴う園路や公園整備によって土砂の移動がなされており、建物の建設などで大規模に搅乱されている箇所などが明らかになった。それゆえ、現在の千間広場については、本来の地形について現地形から直接推測できないことも明らかになった。

その後、平成28～29年の調査は、千間堂跡周辺を中心に実施した。29年度の第2トレンチ以外では、明確な遺構を確認することができなかったが、建物周辺に整地土の存在を確認することができた。出土遺物については、これまでの成果同様に、9世紀中頃の遺物が点々と出土することも確認できた。ここでは、千間堂跡周辺の出土遺物の傾向、今回の調査で確認した整地土について検討しておきたい。

#### ■出土遺物

今回の調査では、千間堂北側のH28-1、H29-1トレンチでは、破片化し、磨滅著しい土師器片がまとまって出土し、礎石建物跡周辺では9世紀中頃の須恵器片がまとまって出土している。

これまでの調査では、礎石建物跡周辺と北に約200m離れた池状の湿地（窪地）周辺でまとめて遺物が出土している。上記の調査のような偏在性は認められず、伴膳具、調理具ともに出土している。また、修験の場であるにも関わらず、縁釉陶器、灰釉陶器が出土していることからも、9世紀後半から10世紀では、このような希少な品々が持ち込まれるような仏教拠点であったと考えられ、既に想定されているような国分寺等の仏教拠点との結びつきが想定できるかもしれない。既述のとおり、煮沸具が一定程度占めることからも、僧侶が一定程度、滞在していたことを示唆するものと考えられる。また、鍛冶関連遺物もわずかに出土しており、一定程度の維持管理作業なども行われていた可能性を示すと考えられる。

#### ■整地土

また、H29-2トレンチで礎石建物跡の正面で、火の使用を想定させるような土坑を確認した。修行に伴うものか、礎石建物の造営等に伴うかは判断が難しいが、何度も使用された状況ではないことからすると、建物の造営に伴う仏教的な儀式に使用された可能性が

想定される。礎石建物跡の基壇土の中からは破碎された状況で多口瓶が出土したこと（高松市教育委員会2003、渡邊2017）から、建物造営に関わる儀式の存在が想定されており、そのような儀式との関連が注目される。

また、建物の9世紀頃の須恵器を含む整地土が認められ、H29-3トレンチでは、その縁辺が確認できた。既述の遺物の分布とこの整地土の広がりは12年に確認された礎石建物跡周辺のみに限られ、主要建物が展開する範囲は限定的な可能性が想定できる。10年度の湿地周辺での遺物出土状況や、12年度第3トレンチで確認した石積み基壇等から周辺には施設を伴わないような修行等のいくつかの機能別の「場」が設定されていたものと考えられる。既に言及されているように、江戸時代の『屋島記』、『四国遍路日記』等の文献の記載から屋島寺は北嶺に多くの坊舎を築いていたことが想定されてきた（高松市教育委員会2005・2007）。本事業もその内実の解明を目的として実施してきたが、以上の成果を端的に言えば、千間堂という名から想像されるような施設は明確にできなかった。北嶺山上地区は、堆積作用がほとんど期待されない場所であり、踏査での確認でも基壇や礎石建物が確認できなかったため、荘厳な建物が多数存在した可能性は低いかもしれない。瓦の出土も限定的であるので、多くの建物を想定する場合、掘立柱構造の建物を想定すべきかもしれない。これまで幅3m程度のトレンチ調査を実施してきたが、以上のことから、今後は、面的な発掘調査が必要であろう。『屋島記』には遺跡がいまだ残っているとの紹介があるが、その実態や江戸時代に伝えられていた北嶺における屋島寺の記録・記憶がどのように形成されたものであったのかについても今後の調査研究が必要であろう。

#### B. 北嶺という場の歴史

既述のとおり、北嶺における屋島城の存在は現状では不明と言わざるを得ないが、これまでの調査によつて弥生時代中期にいわゆる高地性の集落が営まれた後は、修行の場、屋島寺の建立という宗教空間としての利用が主たる「場」の機能であったと言える。近代になり、名勝的価値が付与されることで、新たな場の利用がなされることとなる。ここでは、これまでの成果を踏まえながら、屋島寺の北嶺における歴史について再度整理し、今後の調査についても検討しておきたい。

#### ■屋島寺の建立

屋島寺は、四国霊場84番札所で、山号は南面山である。『屋嶋寺龍巖勸進帳』などの史料によれば、開基は鑑真和尚で、天平勝宝6年（754）唐から来朝した際に都への中途で屋島に寄ったとされる。その弟子空鉢恵雲律師が北嶺に堂宇（普賢堂）を建立し、普賢菩薩を安置したと『唐招提寺千歳録』が伝えている。その後、弘仁年間には、弘法大師が自ら千手観音像を作り、南嶺に寺院を移したとされる。

既述のとおり、屋島北嶺の千間堂跡という地名が残る場所から南に位置するところで仏堂跡と想定される礎石建物跡が確認されている。基壇からは多口瓶と呼ばれる仏具と考えられる特殊な壺が3つ出土している（高松市教育委員会2003）。出土遺物からこの建物が建立される以前は、9世紀頃から僧侶の修行場所として利用され、10世紀頃に建物等の整備がなされ、主には建物が整備された10～11世紀頃を中心とした時期に寺院としての主な機能が想定されるが、瓦器椀の出土から、12世紀頃まで機能していたと考えられる。御本尊で重要文化財の千手観音坐像は10世紀の作とされ、この北嶺での歴史を伝えるものと考えられる。南嶺での調査で出土した瓦には、讃岐国分寺と同文軒平瓦、綾歌郡綾川町の陶（十瓶山）瓦窯跡群の西ノ浦支群で焼成された可能性のある軒丸瓦・平瓦などが多数出土しており、平安時代後期（11世紀後葉）から末頃に南嶺に寺院が本格的に整備されたと考えられる。また、それ以前の平瓦等も含まれており、寺院の移動時期も含め、北嶺の堂宇との関係が注目されている。

最後に、ではなぜ、屋島寺の前身が北嶺に建設されたのか。この疑問については、これまで修験の地として南嶺よりも北嶺が人里から離れた場所であるため選択されたと想定されてきた（高松市教育委員会2003・2007）。修験という視点からは確かに最も理解しやすいものである。しかし、靈山としての認識は屋島寺建立以降、すなわち9世紀頃の修験場としての利用以降であり、里からの距離としても南嶺から隔絶しているわけではない。あえて、屋島固有の歴史から考えておくことがないであろうか。すなわち、前史としての屋嶋城との関係性から、北嶺建立の可能性を想定するものである。修験の地として選定されるにあたり、南嶺には屋嶋城の存在があり、物理的に寺院を建立する領域若しくは修験の場として適当な空間がなかった可能性、若しくは避けられた可能性を想定するものである。既述のとおり、これまでの南嶺の調査では、7世紀中頃から8世紀前葉頃の須恵器が出土している程

度で、その後の状況はよくわからない。そのため、大宝2年（702）の高安城の廃城を契機として屋嶋城の廃城を想定してきた。今後の調査に期待しなければならないが、屋嶋城跡出土の土器からは継続時期を示すものは薄弱なことを根拠とすると、廃城となっていたものの、国有地として手が付けられなかったのか、城としてかろうじて機能を残されていたのかなどの理由がいくつか想定される。いずれにしても、南嶺の古代の土地利用の状況についても今後の調査の課題である。

### 第3節 今後の調査とその候補地

平成7年以降、約20年間に及んで発掘調査が行われ、多くの成果が積み重ねられてきた。しかし、既述のとおり、史跡の構成要素においてでさえも、その価値の掘り起しは未だ不十分と言わざるを得ない。そのため、ここでは、踏査やレーザー測量などの成果を踏まえながら、今後の調査を行うべき課題について考えて整理を行っておきたい。今後、さらに調査を継続し、新たな屋島の価値の掘り起こしを行っていきたい。

#### A. 屋嶋城跡

既に本章で述べてきたように平坦にイメージされる屋島山上も微地形が存在しており、複数の谷があるなど、他の山城同様に、ある程度建物が配置した箇所も地形に合わせて選定している可能性が想定される。本章において既述した箇所について調査を実施して行く必要があろう。

#### B. 屋島寺の通史的な理解

これまでの調査によって、古代における屋島寺の変遷については、第2章及び本章前節で述べたように、北嶺から南嶺への移動という縁起に残る歴史が明らかにされるとともに、様々な資料からその歴史についてもトレースできるようになってきていている。しかし、千間堂の実態をはじめとして、ある種の修験道の拠点としての実態やその歴史、中世段階の寺院の規模や構造、その歴史、地域における役割、さらには、札所寺院となつた近世以降の歴史については、未だに十分に解明されているとは言いがたい。史跡を構成する要素ではあるが、平安時代以降現代まで生き続けている史跡と言え、屋島寺の歴史は屋島の本質的価値を考えていく上で大きな柱になることは疑う余地なく、今後も地道な調査研究が必要である。

### C. 源平合戦の古戦場に関する遺跡

史跡を構成する重要な遺跡として源平合戦の古戦場跡がある。屋島と言えば、源平合戦と言われるほど、屋島の代名詞の遺跡であるが、これまで唯一発掘調査が実施されていない遺跡でもある。周知のとおり、多くの伝承地が残り、屋島から庵治・牟礼の地域に横断的に分布している。特に、屋島側の関連史跡としては、平家の陣営が行宮を構えたとされる安徳天皇社、菊王丸の墓、松平頼重が整備したとされる佐藤継信の碑が残されている。また、屋島の対岸には佐藤継信の墓、松平頼重が街道沿いに建てたとされる「総門」、佐藤継信が義経の身代わりとなり射落とされた場所と言われる「射落島」、那須与一が扇の的を射落とす時に祈ったとされる「祈り岩」、那須与一が扇の的を石の上に馬を止めて射落としたと伝わる「駒立岩」、弁慶が大長刀を使い、土を掘ってつくったと言われる「長刀泉」、その際に土中から出た巨石をはね上げた時に2km東方へと飛んで、現在の地に落ちたと伝わる「弁慶の投げ石」、合戦の時に源氏の兵のために炊事をするための俎板がなかったので、この背中で野菜を調理し汁をつくり、義経ほかに差し上げたと伝わる「菜切地蔵」、安徳天皇の御在所と伝わる六萬寺と水を捧げたと言われた「杉の井」などがある。これらのうち著名な伝承地は、本市の登録史跡として登録されているものもある。

これらは、いずれも伝承地であり、江戸時代以降に整備されたもので、江戸時代の伝承や記録に基づくものと考えられる。当時の認識を知る上では極めて重要なものであり、源平合戦を取り巻く現在に至るまでの歴史を考える上でも注目されるべきものである。ただ、往時の戦やその前後の周辺の状況を知る手立ては現状では『玉葉』や『平家物語』等の文献資料のみであり、屋島に刻まれた痕跡を見つける必要がある。平家が寿永2年（1183）～元暦2年（1185）という期間滞在していたことに加え、安徳天皇が滞在したことを考えると、一定程度の施設が整えられていた可能性は高く、今後、調査研究を深めつつ、発掘調査の候補地を選定し、継続的な調査を実施する必要がある。ここでは、今後の調査研究を見据えて屋島城同様に、地形から平家が屋島に滞在した可能性のある場所について検討しておきたい。

これまで、平家が滞在した場所として、安徳天皇社周辺が想定されてきた。当該地を含め、第3章で述べたとおり、屋島南嶺側の東斜面は早くから開墾された

状況も踏まえ、標高100m以下に緩斜面が比較的まとまって認められる。さらに、それらの緩斜面は小さな谷地形によって分断されており、一定程度の規模の空間を確保するとなると、場所が限定される。また、海上とのアクセスという点からは、第3章で既述のとおり、屋島の海岸線沿いは崖上の地形となっている。東斜面側においては、現在もその名残がよく残っており、海への出易さなどについても考慮しておく必要がある。これらの条件をもとに下記の2箇所（第94図）について候補地として挙げておきたい。あくまでも地形的視点での把握であり、様々なケースを想定し、東側の緩斜面地をくまなく踏査していく必要があろう。しかし、可能性の高い箇所から検討していくことも重要であろう。

#### 候補地①：安徳天皇社付近

比較的緩斜面に立地し、北と南に谷があり、自然の要害をなしている。他の場所と比較してやや広い空間を確保できる。北と南の谷がまた、海岸線との関係を見てみると、安徳天皇社から南東へと下った箇所は、崖が見られず、スムーズに海にできることができる。また、後世のものではあるが、遍路道沿いに位置し、山上へとアクセスできる点も重要である。屋島寺が厳密に何年に南嶺に移ったかの特定が必要であるが、平安時代末の瓦がまとまって出土しており、屋島寺が南嶺へと移ってくる時期と重なる可能性もあり、注目されるが、当時の南嶺山上の状況は現状では不明確である。ただし、麓での造営とは言え、単なる集落ではなく、ある種の軍事的緊張関係の中での屋島での施設造営であるので、屋島山上と無関係に麓に造営されたとは考え難く、連携がある程度図られたと考えるべきであろう。傍証にしかならないが、南嶺山上は現在の行政区分で言えば、屋島東町で、遍路道も含め、当該地域と一体性が確認される点は注目される。

#### 候補地②

東側の斜面で類似した箇所は、当該箇所の谷を挟んで北側の斜面地や横山の北側斜面地などを挙げることができるが、いずれもやや狭い点や海へのアクセスという点から考えると、横山北側の斜面地が候補地と言えるかもしれない。強いて問題点を挙げるならば、山上へのアクセスと高松側からの距離感、推定されている船隠しの場所との距離感など、いくつか細かな疑問点が残る。

しかし、上記のいずれの箇所にしても、現地踏査を踏まえ、遺物の有無や旧地形の在り方、さらにはその

他の歴史資料等の読み込みから、あらゆる可能性の洗い出しと検証作業が必要であろう。現地においても、第3章の既述のとおり、農地として開削が繰り返されており、どの程度遺構が残存するかは不明と言わざるを得ない。

#### D. 石切丁場跡の調査

以前から知られていた採石と今回の一連の踏査で認識された石切丁場跡としての屋島の価値についても整理し、今後の調査に備えたい。屋島での採石は屋島を構成する3種類の石材、すなわち花崗岩、凝灰岩、安山岩を対象に行われてきた。特に注目されるのは、花崗岩と凝灰岩（いわゆる黒石）である。ここでは、踏査成果とこれまでの既存の研究成果をもとに整理しておきたい。

##### ■花崗岩

これまで、採石行為の明確な記載は認められない。採石行為が確認されている箇所は北嶺が2箇所、南嶺が1箇所である。前者は石場という地名が残る屋島少年自然の家からの登山道周辺と長崎鼻古墳の西斜面（鯨の墓）周辺である。また、長崎鼻西側の海岸にも採石の痕跡が残されている。これらの石切丁場としての認識は第3章で既述した、平成19年度に始まり、25、29、30年度の調査によって範囲などが明確になりつつある。

##### ●石場（小字名）周辺の石切丁場跡

少年自然の家から山上へと通じる登山道の両側に花崗岩が露出する場所があり、その露頭に矢穴が残されている。矢穴は二種類（大型と小型）のものが残されており、江戸時代初期と幕末頃の年代が想定される。それぞれで形状にヴァリエーションが認められ、形状とそこから把握できる時期や技術などに関する詳細な検討が必要であり、詳細な分布範囲についても今後の課題である。

##### ●鯨の墓の西側斜面

小型の矢穴の残る石材を確認し、幕末頃と想定される採石時の矢穴痕跡を確認している。これらの石材は海岸付近まで分布しており、花崗岩に加え、閃緑岩も一部認められる。

いずれも、搬出先は明確にされていないが、大型の矢穴が残るものは高松城築城に関わる可能性が指摘されており（大島2012）、近世初期から石材利用が開始された可能性がある。立地からも、高松城へと搬入するには、当該箇所及び海岸線沿いに分布する石材の利

用が最も効率的であろう。採石時期は江戸時代から近代にかけて利用されたと考えられるが詳細な期間については不明である。

##### ■凝灰岩

洞窟という立体的な遺跡として残っており、早くから認識されるとともに、採石行為の所産として考えられてきた。洞窟の壁面には採石時の加工の痕跡が明瞭に残るとともに、洞窟の前面には作業場や生活の場と考えられるような平坦面が確認でき、周辺には石積み遺構や井戸枠なども残されている。実際の採石作業に伴う遺構が残存している可能性が想定される。採石期間は不明であるが、戦前には採石作業は終了していたと言われている。場所は北嶺2箇所（先端中腹（遊鶴亭展望所の下）と北嶺西斜面（浦生集落の北側斜面））と南嶺北斜面1箇所である。南嶺の洞窟は材質の確認は必要であるが、レーザー測量によって確認された小規模な洞窟が確認されている。いずれの洞窟も標高150～170m付近に分布している。

##### ●遊鶴亭展望所下の洞窟群

早くから認識されている最も著名なもので、屋島洞と呼ばれているものと上屋島洞と呼ばれるものがある。このうち屋島洞は、6箇所の入り口が確認でき、内部で連結している。また洞窟の上部には、露天丁場と考えられる垂直壁が残っている。

##### ●北嶺西斜面の洞窟群

もう1箇所は、上記の場所から同一レベルで南に移動した場所である。ここは岩盤が奥まった場所に位置しているため、表面には崩積土が堆積している。そのため、入り口は前庭部状のやや広い空間が設けられ、洞窟へと通ずる切通し状の通路が設けられる。さらにその奥に洞窟の入り口が所在するという構造をとる。この前庭部や通路には石積みが多用されている。このような構造から遊鶴亭展望所の下に所在する屋島洞などとは外観が異なる。また、構造に加え、その立地からも搬出作業は困難であったと考えられる。

これらの構造の差異は、採石時期の差異を示唆している可能性が高いが、凝灰岩の所在する環境に適した採掘方法が採用されているものとも言える。また、具体的な方法としては矢穴を用いた技法と矢を直接打ち込む矢割技法があり、時期差や用途に応じた採石技法等の可能性が考えられる。

いずれの洞窟からも海岸へと向かう石曳き道が形成されており、多量の搬出が繰り返されたことがわかる。明治6年（1873）の『浦生集落図』に「石出道」が記

載されており、当時の道として認識されるものであったことを確認することができる。この絵図には「長崎道」の記載もあり、当該期には、浦生から長崎ノ鼻に向かう道があったことも分かる。南嶺では、先の小規模な洞窟のほかに、屋島寺南側の谷筋中腹に凝灰岩の露頭が確認されている（長谷川 2014）。また、大正 6 年（1917）に屋島城跡の踏査を行った閑野氏の論考にも、当時、西斜面で凝灰岩の採石を行っていたことが記載されており（閑野 1917）、大正時代においても採石が行われていたようである。

これらの石材は黒石と呼ばれ、安山岩若しくは玄武岩砂粒や軽石を含み、基質部分が火山灰によって構成された石材であるが、比較的目のか細かなものと粗いものがあり、風化の程度などによって、外見が異なる場合があり、色調も灰褐色、黄灰色を呈するものなどがある。

この洞窟を形成した凝灰岩の採石に関しては、近代の資料であるが、文献史料（佐野光利資料）が残っており、本市歴史資料館に所蔵されている。明治 17 年（1884）から大正 6 年（1917）にかけての採石記録で、佐野氏の採石業や、船での搬出状況などに関するものである。現在同様に当時も北嶺の斜面部は官林（国有林）であったため、採石行為と採石した石材の払下げ（採石／持ち出し）、借地、立木補償について愛媛大林区署長（林務官）や高知大林区署長に許可申請を行っており、その際に提出した書類の控えや、それに対する許可書、領収書等が残されている（伊藤 1992）。これらによれば、当時から「黒石」と呼ばれていたことが分かる。

このほかの資料としては、新聞記事によって当時の状況を知ることができる。大正 7 年（1918）6 月 20・21 日、7 月 3 日、10 月 15 日の香川新報の記事によれば、屋島の風致維持のため、黒石採掘を国が不許可としたことに対して、地元採石業者からの嘆願書の提出がなされたこと、その採石許可に至るまでの経緯が掲載されている。この資料によれば、この凝灰岩は屋島石（黒石）と呼ばれ、庭園用灯籠、井桁、竈として搬出しており、岡山地方にも搬出されていたもので、高松藩時代には御用石として利用されていたと記されている。また、採石を行っていた石工は、長崎鼻地区、湯元村西湯元及び浦生地区の住民であったことも分かる。また、伊藤一男氏による報告で紹介された山下氏資料（伊藤 1992）があり、昭和 16 年（1941）2～3 月まで採石していた状況や水洞窟と呼ばれる北嶺西斜面の洞窟で採石し、庭先で加工していたこと

などが記されている。また、明治 25～28 年（1892～1895）頃に、女木島からの依頼を受け、屋島浦生の山下氏ら数名が洞窟を整備したという記録が残っているようである。このほかに、石材売上台帳（昭和 2～13 年（1927～38））等もあり、当時の採石業の実態を知ることができる可能性もある。

また、「木田郡誌」によれば、昭和 15 年（1940）にも「屋島より凝灰岩を産せしも今は無し」の記述があり、採石終了時期は昭和 15～16 年頃と考えられる。上記の資料から、近代における採石状況の一端が明らかであるが、今後の総合的な研究が必要であり、同じ備讃瀬戸に所在し、一大生産地である豊島や女木島、男木島などの比較を通じて、備讃瀬戸における屋島の凝灰岩の产地として占める位置、その歴史などの調査研究が必要不可欠である。

### ■安山岩

石器としての利用が想定されるが、現状で明確な石材利用は長崎鼻古墳の葺石としての利用が最初期である。その後が、屋島城の築城における石積みなどとしての使用である。このほか、これまでの研究で指摘されているものとしては、古墳の用材（堅穴式石室等）としての利用である（宇垣 1987、白石 1993）。既に指摘されているが、県内の产地としては、石清尾山、五色台、豊島、北山地域（さぬき市）などがあり、古墳が立地している近隣の原産地が利用されているようである。屋島産とされる石材は高松市茶臼山古墳に供給されているという成果がある（白石 1991）。それらの研究成果に基づくと、岡山県へ搬出していきたとされる原産地は五色台周辺、豊島、屋島、小豆島が挙げられている。その中で屋島産とされるものは、牛窓天神山古墳（岡山県瀬戸内市牛窓町 全長 8.5m）、一宮天神山古墳（岡山県岡山市北区 全長 6.0m）で使用されているようである（宇垣 1987、白石 1991・1993）。成分分析に基づく、产地分布は屋島産と区別できるようであるが、石清尾山や五色台は重複した分布であり、今後の検証が必要であろう。

このほか、高松城築城に際する用材、長崎鼻砲台跡（石積み（幕末））などとして、安山岩や玄武岩が用いられている。ただし、女木島や男木島産の讃岐岩質玄武岩の可能性も想定され、成分分析による検討が必要である。

上記のような様々な観点から、一部の石材に関する調査研究はなされているものの、屋島を石材の产地として認識した総合的な調査研究は重要な課題である。

その意味で花崗岩、凝灰岩の調査は屋島の新たな価値を示すものとしても期待され、屋島産出の石材の特徴、採石方法、時代、搬出先を明らかにし、市内等への石材供給のあり方を解明することは重要である。このような歴史が解明されれば、現在、本市の特産品である「庵治石」創出の前史を明らかにすることともなり、讃岐高松の石の文化の歴史的価値の掘り起しにもつながるものであろう。

#### E. 製塩関連遺跡

平成24年から27年にかけて本市と徳島文理大学との協働調査によって、鶴羽神社境内遺跡の調査が実施され、詳細な調査成果は調査報告書を待ちたいが、遺跡の継続時期が明確し、弥生時代後期から7世紀にかけての製塩を行う場の歴史が良好な状況で埋没していることが確認されている。平城宮出土木簡に見られる「山田郡海郷」との関係性も含め、注目される。

また、屋島南麓の方本も、上記の「兵庫北関入船納帳」に產地として記載されており、遺跡としては確認されていないが、西潟元浜、東潟元浜等が中世の塩田として考えられている。產地としての実態は不明であり、牟礼側も含め、屋島南麓周辺での塩作りが盛んに行われていたと考えられる。名実とともに塩作りの場として認識されるのは、近世後半期以後で、特に、梶原景山の亥の浜の塩田開発以降、方本から浦生にかけての屋島西麓で大規模な製塩に伴う開発が近代にかけて行われる。現在も残る汐入川は、石炭を積んだ船が通る河川であった。

#### F. 古墳

長崎鼻古墳は平成8～10年度に調査が実施されたが、前期古墳の浜北古墳群、後期の横穴式石室墳が数基存在するものの、詳細は把握されていない。今後の地道な調査が必要である。

### 第4節 おわりに

以上のように個別に概観すると、20年間に渡り調査研究が積み重ねられてきたが、史跡の構成要素をはじめとして、多くの課題が残されていることを改めて確認することができる。現在の山麓：居住地、山上：観光地という対立項は近代から現代にかけて形成されたものであり、それ以前の屋島の歴史は山麓：産業（塩、石）、山上は霊地（宗教）の場として歴史を刻んできた

と言える。その意味でもここで取り上げたものはその一部に過ぎない。広大さと様々な法規制、社会的文脈の存在から、大規模な調査を実施することは困難であるため、これまで同様に地道に調査を積み重ねていくしかないが、様々な歴史が埋没しており、調査研究を行う上で、様々なポテンシャルを有する場所であることは間違いない。また、近年、天然記念物や名勝としての価値について学術的な研究が進められており、歴史のみならず学術研究の場（拠点）としての歴史も新たに付与されはじめ、屋島という特異な形状とその場で繰り広げられる歴史に多くの人々から注目されている。

これまで山上における調査が主であったが、今後は山麓地区の調査を実施し、情報を蓄積しながら、必要な保護（保存と活用）を図っていく必要もある。

#### 註

- 1) 海岸線の検討時に香川大学名誉教授の田中健二氏から講演資料をご提供頂くとともに、方本港の所在地の検討過程について詳細にご教示いただきました、記して謝意を表します。

#### 参考文献

- 出石一雄 2006 「島であった屋島、その幾象的考察—地形図を中心として—」『香川地理学会会報』No. 26  
 出石一雄 2010 「第1章第2節第1項4島であった屋島」『屋島風土記』伊藤一男 1991 「屋島黒石棚出記（上）」『文化屋島』第2・6号  
 伊藤一男 1992 「屋島黒石棚出記（中）」『文化屋島』第2・7号  
 伊藤一男 1993 「屋島黒石棚出記（下）」『文化屋島』第2・8号  
 宇垣匡雅 1987 「堅穴式石室の研究」『考古学研究』3・4-1  
 大石一旬 1980 「屋島の洞窟」『屋島のあゆみ』  
 大嶋和則 2012 「高松城跡の石垣解体修理」『第9回全国城跡等石垣整備調査研究会記録集』  
 矢田唯吉 1922 「屋島（木更津）」『史蹟名勝天然記念物調査報告』1 香川県史跡名勝天然記念物調査会編  
 香川県教育委員会 1953 『香川県文化財調査報告』2  
 亀田修一 2014 「古代山城は完成していたのか」『鞠智城』II 総考編  
 亀田修一 2018a 「古代山城の成立と変容」『鞠智城・古代山城シンポジウム—古代山城の成立と変容—』  
 亀田修一 2018b 「縄治された大野城・基跡城・鞠智城とその他の古代山城」『大宰府の研究』  
 木田郡誌編纂部 1940 『木田郡誌』  
 佐藤竜馬 2002 「中世難敷き造構と野原郷」『高松城跡（西の丸跡町地区）』II 香川県教育委員会  
 白石純 1991 「古備地方の堅穴式石室石材の原産地推定」『古文化談叢』第24集  
 白石純 1993 「讃岐地方の堅穴式石室石材の原産地推定」『古文化談叢』第30集（中）  
 高松市教育委員会 2003 『史跡天然記念物屋島』史跡天然記念物屋島基礎調査事業報告書 I  
 高松市教育委員会 2007 『屋島寺』  
 高松市教育委員会 2008 『屋嶋城跡』II  
 高松市・香川大学天然記念物屋島調査団 2014 『天然記念物屋島調査報告』  
 田中健二 2017 『近世初期讃岐国における城下町建設と開発・治水に関する研究』  
 田中健二 2018 『絵図に見る屋島 屋島カレッジ講演資料』  
 乗松真也 2015 「高松平野における8～10世紀の道路と敷設目的」『多肥北原西遺跡』  
 松田朝由 2009 『豊島石石造物の研究』I  
 松本和彦 2016 「高松平野の古代の遺跡分布」『多肥松林遺跡』  
 山元敏裕 2005 「古代における讃吉國山田郡について—古代山城屋嶋の分析を中心として—」『飛鳥文化財論究』  
 山元敏裕 2006 「屋島の港は城門へと通じる」『十紙山』II  
 山元敏裕 2010 「古代山城屋嶋について」『歴史に見る四国—その内と外と—』  
 渡邊政 2017 「多口瓶」『讃岐びと、時代を動かす』香川県立ミュージアム

# 写 真 図 版





1-1 石場に残る矢穴の残る花崗岩①（北から）



1-2 石場に残る矢穴の残る花崗岩②（南から）



1-3 北嶺へと続く石敷道（北から）



2-1 屋嶋城跡浦生地区城門推定地①（西から）



2-2 屋嶋城跡浦生地区城門推定地②（西から）



3-1 屋嶋城跡浦生地区城壁天端からみた城壁（北から）



3-2 屋嶋城跡浦生地区雉城からみた城壁（北から）



4-1 屋嶋城跡浦生地区城壁城外側の石積み①（西から）



4-2 屋嶋城跡浦生地区城壁城外側の石積み②（西から）



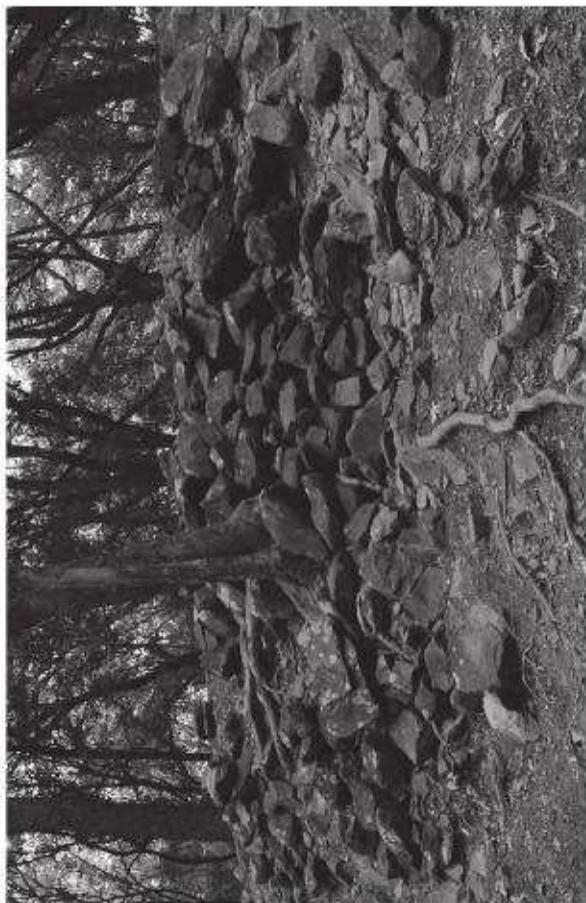
5-2 屋鳴城跡浦生地区城壁内側の石積み①（東から）



5-4 屋鳴城跡浦生地区城壁内側の石積み③（東から）



5-1 屋鳴城跡浦生地区城門推定地側面の石積み（南西から）



5-3 屋鳴城跡浦生地区城壁内側の石積み②（東から）



6-1 屋嶋城跡浦生地区域内側の状況①（北から）



6-2 屋嶋城跡浦生地区域内側の状況②（北東から）



7-1 屋嶋城跡浦生地区城壁城内側の石積み④（東から）



7-2 屋嶋城跡浦生地区城壁城内側の石積み⑤（北東から）



8-1 屋嶋城跡浦生地区城壁城内側の石積み⑥（東から）



8-2 屋嶋城跡浦生地区城内側の状況③（南から）



9-1 屋嶋城跡浦生地区雉城の状況①（南西から）



9-2 屋嶋城跡浦生地区雉城の状況②（北から）



10-1 屋鳴城跡浦生地区城内側石積み詳細①（東から）



10-2 屋鳴城跡浦生地区城内側石積み詳細②（東から）



11-1 屋嶋城跡浦生地区城内側からみた城壁（城門推定地② H24・25年Tr箇所 南東から）



11-2 屋嶋城跡浦生地区城内側石積み詳細③（東から）



12-1 屋鳩城跡蒲生地区 H21 年度 Tr 調査前状況（東から）



12-2 屋鳩城跡蒲生地区 H21 年度 Tr 完掘状況（東から）



13-1 屋嶋城跡浦生地区 H21 年度 Tr 調査前の石積み状況（東から）



13-2 屋嶋城跡浦生地区 H21Tr 完掘時の石積み状況  
①（東から）



13-3 屋嶋城跡浦生地区 H21Tr 完掘時の石積み状況  
②（南から）



14-1 屋鳴城跡浦生地区 H21Tr 完掘状況①（南西から）



14-2 屋鳴城跡浦生地区 H21Tr 完掘状況②（南東から）



15-2 屋嶋城跡浦生地区 H21Tr 北壁土層詳細①（南から）



15-4 屋嶋城跡浦生地区 H21Tr 北壁土層詳細③（南から）



15-1 屋嶋城跡浦生地区 H21Tr 南壁土層詳細（北から）



15-3 屋嶋城跡浦生地区 H21Tr 北壁土層詳細②（南から）



16-1 屋嶋城跡浦生地区 H21Tr 遺物出土状況①（南西から）



16-2 屋嶋城跡浦生地区 H21Tr 遺物出土状況②（南から）



16-3 屋嶋城跡浦生地区 H21Tr 遺物出土状況③（南から）



17-2 屋嶋城跡浦生地区 H22Tr 北壁上層（南から）



17-4 屋嶋城跡浦生地区 H22Tr 城外側崩落石状況②（南から）



17-1 屋嶋城跡浦生地区 H22Tr 檢出状況（北から）



17-3 屋嶋城跡浦生地区 H22Tr 城外側崩落石状況①（西から）



18-1 屋鳴城跡浦生地区 H22Tr 城外側崩落石状況③（南西から）



18-2 屋鳴城跡浦生地区 H22Tr 土層堆積状況（西から）



18-3 屋鳴城跡浦生地区 H22Tr 城外側崩落石状況④（西から）



19-1 屋嶋城跡浦生地区 H22Tr 状況①（東から）



19-2 屋嶋城跡浦生地区 H22Tr 状況②（西から）



19-3 屋嶋城跡浦生地区 H22Tr 城外側崩落石詳細状況①（西から）



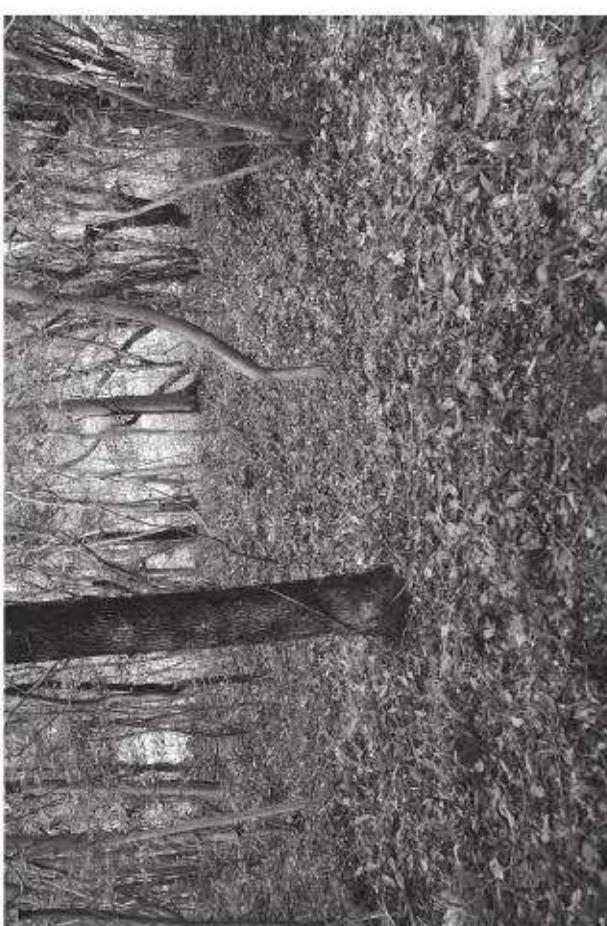
19-4 屋嶋城跡浦生地区 H22Tr 城外側崩落石詳細状況②（東から）



20-1 星鶴城跡発生地区 H23Tr 調査前状況① (東か5)



20-3 星鶴城跡発生地区 H23Tr 調査前状況② (西か5)



20-2 星鶴城跡発生地区 H23Tr 検出状況① (東か5)



20-4 星鶴城跡発生地区 H23Tr 北壁土層① (南か5)



21-1 屋嶋城跡浦生地区 H23Tr 検出状況②（東から）



21-2 屋嶋城跡浦生地区 H23Tr 検出状況③（西から）



21-3 屋嶋城跡浦生地区 H23Tr 北壁土層②（南から）



21-4 屋嶋城跡浦生地区 H23Tr 北壁土層③（南から）



21-5 屋嶋城跡浦生地区 H23Tr 北壁土層④（南から）



21-6 屋嶋城跡浦生地区 H23Tr 北壁土層⑤（南から）



2.2-1 屋嶋城跡浦生地区 H23Tr 北壁土層⑥（南西から）



2.2-2 屋嶋城跡浦生地区 H23Tr 北壁土層⑦（南西から）



2.2-3 屋嶋城跡浦生地区 H23Tr 北壁土層⑧（南西から）



2.2-4 屋嶋城跡浦生地区 H23Tr 北壁土層⑨（南西から）



2.2-5 屋嶋城跡浦生地区 H23Tr 北壁土層⑩（南から）



2.2-6 屋嶋城跡浦生地区 H23Tr 北壁土層⑪（南から）



2.3-1 屋嶋城跡浦生地区 H24Tr 調査前状況（北西から）



2.3-2 屋嶋城跡浦生地区 H24Tr 検出状況（西から）



24-1 屋嶋城跡浦生地区 H24Tr 城内側石積み検出状況（東から）



25-2 屋嶋城跡浦生地区 H24Tr 検出状況②(南から)



25-4 屋嶋城跡浦生地区 H24Tr 北壁土層(南から)



25-1 屋嶋城跡浦生地区 H24Tr 検出状況①(西から)



25-3 屋嶋城跡浦生地区 H24Tr 検出状況③(南から)



26-1 屋鳴城跡浦生地区 H24Tr 検出状況④（南から）



26-3 屋鳴城跡浦生地区 H24Tr 石積み検出状況（北から）



26-4 屋鳴城跡浦生地区 H25Tr 調査前状況（東から）



26-6 屋鳴城跡浦生地区 H25Tr 作業状況（北から）



26-5 屋鳴城跡浦生地区 H25Tr 石積み崩落状況（東から）



27-1 屋嶋城跡浦生地区 H25Tr 検出状況（北から）



28-1 屋嶋城跡浦生地区 H25Tr 石積み検出状況①  
(東から)



28-2 屋嶋城跡浦生地区 H25Tr 北壁土層（南から）



28-3 屋嶋城跡浦生地区 H25Tr 石積み検出状況②  
(東から)



28-4 屋嶋城跡浦生地区 H25Tr 石積み検出状況③  
(南東から)



29-2 屋嶋城跡浦生地区 H25 東西 Tr 完掘状況 ① (北東から)



29-4 屋嶋城跡浦生地区 H25 東西 Tr 北壁土崩 (南東から)



29-1 屋嶋城跡浦生地区 H25 Tr 北壁土崩 (南から)



29-3 屋嶋城跡浦生地区 H25 東西 Tr 完掘状況 ② (東から)



30-2 屋鷲城跡浦生地区 H26-1Tr 檢出状況遠景（南から）



30-4 屋鷲城跡浦生地区 H26-1Tr 下部検出状況①（南から）



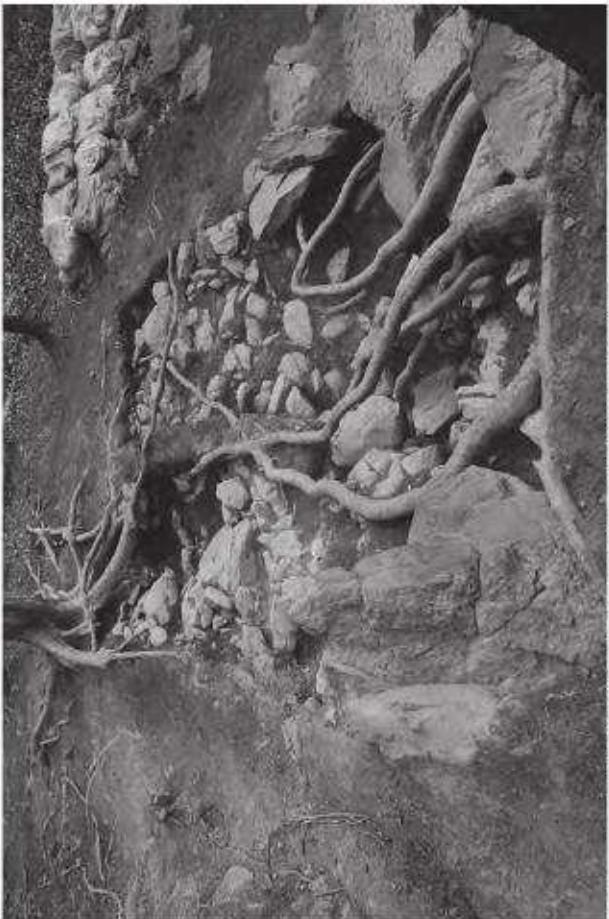
30-1 屋鷲城跡浦生地区 H26-1Tr 調査前状況（南から）



30-3 屋鷲城跡浦生地区 H26-1Tr 上部検出状況（南から）



31-1 屋嶋城跡浦生地区 H26-1Tr 下部換出状況② (南西から)



31-2 屋嶋城跡浦生地区 H26-1Tr 下部換出状況③ (北から)



31-3 屋嶋城跡浦生地区 H26-1Tr 上部東壁土層 (西から)



31-4 屋嶋城跡浦生地区 H26-1Tr 下部中央東壁土層 (西から)



32-3 尾鷲城跡蒲生地区 H26-2Tr 石列検出状況② (北から)



32-1 尾鷲城跡蒲生地区 H26-2Tr 調査前状況 (東から)



32-2 尾鷲城跡蒲生地区 H26-2Tr 石列検出状況① (東から)



3.3-1 屋嶋城跡浦生地区 H27-1・2Tr 調査前状況(北から)



3.3-2 屋嶋城跡浦生地区 H27-1Tr 検出状況①(東から)



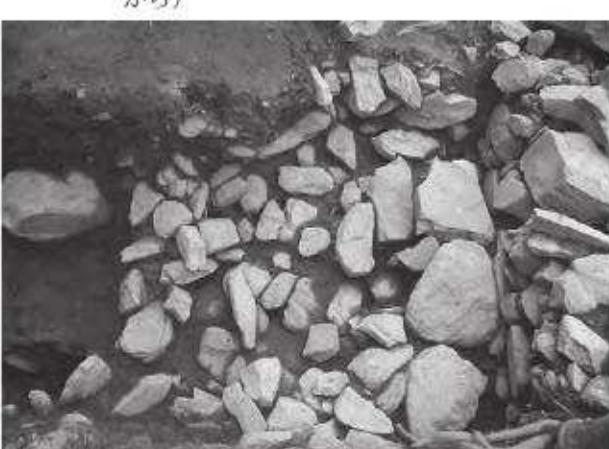
3.3-3 屋嶋城跡浦生地区 H27-1Tr 検出状況②(東から)



3.3-4 屋嶋城跡浦生地区 H27-1Tr 検出状況③(北から)



3.3-5 屋嶋城跡浦生地区 H27-1Tr 石列検出状況①(東から)



3.3-6 屋嶋城跡浦生地区 H27-1Tr 石列検出状況②(北から)



3.3-7 屋嶋城跡浦生地区 H27-1Tr 石列検出状況③(東から)



3.3-8 屋嶋城跡浦生地区 H27-1Tr 北壁土層(南から)



34-1 屋嶋城跡浦生地区 H27.1Tr 石列検出状況④（北から）



35-1 屋嶋城跡浦生地区 H27-1Tr 調査完了状況（東から）



35-2 屋嶋城跡浦生地区 H27-3Tr 調査前状況（西から）



35-3 屋嶋城跡浦生地区 H27-3Tr 検出状況(西から)



35-4 屋嶋城跡浦生地区 H27-3Tr 検出状況(西から)



35-5 屋嶋城跡浦生地区 H27-3Tr 南壁土層(北から)



36-1 屋鳴城跡浦生地区 H27-2Tr 調査前状況（西から）



36-2 屋鳴城跡浦生地区 H27-2Tr 石列検出状況（北から）



36-3 屋鳴城跡浦生地区 H28-1Tr 調査前状況（北から）



36-4 屋鳴城跡浦生地区 H28-1Tr 石積み検出状況（北から）



37-1 屋鳩城跡浦生地区 H28-1Tr 東壁土層①(西から)



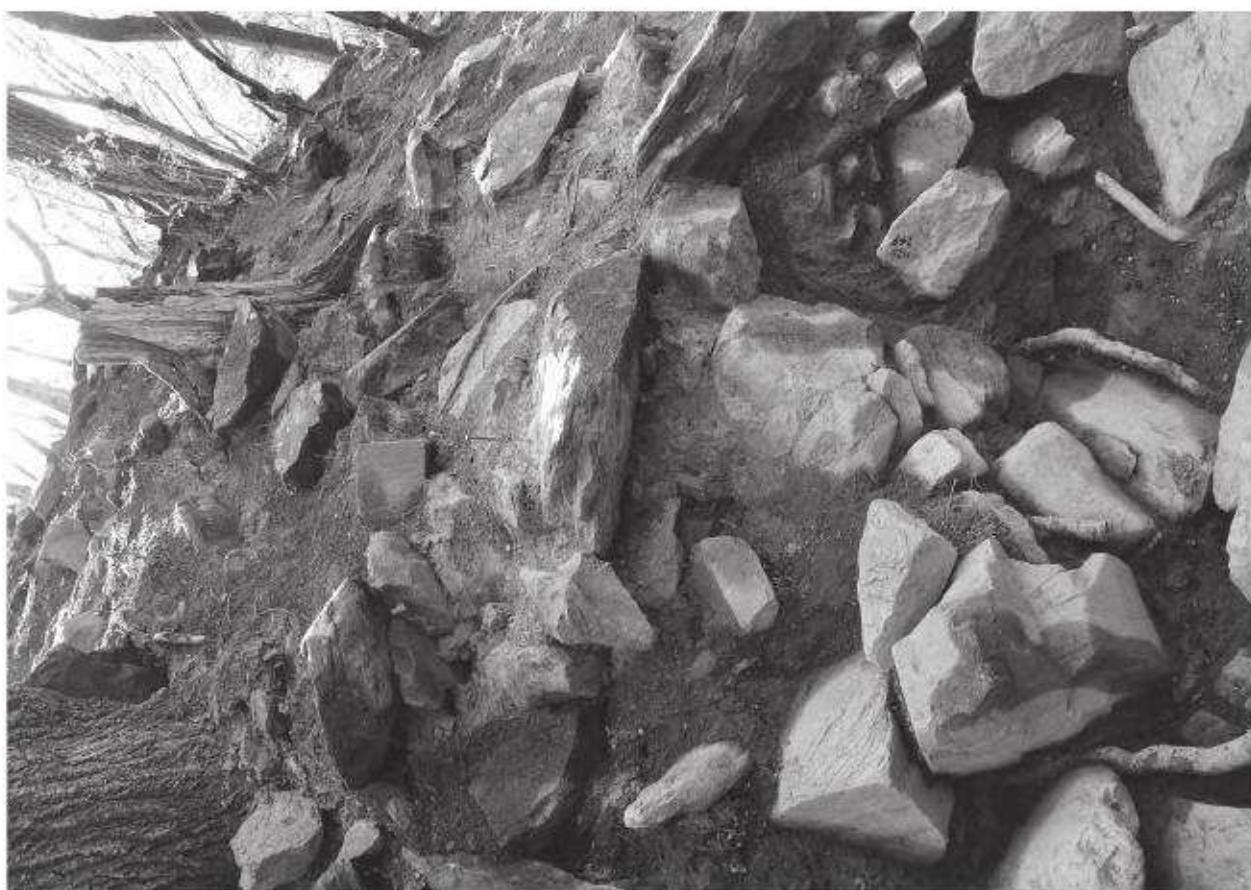
37-2 屋鳩城跡浦生地区 H28-1Tr 東壁土層②(西から) 37-3 屋鳩城跡浦生地区 H28-1Tr 南壁土層(北から)



37-4 屋鳩城跡浦生地区 H28-2Tr 調査前状況(西から)



37-5 屋鳩城跡浦生地区 H28-2Tr 石積み検出状況  
①(西から)



38-2 尾鷲城跡溝生地区 H28-2Tr 石積み検出状況③（北から）



38-1 尾鷲城跡溝生地区 H28-2Tr 石積み検出状況②（西から）



3.9-2 屋嶋城跡浦生地区 H29-1Tr 下部石積み検出状況（南東から）



3.9-4 屋嶋城跡浦生地区 H29-1Tr 上部石積み検出状況②（北から）



3.9-1 屋嶋城跡浦生地区 H29-1Tr 調査前の状況（南東から）



3.9-3 屋嶋城跡浦生地区 H29-1Tr 上部石積み検出状況①（東から）



40-2 屋嶋城跡発生地区 H29-1Tr 上部地盤土層（南から）



40-1 屋嶋城跡発生地区 H29-1Tr 石積み検出状況（南から）



41-2 屋嶋跡浦生地区 H29-1Tr 古礎み下部の状況（東から）



41-3 屋嶋跡浦生地区 H29-1Tr 調査完了状況（南から）



41-1 屋嶋跡浦生地区 H29-1Tr 調査完了状況（南から）



42-1 屋鳴城跡浦生地区 H29-1Tr 拡張区北壁土層①（東から）



42-2 屋鳴城跡浦生地区 H29-1Tr 拡張区北壁土層②（南から）



42-3 屋鳴城跡浦生地区 H29-1Tr 拡張区北壁土層③（南から）



42-4 屋鳴城跡浦生地区 H29-1Tr 拡張区東壁土層（西から）



4.3-1 屋嶋城跡浦生地区 H29-2Tr 調査前状況（南から）



4.3-2 屋嶋城跡浦生地区 H29-2Tr 検出状況（南から）



44-1 北嶺山上地区 H20-1Tr 調査前状況（南から）



44-2 北嶺山上地区 H20-1Tr 検出状況①(北東から)



44-3 北嶺山上地区 H20-1Tr 検出状況②(南から)



44-4 北嶺山上地区 H20-1Tr 検出状況③(北から)



44-5 北嶺山上地区 H20-1Tr 検出状況④(西から)



44-6 北嶺山上地区 H20-1Tr 土層①(北から)



44-7 北嶺山上地区 H20-1Tr 土層②(北から)



44-8 北嶺山上地区 H20-1Tr 土層③(東から)



45-1 北嶺山上地区 H20-2Tr 調査前状況（東から）



45-2 北嶺山上地区 H20-2Tr 検出状況①（東から）



45-3 北嶺山上地区 H20-2Tr 検出状況②（西から）



45-4 北嶺山上地区 H20-2Tr 南壁土層（北から）



45-5 北嶺山上地区 H20-3Tr 調査前状況（西から）



45-6 北嶺山上地区 H20-3Tr 検出状況①（西から）



45-7 北嶺山上地区 H20-3Tr 検出状況②（東から）



45-8 北嶺山上地区 H20-3Tr ピット検出状況（北から）



46-1 北嶺山上地区 H20-4Tr 調査前状況（西から）



46-2 北嶺山上地区 H20-4Tr 南壁土層（東から）



46-3 北嶺山上地区 H20-4Tr 検出状況（東から）



46-4 北嶺山上地区 H20-4Tr 岩盤状況（西から）



46-5 北嶺山上地区 H26-1Tr 調査前状況（北から）



46-6 北嶺山上地区 H26-1Tr 検出状況①（南東から）



46-7 北嶺山上地区 H26-1Tr 東壁土層①（南西から）



47-2 北嶺山上地区 H26-1Tr 検出状況③(東から)



47-4 北嶺山上地区 H26-1Tr 検出状況⑤(南東から)



47-1 北嶺山上地区 H26-1Tr 検出状況②(北東から)



47-3 北嶺山上地区 H26-1Tr 検出状況④(北東から)



4.8-1 北嶺山上地区 H26-1Tr 南壁土層（北西から）



4.8-2 北嶺山上地区 H26-1Tr 東壁土層②（西から）



4.8-3 北嶺山上地区 H26-2Tr 調査前状況（北から）



4.8-4 北嶺山上地区 H26-2Tr 完了状況①（北から）



4.8-5 北嶺山上地区 H26-2Tr 完了状況②（南から）



4.8-6 北嶺山上地区 H26-2Tr 南壁土層（北から）



4.8-7 北嶺山上地区 H26-2Tr 北壁土層（南東から）



49-1 北嶺山上地区 H27Tr 検出状況①（北から）



49-2 北嶺山上地区 H27Tr 検出状況②（南から）



49-3 北嶺山上地区 H27Tr 完了状況（北から）



49-4 北嶺山上地区 H27Tr 検出状況③（東から）



49-5 北嶺山上地区 H27Tr 検出状況④（西から）



50-1 北嶺山上地区 H27Tr 南壁土層（北から）



50-2 北嶺山上地区 H27Tr 東壁土層（南西から）



50-3 北嶺山上地区 H27Tr 北壁土層（南東から）



50-4 北嶺山上地区 H27Tr 北端北壁土層（南から）



50-5 北嶺山上地区 H27Tr ピット検出状況（西から）



50-6 北嶺山上地区 H27Tr ピット完掘状況（西から）



50-7 北嶺山上地区 H28-1Tr 調査前状況（西から）



50-8 北嶺山上地区 H28-1Tr 完了状況①（北西から）



51-1 北嶺山上地区 H28-1Tr 完了状況②（東から）



51-2 北嶺山上地区 H28-1Tr 完了状況③（南東から）



51-3 北嶺山上地区 H28-1Tr 完了状況④（東から）



51-4 北嶺山上地区 H28-1Tr 完了状況⑤（南西から）



51-5 北嶺山上地区 H28-1Tr 完了状況⑥（西から）



51-6 北嶺山上地区 H28-1Tr 南壁上層①（北から）



51-7 北嶺山上地区 H28-1Tr 南壁上層②（北から）



51-8 北嶺山上地区 H28-1Tr 南壁上層③（北から）



52-1 北嶺山上地区 H28-1Tr 南壁土層④（北から）



52-2 北嶺山上地区 H28-1Tr 南壁土層⑤（北から）



52-3 北嶺山上地区 H28-1Tr 東壁土層（北から）



52-4 北嶺山上地区 H28-2Tr 調査前状況（東から）



52-5 北嶺山上地区 H28-2Tr 完了状況①（北東から）



52-6 北嶺山上地区 H28-2Tr 完了状況②（北から）



52-7 北嶺山上地区 H28-2Tr 完了状況③（東から）



52-8 北嶺山上地区 H28-2Tr 完了状況④（西から）



5.3-1 北嶺山上地区 H28-2Tr 完了状況⑤（北から）



5.3-2 北嶺山上地区 H28-2Tr 完了状況⑥（南東から）



5.3-3 北嶺山上地区 H28-2Tr 完了状況⑦（北東から）



5.3-4 北嶺山上地区 H28-2Tr 北壁土層①（南から）



5.3-5 北嶺山上地区 H28-2Tr 北壁土層②（南東から）



5.3-6 北嶺山上地区 H28-2Tr 北壁土層③（南から）



5.3-7 北嶺山上地区 H28-2Tr 北壁土層④（南から）



5.3-8 北嶺山上地区 H28-2Tr 北壁土層⑤（南から）



5.4-1 北嶺山上地区 H28-2Tr 北壁土層⑥（南から）



5.4-2 北嶺山上地区 H28-2Tr 土器出土状況①（北から）



5.4-3 北嶺山上地区 H28-2Tr 土器出土状況②（北から）



5.4-4 北嶺山上地区 H29-1Tr 調査前状況（西から）



5.4-5 北嶺山上地区 H29-1Tr 完掘状況①（東から）



5.4-6 北嶺山上地区 H29-1Tr 完掘状況②（北から）



5.4-7 北嶺山上地区 H29-1Tr 完掘状況③（南から）



5.4-8 北嶺山上地区 H29-1Tr 完掘状況④（南から）



55-1 北嶺山上地区 H29-1Tr 完掘状況⑤（北から）



55-2 北嶺山上地区 H29-1Tr 北壁土層①（南から）



55-3 北嶺山上地区 H29-1Tr 北壁土層②（南から）



55-4 北嶺山上地区 H29-1Tr 北壁土層③（南から）



55-5 北嶺山上地区 H29-2Tr 調査前状況（南から）



55-6 北嶺山上地区 H29-2Tr 検出状況①（北東から）



55-7 北嶺山上地区 H29-2Tr 検出状況②（南から）



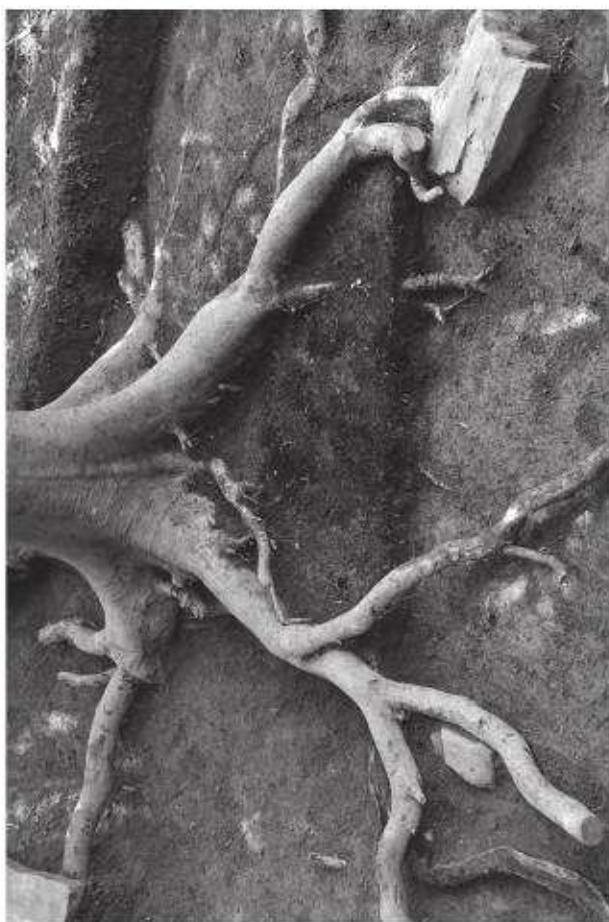
55-8 北嶺山上地区 H29-2Tr 炭化材検出状況（東から）



56-1 北嶺山上地区 H29-2Tr 炭化材集中範圍半段状況（東か5）



56-2 北嶺山上地区 H29-2Tr SK 1 検出状況①（北西か5）



56-3 北嶺山上地区 H29-2Tr 調査完了状況（北東か5）



56-4 北嶺山上地区 H29-2Tr SK 1 検出状況②（西か5）



5.7-2 北嶺山上地区 H29-ZTr SK 1 土層（西から）



5.7-4 北嶺山上地区 H29-ZTr 東壁土層（北西から）



5.7-1 北嶺山上地区 H29-ZTr SK 1 検出状況③（南から）



5.7-3 北嶺山上地区 H29-ZTr 南壁土層（北から）



5.8-1 北嶺山上地区 H29-2Tr ピット検出状況（南から）



5.8-2 北嶺山上地区 H29-2Tr ピット完掘状況（南から）



5.8-3 北嶺山上地区 H29-3Tr 完掘状況（南から）



5.8-4 北嶺山上地区 H29-3Tr 土層状況（南から）



5.8-5 北嶺山上地区 H29-4Tr 完掘状況①（南東から）



5.8-6 北嶺山上地区 H29-4Tr 完掘状況②（南西から）



5.8-7 北嶺山上地区 H29-4Tr 完掘状況③（東から）



5.8-8 北嶺山上地区 H29-4Tr 完掘状況④（西から）



5 9 - 1 北嶺山上地区 H29-4Tr 完掘状況⑤（南から）



5 9 - 2 北嶺山上地区 H29-4Tr 完掘状況⑥（南西から）



5 9 - 3 北嶺山上地区 H29-4Tr 完掘状況⑦（西から）



5 9 - 4 北嶺山上地区 H29-4Tr 完掘状況⑧（南西から）



5 9 - 5 北嶺山上地区 H29-4Tr 土層①（南から）



5 9 - 6 北嶺山上地区 H29-4Tr 土層②（南から）



5 9 - 7 北嶺山上地区 H29-4Tr 土層③（南から）



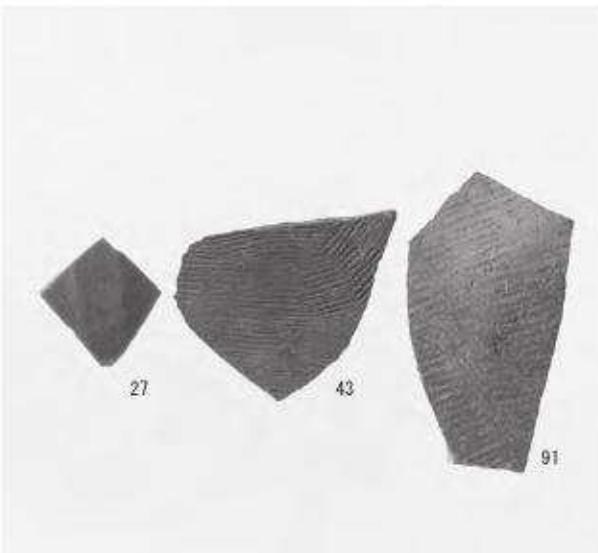
5 9 - 8 北嶺山上地区 H29-4Tr 土層④（南から）



6.0-1 屋嶋城跡浦生地区出土平瓶



6.0-2 屋嶋城跡浦生地区出土石器



6.0-3 屋嶋城跡浦生地区・北嶺山上地区出土青磁及び須恵器



6.0-4 屋嶋城跡浦生地区・北嶺山上地区出土かわら投げのかわらけ

## 報 告 書 抄 錄

平成 31 年 3 月 29 日 印刷

平成 31 年 3 月 29 日 発行

高松市埋蔵文化財調査報告第 200 集

史跡天然記念物屋島  
—史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書Ⅲ—

発 行 者 高松市番町一丁目 8 番 15 号  
高松市教育委員会

印 刷 者 高松市伏石町 2157-7  
有限会社 中央ファイリング